

大成学園百年史

Taisei Gakuen since 1909



学校法人大成学園

100th
大成学園100年史
Anniversary

Taisei Gakuen since 1909



100th Anniversary

Taisei Gakuen since 1909

大成学園100年史



TAISEI GAKUEN

学校法人大成学園

歴代制服

大成裁縫女学校・水戸市大成女学校・大成高等女学校・大成女子高等学校



1909~

制服制定前

自由に着物羽織と袴を着用。



1924~

初代制服

紺サージの着物に
えび茶の袴、黒の革靴。



1928~

セーラー服

夏は白地、冬は紺地で
スカートは紺地の
車ひだ。
ネクタイは紺地で斜め
二本の白線をついた。



1941~

全国標準服

女学生の制服が
全国同じ国民服的
スタイルに統一。
ヘチマ襟でベルト付き
上着。下はスカートから
モンペへ、靴から下駄へ
変わっていった。

1909

1924

1928

1941

1953

1961

1975

2005



1953~

ボレロジャケット

車ひだの
ジャンパースカートと
白えりブラウス。

当時は戦後8年とはいえ物
資が不足しており、布が少
なくて済む形を、飛田先生
始めとする被服の先生方で
考えた結果、この形が採用
された。



1961~

背広型ジャケット

車ヒダのジャンパース
カートと白えりブラウス。

広く生徒の意見も取り入れ、
決定。翌年冬には、オーバーの
形・色も決定。



1975~

明るい紺のブレザー

共布ベスト、
箱ヒダスカート、
エンジリボンに変更。



2005~

現在の制服

チャコールグレーの
ブレザー、ニットベスト、
チェックスカートまたは
スラックス、
カラーシャツ(3種)、
リボン(2種)。



生徒の裁縫作品 (1909~1948)

大成裁縫女学校・水戸市大成女学校・
大成高等女学校

当時は、女子にとって裁縫の技術習得は社会通念上必須であり、
一般教科と共に、裁縫の技術向上のために、生徒皆が日々努力していたという。



和服の雛形 1913(大正2)年
大成裁縫女学校専科卒業生
桜井あいさん在校中の作品
(本学園創立60周年記念の際にご寄贈)

子供から大人までの年齢別の袴、単衣の着物、
袴の着物、羽織、股引、手甲、脚絆、のれん、タン
スカバー等、様々な衣類の雛形(実寸の5分の1
くらい)が作成されていた。それぞれの作品に
は、首元や裏側の目立たない所に「大成裁縫女
学校」の朱印が押されている。提出課題合格の
証と思われる。



当時の和裁の授業風景
(1925年卒業写真帳より)



洋服の雛形 1924(大正13)年
水戸市大成女学校本科卒業生
小滝はるさん(在学中の作品)
(伊藤ゆみ子様ご提供)

セーラージャケット、ズボン、マント、シャツ等の洋服類は、ミシンで縫われている。結婚して子供が学童になると、母として我が子に通学用衣類を縫うのに、こうした技術が大変役に立つたという。



1943(昭和18)年 水戸市大成女学校専科卒業生で
教員も務めた大森うめさんのお食い初めの食器に掛けるカバー
見事な刺繡が施されている。



1926(大正15)年 水戸市大成女学校本科卒業生
塙みつさん(在学中の裁縫道具) (猪野嘉久様ご提供)
上から、こて、物差し、くけ台。物差しには、
「水戸大成女学校内本科第一学年生 塙美津子用」と記名がある。



ミシンの授業 (1925年卒業写真帳より)



刺繡の授業 (1923年卒業写真帳より)

礼法

創立時より、他を敬い自己を活かす礼法の指導は本学園の伝統である。

終戦までは小笠原流礼法指導を行っていた。

敗戦でGHQの民主主義指導が入った後は一時中断したが、1959年に復活させた。

以降、小笠原流とは異なる茶道系の礼法を取り入れての指導が続いていた。

2008年度より、小笠原流を復活させている。



おじぎの練習 (1919年)



礼法の授業 (1925年)



礼法の授業 (1940年)



礼法の授業 (1923年)

1909

1919

1929

1939

1949



遠足・旅行

本学園では1920(大正9)年5月に遠足・修学旅行規定が定められた。

さまざまな場所に出かけ、その土地の文化に触れる旅行は、視野を広げる好機となっている。

2000(平成12)年以降は、海外への研修旅行を実施している。



松島 (1929年)



奈良 (1940年)



香取神宮 (1942年)



伊勢神宮 (1934年)



湯ノ湖 (1948年)



礼法クラブ (1956年)



作法の授業 (1980年)



礼法の授業 (2008年)



礼法の実習 (1963年)



テーブルマナー実習 (1968年)



テーブルマナー実習 (2009年)

1959

1969

1979

1989

1999

2009



二見浦 (1964年)



熊本 (1992年)



長崎 (1980年)



ハワイ (2008年)



大成女子高等学校の一年

4月

5月

6月

○入学式

○対面式 ○体験入部 ○スポーツフェスティバル
○茨城女子短期大学早期授業(通年で実施)

○遠足

○載帽式



入学式



遠足



スポーツフェスティバル



載帽式

10月

11月

12月

○コース別研修

○ハワイ研修旅行

○着付け教室

○1年合唱祭 ○協同病院キャンドルサービス
○スキースクール



コース別研修



着付け教室



協同病院キャンドルサービス



ハワイ研修旅行



1年合唱祭



スキースクール



7月

8月

9月

◎吹奏楽部
五軒サマーナイト参加

◎中学生体験学習

◎吹奏楽部体験入部

◎大学生による
進路ガイダンス

◎撫子祭



中学生体験学習



吹奏楽部体験入部



撫子祭

1月

2月

3月

◎本校入学試験
◎大学入試センター試験

◎家政科課題研究発表会
◎看護師国家試験激励会

◎3年生を送る会

◎卒業式
◎ひな祭り

◎看護師国家試験発表



インターンシップ



看護師国家試験激励会



卒業式



茨城女子短期大学の一年

4月

5月

6月

◎入学式

◎スポーツフェスティバル



入学式

スポーツフェスティバル

10月

11月

12月

◎樹林祭

◎保育科発表会



樹林祭

保育科発表会



7月

8月

9月

◎おやこ広場ばば (通年で実施)

◎ダンスサークル水戸黄門祭参加

◎国文科ゼミ旅行



おやこ広場ばば



ダンスサークル水戸黄門祭参加

国文科ゼミ旅行

1月

2月

3月

◎スキー・
スノーボードスクール

◎ばば実習発表

◎学位記・修了証書授与式
卒業・修了を祝う会



スキー・スノーボードスクール



学位記・修了証書授与式



ばば実習発表



卒業・修了を祝う会



大成学園幼稚園の一年

4月

5月

6月

◎入園式

◎親子遠足

◎園外保育



入園式



親子遠足



園外保育

10月

11月

12月

◎園外保育

◎遠足

◎サツマイモ掘り

◎作品展

◎お楽しみ会



遠足



サツマイモ掘り



作品展



7月

◎高校生と遊ぶ日
◎宿泊保育(年長組)



高校生と遊ぶ日

8月

◎夕涼み会



夕涼み会

9月

◎プール



◎スポーツフェスティバル



宿泊保育(年長組)



プール



スポーツフェスティバル

1月

◎コンサート



生活発表会

2月

◎生活発表会



3月

◎修了証書授与式



大成学園創立100周年記念式典

2009年7月11日土曜日 10:00～12:30 茨城県立県民文化センター大ホールにて挙行

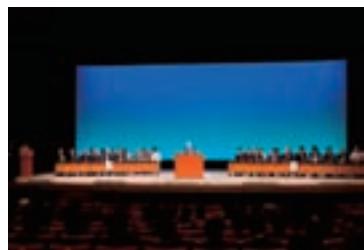
オープニング 『大成学園100年の軌跡』

これまでの各時代の映像とその時代の制服姿の学生・生徒・園児たちにより、大成学園の歩みを紹介



式典の部

ファンファーレの後、
来賓を壇上にお招きして式典を挙行

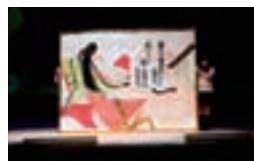


発表の部

茨城女子短期大学
ポエトリーリーディングとコーラス



大成女子高等学校
"Taisei Girls' Collection"
各科・コース・部活動生徒による学校紹介



大成学園幼稚園
「リズムダンスと園歌」

大成女子高等学校 吹奏楽部
「音楽劇シンデレラ」
萩原健先生指揮により卒業生も加わった演奏





大成学園創立100周年記念パーティー

2009年7月12日日曜日 11:00～14:00 水戸プラザホテル「プラザボールルーム」にて開催

水戸市大成女学校、大成高等女学校、大成女子高等女学校、茨城女子短期大学の卒業生が一同に会し、大同窓会を催した。大成女子高等学校卒業生 井上いくえさんとご家族によるオカリナ演奏で幕を開け、大成学園創立100周年記念事業委員会のメンバーによる挨拶、大成女子高等学校ダンス部卒業生による演技、大成女子高等学校旧職員「いざよい会」によるコーラス、前日挙行した記念式典の映像等の余興を楽しみながら会食、和太鼓兄弟ユニット「は・や・と」の演奏で賑やかにお開きとなった。





大成学園創立 100 周年記念誌の発刊に寄せて

大成学園は、1907 年（明治 40 年）12 月、額賀三郎・キヨ夫妻が水戸市に開いた裁縫塾を起源とし、1909 年（明治 42 年）4 月 3 日には、茨城県下初の私立学校である大成裁縫女学校（本科・専科）を開学いたしました。その後、水戸市大成女学校と改称、大成高等女学校併設時代を経て、1948 年（昭和 23 年）には学制改革により大成女子高等学校、1967 年（昭和 42 年）に茨城女子短期大学、1971 年（昭和 46 年）に大成学園幼稚園を設置いたしました。そして 2007 年（平成 19 年）に私塾開設 100 年、2009 年（平成 21 年）には学園創立 100 周年を迎えました。現在では、茨城女子短期大学には国文科・保育科・介護福祉専攻科を、大成女子高等学校には普通科・家政科・看護科（5 年一貫教育）を設置しております。

これまでに本学園で学んだ同窓生は 5 万名近くにのぼります。創立以来、「誠実・協和・勤勉」の校訓に基づき、「社会に役立つ女性」の育成に専心し続けてまいりました。創立者の意思を受け継いだ温かくきめ細やかな教育活動により、学生・生徒たちがそれぞれの夢と希望を叶えるべく充実した学園生活を送り、卒業生が社会の各分野で広範に活躍されておりることは、私達一同の誇りでございます。この輝かしい伝統を築くことができましたのも、長い間本学園を支えてくださいました多くの皆様方のご尽力の賜物と、心より感謝を申し上げます。

さて、学園創立 100 周年に際し、様々な記念事業を計画し実施して参りました。記念イベント等の実施、記念誌等の発刊、寄付拠出金の募集、記念棟の建設および施設の整備、歴史資料の収集保管等です。全て完了するのは、まだ先になりますが、鋭意進めておりますのでご期待いただければと思います。

記念イベントとしては、2009 年 7 月 11 日、茨城県立県民文化センター大ホールにて記念式典、翌 12 日、水戸プラザホテルにて記念パーティーを開催したことが記憶に大きく残っています。

記念式典においては、多くのご来賓の皆様、関係者の皆様にご臨席いただき、また心のこもったご祝辞を頂戴いたしました。続く発表の部では、本学園



学校法人大成学園理事長
大成女子高等学校校長 **額賀修一**

の教育活動の一端を披露させていただきました。短い準備期間ながらも精一杯の練習を重ねた、学生、生徒、園児の演技が、参集者全員に強い感動をもたらしました。

また、記念パーティーにおいては、数多くの卒業生の方々にご参加いただき、創立 100 周年に相応しい大同窓会となりました。今後も、卒業生の方々が集える機会を設け、本校に学ぶ後輩達とともに親睦を深められるようにできればと考えています。

そしてこの度、学園創立 100 周年記念誌『大成学園 100 年史』発刊の運びとなりました。執筆してくださった多くの方々、資料のご提供など様々な形でご協力くださった方々に厚く御礼申し上げます。

これら記念事業を通し、本学園の全ての関係者が、創立者の意思と築かれた伝統を再確認し、新たな大成学園の歴史を作るため、力をひとつにして欲しいと願っております。

大成学園は、次の 100 年においても、女子の特質を理解し効果的な教育を行う学校として、「社会に役立つ女性を育成する」ために努力し続ける所存です。引き続き、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

大成学園創立100周年を寿ぐ

前学長額賀良一先生が健康上の理由からご勇退されました後を受けまして平成21年12月1日付けにて、新学長に就任しました。現在短期大学は、何かと厳しい状況に置かれておりますが、皆様のお力添えをいただきまして課題の一つひとつに丁寧に取り組み、志を高く持ち努力して参りたいと思っております。

顧みますと茨城女子短期大学は平成19年に開学40周年を迎えて水戸京成ホテルにて記念式典並びに記念祝賀会等を開催しました。ご来賓の皆様や同窓会の皆様にはお忙しい中をご出席いただきまして誠にありがとうございました。更に40周年までの節目の年月を振り返りますと、10周年と20周年は、内々ということで内輪で実施しまして、30周年の年は、特に設けず40周年を迎えるました。40周年という年は、第1回の卒業生が還暦を迎える年に当たり、こちらも合わせてお祝いしようということになり、企画当初から同窓会の役員の皆様に加わっていただき、前年から8回ほど会議を重ね、ご相談しながら進めて参りました、同窓会役員の皆様には、絶大なるご協力をいただきましたことを厚くお礼を申しあげます。

大成学園の建学の精神に「集大成を旨とする」とありますが、これは、大成学園の命名の由来となる言葉で、中国の古典の『孟子』によるものです。集めて大きくなるとか、集まって大きくなるといった意味がありますが、この建学の精神の実践・試みとして、40周年の記念史のほかに2冊記念出版をしました。保育科では、『プログラムによる保育科発表会の軌跡』と題して過去の卒業発表会のプログラムをまとめました。国文科では、『青春の息吹—茨城の近代詩人感想文集—』と題して、過去約30年間の卒業生の感想文をまとめました。『青春の息吹』については、続々と落手のご返事やお礼のお葉書やご批評等が届き好評を博しました。

平成17年度に学校教育法が改正され、大学は、7年に1度第三者による評価を受けなければならぬことになりました。本学は平成22年度にこれを受けることになっております。当面は、この第三者評価をクリアすることを目標に努力して参りたいと考えております。



茨城女子短期大学学長
大成学園幼稚園園長 小野孝尚

さて、大成学園は、平成21年に創立100周年を迎え、7月11日に茨城県民文化センター大ホールを会場に、盛大な式典を挙行し、引き続き翌日には、水戸プラザホテルにて記念祝賀パーティーを開催しました。

式典には、大成学園に学ぶ幼稚園児・高校生・短大生それに全教職員が出席し、来賓の皆様には、温かいお心のこもったご祝辞をいただきました。

その後、ステージでは、茨城女子短期大学の学生による詩の朗読とコーラス、大成女子高等学校の生徒による発表と幼稚園児による「手のひらを太陽に」のダンスの発表がありました。園児たちは、赤や、青や、黄色の職員手作りの衣装を身にまとい一所懸命に踊り、客席からも合いの手が入り、舞台と客席が一体となる等、参加者全員が感動を共有することが出来ました。これも一重に父母の会、同窓会等の皆様のご尽力と教職員の指導の賜物です。記念祝賀パーティーでは、同窓会が中心となり、茨城女子短期大学の現役学生から最年長者92歳の女学校卒業生までの幅広い交友がありました。

本学の教職員からも感動的な式典であったと好評でした。創立100周年という記念の年に関わることが出来ましたことに感謝しつつ、伝統の重みと新たなる飛躍を感じ、大成学園の益々の発展を祈念します。幼稚園、高校、短大、本部と、誠に見事な建学の精神「集大成を旨とする」ことの実践であったと思われ、大成学園の現況が出席者全員の心に届けられたものと思われます。

目次

口絵

挨拶 大成学園理事長・大成女子高等学校校長 額賀 修一
茨城女子短期大学学長・大成学園幼稚園園長 小野 孝尚

寄稿

・ご挨拶 大成学園創立 100 周年記念事業委員会委員長・大成女子高等学校同窓会なでしこ会会長 塙 富子	2
・ご挨拶 大成学園創立 100 周年記念事業委員会前副委員長・大成学園前理事長 額賀 良一	2
・回顧 大成女子高等学校元教頭 小澤 榮弘	3
・大成学園 100 周年に寄せて 大成女子高等学校後援会会長 橋之口 英嗣	4
・創立 100 周年に寄せて 大成女子高等学校父母の会会长 鯉渕 嘉弘	4
・思い出 大成裁縫女学校本科卒業 鈴木 光子	5
・今はむかし 水戸市大成女学校専科卒業 西野 好子	6
・回顧 大成高等女学校卒業 平塚 イシ	9
・同窓会発足 40 周年の通知を拝見して 大成高等女学校卒業 小林 萬利子	11
・なでしこ会発足時を思う 大成女子高等学校普通科卒業 小森 寿子	11
・随想 大成女子高等学校普通科卒業 高橋 洋子	13
・看護師を志し衛生看護科へ 大成女子高等学校衛生看護科卒業 武尾 幸子	14
・大成女子高バレー部の伝統と誇り 大成女子高等学校普通科卒業 今井 路江	14
・未来へのシンフォニー 大成女子高等学校普通科卒業 井上 いくえ	15
・お祝いの言葉 大成女子高等学校 2009 年度前期生徒会長 檜山 藍	16
・短大の思い出 茨城女子短期大学前文学科長 若水 俊	17
・思いつくままに 茨城女子短期大学前副学長 高瀬 一男	20
・専攻科の思い出と介護教育への期待 茨城女子短期大学前専攻科長 上田 忠義	23
・大成学園 100 周年を祝して 茨城女子短期大学同窓会秋桜会前会長 後藤 久枝	26
・3 つの園舎の思い出 大成学園幼稚園前教頭 柴田 和子	28
・大成学園幼稚園に勤めて 大成学園幼稚園元教諭 中庭 理恵子	29
・大成学園幼稚園の思い出 大成学園幼稚園卒園児保護者 橋本 宏子	29
・100 周年記念に寄せて 大成学園幼稚園卒園児保護者 菊池 綾子	30

● 第1部 大成女学校

I 大成裁縫女学校の創立 1907～1919年	32	III 大成高等女学校の併設 1930～1939年	41
II 水戸市大成女学校に改称 1920～1929年	37	IV 戦中期 1940～1945年	46

● 第2部 大成女子高等学校

I 大成女子高等学校の設立 1945～1952年	58	VI バブル経済崩壊以降 1990～1999年	117
II 高度経済成長時代に向かう 1953～1959年	66	VII 新たな百年に向けて 2000～2009年	127
III 学園の拡張 1960～1969年	78	VIII 看護科の歩み	146
IV 創立70周年を迎えて 1970～1979年	92	コラム集：部活動の変遷	157
V バブル経済期 1980～1989年	104	大成女子中学校の思い出	160

● 第3部 茨城女子短期大学

I 茨城女子短期大学の開学	162	III 環境・設備の充実	168
II 新たな校舎の完成	164		

● 第4部 大成学園幼稚園

I 大成学園幼稚園の開園	174	V 園舎の変遷	195
II 大成学園幼稚園の保育	174	VI 創立30周年と園歌制定	198
III 大成学園幼稚園の行事	177	VII 地域に根ざす園としての役割	199
IV 大成学園幼稚園の取り組み	193		

● 資料編

I 組織	202
II 歴代役職者等	203
III 卒業生の推移	205
IV 校地・校舎の変遷	207
V 現況	211
年表	215
創立100周年事業関連組織図	228
寄付者ご芳名	229
あとがき	231

寄稿

■ ご挨拶

大成学園創立 100 周年記念事業委員会委員長

大成女子高等学校同窓会なでしこ会会長

1976（昭和 51）年大成女子高等学校普通科卒業

塙 富子

大成学園が、創立以来「社会に役立つ女性」の育成に専心し続け、県内の私立学校として初めて、晴れの創立 100 周年を迎えることができましたことを、心よりお慶び申し上げます。100 年もの長い間、数多くの先輩諸氏がご努力とご苦労を重ねて築き上げてくださった賜であり、感謝を申し上げます。

県内で最も伝統ある私立学校の関係者として、私どもは、この 100 年の歴史を顧み、来るべき学園新世紀に向けてますますの発展を期し、同窓会、後援会、父母の会、学校が一体となり創立 100 周年記念事業委員会を組織しました。2006 年 5 月の発足以来、様々な方々のご意見・ご要望に耳を傾け、また、それぞれの思いを汲み取りながら会

合を重ね、各種記念事業を計画、実施いたしてまいりました。

記念式典を始めとする種々の記念行事を滞りなく実施することができましたことを、大変喜ばしく存じます。記念式典は、文部科学大臣、茨城県知事を始め、各界の多数の方々のご臨席を賜り、盛大に挙行することができました。また、記念パーティーには多くの卒業生にご出席いただき、和やかで楽しい大同窓会となりました。ご支援をいただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

生徒の皆様には、大成学園が創立 100 周年を迎えた今、伝統への敬意と、自らが大成学園の主人公であるという自覚を持って、新たな一歩を力強く踏み出していただきたいと思います。

大成学園は、新たな 100 年に向けて歩み始めています。これまで多くの皆様より賜りましたご厚情に対し、厚く御礼申し上げますと共に、今後とも、本学園の一層の充実に対し、さらなるお力添えとご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

■ ご挨拶

学校法人大成学園 前理事長

大成学園創立 100 周年記念事業委員会前副委員長

額賀 良一

大成学園がこのたび創立 100 周年を迎え、多くの皆様のご臨席を賜り記念式典を挙行できましたことは、まことに喜ばしいことでございます。

これまでに本学園で学んだ 5 万余名の同窓生は、社会の各分野で広範に活躍しております。

この輝かしい伝統を築くことができたのは、本学園の建学の精神に共感し、長い間支えてくださいました皆様方のご尽力の賜物と、改めて御礼申し上げます。

厳しい社会状況下ではありますが、社会に役立つ堅実な女性の育成という理念を実現するため、大成学園は、学生生徒の眞の育ちに繋がる確かな教育を実践し続けます。皆様には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。



high school

■ 回顧

大成女子高等学校元教頭 小澤 榮弘

この度、大成創立 100 周年記念誌を発刊されることを心から祝福したい。

私は初代額賀三郎校長の時、大成に奉職して四十余年。思えば人生の半分を本校で過ごしたことになり、感無量なものがある。

ここに、その間の記憶のいくつかを記してみたい。

終戦後、私が教師になりたての頃の大成は、校舎は戦火で焼失、大谷石の塀と屋根の崩れ落ちた石蔵だけであった。

教員室は軍隊時代の下士官室で、裸電球が一つ、粗末な机、椅子と火鉢が一つ、黒板一枚の寒々しいもので、ガラスの破れた部屋は風通しがよく、風雨のときは惨めであった。それで傘やコーモリがなくて、雨の日には欠席する生徒も居た。

男子の教師は宿直があり、教員室の一隅の鍵のない小さな部屋に泊まり、夜間警備の役をするが、深夜人気のない教室廻りをするときは、重圧を感じ、今でも夢に見ることがある。生徒達は戦後のこと、服装や身なり等はかまっている余裕もなかったが、学校に来ること自体が楽しみで、横道にそれる生徒は少なかった。教科書などは粗末なもので、内容も易しく、大学入試問題なども易しくて、今の受験生なら誰しも羨ましく思うだろう。

生徒は板の間に座って、画板を膝の上に乗せてノートをとって授業を受けていた。時折南京虫が這い上がって来て、授業の妨げになることもあった。昼食の時に、白米を食べている生徒は少なく、友人の弁当を覗いたり、交換して食べていた生徒もいた。

このような生活が 2、3 年続き、新校舎を藤坂町に移したい希望が強まり、「学校債」を発行し、建築費を捻出することになった。校長始め先生達が地域を分担して、週末、休日も返上して、在校生、卒業生宅を訪問して、主旨に協力と理解をお願いしたこと。そして木の香も新しい教室が、本校に次々と建てられ、百里航空隊の建物の払い下げを受けて、生徒達も資材の運搬を手伝ったこと。また仮校舎の 42 部隊から椅子を抱えて、蟻の行列のように街中を本校まで運ぶなど、生徒の協力も大きかった。

さて、その当時の学校はどうなっていたろうか。戦災を免れた学校は現在地で勉強し、戦災で校舎を焼失した学校は、旧 37 部隊（現茨大）と旧 42 部隊の兵舎を授業の場としていた。即ち前者には、水戸一高、大成女子高、常磐、聾啞学校、日赤看護養成所。後者には水戸二高、水戸三高、市立女専などがいた。この辺一帯は学校街の様相を呈し、上下校時は数千人の生徒でまさに壯觀ですらあつた。それでも春には宮門に至る長い桜の花のトンネルは、いつでも我々に明るい活力を与えてくれたし、又桜並木の中間にあった店のボリュームのある一個十円の「大学饅頭」の味は今でも忘れられない。

又当時は米国の占領下にあり、米軍将校が定期的にジープで学校視察に来たので、その日には学校挙げての清掃で大変であった。或る日、運悪く先生方の出張、欠席が多く、補講を多くのクラスに裁縫をあてていた。彼らが各教室の視察を終えてから、修先生に「裁縫をしているクラスが多いのは何故か」と質問。先生ひるまず「本校は裁縫学校として創立されたから」と答えると、「今はハイスクールであり、ソウイングスクールではな

い」と忠告された。どきっとした出来事だったが、無事終了して胸をなで下ろした。これらは私のスタート時代の思い出に残る事件であった。

この度、大成女子高情報誌「To Say！」を見る機会があり、一見して、まるで「浦島太郎物語」

の様であった。私の想像を遥かに越えた21世紀に飛躍した学園の姿を知り、感無量の喜びで一杯であった。

No pains, no gains.

この言葉を贈り、私の祝辞とする。

■大成学園100周年に寄せて

大成女子高等学校後援会会長 樋之口 英嗣

大成学園100周年、誠におめでとうございます。明治から大正、昭和そして平成と時代は変わるもの大成学園は、草創期から変わらず建学の精神を引き継いでこられた。継続は力なり、大成学園は、ただひたすらに真摯に100年続けてきたことに感動を覚える。

感動は人の行動に影響を与える、人は感動の数ほど大きくなれる、感動の深さほど優しくなれる。教育の原点ではないかと思う。大成の子ども達はその感動を抱えて巣立っていったことと思う。

ところで、感動の種類には、大きく分けて二つあると思う。客体の感動、歌を聴いたりしたときに経験するもの。そしてもう一つは、主体の感動、部活などで得られるもの。主体の感動、客体の感動どちらも重要である。

時代はうごいている、過ぎた100年は、百周年事業というイベントで感動の確定を見た。次の100年はすでに始まっている、子ども達の成長は常に止まることを知らない。学園に対して、そのお手伝いをどうするか、多くの感動を子ども達が経験できることを期待して、これから100年へののはなむけとします。

■創立100周年に寄せて

大成女子高等学校父母の会会長 鯉渕 嘉弘

創立100年という節目の年に父母の会会長という大役を仰せつかったことの重責を今改めて感じております。平成16年4月に長女が大成女子高に入学し、思いがけなく父母の会の理事を引き受けた時には、100周年はずいぶん先のことだし自分とは無縁のことと思っていました。ところが3年後に次女も入学し引き続き理事を勤めさせていただくことになりました。創立100周年記念事業委員会にも参加して参りましたが、皆さんのお役に立つことができたか自信はありません。

大成女子高とのご縁は、6年目とまだまだ日は浅いのですが、卒業生と在校生の保護者として今

までに感じたことを述べたいと思います。

入学手続きの時に初めて本校を訪れたのですが、第一印象は「きれいな学校」でした。校舎の新旧ではなく、隅々まで清掃が行き届いているのです。私立校だし定期的に業者に頼んでいるのだろうとその時は思ったのですが、入学後娘に尋ねてみると毎日生徒全員で清掃しているとのこと、今まで何度も役員会や学校行事に参加しましたが、隅々まできれいな校舎とそれ違うごとに明るく元気に挨拶してくれる生徒達の姿に変わりはありません。女性としての素養を磨く場と校長先生がおっしゃっていたことを実感しています。

また、毎年開催される「撫子祭」では、父母の会の模擬店を開いていますが、家では見ることのできない子供達の姿を見ることのできる数少ない

チャンスと思い子供達以上に私達保護者も楽しみにしています。女子高らしく色々と趣向を凝らした食べ物を売るクラスが多いことやそれぞれクラスごとに作るTシャツの面白さ（年々面白さが増しているように思う）と盛りだくさんです。一般公開日に「こここの学校にすればよかった。」と話しながら帰る生徒さんがいました。私まで何だか誇らしい気持ちになりました。

「大成でよかった。」と私の二人の娘が言いますが、楽しいだけの高校生活ではなかった筈です。

✿思い出

1915（大正4）年大成裁縫女学校本科卒業
鈴木 光子（1969年当時なでしこ会副会長）

私が父に連れられて大成女学校の門をくぐったのは大正2年だったように思います。創立者の額賀三郎校長、キヨ先生もお若く、校長先生は立派なひげを生やしておいでになり、キヨ先生は小柄でお美しくおかしがり威厳をお持ちでした。現在の校長先生（額賀修先生）はその頃可愛い可愛い坊ちゃんで校長先生似、弟の誠様はキヨ先生似のようを感じられました。寄宿舎おりました私は、夕食後誠様と汽車の画を学校の黒板によく書いたものでございました。当時の校舎は、現在の校長先生のお住まいの所にあり二階建ての小さいものでした。私は本科に籍をおきましたので普通女学校と同じように学科もしたはずですが、お裁縫もずいぶんやったように思います。お裁縫では規定の細目以外に学校のものをどんどん休みなしに縫いました。両先生に私はずいぶんかわいがって頂きました。後年私がキヨ先生を実母のように思う原因もその頃からあったのでございましょう。

寄宿生は日曜日に皆でよく外出をしました。外出許可は大抵校長先生からもらうことにしまし

でも、卒業を目前にする時期になると辛かったことも良い想い出として残るのかもしれません。また、社会人となって初めてこの学校で学んだことや身に付いたことが役立ったとき、「大成女子高を卒業してよかった。」と実感する時が来るだろうと思っています。

どうかこれからも、50年先、100年先も、「大成女子高を卒業してよかった。」と親子で話し合えるような素晴らしい高校でありますよう益々のご発展をお祈りいたします。

た。校長先生は何もおっしゃらずに下さいますが、キヨ先生は必ずいろいろお聞きになりますので外出許可はもっぱら校長先生ということにして、出かけるものが揃って校長先生の所に行きそのうちの一人がお願いして全員頭を下げて終わり。帰るとまた揃って先生のお部屋にご挨拶にまいりました。楽しい楽しい寄宿舎生活でございましたが、あの当時の方々だいぶ亡き人の数に入られました。

結婚の後私は夫の勤めの関係上、仙台から札幌、岩手県等廻って昭和10年1月に水戸に参りましたが第一番にお訪ねしましたのは先生の所でございました。妹の結婚は先生のお仲人でした。その夫が飛行機で亡くなり千葉県下志津の飛行学校で校葬が行われましたとき、キヨ先生は遠い千葉県までお越しになり、また私たちの母の葬式には真壁郡明野町までおいで下さいました。水戸に落ち着きました私は、暇あるごとに先生をお訪ねしましたが本当の母のような感じでございました。三男喬を孫のようにかわいがってくださいましたので東北大学在学中旅行の度にほんのわずかなものでも「これは大成のおばあちゃんに」とお土産を持ってくるのでございました。喬の結婚が決まりました時にも一番に先生の所に嫁を連れて見ていただきました。地味な校長先生を喬はこの上もな

く尊敬しておりました。

昭和30年まだお元気だった先生を夫がお誘いで自動車で日光に行き一泊、お風呂も先生と私は一緒に過ごす中で背中の流し合いをしましたのも懐かしい思い出でございます。お元気だった頃にはお正月二日には必ずおいでになり私の手料理を喜んで召し上がってくださいました。また夫を自分の息子のようにいろいろと気を配ってくだ

さるのでございました。

学校を出てから半世紀以上たちました。学校はますます発展して名声高く、立派な短大もできましたことを私は誇りに思い心から喜んでいるのでございます。

(1969(昭和44)年発行学園創立60周年記念誌
より転載)

今はむかし

1922(大正11)年水戸市大成女学校専科卒業
西野 好子

【寄宿時代】

寄宿舎は住宅を改造したような建物で一階、二階、中二階の三つに区切られており私は二階の北側の部屋にいた。階下の渡り廊下伝いに教室に行くので非常に便利だった。雨の日などとさら有り難かった。

下の部屋は押し入れを境にして家族の人たちが住んでおり校長先生ご夫妻の部屋を「オク」といっていた。現校長の修様(1969(昭和44)年当時)、弟の誠様、そして笹島教頭も額賀家の一員として生活、いずれも水中在校中のことでした。自習のない土曜の夜は笹島さんを先頭に新校舎に集まり何かと話し合った。今考えるとどんな話をしたか全然覚えていない。なんだか表など作って熱心に討論みたいなことをしたこともある。いつも元気に発言する菊池よつさんという人は詩吟がうまくて時々聞かせてもらった。彼女の座布団を二つ折りにし赤ん坊代わりに抱いた剣舞はいつも大ウケである。捨て子という題のゆえ、私は初めて見たのすごく感動した。外出ができぬ雨の日など、特に楽しかった。

時々新校舎の二階で歌の集まりなどもやった。新潟の古市さんという一級上の人には寄宿生中随一

の美人である。ある日その人が歌うというので非常な期待を持って番を待っていた。「デアボロ」というのを歌った。声が少し太くて私はその歌の意味が分からずがっかりした。あんな美人だから夜曲でも歌うと思っていたのに。私は佐藤みちゃんとふたりで「ローレライ」を歌った。思いがけない拍手に二人はすっかり慌ててしまった。

【ネズミ退治】

外出は週3回、水土日曜が待ち遠しい。何かの都合で外出しない人には誰かが必ず何かを買ってくる。夕食前後にお互いに出し合って食べるのもとても楽しみだった。ところが思いがけない事件が起きてしまった。

バスケットが次々とネズミにかじられてしまったのである。13人の中1人残らずやられてしまった。舎監の先生が「食べ物を入れておくからですよ」と言われたが当時の私たちにはバスケットよりもほか入れ物はないのでどうしようもない。それで次の日曜にネズミ退治ということになった。

窓ガラスを全部締め切り全員手分けして出入り口をピッタリと押さえつけた。手に手に棒切れや物差しなどを持って押し入れを引っ掻き回した途端、「キャッ出た」という声に驚いたのはネズミである。あっちに飛びつきこっちに飛びつき逃げ回る。その素早いこと。「座布団、早く座布団かぶせてよ、なんでもいいよ」と誰かの叫び声に、

あわててそこら中の夜具布団を手当り次第に投げつけた。そして全員よってたかって代わる代わる座布団を叩き付けた。「もう大丈夫だ、死んだよきっと」といってこわごわ布団を取りのけたら、オヤッ、当のネズミはどこへやら、私たちは誰かのインキ瓶を夢中で叩き付けていたのである。そのときのお互いの表情は今も忘れられない。

【写真】

現校長さん（額賀修先生）は当時には珍しく写真が得意で、盛んに写しまくっておられた。夕食後のあるとき「写してやるから」というので15、6人ほど新校舎の前に集まった。二階建ての校舎はバックにはもってこいのモダンな建物である。何となくこみ上げてくる笑いをこらえながら、一生懸命に澄まし顔をした。ところが「今のは動いちゃったからもう一度」という訳で今後は前にもまして念入りなよそ行き顔をした。「撮りましたよ」という声にやっと普通の顔を取り戻しほっと一息入れた途端、「アハハ、今のはうそだ。みんなの顔見てやったんだ」と言うなり逃げ出した。「ワア、ひどい、ひどいよ」と叫びながら菊池さん野口さんが追いかけたが間に合わなかった、オクの部屋に逃げ込んでしまっては。「ずるいよ、今度の土曜に仕返ししてやるから」と大いに作戦を練った筈だったが、その後どうなったかは覚えていない。

【代筆】

炊事番の女中さんはすごく体格が良い。男かと思われるほどたくましい顔をした彼女は木綿のメクラ縞の筒袖がよく似合う。大きなお釜の下でいつも汗を流しながら、私たちのご飯を炊いていた。その女中さんが時々階段の途中から顔を出して、奥で呼んでいると言う。そんな時は大抵手紙の代筆だった。奥の床の間近くに小さな品の良い机がある。いつも万年筆とハガキ類がのっているので

用件はすぐにわかる。机の前に座って女先生のいわれる住所、名前、内容を耳を澄まして聞きながらペンを走らせる。その間にも先生は時々御用でお立ちになる。書き終わって私は読み上げる。それに先生がちょっと目を通され「どうもご苦労様、ありがとう」とおっしゃっていつもお茶とお菓子を下さった。恐縮しながら戴くので、「遠慮しないでたくさん召し上がり」といつもおっしゃったが、私は同宿の人たちのことが目にちらついてやっぱり落ち着かない。

「寄宿生活はどうですか」ある時は「どうも設備が不十分ですから」といろいろおっしゃった。そんなとき何かしら胸が熱くなる。あわててご挨拶をして立ち上るとたいてい残りのお菓子を紙に包んでくださった。部屋に帰ってから私は黙ってみち子さん達と食べた。

【こまつた専科生】

私は専科生だった。専科は裁縫が主で時に一日中裁ち板の前に座っていることもある。放課後自室に戻ってからも手を休めず、そのまま夕食後から消灯まで夢中で針を動かしている人もある。否、大半はそうであった。私はそんな空気がどうにも重荷で嫌だった。別に裁縫そのものは嫌いではなかったが、同宿の学生としてもっと何か話したい。話し合うべき何かがあるような気がするのだけど。ただ、裁縫、裁縫とそのことのみに全神経を打ち込んでいるその人たちを見ると、なんだか裁縫工場にでもいるようで話したい話もできぬ毎日の生活がなんとなくしつくりしなかった。私はその気持ちを払いのけるように毎日小説に熱中した。夢中で讀んでいるとなんとなく心が落ち着く。志賀直哉、二葉亭四迷など消灯ぎりぎりまで読みふけった。月のすごく明るい晚だった。消灯後、窓の所へ行ってその光で讀もうとした。全く昼とあざむくというほど明るい夜であったが無理だった。ちょっと見てはいくらでも讀めそうなのだが、

いざ読もうとするとやはり一字一字がはっきりしない。持ち方もいろいろと工夫した。その都度読めそうでいて読めないもどかしさ、そのときの残念さ、それでも床に入るのが惜しくていつまでもいつまでも窓の所に座って月の後を追っていた。

卒業期が近づくにつれ私は一層読書欲が出て来た。そしてなんということなくそんな勉強がしたいという気持ちが胸いっぱいにうずく毎日だった。

専科という特殊な学生として一番怠け者の私ではあったが落第もせず卒業した。

【結婚】

話はどんどん進んでいたらしい。何でも卒業式当日からだったとか、とも知らない私はもう少し学校に行きたいとばかりあちこちの学校から規則書を取り寄せては一人で調べていた。文科系のところ、そして無試験のところ、しかしその時になつて私ははげしい失望に打ちのめされた。上級校進学の資格がなかったのである。私にはその資格がないんだと思った時、私は初めて自分が水戸高女を中退した惨めさに身を震わして泣き崩れた。(私がなぜ中退したかその口惜しさはいずれの機会に申し上げるとして。)

私はその年の初夏、水戸出身の陸軍将校と書院の一室で見合いをした。といっても、私はただその人の金歯がピカリと光ったのを見たに過ぎない。何となく慌ててしまつてお茶をこぼしてしまった。

結婚の日取りが決まると先方が幼年学校(陸軍幼年学校:軍で出世するためには必須の学校)出身だからというので、診察が終わった後毎晩兄からドイツ語の勉強を強いられ、またそれを一生懸命にやつた。今思い出しても全くおかしな話で吹き出したくなる。

八月のさなかに挙式、新婚旅行をかねて東京を振り出しに江ノ島、鎌倉、岐阜と遊び回つて一週

間後赴任地各務が原についた時は鎌倉での水遊びで顔は存分に焼け鼻の頭は皮までむけ始めました。

出発のとき水戸駅まで人力車で見送りにこられた女先生が、「あちらへつきましたら毎日よくお化粧しておくんですよ」といわれて化粧品一揃え下さった。そのせっかくの品々も荒れ果てた顔ではどうしようもありません。主人はあきれ果てたり、困ったような顔をしております。

十日ほどお手伝いの婆やさんが暇をとりました。茶碗蒸しを作ることになりました。白いエプロンで身を包み私も少しは女らしくなつたなあと姿見に映つた自分の姿に独りで感心しているうちに夕方になりました。帰つた主人がちゃぶ台に座るなり「どれどれ美味しそうだな」といつてふたを取つたと思ったら「何だこらあ飯が入つてるじゃないか」と頓狂な声を上げました。そして、「なんだ茶碗蒸しもできなかつたのか」と言った後「まあいいやせっかく作ったんだからな」と言って食べ始めました。私は恥ずかしいのと何となく侮辱されたような変な気持ちで、すっかり不機嫌になつてしまつました。口を結んだまま座つてゐるうちに涙がぽろぽろこぼれてきました。「なんだ泣いてるのか」と困つたような顔をして煙草を吸つていた主人。

次の日曜日木曽川の本流が真下に見える犬山隨一を誇る迎賓館という立派な旅館だか料理屋だかで茶碗蒸しと名物鮎のみそ焼きをご馳走してもらいました。そのときの味は今も舌の先に残つてゐるような気がいたします。

半年後私たちは初めて水戸に帰りました。真っ先に大成の門をくぐりました。女先生は娘が帰つたように大喜びをしてくださいました。尽きぬ話に私は夕方までお邪魔致しました。たまたま茶碗蒸しの話をしましたら先生は涙を流しながら笑われ「あなた、いい旦那さんでよかったです、よかったです」とおっしゃいました。そしてしきりに涙を拭つて

おられました。

その時の先生の涙がさっぱりわかりませんでしたが、後になってやっと気がつきました。私の従妹も大成でお世話になりましたが、「先生いつもあなたの話をするんですよ。媒酌をなさったくらいだから気に入ってたんじゃないの」としみじみいわれたことを思い出します。

【その後】

戦後私は東京に出ました。ちょうど10年間生家に世話になっておりましたが田舎では田畠の仕事をうまくできないし、子供達も就職の都合で思い切って上京しました。

先生がお床に付くようになったある日、何か無性にお目にかかりたくて私は娘の結婚式の写真を持って馳せるようにしてお伺い致しました。先生はその写真を食い入るようにいつまでもいつまでもご覧になっております。そして「よかったわね、よかったわね」と繰り返しあっしゃいました。

姉からの連絡でお伺いしました時はだいぶお体もすぐれぬご様子でした。いつなく私の手を離そうとなさいません。そして私の顔をじっとご覧になり「今度はいつ来ますか」「先生またすぐにやって参ります、もう娘達も皆大きくなって心配ありませんから、それまで先生お元気になられ、今度東京にまいりましょうよ」と申したら先生は嬉しそうなお顔をなさいました。私がお暇申し上げようとすると、もう一度しっかりと手を握られて「じゃまた」とおっしゃられたその眼に、うっすらと涙をたたえられておりました。私もそ

の時は泣けて泣けて、汽車の中でもしばらく涙が止まりませんでした。その後もう一度、もう一度と思いながらついその機会がないままとうとうあのときが最後のお別れとなってしまいました。こうしておりましても、あのときの先生の柔らかいお手のぬくもりが残っているような気がして、私は時々自分の手のひらに手をやってみることができます。静かな夜などそのお姿が、お声がいろいろな様相で私の胸によみがえって参ります。

随分お世話になりました。学生時代、結婚そして（夫の）突然の事故死とその後のことを書けば数限りない思い出が胸にうずきます。今も学校に行けばお目にかかる、ともすればこういう錯覚さえおこりますのも私だけではないでしょうと思います。

昨今私もやっと暇が持てましたので団地内に未亡人会を結成し飛び回っております。15日には連合会大会、私どもの会からは寸劇を出します。自作自演という訳で会員一同大張りきりでございます。こんなこと先生がご覧になったら随分お笑いになるのでしょうかね、など思いながら今稽古から帰るなり、延び延びになっておりました原稿をまとめました。

孫は女ばかり9人、どうやら女系家族のようです。ともあれぜひお目にかかりたいのは当時の人達、同宿生だった人達に一度だけでよい、ぜひお目にかかりたいと願っております。(1969.2.7夜)

(1969(昭和44)年発行創立60周年記念誌より
転載)

■回顧

1939(昭和14)年大成高等女学校卒業

平塚 イシ

昭和14年3月卒業の私たちは、水戸駅で「千

葉部隊」「石黒部隊」を日の丸の旗を持って「元気で帰って来てください」と声張り上げて北支へと送りました。でも内地では悠長な音楽が流れていきました。

汽車通、バス通、徒歩で通学する友達の朝の雰

囲気は、ざわめいていましたが、しかし始業時間になるとやはり一人ひとりは緊張の心に戻りました。

いつも難しい顔の鈴木五平先生は茶色の鞄を右手に持って事務室へ入ってきます。

黒沢先生は鼻が高く顔色は茶褐色、額が小さくまるでエチオピア人と生徒の間では言われていました。

松浦先生は、「人ごとを我に向いて言う人は、さぞ我がことも人に言うらん」と、世の中に出て大切なことを短歌にして教えてくださいました。現在まで人生の羅針盤となっております。

額賀キヨ先生は慎ましやかな態度で上品さにただ頭が下がりました。あや子先生も和装洋装の美しさに感心させられました。しかしながら厳しさがありました。

田辺先生は地図を見ながら「アメリカの五大湖くらいは必ずいつでも言うことを心掛けなさい」とおっしゃいました。現在でも覚えています。エリー湖、ヒューロン湖、スペリオル湖、ミシシッピー湖、オンタリオ湖と、88歳の今まで感謝しております。

弘前生まれの工藤彰先生は、国学院大学を卒業され赴任なさいました。特徴的な朗読には感心致しました。「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心やのどけからまし」まるで神主さんの祝詞を思い出しました。

実は大成を卒業して10年後だと思いますが、

【短歌】

いたつきに友の苦しみ長かりきほぐれぬ糸の如き思いにて
日に一本の牛乳飲み得るも幸か親に感謝し子に感謝する
華道フェスティバルの花道教室に参加せしは八十七歳吾が最高齢なり
移り来て二十三年疊替え炬燼布団も新調したり
還暦に子に貰いたる祝座布団米寿になりて初めて使いぬ
久々に逢いたる友と佇みて久慈の山並静かに眺む
読書会にて知り合いし友との語らひを楽しみとして一年の過ぐ

水郡線の車中で黒沢先生と隣席しまして塩煎餅を一袋戴き、そのときの感動は到底忘ることはできません。私のことをよく覚えていてくださいました。

私は生まれて初めて故郷を離れて叔父の家に下宿して通学した4年間でしたが、夕方になると郷愁に駆り立てられて一週間くらいよく泣いたことを覚えています。でも学校へ行けば友がいる、先生がいる、全て現在は貴重な思い出となっております。

【私の近況】

88歳になりました現在は、毎週水曜日に8名くらいのグループで高橋ひで子先生を中心としてカラオケ教室を楽しんでおります。年二回の発表会は2つのグループになりますので、15名くらいになります。ささやかな会ではございますが各人の真剣さには驚かされます。

また、短歌は新アララギ短歌会に入会後、約28年間皆様と共に勉強しております。毎月第3日曜日は笠間に集合しまして、勉強会をしております。毎月東京の本部へ12首、笠間へ2首を提出しております。何でも同様に奥が深く、一生統けても難しく感じます。

顧みますと昭和28年に全国保母試験を受験し8科目合格しましたので、その後の人生において今日の生活の安定を勝ち取ることができましたことを何より幸せに感じております。

黒鳥の番いは餌を漁りつつ付かず離れず水際に遊ぶ
 寒き朝続きし為か吾が窓に鳥の啼き声聞こえずなりぬ
 年賀状下さりし歌の友一昨日死去せしを朝の新聞に見る
 ワークシェアリング叫ぶ政府は正社員の給料下げるが目的ならむ

♦ 同窓会発足 40 周年の通知を拝見して

1949 (昭和 24) 年大成高等女学校卒業

小林 萬利子

「今までの百年 繋ぐ これからの百年*」の趣意書が送付され、ここに私が小学校3、4年生の頃、バレーボールの合宿に姉に連れられて、大洗の別荘に宿った時の写真が掲載されておりました。

父**に抱かれて撮影されているのにびっくり致し、父の50回忌を済ませた後でしたので、送付されて来たのも何かの引き合わせかと思いました。

私たち子どもには厳しい父でしたが、生徒達には「お父ちゃん」のニックネームで慕われていた父を子ども心にとられた思いでおりました。

女学校に入学して卓球部に入りましたが、バレーボールに誘われ、先輩達が第2回国体に出場したので、第3回国体を夢見ながら、楽しみも苦しみも分かち合い、灼熱の中、そして木枯らしの吹く37部隊跡の仮校舎で、ボールが見えなくなるまで猛練習を重ねたのに、決勝戦でフルセットの末水海道高女に破れ、九州行は水の泡となってしまいました。

戦後、食糧難の時代でしたので、本校に戻った時は皆様からお米や野菜の差し入れがあり、級友に助けられての合宿練習、各自持参の布団で机を

ベッド代わりにして皆で楽しく語らいながら休んだものでした。

翌年、念願の第4回国体に出場することができましたことは、生涯忘れることなく心のアルバムに残っております。

後輩が全国大会に準優勝の吉報を受けた時は、レベルの高さに驚かされました。十数年ぶりに昨年お伺いした時は、当時の校庭はなく、立派な体育館になっており、時の流れに「今のは恵まれているな…」と感じました。

私は今、週二日ほど卓球をしながら地区大会に協力しております。後期高齢者になり、古希まではと思って始めた卓球でしたが、今では、八十、米寿、と欲が出てきました。体を動かし続けられることがどんなに幸せか、学生時代に体を鍛えたことが素晴らしいことが、今更ながら思われます。

孫の小学校が少子化で、30余年で廃校になってしまったなか、百年も続いていることは素晴らしいことです。これからも一層躍進されますよう、お祈り致します。

(*2008年4月に送付されたなでしこ会発足40周年会報の同封資料)

(** 本校バレーボール部初代監督の寺田保三郎先生)

♦ なでしこ会発足時を思う

1955 (昭和 30) 年大成女子高等学校普通科卒業

旧職員 小森 寿子

この度は、大成学園が創立100周年を迎えられ、誠におめでとうございます。また、記念誌が発刊

され長い歴史が貴重な記録として残されることを、意義深く心よりお慶び申し上げます。

なでしこ会は今年で42周年目を迎え、卒業生約4万人で築き、大地に根を張る大きな木となりましたが、発足時を振り返ってみたいと思います。

最初は、創立者額賀キヨ先生に教えを受けてお慕いした卒業生が、町田ふく様を中心に月日を決め、集まって和やかな時を過ごしてきたそうですが、昭和43年教頭であられた 笹島菊次郎先生が、大成女子高にきちんと組織化された同窓会を作ろうと提案されました。

誰もが大賛成でした。 笹島先生は、元岩手県立高校の校長で、豊富な経験を活かし立派な会則を作ってくださいました。顧問は当時校長であった額賀修先生ご夫妻が、事務局は卒業生で在職していた者が、田所タケ先生を中心に担当いたしました。

会名は、校章に由来し「なでしこ会」と命名しました。なでしこ会を盛大にし、同窓会館を作り、卒業生がいつでも使用できるように、また、結婚式等も挙げられたらよい等と皆で夢を大きく膨らませました。特に額賀あや子先生の喜びに溢れた笑顔は、今でも脳裏に深く刻まれております。

この年は、夏休み返上で、なでしこ会の名簿を卒業生台帳をもとに作り始めました。パソコン等は身近になく、手書きで書いたり、貼ったりの作業でした。印刷・製本は、卒業生のお店にお願いし、ピンク色の表紙でかわいらしい名簿が完成した時は、とても嬉しく感激したことを思い出します。しかし販売等は思うようにできませんでした。

一方、役員を決めなければならなく、こちらは額賀あや子先生が中心となり、田所先生と、まだ若く何も知らない私たちが、卒業生のお宅を訪問し、お願いをして歩きました。皆様快く引き受けてくださいました。

会長には根本八重子様。大きな農家で土建業、旅館業等を行うとても忙しい方でした。会長挨拶

の時は、毎回生徒の前で「私は19歳で結婚し、我が家は娘も嫁も大成卒で大成一家なのですよ。」と何か誇らしげにおっしゃっていたのが、印象的でした。

副会長には、在学中勉強や運動に力を入れておられた横川みのる様と、耳鼻咽喉科の医師になられ、いつも進歩的な意見をおっしゃる安達一枝様。

理事には、高木よし子様。4年間の寄宿生活の中で額賀キヨ先生のご指導を直接肌で感じ取られ、大成の教育の原点を知った方のようで寮生活の話をよくしてくださいました。

大塚芳江様は本校の副校長をなさった大塚武男先生のお母様で、とても明るい人柄でその場の雰囲気を和ませてくださいました。既に高齢であった村井長様、影山ヤエ様、お二人ともいつも着物をきちんとお召しになり、凛としたお姿を今でも思い出します。

村井様は、水戸が大空襲に遭い、焼けタンを使ったバラック屋が建ち並ぶ頃、民生委員をなさっており、「亡くなった人が着ていた衣類や寝具まで、すぐたらいで洗い使っていたのよ。」等、戦後の経済状態のひどかったことを話しておられました。民生委員としての功績が認められ、当時厚生大臣から表彰を受けておられました。

影山様は、水戸の大きな老舗の奥様で心が広く、何でも話をよく聞いてくださったり、総会や行事の度に寄付をしてくださっていました。

発足時の役員が表彰を受けたり古希を迎えた時などは、事務局が中心となりお祝いの席を設け、みんなで祝福し合いアットホームな雰囲気でした。発足時から、総会にはもっとたくさんの卒業生に出席して欲しいとお互いに誘い合い、話し合い等を続けてきました。お知らせは往復はがきを出したり新聞に掲載したりし、内容は講演会、在校生の部活動の発表等を取り入れ魅力的になるよう常に努力して参りました。

今では卒業生が出る度に理事や評議委員が選ば

れ、又、本部役員は、役員指名委員によって選出されております。

なでしこ会名簿も平成元年には2冊目、17年

には100周年に向け3冊目が完成して、なでしこ会のすばらしい充実を嬉しく思い、今後のますますの発展をお祈り申し上げます。

♦ 隨想

1960（昭和35）年大成女子高等学校普通科卒業
旧職員 高橋 洋子

私は額賀修校長先生時代の大成女子高等学校に昭和32年4月に入学致し、昭和35年3月卒業致すまで、停学もしくは留年することもなく、従つて浮いた噂も一切なく、ひたすら清く正しく美しい学校生活を送ることができました。続いて卒業と同時に國學院大学の史学科に進み、これまた浮いた話もなく昭和39年卒業、同年社会科の教師として奉職、川崎、野沢両先生の大学の先輩として大いに我が儘を言ったり睨みをきかしたりしておりました。

いささか両先生には気の毒な気がしないでもありませんでしたが。その間、一貫して蓮田洋子で過ごして参りました。

聞くところによると、他県では茨城県の女子について次のような相反する評価がなされているそうです。

1. 茨城県の女性は日本の中でも十本指に入るほど、よい妻になる素質がある

2. 筑波山の見える処の女は金輪際嫁にはするな

このような評判の中で、大成女子高卒の女性は果たしてどちらに属するのでしょうか。其処に我が母校の輝かしい歴史があると思うのですが。

ここで大成女子高生徒時代、特に印象に残った先生として、社会科の秋山義隆先生の名が浮かびます。此の先生は大変恐い反面、歴史、国語、文

学等については大成女子高きっと生き字引的存在で、私が社会科教師を志したことについては大きな影響を受けたように思われます。

さて、昭和30年代の前半は漸く食べ物が出回り出し、ラーメンが美味しくなったように記憶しております。「あさ屋」さんという学校近くの店で、ラーメン、おにぎり、各種お饅頭等をよく食べたものです。日本中が貧しい時代でしたので、これで十分満足できたのです。

当時大成女子高の校庭の周りにはイチョウの木が立ち並び、秋には美しい黄葉で学校を彩っていました。今日のようなコンクリートジャングルに比べて、妙に懐かしい風景です。

未だお江戸は水戸の女子高生にとっては遠い存在で、せいぜい土浦くらいが旅行範囲でした。

古歌の一説に「昔を今になすよしもがな」という言葉がありますが、青春、壯年の時を大成女子高校で送った私も、今や古希に近づき、ますます穏やかになりました。青春の思い出の最たる映画鑑賞も今では年に数回見ればいい方です。試験になると妙に見たくなつたのですが、このことではよく秋山先生に叱られたものです。今一言付け加えれば、以前水戸にあったオデオン座という洋画専門館が私の図書館代わりで、本を読むより映画で見る方が手取り早いとせつせと通つたものです。

思い出は次から次へと脳裏に浮かび、きりがないので、この辺で終わりに致します。（故人）

■ 看護師を志し衛生看護科へ

1972（昭和47）年大成女子高等学校衛生看護科
第1回卒業 武尾 幸子

私は中学時代、奉仕活動で見舞った老婆との出会いがきっかけで、看護師になる事を決意した。女性であっても経済的・精神的に自立し、生甲斐を持って働きたいという理由からである。

そんな時、茨城県初の衛生看護科の開設を知り、一日でも早く資格を取りたい私は何の迷いもなく受験し、一回生としての合格通知を受け取っていた。しかし、中学の担任は「普通高校を卒業してから、看護学校に進んでも遅くないだろう」と、明日に迫った県立高校の受験を勧めた。確かに、水戸は遠く通学も大変、しかしそれだけではない引っかかりをその担任の言葉に感じた。

入試は筆記と面接試験があり、校長先生からなぜ看護師になりたいのかを問われ、あの老婆との出会いとその時の思いを私は熱く語った。その老婆は病気のため全盲で、誰一人見舞う人もいない様子だった。きれいな新館もあるが、老婆は薄暗い古い木造の部屋に寝ていた。私達は拾った牛乳瓶に花を飾り、全校生徒から寄せられた千羽鶴を渡し、励ましの手紙を読んだ。すると老婆は見えない目から涙をいっぱい流し、とても喜んでくれた。

その後、お金がなく差額ベッドのある新館に入れない事や老婆の境遇を知った時、今まで自分の知らなかった現実の社会をそこに見た。世の中に

はこんな人達も居るのだ、人間は平等ではなかつたのか、と心が痛んだ。そして、私にはこの人達を明るい日の当たる場所に連れ出してあげる義務があるのではないか、そして何より、誰でも幸せになれる社会にしなければいけないのではないか、その思いが人の役に立つ仕事がしたい、女性であっても自立して生きていきたい、そのためには看護師になろうと思った。

一回生は県内各地や県外からの入学者もいて、寮や親戚のところから通学する人や、開業医の先生のところで手伝いながら下宿して通学する人もいた。授業時間が多くて、七时限の時は、病院実習の後また学校に戻り勉強した事もあった。先輩のいない三階建ての校舎を掃除するのは大変で、土曜日の午後はワックスがけ等、校舎を磨き上げ頑張った想い出がよみがえる。

あの頃、社会情勢とは無関係に無邪気に過ごしていたが、社会の要請で衛生看護科が発足し、県や医師会・学校関係者等、多くの方々の注目と努力の中で温かく見守られ私達は大事に育てられてきた。そして、幸せであったと今、心から思う。

卒業生がどう評価されるか、その結果に責任を負う内田先生始め教務の先生方のご苦労・ご心労はどんなに大変なものであったことか。あの厳しくよく叱られた想い出も今は全てが懐かしく良い想い出となり、感謝の思いで一杯である。そして、あの中学の担任に私達はどう映っているのだろうか。後輩達を送り出しても大丈夫と思っていただけたのだろうかと気にかかる。

■ 大成女子高バレー部の伝統と誇り

1983（昭和58）年大成女子高等学校普通科卒業
今井 路江

学校法人大成学園創立100周年、誠におめでと

うございます。1980年代の卒業生（バレーボール部）を代表しまして衷心よりお祝い申し上げます。大成学園は、明治・大正・昭和・平成の4代にわたる激動の中、幾多の栄光と歴史と伝統のもと、歴代の校長先生を初め、教職員の皆様のたゆ

まぬ努力とご尽力、また卒業生の母校を思う心の集大成でここに100周年記念の日を迎えられましたことは、この上ない喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、福島県いわき市に生まれ育ちバレーボールが大好きで親元を離れ大成女子高等学校に入学しました。当時は普通の高校ではなく何しろバレーの強い学校へ行きたかったのです。目指すは、春の全国選抜高校バレー大会とインターハイ、そして国体に出場し全国制覇をすることでした。入学と同時に寮生活が始まり、最初は集団生活に慣れることと規則を覚えることからでしたが、監督始め上級生の皆さんのご指導を賜りながらバレー生活がスタートしました。勉強するのは授業中のみで、その他の時間はバレーの練習に費やされました。練習も厳しく、監督も怖く、楽しみは何より食べることだけで同級生に買い物を頼んだことを思い出します。監督も家庭を犠牲にして練習と遠征に力を入れて下さり、私たちが3年生の年には、チームメイトにも恵まれ、茨城県代表として昭和58年の第14回春の全国選抜高校バレー大会に出場、見事全国三位入賞を果たし初めて銅メダルを獲得することが出来ました。栄光の影には、父母の会のバックアップ、更には校長先生を先頭に教職員始め学校全体の応援と協力があったから

だと感謝しております。また監督、そして計り知れない多くの先輩方が伝統や基盤を築いて下さったおかげで銅メダルを獲得できたと思っております。私の一生の宝物です。

大成女子高校バレー部の伝統と歴史は大変素晴らしいもので、繋でつないで守りたいと願うばかりです。私は、この三年間、普通の高校生では学べないことを体験し、バレーの練習はもちろんのこと一般常識や食事作り、洗濯、礼儀、気配り等たくさんのこと学びました。特に精神面では忍耐や根性、そして努力が身につき社会人になってから大変役に立っています。

いろいろなご縁で私は今、北茨城市議会議員として職責を担っておりますが、選挙で戦うのも精神力が必要とされ、仕事の中でも忍耐は必要であり、高校時代の経験が本当に今日生かされております。また多くの皆様にご支援を賜り、ここまで育てて下さった皆様に感謝をしながら恩返しをすべく、これから的人生、世の為、人の為、一生懸命頑張ってまいる所存です。素晴らしい伝統を誇りに思い、今後も大成女子高校バレー部の卒業生として胸を張って行動していきたいです。

終わりに、この記念すべき100周年を契機に、大成学園の益々のご発展と皆様のご活躍とご健勝をご祈念申し上げお祝いの言葉といたします。

■未来へのシンフォニー

1998（平成10）年大成女子高等学校普通科卒業
井上 いくえ

思い出に逢いたくなったら、私は今を抱きしめます。だって、思い出は遠い日の過去じゃなくて、ずっとずっと寄り添って歩んでくれる、大切な宝物だから。

抱きしめるは、音。父はオカリーナ職人。幼少の頃より、ずっと音楽に囲まれて暮らしてきまし

た。現在は私も、父の技を受継ぐ職人です。それゆえに、心に残る思い出は、全て音を帯びています。日本語の美しさに挑んだNHK杯全国高校放送コンテスト・アナウンス部門。二年連続で全国大会に出場することができた、あの時の音は「ミ」。父のオカリーナが脚光を浴び、ニューヨークのカーネギーホールで演奏した時の思い出は「ソ」。英語スピーチコンテストで茨城県三位になった時や生徒会会長に就任した時の、歓喜の音は「ラ」。み・そ・ら。心の五線譜に記すと、明日への希

望が響いてきます。音は、色あせない。だから思い出に逢いたくなったら、私は音楽を奏でるのです。

抱きしめるは、心。「ありがとう」と言うだけで心が豊かになるのを感じます。母校を巣立ってから、悩み苦しんだ時期もありました。そんな時、支えてくれたのは先生方でした。先生方の清く誠実なエールが、どれほど私を勇気付け、生きる指針になったか分かりません。だから思い出に逢いたくなったら、私は大きな声で心から伝えるのです。「ありがとう」って。

抱きしめるは、愛しきわが子。私には現在息子と娘がいます。2人は大成近くの産婦人科で出産しました。なにかに導かれるように病院を訪ねると、待っていたのは旧友との再会でした。衛生看

護科（現：看護科）を卒業した彼女は立派な看護師として、私を温かく迎えてくれました。わが子を見つめると、彼女が浮かびます。彼女の声、笑顔、そして思い出が溢れます。だから思い出に逢いたくなったら、わが子をぎゅっと抱きしめるのです。

ふるさとの四季を愉しみ、職人魂を手の平で継承し、子を愛し、懸命に生きる今が、本当に豊かで幸せです。現在の私は、母校で出逢った、かけがえのない人たちとの絆で作られています。だからこそ、母校の思い出を過去にせず、幸せの意味を子供たちへ、殊に娘へ語り継ぎたいと思っています。そしていつの日か、娘にとっての母校が、同じ場所であってくれたらいいな、と心から願っています。

■ お祝いの言葉

2009年度前期生徒会長 檜山 藍

創立100周年を迎えるこの記念すべき年に在学し、記念式典に参加できましたことを、私たち在校生一同大変嬉しく思い、誇りに感じております。また、多数のご来賓の方々、関係者の皆様のご臨席を賜り、ともに祝い喜んでいただけますこと、誠に光栄であり、在校生を代表いたしまして心からお礼申し上げます。

大成とは「完全に成し遂げること」と辞書にあります。私たちも日々、自らの夢に向かって勉学に励み、イベントや行事の時など、全員が一致団結し成功を目指しています。その他にも各部の活躍や日々の練習から、大成らしさを感じることができます。また、私たちの目標達成のために、

どの先生方も熱心に指導してくださり、私たち生徒の意欲を引き出してくださいます。この先生方の熱心さは、大成にしかないものだと思います。先生方と生徒が一つとなり、同じ目標を目指しているからこそ、ひとつひとつの努力が輪となり、完全に成し遂げることという意味を、なしているのだと思います。

この歴史と伝統のある大成女子高等学校で学ぶことができるのも、創立当初から今日までの、諸先生方ならびに卒業された先輩方の努力の賜物であると思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

1年ごとに1輪ずつ増え続けてきた撫子の花が、100周年を迎えた今、100輪のすばらしい花束になりました。今後も大成が発展し、200、300と美しい撫子の花が咲き誇ることを願い、お祝いの言葉とさせていただきます。



■ 短大の思い出

茨城女子短期大学前文学科長 若水 俊

大成学園が100周年を迎えると同時に、茨城女子短期大学が40周年記念を迎えるとの知らせを受け、思わず心からおめでとうと叫びました。既に私は5年前に短大を定年退職しました。しかし在職期間は短大同様、長期にわたりましたので、祝福の気持ちが自然にこみ上げてきたのです。

私の人生を語る上で短大を抜きにして語ることは出来ません。また、この間教員として大過なくすごすことが出来たことは、学長を初め教職員皆様方のご理解と援助と卒業生諸君の若いエネルギーの支えがあったためです。私はことあるごとに、人間は一人で行き抜くことは不可能で、人々の相互の助け合いによって、この世に生かされているのだ、ということを人生のモットーにしてきました。したがって、私にとって短大は、人生の大半を生かし、しかも学問研究を培ってくれた、大地のような存在だったのです。

短大の思い出を書いてくださいとの依頼ですので、思い出すままアットランダムに書くことにします。

初めての短大 私が短大に奉職したのは昭和42年春でした。水戸を訪れたのはこの時が最初でした。大成高校の応接室で初代学長の額賀修先生と、現学長の良一先生にお会いしました。修学長は私と同じ大学の同窓で大先輩でした。紹介者の尽力もさることながら、これが1つの本校勤務の縁となったのも事実です。

この時最初に短大を訪れました。2月28日で雪が積もり、大都会の生活の中で暮らしている自分には久しぶりに触れた、自然の冬景色でした。

通勤 さて勤務が始まりました。東京から短大へ週3日程通勤することになりました。それは往復で5時間以上を要する長距離通勤でした。しかし、そのようなことに驚いていられませんでした。なぜならば東京からご高齢の先生方が多数通勤していらっしゃったからです。

特に驚いたのは神奈川の平塚から通勤していた能村潔先生でした。先生はご承知のとおり短大の校歌を作詞しています。特に万葉集など上代文学が専門でした。また、同様に英文科に渡辺武先生が居られました。

週3日とはいえ、毎日通勤するのは大変ですから、なでしこ寮に先生方と1泊しました。通勤の往復の際もそうでしたが、それにもまして3人でよく夜遅くまで学問の話に花を咲かせました。

能村先生は日本文学、渡辺先生は英文学で、不肖私が漢文学でした。この三人三様の異なった学問の世界が、互いの研究、特に若輩の私にとっては、他分野のこの上ない、貴重で新鮮な知識を得る重要な時間となりました。

先生方の私に対する質問は大変鋭く、しばしば応えに窮するしまつでした。もう今となっては遠い昔で、ご一緒した両先生は故人となられました。しかし、退職後もお付き合いをさせていただきましたので、お2人の学問が、現在の私の研究の一端となっていることは言うまでもありません。

確かに自分にとって、通勤は一仕事でした。しかし、車内では学生と結構雑談が出来、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。また、専門外の書物を読む時間が十分ありましたから、電車は私にとってまさに動く研究室だったのです。

学生と授業 国文科の学生達は、文学好きで短大に進学してきました。私の授業は、学生にいろ

いろいろ問題を提出し、質問して授業を進めるタイプでした。創立当初は学生も少なかったので、古典や漢文を読ませたり、解釈させたり、質問したりしたので、1時間の間に何回も指名されて、気の毒のように感じましたが、若さゆえに、自分のモットーを曲げることはしませんでした。

やはり教育には少人数制が最も大切であります。当時他大学は巨大化しつつありました。このような中、額賀修学長は、1校ぐらい小さな大学がって、手作りの教育を目指しても良いのではないか、と常々語っておられました。それは現代の人間教育にとってこそ必要な考えだと思い、学長の教育理念の崇高さを今更ながら知らされる思いです。

学生との接触は、授業だけでなく、放課後読書会を開いて、文学論を互いに語りあうこともありました。特に印象に残っているのは、夏目漱石の『こころ』を読んだ時でした。『こころ』は、高校時代に読んだことがある程度で、熟読した作品ではありませんでした。しかも私にとって漱石は専門外で、彼の漢詩以外精読したことはありません。

しかし、過去の曖昧な記憶では、学生に太刀打ちできませんので、読み返しました。恥ずかしい事ですが、漱石の作品の偉大さを知らされたのは、実はこの時であったのです。人間性の内部を抉り出し、また天馬空を飛ぶが如き強烈な文章の運びに唖然としました。

学生達は、いろいろな立場から、それぞれ意見を出しておりましたが、それらは何れも貴重な感想でした。しかし、彼女等よりも少し年齢的に先輩の私は、結局学生にむかって述べたことは、もう一度10年後に読み返すように、と言うのが精一杯だったおぼえがあります。多分、彼女達と、私の間には、なにか人生観の上で見解の相違があったのでしょう。

ゼミ旅行 国文の学生で忘れられないのは、私の「古事記」の講義が契機となって、学生自身が、

神話の里を旅しようとする計画を、独自に立てていたことでした。夏休みの直前になって、研究室に突然学生が現れ、一緒に出雲地方を文学散歩しませんか、と誘われました。まさかこのようなことが密かに計画されているとは思いもしませんでしたが、学生の熱意を感じすぐに承諾しました。出発から帰宅まですべてを学生自身が計画したのです。

私は、それまでに幾度か出雲を訪れていましたので、今回はガイド役というわけです。ほとんどの国文の学生が参加しました。このような行事を学生が実行したことは後にも先にもこれ1回だけでしたが、充実した神話の世界を散策でき、この時の学生達の印象は強烈に私の脳裏に残されています。

旅行といえば、卒業年度の学生が、松阪・奈良・京都を巡るゼミ的な文学旅行を毎年実施したことは、私にとって忘れられない思い出となっています。特に松阪は国学の祖、本居宣長が生涯を過ごし、数多くの著書を執筆した土地でした。本居宣長記念館や、彼が住んでいた旧宅跡、また彼の墓も訪問し、宣長の業績を偲ぶことが出来ました。また、その後、旅は古典の郷、長谷寺、室生寺、淨瑠璃寺などを経て、京都へ入り、それぞれ学生達が熱心に自分の研究テーマに従って、旧跡を探索したことは、卒業生にとっても、大いに有意義であったとともに、教師と学生との間に親密な交流が生れ、互いに理解しあえたのは大変意味のあることでした。

当時の引率役は竹内・武田各先生と私でしたが、殆んど旅行期間中、学生の動向に気を配る必要はなく、各自責任あるしっかりした態度で無事旅を終了できたことは、あらためて学生に感謝するしたいです。竹内先生は京都の地に精通しており、いろいろなことを教えていただきました。しかし、近年病気のために逝去されました。私にとって先生は良きライバルでしたので計報に接したときに

は本当に落胆しました。今は旅行の際に、京都の酷暑の中に帽子を被って歩く姿だけが思い出に残るばかりです。

研究紀要のこと 研究分野の話になりますが、研究紀要を仲間と立ち上げた時は、現学長の理解もあって、無事創刊号を出すことが出来ました。初めのうちは原稿も順調に集まりましたが、次第に投稿数が減少しました。さすがに継続できるかどうか危惧しました。

しかし、その重要性を認識していただいた英文科の茂木先生が、強力に援助してくれました。これは私にとって非常に力強いバックアップとなりました。したがって休刊をした年が一度だけでしたが、どうやら、その後も持続できました。私が短大を退職する頃には、多くの先生方が論文を投稿し紀要も大変分厚いものになっておりました。すっかり研究の基盤となっていることを嬉しく感じます。

また『茨女国文』の発行も、卒業論文とともに、国文科にとっては有意義なものとなりました。小雑誌ですが、先生方が内容をコンパクトにまとめ自由に発言しました。また、短歌など、高校生を対象にした公募作品も多く集まるようで、短大に裨益する所多大であると思います。今後の発展を祈ります。国文科の小野、武田、小林各先生方の今後一層の努力をお願いいたします。

失敗談 大失敗もしました。現在も行われていると思いますが、グループ交流会で、いい気分で走っていた時、アキレス腱を断裂してしまいました。もう、年なのによしておけばよかったのですが、中高時代少し陸上競技などをやっていたのが、仇となったのです。

入院し、皆様に多大なご迷惑をかけることになりました。この時、国文の学生諸君から激励の言葉を書いた色紙をいただきました。その中に「石膏で固められて痒いでしょう」などとさんざん冷やかされました。その色紙は今も私の書斎にあり

ます。これがきっかけで交流会が来るたびにこの一件が話題となって閉口しました。遠い昔の痛い思い出です。

また、交流会では、教員の仮装行列が行われるのが恒例でした。いろいろな仮装がありましたが、中でも一番困ったのは、花嫁衣裳を着せられることでした。ある年、不幸にもその衣装を着せられる運命となりました。周囲の学生諸君は私の無様な格好をみて笑いころげました。長い人生の中でも花嫁衣裳を着たのは、男性とはいいながら、後にも先にもこれ1回だけでした。あとで撮影された写真を見て自己嫌悪に陥りました。

自然美 私は、短大から茨城学園までの道を歩くのが大変好きでした。講義が終了すると、後台駅に向かって道路を直ぐ右折し、寮の裏側の堀にそって歩き始めます。歩くのは健康に良いというのが励みになっていましたが、それにもまして民家が点在する田園の中を通る道が、四季の美しさを感じさせてくれました。鶯、ホトトギス、郭公の声も聞えました。

時々、遅い時間帯に講義をお持ちの英文科の岡田先生と会うことがありました。先生はゆっくりと歩きながら、周囲の季節ごとに変化する樹木や田畠の様子を見ながら散策を楽しんでおられるようでした。お会いすると、先生は必ず「自然は本当に美しい、美しい」と幾度も私に語りかけ、しばし、2人で周囲を眺めて、立ち話に耽りました。

確かに、この付近の景色は、ごくありふれた田園風景なのですが、その雰囲気には、人間に安らぎを呼び起こす力が残されており、大都会で暮す私にとっては、またとない情景で、今もその景色が思い浮かびます。美しい日本というところでしようか。

終りに さて、創立以来、40年の間には、短大多くの卒業生を輩出し、政治、経済、文化、教育、家庭など各方面でそれぞれ活躍されておら

れます。その事は、多くの学生からいただく年始状やお便りなどから知ることができます。これからは社会情勢も大きく変化するでしょう。この激変に負けることなく、堂々と頑張ってください。

また、最近は国文科という学科名が、全国の短期大学から消滅しています。横文字の曖昧な学科名を付けるところもありますが、やはり日本の言語や文学を研究するのですから、国文科の名前が最適です。今後もこの名称が永遠に茨城女子短期

大学に継続することを願っております。

筆を置くに当って、多くの先生方や、事務局の方々のお顔が浮かびます。この思い出の記には文科以外の先生方の個人名は挙げておりませんが、私の心のうちに鮮やかに残されています。私は短大の多くの方々によって生かされてきました。本当に有難うございました。

最後に大成学園と茨城女子短大の一層の発展を祈念して思い出の一端とさせていただきます。

■思いつくままに

茨城女子短期大学前副学長 高瀬 一男

学校法人大成学園が本県の私学女子教育の草分けとして開学され、明治・大正・昭和・平成の4世代に亘り、女子教育の充実と発展に寄与され、ここに創立100周年を迎えられること、誠に大慶に存じます。

短大とのご縁

私は平成7年4月から17年3月までの10年間奉職した。それ以前は、茨城大学教育学部に約40年間勤務し、理科教育学を中心に教員養成に関する教育・研究を行ってきた。その間、教育学部附属小学校長・幼稚園長を6年間併任した。また、大成学園幼稚園とも縁があり、文部省委嘱「幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究」の講師として、昭和62年から3年間かかわってきた。一方、他大学の非常勤講師として、幼児教育の「自然」「理科」等を担当したこともある。

茨城女子短期大学には、このような関係もあって、五來保教授のご退職後、私が採用されたのである。

赴任当初の印象

水戸台地に対峙する那珂台地の東木倉地区に入ると、清楚な茨女短大校舎が人目を引く。玄関には美しい花が生けられ、整然として綺麗

さが印象的だった（当時は土足厳禁だったこともあろう……）。

外に出れば、広大な校庭は全面芝生、大きな池に鯉や金魚が泳ぐ、工夫された花壇、ほどよく配置されたベンチや樹木、自然的・教育的環境の良さは他に類を見ない程である。

近隣には、那珂町立五台小学校・幼稚園、県立水戸農業高等学校、さらに、県立那珂高等学校、そして茨女短大附属大成幼稚園と正に教育環境の豊かな文京地区であると感じた。

茨女短大は、文学科、保育科、専攻科の3学科から構成されており、私は保育科に所属した。研究室は、第5研究室で、松永暁子・芝沼永・倉持洋子・小林洋子・佐藤豊先生方との同室となった。これまで40年間も個室だったので違和感もなくはなかったが同室の先生方は、新参者の私に何くれと親切に教えてくれ、すぐに馴じむことが出来た。

相次ぐ悲しみ

保育科長松永暁子教授は、平成7年11月学内において突然クモ膜下出血によって倒れられた。水戸済生会総合病院で手術、加療されたが、残念ながら12月16日永遠の眠りについてしまわれた。

教授は、昭和52年着任、昭和61年には学術博士の学位を取得される程の学究の徒であった。平成6年からは保育科長・評議会メンバーとして、

学科並びに短大運営にかかわる要職につかれていた。一方、自己点検・評価規程の策定委員としても尽力された。今後の点検・評価活動の推進役として期待されていた矢先のこととて、短大にとって大きな痛手となったのである。改めて先生のご冥福をお祈り申し上げる。

年明けて平成8年1月不肖私が保育科長に任命された。個人的には勤務して日浅く、短大の内容も十分理解していないので躊躇したのだが、入試の時期でもあり科長空席では運営上支障をきたしかねないとのことで受諾したのである。

平成8年度が心機一転してスタートしたのだったが、夏休み頃から倉持洋子教授が病魔に冒され入院加療をやむなくされた。体の不調を訴えられて僅か3か月後の11月25日に昇天されてしまった。

教授は、昭和43年に着任され、保育内容研究、実習指導、児童文化の講義を担当する一方、学生部長の要職にもつかれていた。

特に、学生の実習先である幼稚園、保育所等を一手に掌握し、学生の配当を円滑に進めていたので、先生亡き後戸惑う程であった。

2年続きの弔事に遭遇し、私達は沈痛の極みから、お二柱のご冥福を祈ると共に健康・安全を祈願したのであった。

自己点検・評価

茨女短大では、大学・短大の設置基準の改正の趣旨に則って「茨城女子短期大学自己点検・評価に関する規程」(案)が平成7年8月の教授会で承認され、その活動が始動した。

平成7年度には、茨女短大全体にかかわる大枠の点検・評価項目を設定し、各委員会において検討され、貴重な資料が得られた。特に、建学の精神に則った女子教育に関するカリキュラム等に着手し、共通教養科目を設け、専門科目との密接な関連を持たせる方策を講じつつ改善を図ってきた。

平成11年度には、大学における教育・研究活動は、その大学の生命ともいべき活力を示すもので、極めて重要な基軸であるとの認識にたち、教員個人の研究業績及び教育活動(代表的な授業の展開と評価)、さらに社会的活動等について取り上げた。また、各学科における特徴的な教育、課外活動、学生生活の実態等についても点検・評価を実施した。

その結果、全教員の理解と協力を得て「研究業績・教育活動一覧」-茨城女子短期大学における自己点検・評価報告書-平成11年度を刊行した。

さらに、平成13年度は、自己点検・評価を開始して以来の評価項目、即ち、教育理念、教育活動、教員構成、図書館、国際交流、地域社会との連携及び管理・運営等の全般にわたって、全教職員により点検、評価を実施した。その結果をまとめ「自己点検・評価報告書」-平成13年度-を刊行した。これらのことは、自己点検・評価委員長として喜ばしいことであった。

平成14、15年度には、平成13年度の報告書の中で指摘された改善点が、どのように改善されたかについて、各担当委員会で検討した。さらに、教員の授業評価の一環として、他大学等で実施している先行研究を参考にして、授業内容、指導方法、学生の受講状況等について評価項目を作成し、各自評価を実施した。

平成16年度は、引き続き授業評価に視点をとき、学科によってはFDを実施する等して、教授内容・方法の改善に努めた。

今後は、第三者による評価検証が求められることでもあり、短大充実発展のため、一層努力されることを切望する。

叙勲の祝賀会

茨城女子短期大学理事長・学長額賀良一先生は、学園内外における教育文化の振興に貢献された功績により、平成14年春の叙勲の栄誉に浴され、勲四等旭日小綬章を受章された。

その栄誉を讃えるため、先生ご夫妻をご招待して、6月8日水戸京成ホテルにおいて、祝賀会を開催した。

茨城県総務部総務課長小川俊明様・同私学振興室長木城晃三様、水戸市長岡田広様、那珂町長小宅近昭様はじめ、大成学園理事・評議員の方々のご臨席をいただき、短大・高校・幼稚園の教職員、さらに父母の会、後援会、秋桜同窓会、なでしこ同窓会等の関係者、130余名の参加を得て、盛大に祝賀会が挙行された。

先生ご夫妻の数々の功績やエピソードを語り合うなごやかな情景は、学園の繁栄を象徴するが如く思われ感激した。そこで、拙句

「薰風や胸に勲章輝けり」を呈した。

理事長先生のご健勝と大成学園の益々のご繁栄を祈念してお開きとした。誠に大慶に存する次第である。

実習巡回訪問

保育科の学生は、毎年幼稚園、保育所、福祉施設等で実習を行っている。その期間中、実習指導のため巡回訪問する。

訪問先々には、かつて私が他大学で教えた学生や、文部省・茨城県教育委員会主催の認定講習「幼稚園教育内容」の受講生が、主任級として活躍していた。また、茨女短大で出会った若き卒業生も、現場での試練を重ねて立派に成長し、温かく迎えてくれた。

9月の暑い日「冷蔵庫で冷やしてお待ちしていました。」と、冷たいおしぼりを出してくれた時は非常に感激した。

このような打解けた雰囲気の中で、学生の実習状況（幼児との対話のし方、実習日誌の書き方、ピアノの弾き方、挨拶のし方、敬語の使い方、健

康管理に至るまで）を忌憚なく話してくれ、学生の指導上参考になることが多かった。

時には、「実習生の○○さんを是非採用したい。」とか「茨女短大の卒業生を採用したいので推薦してほしい。」等、就職の相談を受けることもあった。従って、学生には、建学の精神に則り、日々精魂こめて取り組むことの大切さを説いてきたのである。

短大の発展を願って

平成12年9月、学長の諮問機関として、「茨城女子短期大学運営委員会」が発足した。

委員会は、本学の教職員・卒業生、本法人以外の学識経験者10名の委員で構成され、学科及び専攻に関する組織・編成や、短大運営全般について検討を重ねた。

時代の趨勢により、一部の学科に定員割れが生じ、平成14年度には、文学科英語英文学専攻の学生募集を廃止し、文学科を国文科と改組した。

「地域に根ざした茨城女子短期大学はいかにあるべきか」について、意見を求めた結果、「建学の精神」を基礎に据え、現代社会が求める女子教育の充実、公開講座（出前・リカレント・地域連携型・一般講座等）の強化推進、ボランティア活動への参加、介護福祉士養成や各種資格取得の拡大、さらに、短大の現状に対する教員の意識高揚等が上げられた。

これらも踏まえて、茨城女子短期大学が益々発展されることを切望するものである。

今後、伝統ある学校法人大成学園が一層地域との連携を深めながら、益々発展されますことをご祈念申し上げます。

■専攻科の思い出と介護教育への期待

茨城女子短期大学前専攻科長 上田 忠義

専攻科開設

平成元年県を退職、介護福祉士を養成する専攻科を設けるとお話しにより茨城女子短期大学に奉職したが、当初の計画は1年おくれて平成2年度からとなり、1年間は保育科に所属し社会福祉系の諸科目を担当した。

当時専攻科の開設準備事務は教務課の江畠武彦氏が担当され、当時の厚生省への認可申請事務等を行っていた。10月になって申請内容中「介護実習」について担当官からより具体的かつ明確にとの要請があったと江畠氏から相談があり、第1段階を6月に2週間の参加実習、第2段階を9月4週間の介護技術実習、第3段階を12月2週間の現任準備実習とし、内容も具体化し再提出してもらった。

12月1日厚生省の係官2名が県職員同行のもと来学。3号棟の建築許可関係の書類の確認、教室・実習室の点検、福祉関係図書の確認、教科担当予定者の履歴等の聴取が行われた。そしてその際係官から開設許可の通知を受領後学生募集実施事務を開始するとの強い指示があった。

12月末堀籠学長より専攻科開設準備室長の辞令を受け、1月10日学内関係者による専攻科受験要領等の検討会を開催。2月に入って開設認可通知を受けたが教務課は年度末テスト等の業務で多忙。広告費等も予定していないことなので資料を作り水戸市内の新聞社、支局等報道機関を個別訪問し、報道化を要請した。翌日の記事は数紙にとどまったが「茨城女子短大介護福祉士養成コース新設」等の見出しの記事が掲載された。

3月15日入試。7名の希望者があったが第1期生は6名が入学した。

専攻科カリキュラム 平成2年度単位

授業科目	必修	選択
老人福祉論	2	
障害者福祉論		2
リハビリテーション論	2	
レクリエーション指導法		2
老人・障害者の心理	2	
家政学概論	2	
家政学実習	2	
介護概論	4	
介護技術演習	3	
障害形態別介護技術演習	3	
介護実習	8	
実習指導	1	
課題研究	1	

当初のカリキュラムは上表のとおりで保母資格取得者の場合は選択科目及び課題研究を除いた教科の養成が義務づけられていたが、本学においては、障害者福祉論等の教科を全員が受講するよう指導し、必修化してきた。その後、介護対象者の実態に応じ医学一般をカリキュラムに加え実習指導、課題研究等単位数を増加した。

質の高い介護福祉士の養成

よりよい福祉後継者の育成こそ今後の私の課題として赴任し、1年間保育科に所属し学生と接している間に私の使命は学生への支援が重要で研究は後回しにして人を育てるに力をそそぐべきだと強く感じた。

人を育てるには学生との接触を多くすることが必要であり、教室と研究室の近接化、研究室図書の貸出し、夕刻時の研究室在室等に配慮した。

特に社会福祉施設側の養成校への評価は3年が勝負と言われているので質の高い福祉人材を育てるためには修了式時はもちろん、実習派遣時や長期休暇に入る際にはそれぞれの期の状況に応ずる講話を行ったり先進的優良施設の見学や学生の計画した懇親会等への参加など学生との交流を重視した。

施設見学は、国際福祉機器展の他県内の老人福祉施設であったが県外の施設では神奈川県の福祉機器展示施設、仙台の特別養護老人ホーム「せん

だんの杜」、平塚の障害者施設「ソーレ平塚」などであった。

また、学生の意欲を高めるため、ESSE、うえるわーく、おはよう 21、福祉新聞などに働きかけ、取材に応じ専攻科の状況を記事化することにも努めた。

今でも専攻科修了生の就職先を訪問すると施設長等から「本当によくやってくれている」等の話を受けることが多く、よき福祉人材を育てることができたと感じている。

1期生の旧姓小林さんが「おはよう 21」の新人寮母奮戦記に「相手の立場に立つ」学校で学んだこの言葉の大切さを感じ、いつもほほえみを忘れず、これからも忘れずに（以下省略）……と書かれているが、介護利用者に対する対人姿勢が誠に適切、質の高い介護福祉士の育成に寄与できたのではと自己満足している。

同期会と結婚式への参加

専攻科は学生数も少なく仲間づくり活動も盛んなため就職後も同期会を開催するクラスが多い。専攻科設置 5 年後頃までは学内介護福祉学会を設け研究活動の充実を考え一部の修了生と何回か話しあいをしたが、修了生は老人介護や障害者支援の分野ばかりでなく、幼稚園や保育園に勤めている者もあり学会結成は難しい状況となった。そこで修了生向けの公開講座を実施したがこれも参加者少数という結果であった。ここ 10 年の間に社会福祉の制度や法律は大改正されており、修了生の多くは新採用員の指導等を行う立場になって來たので同期会の場を通じて卒後教育を行うこととした。

最近の集会では多くの期が 1 時間程度の時間を予定し、講義のテーマを設定し要請してくるクラスもあるが「介護保険の改正」「障害者自立支援法の概要」「社会福祉の動向」などとなっており、不十分ながらも卒後教育が軌道にのって來たと感じている。

結婚披露宴への御招待を受けることが多い。

年によっては年間 10 回といった年もあったが、退職後の現在も嬉しいお招きを受けている。多くの場合主賓として御祝辞を申し上げる役割が課されるが、その席には必ず同期生が数人参加されておられるので、同期生のご披露宴で話した同じ掛けの言葉を申し述べる訳にはいかず苦労したこともあった。

その後、住所の変更や出産のお便りなども頂いた折には御返事を忘れずに出すよう心掛けている。

共通テストとカリキュラムの改正等

介護福祉士の資格取得の方法は大別すると養成校卒業と国家試験合格の 2 種類である。

養成校も年々増え本県だけをみても 9 校となつたが、卒業生を採用する施設側から養成校卒業者は国試合格者より知識面で劣っている者がいる等の意見が出され、養成校で組織している介護福祉士養成施設協会が平成 10 年からすべての養成校で国家試験とほぼ同様の統一試験を実施することになった。

介護系の問題は実習体験もあるため成績は本学を含め他校でも比較的良好であるが、社会福祉概論、援助技術、老人福祉論、医学一般等の成績は個人差が大きく不出来の者もおり、総復習を 1 月に実施せざるを得なかった。

共通テストの本学専攻科の成績は年次的に若干の差はあるが、全国平均よりやや上位という状況である。

その後、介護保険法の施行時に合せて介護福祉士養成施設指定規則の一部改正があり、11 期生から新カリキュラムによる養成となった。変更の主なものは、老人福祉論が 4 単位に、介護技術、形態別介護技術がそれぞれ 1 単位増えて 4 単位の履修となった。なお、その数年前から課題研究が I と II に分類実施され、時間割には学内研究という時間が設定されて学生自らが自発的に学内で学

習する形態もとられている。

これらのはか他の養成校と異なることは、第2段階の実習の際、特定の入所生活者を個別観察対象者に選び生活の実態をとらえ望ましい援助策を考察させこれを原稿25枚程度のレポートにまとめさせ、毎年これを冊子化し発刊している。

1か年で資格付与のため専攻科は夏休み、学年末休み等も保育科に比して少なく、卒業期等に「保育科の2か年より専攻科の1年の方が倍も学習した」と述べる者が多い。就職後も夕刻など来校する修了生の多いことも専攻科の特性といえよう。

長寿学園の開設と専攻科生との交流

茨城女子短期大学に赴任後間もなく県教育庁社会教育課の係員が長寿学園開設の件で本学に数回来訪された。何回目かに事務局から話を聞いてほしいとの連絡を受け面談。高齢者が生きがいをもち充実した生活をおくるための講座「長寿学園」を開設する。については貴学で専門課程の福祉コース（定員20名）を担当してもらいたいとのことだった。

学長等に報告して2か月程たった折、他の短大等でも受託しているので7月25日の担当者会議にとりあえず出席するよう堀籠学長から指示された。会議では本学の場合授業内容は社会福祉とし、学習分野を原則15時間を1単位として編成すること、運営費は県が交付、各開設校ごとに運営委員会を設けて実施すること等の説明を受けた。

夏休みに入ったがともかく申請書類の作成が必要のため学内の分担が不明確のまま当面の業務の処理をせざるを得ず、開設打合会等も開き10月17日25名の受講者を迎えて開講した。後程学内で長寿学園は専攻科がやっているといわれた原因がここにあったと思われる。

長寿学園の方々は熱心に学習される他、スポーツフェスティバルや樹林祭にも参加され専攻科生とは討議や忘年会等一緒に実施したクラスもあつた。

学習分野	6期まで	7期以降
社会福祉一般	30時	20時
家庭福祉と青少年育成	15	15
障害者福祉	15	15
高齢者福祉	15	15
施設見学・実習	15	15
地域福祉	15	15
計	105	80

		1年次	2年次	受講生
長寿学園 福祉コース	1期	35時	70時	25
	2期	50	55	21
	3期	50	56	26
	4期	50	57	17
ゆうゆう カレッジ 福祉コース	5期	51	58	21
	6期	50	55	19
	7期	40	40	18
	8期	40	44	14
	9期	40	44	15
合計				176

※5期生から学園名称が変更となった

専攻科の6期生はスポーツフェスティバルで長寿学園の方々の奮闘で優勝の栄冠を得たチームであるが、代表の神長さんは、長寿学園4期生の卒園記念文集「ふれあい」に「修了の日に頂いたお花と励ましの言葉は花開く可能性を強く感じさせて下さるものでした。これからも私どもを導いて頂いたり、ボランティアとして就職施設にお越し願いたいと思います」と記している。

長寿学園の文集には交流によって若者への認識を改めさせられ、私たちに若さをとりもどさせてくれた等の記事も多くみられ、相互に大きな成果があったと思っている。

福祉コース修了者の多くは民生委員、ボランティアグループや老人クラブのリーダーとして活動していること、各期ごとに同期会がもたれていること等大きな成果といえよう。

退任記念パーティで感激

茨城女子短期大学に勤めて17年が経過し75歳の定年を迎え、平成18年3月31日をもって退職した。

受ける身となった私にはパーティ実施に至った経緯は解らないが退任を目前にした3月26日、ひたちなか市のクリスタルパレスに来るよう御

案内を頂いた。

16期生までの修了生は257名で東京都内、福島、栃木の居住の方、子育て中の方なども多いのに約半数の120名超える方々と専攻科育成に御尽力を願っている小池先生、早船先生及び仙波先生、中野先生、井坂先生の御参加で盛大なパーティには大変驚かされた次第でした。

1期生の小松崎さんからごあいさつをいただき2期生の古室さん、9期生の緑川さんから記念品そして4期生の川下さんから花束の贈呈を受け、

8期の浅野さんの乾杯で会が進み、修了期ごとの記念撮影でさらに花束や記念品を頂戴するなど感無量でした。頂いた寄せ書には温かい言葉が記されており生涯忘れられない思い出です。

この他13期生が平成18年10月に開いてくれた謝恩会も心にこもるものがあり、記念品まで頂いたのも忘れられません。

愛情豊かな若人と共に過ごした想い出多い17年間に感謝している。

■大成学園100周年を祝して

茨城女子短期大学同窓会秋桜会前会長
1969（昭和44）年保育科卒業 後藤 久枝

大成学園100周年記念誠におめでとうございます。

秋桜同窓会会員の皆さまと共に心からお祝い申し上げます。

私個人としましても、母が昭和10年代に、私が40年代に、娘が平成10年代に、親子三代に渡りお世話になりました。卒業いたしましたので感慨ひとしおでございます。

茨城女子短期大学に通った頃の思い出等も書かせていただきますが、先に母体であります大成女子高等学校の歩まれた足跡をたどってみたいと思います。

大成女子高等学校は、明治42年に額賀三郎・キヨ先生夫妻が女子教育の重要性に痛感されて大成裁縫女学校を創立されました。茨城県で最初の私立女学校として本科生徒5名、専科生徒8名で授業を開催しました。明治44年生徒数が増え校舎を増築し2階建ての校舎が完成しました。

ところが大正5年強烈な暴風雨に襲われ、新築の校舎は一夜のうちに倒壊してしまいました。言葉も出ない大変な衝撃を受けましたが再建に着手

し大正6年に完成しました。

明治45年なでしこの花をかたどった校章が制定されました。本校で学んだ生徒が「やまとなでしこ」とたたえられるような美しく気品のある女性になることを願って校章にとりいれられました。大正8年大成裁縫女学校を水戸市大成女学校と改称しました。

本校の特色は、校長先生を中心に教職員が一家の父母姉妹のような親密さで生徒に接し、教職員自ら言葉に出したことは実践し、行き届いた教育を行いました。

昭和4年大成高等女学校設立が認可、校歌が制定されました。

水戸学の精神を受け継ぎ、美しい自然の中で貞節の心を養い、特に誠実・協和・勤勉の実践目標を掲げて、大成の名において勉め励もうという本校の教育精神を明らかにしております。昭和20年戦災で全校舎焼失しました。

学園は廃墟の中から再建をめざし、旧37部隊兵舎を借りて仮校舎とし、授業が再開されました。机や椅子はなく、板を切って机としました。食料不足を補うために、校舎は野菜畠となりました。職員・生徒・卒業生が協力して、焼け跡の整理が進みました。

昭和23年、学制改革によって大成女子高等学

校と改称し、新制の高等学校となりました。戦後の混乱期に校舎の再建は難しく、昭和22年に建てられた第1校舎で、生徒は週1度学ぶ以外は、37部隊の兵舎で各校雑居の授業が続きました。

昭和28年第4校舎が完成し、戦後の間借り生活に終止符が打たれ全校生徒が本学で学べるようになりました。

昭和28年、初代校長先生の志を受け継いで額賀修先生が就任し、さらに教育環境の整備にあたり、木造校舎時代から鉄筋校舎時代への転換期を迎えたのです。

先生は、人情に厚く、あたたかい人柄ありました。

大成女子高等学校を母体にして、茨城女子短期大学や同短大の附属大成学園幼稚園を擁する「大成学園」を作りあげました。また、全国私立中学校高等学校連合会理事、全国短期大学の常任理事、茨城県の私学協会の協会長として、私学振興に努力されました。

昭和59年、額賀良一先生の校長就任により校舎建設の具体化がさらに進められました。昭和63年には、待望の2階建ての新体育館が落成し、優れた設備を整えて部活動や集会に利用され学園生活を豊かにする場になりました。

平成8年に木造校舎がとりこわされ跡地に本館が竣工されました。

こうして現在は、全部の建物が鉄筋の校舎に建てかえられております。

さらに時代の要請に沿って、OA機器が設置され、多方面にわたって利用されております。又、衛生看護科の充実がはかられ、5年一貫教育に進まれた学生が卒業されました。

そして、これまでの卒業生全員が国家試験に合格され看護師の資格を得られました。私は、看護科第1回生の戴帽式に出席させて頂いて厳肅の中に感動を憶えたことを忘れることができません。

平成16年4月より額賀良一前校長先生から額賀修一先生になられ、時代に即応した女子の教育に全力をそがれております。

以上、大成女子高等学校の歩みを創立90周年記念誌等を参照し抜粋させていただきました。

書かせていただき感じたことは、決して平坦な道のりばかりではなかったということです。

二度も校舎を失い、その度に努力されたことが大きな根を張りゆるぎない大成学園を作っているように思えました。

このような大成学園が茨城女子短期大学を昭和42年4月に開学し現在に至っております。

本学が目指すものは、学園の建学の精神を基盤とし、本学学則の総則に「本大学は、教育基本法および学校教育法に従い、広く知識を授けるとともに深く国文教育および保育に関する専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を養い、明朗で知性に富み穩健かつ情操豊かな女性の育成を目的とする。」ことにあります。と示されています。

私達は、希望にもえて茨城女子短期大学に保育科第1回生として入学いたしました。

自然に囲まれた環境の中に真新しい学舎が建たれ、文科英文専攻8名、文科国文専攻8名、保育科47名のスタートでした。

先生方に熱心にご指導をしていただき楽しい学園生活を送ることができました。

その第1として、1年生の時に野外研修で那須に行きました。授業では、心理学という新しい科目に興味をもちました。又ピアノのレッスンをするために、バスから降りたら夢中でピアノ室へ走りピアノを確保して練習をしたこと、教育実習で緊張したこと、水泳の単位を取るために泳いだこと、文化祭で遅くまで残って準備をしたこと、そして修学旅行で北海道に行き大自然の中で私達の将来を熱く語り合ったこと等それもこれもなつかしい思い出です。

第1回卒業生は、すでに還暦を迎えていました。歳を取るのは、早いものだなあとおもいますが歳を取るのも良いこともあります。なぜなら、いろいろな事を体験し物事のことわりがわかるようになってきたからです。若い皆さん、悩んだら話しかけて下さい。たくさんの卒業生がおりますよ。

卒業生であることがわかると急に親近感を覚え親しくなるものです。

それが古い歴史をもつ学校の良さだと思います。

創始者の額賀三郎、キヨ先生のおしえが代々の校長先生に受けつがれそれが今の私達の幸福につながっていることをしみじみと痛感いたしております。

ですから在校生の皆さんも、この学校を卒業して良かったと思えるように有意義な学園生活を送って下さい。

これから私達は、卒業される皆さんを受け皿になつていきたいと思います。

家族においては、若い人達のよき理解者になり地域では、皆さんと仲よく付き合ってお役に立てる人になっていきたいと思っております。

幸福になって活躍できることが今迄一生懸命に教えてくださった代々の先生方に恩返しできることだと思い頑張っていこうと思います。

大成学園100周年を心からお祝い申し上げ、学園の益々のご発展と先生方のご健康をお祈り申し上げご挨拶といたします。



kindergarten

■3つの園舎の思い出

大成学園幼稚園前教頭 柴田 和子

創立100周年、誠におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。

100年という長い年月の中で、20余年を大成学園で過ごす事の出来た喜びと、100年という節目にあえた幸せを有り難く感じております。

この中で私が一番心に残るのは、現在の園舎と今は幻と消えた2つの園舎の中で過した日々です。昭和58年に県教育庁を退職し、すぐに大成学園で再び幼児と触れ合う生活ができました。その時の1つ目の園舎には中二階があり、階下で遊ぶ幼児の姿を保育科学生が観察する場でした。裏庭には学生が以前、部活として使用していた中学校校舎が廃屋として残され、当時の幼児は毎日心躍らせ、想像の世界をくり広げていました。ヘビが廃屋に入ったと恐怖で窓ガラスに石を投げた

り、ドラキュラ退治をするといつては、ニンニクとネックレスの十字架を片手に、教師を先頭に心おののかせながら探険した場もありました。お茶の若葉を摘んでのお茶つくり、園庭に広がる新茶の香りを胸いっぱい吸い、ブランコを漕ぐ幼児。楽しい生活ができた環境があった園舎でした。

現在の園舎になる前、11ヶ月過した2つ目のプレハブ園舎、短大の広い芝生を自由にかけ廻り、自然体験がたくさん出来た園舎、40度の暑さにもめげず、汗まみれになりながらも遊びに没頭していた当時の教師や園児の何とたくましい事。

3つ目の現在の園舎、額賀先生の「主役は子ども、広い保育室を自由に使ってのびのび遊んでほしい」の理念に共感！扉を全開すると廊下と一体になり更に広い空間となる保育室。玄関、トイレの前、絵本のへやの廊下と天窓のステンドグラス等、美しい環境のもと幼児と教師が創意を働かせ、楽しい遊びが生まれた園舎。今でもこの園舎は私

の一番のお気に入り。いつの間にか大成学園が「心

のふるさと」になっている私です。

■大成学園幼稚園に勤めて

大成学園幼稚園元教諭 中庭 理恵子

創立 100 周年を迎えたこと、誠におめでとうございます。心よりご祝詞申し上げます。

私は、幼稚園創立 4 年目の昭和 49 年 4 月から、平成 4 年 3 月までの 18 年間、幼稚園にお世話になりました。

短大を卒業し、初めて勤務した時の事が、今でも鮮明に思い出されます。

初めて担当する部屋に入った時には、高い天井、まっ白で広々とした部屋に胸を高鳴らせ、子どもの迎えでマイクロバスに乗った時には、嬉しさと緊張感を覚えたものでした。

親元を離れて初めて集団生活を経験しようとする子ども達、私も何もかもがわからない事ばかりで不安でしたが、その姿を見せてはいけない、と夢中で毎日を過ごしました。

そうした中で跪く程に、自分の指導の未熟さを

忘れてしまい、どうして私のクラスの子ども達は思うように動いてくれないのだろうと、悩んだりもしました。

又、短大の附属として、実習生を迎えるなければなりませんでしたが、あれこれと言い訳をしながら学生に接していたように思います。辞める 3 年前には、文部省の研究指定園になり、子ども達の姿を長期にわたり追ったわけですが、研修会が設けられる度に、多くの先生方をお迎えしての保育参観等、毎日が緊張の連続でした。

しかし、大変な事を乗り越えてきたからこそ、今日の自分があると思います。

幼稚園で触れ合った子ども達一人ひとりの、届託のない純粋で明るい笑顔、園庭で元気一杯走り回っていた子ども達の姿を思い浮かべますと、“あの頃は本当に楽しかった、子どもも私も夢中で走り続けていた”と、満足感を覚えます。子どもと共に過ごした思い出が、いつまでも私の心の中に生き続けています事に、幸せを感じます。

■大成学園幼稚園の思い出

大成学園幼稚園卒園児保護者 橋本 宏子

大成学園創立 100 周年、大成学園幼稚園創立 39 周年、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

2 人の子どもの在園中は、園長先生はじめ、副園長先生、諸先生方に大変お世話になりました。「誠実、協和、勤勉」3 つの教育理念のもと、先生方の優しい笑顔、規律ある生活、子どもたちはのびのびと楽しい毎日を送っていました。5 年間の園生活は、私にとりましても、たくさんの人と出会い、貴重な経験ができ、今では大切な思い出

となっております。

小さな娘の手を取り迎えた入園式、私のほうが緊張していたかも知れません。通園バスに乗るのを嫌がり、園まで送って行ったものの、外まで聞こえてくる泣き声をいつまでも駐車場で聞いていました。そんな娘は年長になると、弟と手を繋ぎ仲良く通園、子どもの成長に感激したものです。自分を表現するのがなかなかできない娘を温かく見守り、個性を上手に引き出してくれた先生には、今も感謝しております。最後の生活発表会で立派に役を演じきった時には、涙が出ました。

姉と一緒に通園するのを心待ちにしていた息子は、楽しく元気に園生活を送っているようでした。

いつも姉の後ろで頼りなく見えた息子、年長の時には小さなお友達の手を取り遠足に向かう姿が、頼もしく立派に見えたものでした。スポーツフェスティバルでは、リレーのアンカーをつとめ、組体操の演技では、男の子らしい雄姿に感動しました。何事も子どもと一緒に考え行動し、興味ある

ものを上手に取り入れてくれた先生は、笑顔の素敵な素晴らしい先生でした。

こうして振り返ると、楽しく充実した思い出ばかりです。これからも、元気いっぱいの園児たちの声が聞こえますよう、大成学園幼稚園のますますのご発展をお祈りいたしております。

■ 100周年記念に寄せて

大成学園幼稚園卒園児保護者 菊池 紗子

創立100周年おめでとうございます。心からお喜び申し上げます。

一口に100周年といいますが、この1世紀の長い時の流れの中で、いろいろな移り変わりがあったのだろうと感慨深い気持ちになりました。創立100周年という記念すべき大きな節目に立ち会うことができ、とても嬉しく思います。

大成学園幼稚園も39周年とのことで、私が通っていた頃を懐かしく思い出しました。

楽しかったバス通園、短大グラウンドでの運動会、ぶどう狩りに出かけた遠足、毎日園庭でお友達と遊んだこと。

クラスごとのお部屋では、粘土遊びをしたり絵を描いたり、先生のピアノに合わせて歌ったりもしました。

手作りのお弁当をショルダーバッグに詰め登園

する姿がまるで昨日のことのようで、どれもこれも宝物のような大切な思い出です。

私には息子が2人います。2人とも大成学園幼稚園の卒園生です。

子ども達が入園式の日は、いつも園庭の桜が見事で感動しました。懐かしいツルツル山もそのまま、新園舎になったものの建物の趣は変わっていなくて、掃除の行き届いた清潔なお部屋で先生方のきめ細やかな保育指導にも感心しました。

私は、親と子の2代で大成学園幼稚園に通えたことを誇りに思います。

何気ない1日でも、それは充実した中身の詰まったもので、たくさんの発見や感動がその時々で生まれてくるということを、卒園してから成長するにつれ子ども達も理解していくのではないかでしょうか。大成学園幼稚園で学んだことを心の糧にして大きくなつていってほしいと思います。

私達は伝統をしっかりと受け止めて、大成学園のさらなる発展を期待しております。

第1部
大成女学校

I 大成裁縫女学校の創立

1907(明治40)年～1919(大正8)年

●当時の社会情勢と教育事情

日清戦争(1894～1895年)から日露戦争(1904～1905年)にかけてわが国の工業は、紡績業を中心とする軽工業が発展していたが、軍事上の必要から八幡製鉄所の設置等、重工業発展の基礎も築かれるようになった。国際的地位の向上に伴い国民の所得も少しずつ向上し、国際社会での国威の維持伸長を図ろうとする国民的意識が高められていった。

わが国の近代における学校制度は1872(明治5)年の学制制定に始まる。その後の経済状況向上の中で教育制度は次第に整備され、教育は急速に普及することになった。特に初等教育の発展は著しく、1897年には70%を超える就学率に達した。しかし、女子の場合は男子に比べ就学率ははるかに低く50%にも達しない有様であった。

義務教育の就学率も飛躍的に向上するようになった。1907年には、それまで4年だった義務教育年限が6年に延長され就学率は98%に達していた。また、1893年頃から1899年にかけて、中学校のほか実業学校および実業補習学校などいろいろな中等教育の学校が出揃った。こうして、社会・経済の要請が公教育制度に組み入れられるようになり始めた。

女子教育に関しては、日常生活に欠くことのできない衣食の調達は女子の重要な任務として、江戸時代から続いて家庭の子女は多く仕立て屋の師匠について終日練習に励み、いわゆる裁縫の技術の熟達に努めた。そして1880年頃から裁縫は学校教育の中で女子の重要な教科として取り入れられるようになった。

1899年には高等女学校令が公布され、各地に女学校が創設されるようになっていった。東京では1899年に下田歌子の実践女学校(現実践女子

大学)、1900年には津田梅子による女子英学塾(現津田塾大学)、成瀬仁蔵による日本女子大学校(現日本女子大学)などが、相次いで設立された。

茨城県内では1900年に茨城県高等女学校(現水戸二高)、下館町立裁縫女学校(現下館二高)、1903年に土浦高等女学校(現土浦二高)、1907年に行方郡潮来町立女子技芸学校(現潮来高)と公立の女学校が開校し、男子の中等教育に後れを取りながらも、少しずつ受け入れ態勢が整いつつあった。が、人数的にも希望者を多く受け入れるまでには至らなかった。そこで、水戸にもいくつかの女子教育を担う私塾が創立されるようになつていった。

(大成学園創立60周年記念誌、文部科学省『学制百二十年史』より抜粋)

●創立者額賀三郎・キヨ夫妻

本学園の創立者額賀三郎先生は、1881(明治14)年8月2日新治郡石岡町根当(現在の石岡市)に額賀家の三男として生まれた。水戸中学から東京の進学校大成中に転校し、国学院で学んだ後、『やまと新聞』(現在の『東京スポーツ』)の記者をしていた。大変もの静かで温厚、地味だが威厳があり、書に秀でた方だった。また、猫好きでもあった。

額賀キヨ先生は同じ1881年8月5日に小川村



額賀三郎先生



額賀キヨ先生

(現在の小美玉市) 小塙に生まれ、1900年東京の東京裁縫女学校(現在の東京家政大学)高等科を卒業し、故郷で裁縫教授所を開設していた。小柄で上品、立ち居振る舞いが大変美しい方だった。

1907年2月に結婚した額賀三郎・キヨ夫妻は、水戸市鳥見町(現在の泉町)に居を構えた。

●水戸市鳥見町で裁縫塾開設

水戸に移った年の12月、三郎・キヨ先生は希望者を集め自宅で裁縫教授所を開設。本学園は、三郎・キヨ両先生が水戸で開いたこの私塾を学園の始まりとし、2007(平成19)年12月に私塾開設100年祭を催した。現在、同窓会名簿によりこの私塾で学んだ生徒のうち11名の氏名がわかつており、皆それぞれに地域社会に貢献する女性となっている。

その中の町田ふくさんは医師に嫁ぎ、妻と母としての立場にとどまらず、県母子福祉相談員、水戸地区司法保護司、水戸葵会副会長として地域社会の信頼を集める婦人でもあった。本校同窓会「なでしこ会」の名誉会長となり、同窓会発展のためにも尽力した。

また、小松尋常小学校の訓導(教員のこと)となった猿田千代さんは、小松原暁子(こまつらぎょうこ)のペンネームで『いはらき』(現在の『茨城新聞』)に短歌を発表し、のちに茨城初の女性ジャーナリストとして同新聞社で活躍した。この2人をはじめいずれの卒業生も、家庭人としての務めを果たすだけでなく、広く地域社会に貢献しており、まさに本学園が育成目標とする「社会に役立つ女性」であった。

猿田千代

「猿田千代は歌人で県下初の女性記者」 茨城女子短期大学学長 小野孝尚

大成女子高等学校卒業生名簿「なでしこ会会員名簿」巻頭の7ページには、大成裁縫女学校前身の卒業生の方たちの名前が掲載されています。創立者の額賀三郎・キヨ夫妻は1907(明治40)年12月に水戸市鳥見町に裁縫塾を開設し、1908年4月に藤坂町に移転しました。この頃通われた方たち11名ですが、その最後に猿田千代が載っています。

猿田千代は1890年に、現在の城里町上入野に生まれました。1907年3月に水戸高等女学校を卒業後、日本女子大学に入学し、中退して郷里に戻り大成裁縫女学校の前身の裁縫塾に学び、その後小学校の教員となりました。傍ら小松原暁子のペンネームで歌人としても活躍しました。尾上柴舟・横瀬夜雨・山村暮鳥・大関五郎等との交流もありました。金子未佳編『小松原暁子著作集短歌編』から引きましょう。

やはらかき 夢より醒めて 明け近み うつらうつらに 聞く春のあめ
わが春着 灯のもとに 縫ひ急ぐ 深夜つめたき 紅絹の手ざわり

彼女の才能を見出した当時の『いはらき』新聞社主筆の懇意に両親の反対を押し切って、県下初の女性記者となって活躍しました。その文章は文語体の多い中にあって、母親譲りの豊かな感性と口語体の柔らかくわかりやすい表現は女性読者の心をとらえました。

退職後は郷里の教育委員や婦人会長を歴任し、1960(昭和35)年常北町(現在の城里町)町議会議員に女性として初めて当選、町政に貢献しました。再選2年目の1966年4月、婦人学級バレーボール大会帰宅後心筋梗塞のため倒れ、76歳で亡くなりました。男女共同参画社会の先駆け的な存在で「男の人でも敵わない」といわれたほど、身を尽くし地域のために働いた功績には大きなものがあります。文学的な面においても著作集の出版等再評価の機運が高まりつつあります。



猿田千代

●大成裁縫女学校の創立

裁縫塾での教育に携わる中、額賀三郎・キヨ先生は、広く女子生徒を集めて、裁縫教育を中心とした実学と同時に、女子の人格全般の陶冶を目指す、という多年抱いていた教育者としての抱負を実現するために、私財を投じて本学園を創立するに至る。鳥見町で私塾を開設した翌1908（明治41）年4月には、水戸市藤坂町（現五軒町）にトタン葺き2階建53坪の校舎を新築し、正式な学校として発足するための準備を始めた。この初代校舎は、現7号館の東側の土地に建てられていた。

こうして翌1909年4月3日、茨城県から正式な認可が下り、「大成裁縫女学校」が開校することとなった。これは、現存する茨城県下最古の私立学校である。

一般教科と裁縫を同等に学ぶ本科、裁縫が主の専科、家政科があり、修業年限は本科・専科ともに2年、家政科1年で、定員は200名であった。4月10日には開校式が挙行され、第1学年は本科5名、専科8名で授業を開始した。入学資格は、本科・専科生は高等小学校第1学年（現在の小学5学年）修了以上、家政科は本科・専科の卒業となっていた。生徒の中には相当の年配者もいたが、勉学の態度は極めて真剣で、将来の学校の発展を予想するのに十分なものがあったという。

本校の特色は、校長夫妻を中心に教職員が一家の父母姉妹のような親密さで生徒に接することであった。授業中はもちろん、放課後や生徒の家庭生活に至るまで、細心の注意を払い、親切な指導を行った。創立60年記念誌の中で、ある卒業生の寄宿時代の思い出が語られている。それによると、創立当初から寄宿舎は校長宅と同一の建物内に設けられており、寄宿生たちはまさに教職員と家族同様の生活をしていたという。このことが忘れられない思い出となり、その後一生にわたり教職員との親交を深めていったようだ。

翌1910年には、現在の生徒会にあたる校友会

の組織を整え、6月には校友会雑誌第1号を発行した。その表紙に額賀三郎校長の次の和歌が載せられていた。

ひなみやこをみなはことに縫はりの
ただしき道にすすめとぞ思う

ここに、裁縫を中心とした実学を学びながら現代社会に即する女性としての教養を養っていって



校長（右）と創立当時の校舎



寄宿舎の「梅の間」



寄宿舎同室の生徒たち

ほしい、という創立の精神が明快に示されている。

●出身地別卒業生数

第1回から3回までの卒業生（1910～1912年）の出身地が、創立30周年記念誌に残されている。それによると、水戸市以外の遠隔地からも集まってきたことがわかる。女子教育の環境が整つていなかつた当時も、意識の高い層が寄宿や下宿を利用して、水戸まで娘を送り出していたことがわかる。

水戸市：8名	東茨城郡：12名
西茨城郡：4名	那珂郡：6名
久慈郡：7名	多賀郡：3名
鹿島郡：4名	真壁郡：1名
行方郡：1名	他府県：5名

●別科の増設

1912（明治45）年4月、別科を設置した。別科は、高等女学校本科および実科高等女学校を卒業した者を対象とし、女子の日常生活に必要な裁縫・手芸などを短期間に専門的に教授し、卒業後に社会や家庭ですぐに役立つ人材を養成することを主眼としていた。修業年限は1年で、1週当たりの授業時間は48時間。そのうち2時間は修身や家事で、残る44時間は裁縫の授業であり、和服、洋服、雛形作成のほか、ミシン裁縫も含んでいた。また、そのほかに、造花、袋物、細工物、刺繡、組糸、編物、挿花、茶の湯を追加履修することができた。授業料は1か月1円であった。

●校章制定

校章は1912（明治45）年6月に制定された。五弁のなでしこの花をかたどったもので、花の中央に「成」の1字を表したものだった。

なでしこは「やまとなでしこ」（大和撫子）ともいい、古来日本女性の美称として用いられてきた。また、なでしこは「撫で慈しむ」という意味

で、日本の古典ではよく愛児にたとえられている。

額賀三郎校長は、なでしこを校章に用いることにより、教師が生徒に対し親がわが子を愛育するように教え導く家庭的校風の樹立を目指し、また、本校で学んだ生徒が「やまとなでしこ」と称えられるような美しく気品ある女性となることを念願した。

その後、1919（大正8）年に水戸市大成女学校と改称されてから、花の中心に大成の2字を表した緑色の新しい校章に改めた。次いで1929（昭和4）年に大成高等女学校が併設されると、同校生徒のため、中心に高女の2字を表した横長の校章を定めた。

また、1943年に大成女学校も高女のように横長のなでしこに大成と横書きしたものに改めた。

太平洋戦争末期の1945年前後には金属類が極めて不足したので、布製のマークを作り校章に代用した。

さらに1948年に大成女子高等学校となってからは、高女の校章を基にして、緑色の文字を「高」と改めた現在の校章が定められた。



校章の変遷

●夏期講習会の実施

開校以来、毎年夏期講習会を実施し、裁縫手芸の専門的な技能を教授した。開催するごとに定員を突破する盛況ぶりだった。受講者には小学校教員が特に多く、熱心に授業が行われ、毎回好成績

のうちに終了した。時代の要請に応えるとともに地域社会に貢献する催しだった。期間中1日の休みもなく、継続して実施されていた。当時の募集要項は次のとおり。

夏期講習会生徒募集規則

期日 8月2日より8月20日 19日間

科目 裁縫、造花、袋物

講習料 1科目ニツキ 80銭

2科目兼修ハ 1円50銭



1918年の校舎と生徒たち

創立後、年をおって生徒数が増加し、これまでの校舎では希望者全員を収容することは難しくなったため、1911（明治44）年9月、教室の増築工事に着手し、翌1912年4月木造トタン葺き2階建160坪の校舎が完成し、創立4年目の授業が新築の校舎で開始された。

次いで1916（大正5）年6月に木造瓦葺き2階

建70坪の増築に着手し、同年9月下旬に完成した。が、10月1日強烈な暴風雨のため新築の校舎は一夜にして倒壊してしまった。関係者一同は、言葉も失うほどの衝撃を受けたが、間もなく復旧計画が立てられ、この年12月再建に着手し、翌1917年2月完成した。

さらに1919年4月、トタン葺き平屋建60坪の新築工事に着手し、同年6月に完成した。

「なでしこ」について

なでしこはナデシコ科の多年生の草本で、8、9月頃に薄紅色の清純優雅な花をつける。山野に自生するので、どこでもよく見かける花で、秋の七草の一つとしても古来より親しまれている。万葉集その他多くの歌集などにも詠まれているほか、源氏物語の夕顔の巻などにもかわいらしい少女の異名として登場する。

藤原家経朝臣（ふじわらのいえつねのあそん：992～1058 文章博士、信濃守、讃岐守などを歴任）は、なでしこについて以下のように書いていている。（『藤原家経朝臣和歌序』）

鍾愛抽衆草故曰撫子 艷状共千年故曰常夏

（愛情の深さがほかの多くの草花に比べ特に目立っているので「なでしこ」といい、美しい姿の花が毎年いつまでも咲き続けるので「とこなつ」という。）

また、『続千載集』には、

心して植えしもしく撫子の 花の盛りを今も見るかも

『新古今集』にも、

よそへつつ見れど露だに慰ます いかにかすべき撫子の花と歌われている。



カワラナデシコの花

II 水戸市大成女学校に改称

1920(大正9)年～1929(昭和4)年

●当時の社会情勢・校名の変更

第一次世界大戦(1914～1918年)においてヨーロッパで軍需が盛り上がったため、日本の経済は非常に潤い軽工業から重工業へと転換した。いわゆる大戦景気である。しかし、第一次世界大戦が終結してヨーロッパの軍需が冷え込むと外需に依存していた日本は戦後不況に陥った。また、1917(大正6)年に起こったロシア革命をきっかけにして、あるいは米騒動によって、思想問題や社会問題が深刻になっていった。

このような時代背景の中で、婦徳を養い、家庭の主婦としての知識・技能を身につけた女性を育てるために、いっそう充実した教育を行い、学園の完成を意図して、1919年9月に認可を受けて水戸市大成女学校と改称した。

水戸市大成女学校学則には、訓育方針が次のように記されている。

水戸市大成女学校ハ現代社会ニ即スル中堅女性トシテノ婦徳ヲ養ヒ家庭ノ主婦トシテノ知識技能ヲ修得セシムルタメ裁縫家事ニ主力ヲ注ギ之ガ実践達成ニ努ム。

尚教育方針ヲ徹底セシムルタメ教員生徒共ニ左(下)ノ信条ヲ目的トシテ進ム。

1. 信ヲ社会ニ得ルニ努メン。
2. 社会向上ノ為ノ教育ヲナサン。
3. 優秀校風ヲ養成セン。
4. 自立自治ノ習慣ヲ涵養シテ実践躬行ノ人タラシム。
5. 共存共栄ノ実ヲ挙ゲ社会奉仕ニ心懸ケン。

こうした教育方針のもと、新たに歩み出した水戸市大成女学校は、定員400名で、本科、専科、研究科、家政科の各科があった。

●水戸市大成女学校の教育内容

本科(修業年限3年、入学資格は高等小学校第1学年修了程度(13歳)以上)の教育課程は、週36時間のうち、裁縫の授業が半分以上を占め(1年生:21時間、2・3年生:17時間)、修身(作法を含む)2時間、国語4時間、数学1～2時間、地理、歴史、英語、理科、図画、音楽、公民、体操、以上各1時間、ほかに手芸、家事、洗濯染色、教育、割烹を履修し、商事要項、邦文タイプライター等を選択できるようになっていた。

専科(修業年限2年、入学資格は高等小学校第1学年修了程度以上)は実習をさらに重視した教育課程で、週36時間のうち、裁縫の授業が23～25時間、国語4時間、修身(作法を含む)、家事が2時間、ほかに公民、教育、珠算、音楽、体操、手芸が1時間ずつであった。但し書きとして、裁縫に相当の経験ある者は、「試験の上第2学年に編入することあるべし」とある。

研究科(修業年限1年、入学資格は高等女学校または実科高等女学校卒業以上)は、週36時間のうち、和服裁縫全部、男女洋服裁縫全部の裁縫実習19時間、裁縫理論1時間、国語3時間、修身2時間のほか、地理歴史、理科、体操が各1時間ずつ、さらに教育が4時間あり、内容は教育学、心理学、教授法、管理法で、卒業後に裁縫の教員となることを念頭に置いていたことがわかる。実



裁縫の授業

際に、研究科卒の生徒が、数年後には教員として本校の卒業アルバムに登場している例がいくつか見られる。

家政科（修業年限1年、入学資格は本校の本科・専科、または実科高等女学校卒業程度以上）は、週36時間のうち22時間が裁縫実習で、内容は高度なものであった。また、卒業後の就職を意識してか、商事要項、簡易簿記が必修となっており、タイプライターの指導も行われていた。

本校では、教職員の態度は極めて親切熱心で、繰り返し学習させることに重点を置いて、行き届いた教育を行った。一般に裁縫教師の持ち時間数は毎週18～20時間が通例であったが、本校の教員は毎週24～25時間を担当し、さらに、生徒の作品の出来具合を調べるために、放課後、教職員が揃って作品ごとに合議し、批評や訂正の部分を生徒の工程簿に記入したり、作品の完成まで徹底して指導を行ったり、絶えず指導方法の研究協議を実践した。縫い物競争のようなものも校内で頻繁に実施されていたことが、多くの卒業生の証言からわかっている。

また、1920年代に、日本の保育士第1号の豊田英雄女史が、本校の先生として活躍し、本校の教育向上のために大いに尽力した。

創立当初からの家庭的な雰囲気は、校名が変わってもそのままで、遠足に出かける生徒に額賀キヨ先生が、大ザルに入れた夏みかんを一人1つずつ配られたということが、当時の生徒の思い出として残されている。



大成裁縫女学校の卒業証書

制服の制定

創立当初は、生徒は各自の着物に袴を着用していたが、1924（大正13）年5月に紺の和服を制服として採用した。そのほかに好みの色の袴、黒の革靴を合わせていた。袴の色は、紺は先生の色ということで、生徒たちは当時女学生の間で「えび茶式部」といわれ全国的に流行していたエビ色（葡萄色とも書く）の袴を着用する者が大半だったようだ。これらの制服は、生徒が授業で習った技術を生かし、各自裁縫して着用していた。寒い時期に着用する羽織は、様々な柄であることが当時の写真からわかり、自由だったようである。また、自分で編んだマフラーを巻く生徒も多く、人々の注目を浴びていたことが、県教育関係の資料からもわかる。



制服制定前の生徒の服装



最初の制服 紺色の和服と袴（1926年）

遠足・修学旅行の開始

1921（大正10）年5月、遠足および修学旅行規程が定められた。遠足には筑波山や大洗、日立の助川海岸などに行った。1年生は那珂川の畔を



作法の授業



生け花の授業



豊田英雄先生

歩行し水道工事を見学するといった程度で、強歩訓練が主であった。修学旅行には、松島などに1泊で出かけていた。大正期の遠足の写真には、流行の日傘を手にする生徒たちの姿があり、今も昔も女子学生のオシャレへの関心の高さがうかがえて、微笑ましい。



1926年卒の生徒たちの松島旅行

●校舎の拡充

1925（大正14）年1月、道路を挟んだ東側の2階建の家屋を借り入れ、調理室等の特別教室として使用した。

続いて従来の校舎に大改増築を施すことになり、1926年7月地鎮祭を行い建築に着手し、同年10月スレート葺き2階建170坪の校舎が完成了。この校舎は、校長居宅、寄宿舎、事務室、職員室などを含み、本科、専科などの女学校校舎として使用され、1945（昭和20）年戦災で焼失するまで学校の中心となる建物であった。



水戸市大成女学校校舎

●校歌・校訓の制定

1929（昭和4）年3月に校歌が制定された。歌詞は金子彦二郎氏（東京高等師範学校教授）に依頼してできたものである。額賀三郎校長は同氏と親しく、同氏の編集による国語の教科書を採用し、水戸で講演会を開いたこと也有った。

作曲は、金子氏の友人であった萩原英一氏（東京音楽学校教授）に依頼した。

水戸学の精神を受け継ぎ、美しい自然の中で貞節の心を養い、特に誠実・質素・勤勉の実践目標を掲げて、大成の名において勉め励もう、という本校の教育精神を明らかにしている。

この「誠実・質素・勤勉」の実践目標は、校訓と定められた。その後時代の変化に沿って、校訓は「誠実・協和・勤勉」に改まった。それに伴って、校歌の3番も改められた。

■新制服の採用

1928（昭和3）年5月新しい制服が採用された。これまで和服であったが、洋服となった。夏は白地、冬は紺地のセーラー服で、紺のひだスカートを着用した。ネクタイは紺地で中ほどに斜め2



2代目となる紺色セーラー襟の冬用制服

本の白線を付けた。この制服は翌年設立した高等女学校でも同じものを採用している。

制服の制作は、家政科と研究科の全生徒が担当した。当時の生徒の裁縫の技能は非常に優れており、1929年11月には生徒佐藤ヒロ子さん、今秀



夏用制服

校歌

金子彦二郎 作詞 萩原英一 作曲

1 明君賢佐 万代に
のこししろ ことわざ
遺しし著き 功業に
こもれる精神 承けつきて
ひととく 勉めはげまん もろともに

2 水明山紫 名にし負う
ときわおか いろそ
常磐が丘に 色添ふる
みさおまつ かがみ
操の松を 鑑にて
ひととく 勉めはげまん もろともに

3 誠実協和 勤勉の
みち 道ふみわけて すえ
大成の名を 誓ひつつ
ひととく 勉めはげまん もろともに



1934年卒業アルバム掲載の校歌と校旗：歌詞は1932、1933年頃に、書が得意な生徒がキヨ先生の隣に座って清書したものという。（1934年卒業生の記憶による）

子さんの制作した子供服と編み物が天皇の御覽に預かるという光栄を受けている。

III

大成高等女学校の併設

1930(昭和5)年～1939年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

第一次世界大戦（1914～1918年）後の戦後不況が尾を引いている中、1923（大正12）年に関東大震災が発生し、その処理のための震災手形が膨大な不良債権と化していく、銀行の信用が大きく揺らぎ1927（昭和2）年に金融恐慌が発生した。さらに1929年からの世界恐慌と重なることで不況は悪化した（昭和恐慌）。

こうした状況下にあっても国力強化のために政府が進めてきた教育普及の努力が功を奏している。1899（明治32）年に公布された高等女学校令は、以後、1908年、1911年、1920年と改訂を重ね、実科高等女学校設置許可、市町村学校組合立女学校の設置許可等を経て、女子教育熱が高まっていた。昭和になる頃には、男子の旧制中学校に比べ女子が普通中等教育を受ける教育機関の数は多くなり、女子教育の門戸は広がっていたが、その収容数は必ずしも需要に十分対応し得るものではなかった。

●大成高等女学校の設立

1929（昭和4）年3月20日、大成高等女学校設立が認可された。この時期女子の修学熱が非常に高まり、高等教育を受けようとする者が多くなってきた。そこで、水戸市大成女学校の一部を昇格して高等女学校を設立する計画が立てられ、定員200名、本科修業年限4年、補習科修業年限1年として文部省に申請していた。4月11日に入学試験を実施した結果、40名の生徒が合格し同月15日に大成高等女学校最初の入学式が行われた。

大成高等女学校の訓育方針は、「道徳的知見を

豊かにすると同時に、情操の涵養にも努め、校内においても校外においてもあらゆる機会を通して、道徳実践の習慣を養成することを目指す」とある。

定員はその後、1936年4月に400名に、さらに1939年4月には600名に増員された。補習科定員は50名であった。

●大成高等女学校の教育内容

教育課程を見ると、大成高等女学校と水戸市大成女学校の違いが明確となる。前述のように、女学校の本科は、週の授業時数が36時間で、全体の3分の2の23時間が裁縫や家事等の実業系教科にあてられ、13時間が一般教科であった。一方、高等女学校本科では週の授業時数が32～33時間で、うち2時間が修身、全体の3分の2の21～22時間が国語、数学、英語、理科、社会、芸術、体育等のいわゆる一般教科にあてられ、裁縫や家事等の実業系教科は10時間ほどであった。

高等女学校には、高女卒業生に向けてさらに補習科が設けられており、第一部は高女本科卒業後の既修学科補習コースであり、第二部は小学校教員を目指すコースで、週7時間も「教育」という教科にあてられていた。

教員も広く優秀な人材を募った。前龍ヶ崎高等女学校長の松浦龍先生、埼玉県庁より数学の高堀育三先生、水海道高女より体育の寺田保三郎先生ら、また、稻村先生、須田先生、永井先生、小坪先生等、帝大卒の教員も多かった。図画の菊池先生は、のちに大洗美術館長も務めた。こうして教員の人材充実に努めた結果、地方からも優秀な生徒が集まり、進学校としての実績をも築き上げていく。この時期、多くの生徒が医師、歯科医師、薬剤師、教員等の専門職を目指し勉強に励み、夢を現実のものとしていった。

●施設設備の充実

高等女学校の併設に伴い、校地 422 坪を拡張し、現在の 3 号館の場所に高等女学校用新校舎を建設した。1931（昭和 6）年 5 月に本館校舎、雨天体操場その他付属建築物の新築が始まった。同年 9 月にスレート葺き 2 階建の校舎が完成し、2 学期の始業式から、高等女学校生徒はこの校舎で授業を受けることになった。

次いでこの年の 9 月 15 日、家事室に水道・ガスの設備が完工し、また新校舎事務室と旧校舎事務室との間には電話も架設され、授業時間を探せるベルも取り付けられた。さらに 11 月 20 日には新校舎東側にあった 4、5 軒の家が取り払われ、運動場が 200 坪拡張された。それでもなお校庭は狭かったが、4 年後の 1935 年 5 月になり運動場 900 坪を拡張したため、かなりの余裕ができた。

1936 年 4 月、高等女学校の定員を 400 名に増加し各学年を 2 組とすることになったので、教室が不足となった。そのうえ入学志望者もさらに増

加したので、高等女学校校舎の東側に 2 階建 200 坪の校舎を建設し、1937 年 5 月に竣工した。この校舎には、1 階に生徒昇降口、職員室、教室 2 室があり、2 階には教室 3 室があり、生徒 250 名余を収容することができ、高等女学校生徒の定員全員が入れるようになった。また、家事科洗濯用のコンクリート工事の完成、グランドピアノの設置がなされ、恵まれた教育環境が整った。この建築で校庭が狭くなったので、1938 年 11 月、石造り倉庫の 3 分の 1 を取り壊し、運動場の拡張を図った。

1939 年 9 月、この校舎に続けて応接室、職員室、玄関などを含む 2 階建 66 坪の建築を始め、1940 年 3 月完成した。

さらに 1943 年 3 月には木造瓦葺き 2 階建 120 坪の校舎が完成した。この頃になると太平洋戦争が激しさを増し校舎の建築などは不可能となり、これが戦時中の建築の最後の校舎となった。



高等女学校校舎（1931 年頃）



グランドピアノ

新校舎落成の喜びの様子

去る 6 月初旬起工式を挙げました新築校舎が 7 月初めに上棟式を行い夏休み中に工事の全部が竣工いたしまして、1 日の始業式にベンキ香り高く美装せられた姿を眺めまして私ども一同の喜びは限りありませんでした。始業式のベルで新校舎に入り中央のアーケードの美しさ、階段も左右より上りて二階は全部普通教室で採光よく、階下には理科、家事、裁縫、作法など皆特別教室ができ、外に爽快な雨天体操場ができました。この体操場が初めて本日の式場に使用されました。

9 月 2 日、新教室で初めて授業を受くることになりました。教室は周囲に大きな建物もなく窓を通して南西には筑波の連山、北には日立の煙突も一望の中におさめられ、市内付近の樹木は我が校の庭園のごとく、朝日の出より日没まで光線の直射を受けますので、冬は暖かに授業を受けることができるなどと楽しみに噂いたしております。

校友会誌『なでしこ』第 25 号（1931（昭和 6）年 12 月発行）

創立25周年ならびに校舎新築竣工記念式

1932（昭和7）年2月28日午前10時より創立25周年記念式ならびに校舎新築竣工記念式を挙行した。これは、私塾開設の1907（明治40）年から数えて25年目の実施である。

野島先生の挙式の辞、新築校舎請負人塙卯之松・
後上八十八両氏に感謝状ならびに記念品を贈呈
し、校長先生の本校の沿革ならびに経営等の式辞
があり、文部大臣鳩山一郎氏、茨城県知事君島清
吉氏、水戸市長鈴木文次郎氏をはじめ著名な方々
から祝辞をいただき、各学校長等 16 名からの祝
電が披露された。職員代表、生徒代表の祝辞、功
績のあった職員 5 名の表彰と受賞者の答辞が述べ
られ、生徒全員が校歌を合唱して、式を閉じた。
式終了後は、来賓を生徒作品展覧会場に案内し、
作品により本校の活動内容の紹介を行い、また前

年夏竣工の新校舎を披露した。続いて祝宴が開かれ、参加者に記念品を贈呈して閉宴した。列席者は、来賓 87 名、卒業生 90 名、在校生代表 50 名であった。この日の前日 2 月 27 日には在校生の記念祝賀式、翌日の 29 日には父兄による記念祝賀式を挙行した。

その翌年 1933 年 10 月には、記念式で祝辞をいただいた文部大臣鳩山一郎氏の揮毫による「温良貞淑」の扁額が、高女作法室に掲げられた。

式典の写真とその様子は、1932年7月発行の校友会誌『なでしこ』に詳しく掲載されている。

● 校旗の制定

1933（昭和8）年12月に皇太子殿下（現在の天皇陛下）が誕生され、職員生徒で協議した結果、本校では祝賀事業として校旗を制定することに

優秀賞について

様々な面で優秀と認められた生徒には、賞を与えた。

安達一枝さんには硯箱が、県知事賞を受賞した平塚イシさんには姫鏡台が贈られました。



卒業時の優秀賞として森キヨ子さんに贈られた帶留め



森さんに贈られた賞状



当時の本校の様子を伝える新聞記事 (1953年4月13日『いはらき』)

なった。職員生徒一同が月額30銭ずつ3か月にわたり寄付することになり、京都市の小林旗店に作成を依頼した。1934年1月18日には校旗樹立式を挙行し、水戸八幡宮の神官により祈禱がなされた。この後、校旗は戦災を逃れ、1980年代半ばまで大切に掲げられた。2009（平成21）年現在の校旗は、1986年卒業生からの寄贈によるものである。

●学校行事の様子

遠足は大正年間に規定ができて以来、徒歩では那珂川沿いの水門見学をしたり、電車にて大洗海岸や助川海岸、筑波山登山に出かけている。

泊まりがけの修学旅行については、大正末期より県外の宮城県松島まで出かけていたが、1932（昭和7）年6月1日に県下中等学校第1回連合旅行に参加し、8日間の日程で特別列車にて関西旅行を実施した。水戸高女、土浦高女、下館高女、龍ヶ



学園創立25周年記念式典での文部大臣祝辞



高等女学校作法室と「温良貞淑」の扁額

崎高女、水海道高女と本校で合計800名で、本校からは上級生47名が参加した。名古屋、山田鳥羽、奈良、大阪、京都、長野地方の名所を巡るハードスケジュールだったようだ。これ以降、1941年までは、東京、伊勢、奈良、京都方面に出かけている。

体育関係の行事としては、1932年5月28日に、春期校内籠球（バスケットボール）大会が開催され、クラス対抗で高女3年生が優勝している記録がある。その際、秋の大会があることにも言及している。それ以降については確認できていない。

体育祭は1937、1938年には校庭で実施し、1940年になると水府グラウンド（県営：1933年開場）にて男子中学生も交えた連合体育祭に参加し、この連合体育祭は、戦時中は1942年までは実施された記録がある。なお、1943年は本校の単独実施で、正式名称は「大成学園体育鍛成会」であった。

1935年2月第1回生徒作品展覧会を開催し、1938年3月の展覧会には本校関係戦死者遺族および傷病兵士を招待している。1939年には傷病兵士や入営兵士のために何回か手芸品を寄贈しており、1940年12月には創立30周年記念展覧会を開催している。これが戦時中最後の展覧会となつた。

●校友会の活動

創立の翌年1910（明治43）年に発足した校友会は、その年の6月に校友会雑誌を発行したが、翌年1月からは雑誌名を『なでしこ』と改題し、その後、長く学校の歩みを伝える校誌となつていった。

昭和に入ると校友会活動は次第に活発になり、『なでしこ』は雑誌部が編集にあたり、7月と12月の年2回発行するようになった。創立25周年記念式の様子が詳しく記載されているのは、前述のとおりである。雑誌部のほかには、映画部、講

演部、園芸部、衛生救護部、集会部、会計部などがあった。映画部では、9.5ミリ、16ミリ、35ミリなどの機械を備え、たびたび映画会を催した。講演部では、年3回ほど著名人を招いて講演会を実施した。園芸部では、園芸週番を作り灌水や施肥を行い、朝顔の良種を東京から取り寄せ美しい花を競って咲かせたりした。1934（昭和9）年落成の温室には300ワットの電熱器が備えられ、アマリリス、シクラメン、フリージアなどを育てていた。いずれの部も、本校の文化向上や美化に大きく貢献した。

文化部の充実だけでなく、体育部の活動も盛んになっていく。1930年に部員制度をとって発足した体育部には、陸上競技部、水泳部、籠球部、排球部、庭球部、卓球部などが誕生した。翌1931年5月に県体育協会が結成され、県下女子中等学校の各種競技会が開催されることになったので、大会出場を目指して各部とも練習に励んだ。同年7月大洗の磯浜なでしこ寮で初めての合宿訓練が1週間行われ、陸上競技部、水泳部が参加した。この夏合宿は、戦争が激化するまでは毎年の行事となった。陸上競技部は9月に土浦高女で開催された県下女子中等学校第1回陸上競技大会に参加し、本科3年権村輝選手が200m決勝で2位に入賞した。籠球部は新築の雨天体操場で8月下旬に1週間の夏期練習を行い、12月には女子師範校庭で行われた県下の競技会に出場し太田高女に惜敗した。1932年4月に赴任した小坪先生が籠球部、永井先生が庭球部の顧問となり、いずれも若い「スポーツ



修学旅行（奈良）

マンでいらっしゃる」（校友会誌『なでしこ』第26号、1932年刊より）男性教員を迎えて、活動もますます盛んになっていく。

その後各部ともに発展し、各種大会で成果を出していく。1932年9月の県北女子中等学校競技大会では、「1等2種目、2等2種目、3等1種目、



連合体育祭

4等5種目、継走3等の賞状を受ける」という記載がある。陸上競技部は、明治神宮関東選手権大会に1933、1934、1935年の3年連続出場の山本光子選手をはじめその活躍は目覚ましく、県内では「陸上といえば大成」といわれるまでになった。籠球部も1932年から県大会で毎年1位、2位を争うまでになった。排球部は、1939年5月に水海道高女より寺田保三郎先生が転任し本校排球部



校友会誌『なでしこ』第26号、36号、37号



陸上競技部の選手



明治神宮体育大会に出場したバレーボールチーム

顧問になって以来、次第に頭角を現し、1940年9月の県北女子中等学校競技大会で準優勝、神宮予選排球競技会で優勝を獲得し、その後の躍進の基礎を築いた。

●小学校連絡懇談会

1938（昭和13）年12月に「小学校連絡懇談会」を実施している。これは、本校生徒が卒業した小学校の恩師を招待し、現在の生徒の様子を見ていいただき、また、生徒が近況を報告することにより、母校とのつながりを持ち続けるために開催されたようだ。これにより小学校の先生方に本校の教育

活動を知ってもらい、次の年も生徒を送ってもらうための広報活動でもあったと思われる。

N 戦中期

1940（昭和15）年～1945年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1927（昭和2）年の金融恐慌と1929年に端を発する世界恐慌が重なることで、わが国の経済状況は悪化した（昭和恐慌）。中小企業の倒産が相次ぎ、失業者が街にあふれ、大学・専門学校卒業生すらも、3分の1が職のない状態であったという。この恐慌は都市に大打撃を与えたが、農村においてはさらに深刻であった。生糸の対米輸出が激減したことに加え、デフレに豊作が重なり米価が激しく下落したことで農村は壊滅的な打撃を受けた。当時、「米」と「繭」の2本柱で成り立っていた農村は、その両方が倒れることとなり、困窮のあまり青田売りが横行して欠食児童や女子の身売りが深刻な問題となつた。

このような状況下で躍進を遂げたソ連の5か年計画に感化され、日本でも自由主義経済から国家統制経済に移行すべきだという主張が強まり、国

磯浜なでしこ寮

1931（昭和6）年の7月より、大洗町磯浜の高台に位置する磯浜なでしこ寮において運動部の合宿が行われるようになり、以後毎年の行事となっている。浜辺でのランニング、磯浜小学校校庭での練習等、恵まれた環境で思い出深い活動となっていた。大変立派な建物だったので、近隣の子どもたちは「大人になつたらあんな立派な別荘を持ちたいものだ」と思っていたという。松島トモ子や月丘千秋が主演した映画撮影の舞台としても使われたという大洗の地元の方からの情報もある。



磯浜なでしこ寮での合宿
(1937年)

家総動員体制を望む軍部と連携して1937年に支那事変（日中戦争）が始まると次々と経済を官僚の統制下に置くようになる。1941年に太平洋戦争（大東亜戦争）が始まると日本経済は完全に国家統制経済となっていました。

1931年の満州事変以後、わが国の教育は戦争の影響を受けるようになってきていたが、1937年の支那事変を契機としてさらに著しい変化をするようになり、教育審議会が発足し、文教行政のうえにも戦時下教育という考え方方が強く示されるようになった。

1937年3月に中学校教授要目、高等女学校および実科高等女学校教授要目中、修身、公民科、国語漢文、歴史および地理の要目の改正を行った。翌1938年には、国家総動員法により中等学校以上に集団勤労の実施が指定された。1941年2月には青少年学徒食糧飼料増産運動実施の文部省通達があり、これを契機に各学校において農作業を重視することとなった。同年12月からの太平洋戦争は、急速に戦時の教育体制をとることを要請したので、情勢は変わってきた。さらに1943年からは決戦体制をとることが必須であるとみられたので、教育全般が非常時に備えるものとなり、中等学校も初等教育の学校と同様に教材を国定教科書の1種類に限り、それが戦時教材として編集された。特に戦時下の中等学校として注目すべきことは、戦時生産の要請によって、実業学校の性格に再編を加え、工業生産に即応させて転換させたことである。さらに生産の増強を図るために学徒を工場そのほかの戦時生産に動員し、学校工場を設けるようになった。これらの方策は1943年から翌年にかけて強化された。戦争の激しさが本土の近くに迫るとともに、1945年5月には戦時教育令が公布され、学校の教育はほとんど停止されるという措置をとらなければならないまでになった。

●本校の戦時中の教育

大成高等女学校の「訓育方針並ニ施設」に目を通すと、「日本精神ノ涵養ニ関スル施設」として、「国体ニ関スル事項」「皇室ニ関スル事項」「敬神崇祖ニ関スル事項」「事変関係事項」と詳細に書かれている。まさに戦争下の教育であることが伝わってくる。

1932（昭和7）年頃より、戦況に応じて、様々な活動が実施されたことが、年表よりわかる。

軍関係者への寄付や奉仕については、1938年4月1日に国家総動員法により中等学校以上に集団勤労の実施が指定され、本校の卒業アルバムに「勤労奉仕・銃後運動」の文字が明示されるようになる。「銃後」とは直接の戦場ではない後方という意味で、当時の日本においては兵士を除く日本国民全員を指した。生徒たちは裁縫の技術を生かし、軍服のボタン付け、軍服の徽章付け、軍服の調整等、先生たちの指導のもと様々な作業を行った。軍服は生地が厚く針も通りにくいが多くの枚数を期限内に仕上げる必要があり、生徒たちは指に血をにじませながら健気に作業に専心したという。

1941年2月の青少年学徒食糧飼料増産運動実施の文部省通達の後には、学生も農作業に従事することが義務づけられ、本校生も食料危機のさなか県営水府グラウンド（現青柳運動公園付近）を耕し農作物の栽培を行い、また、近隣の農家や農場に出向き農作業の手伝いもしている。本科生は、常磐村の愛郷塾で奉仕活動を行ったという。（愛郷塾は農本主義思想家の橋孝三郎氏が主催した私塾。妹の橋はや女史、副塾長の林正三氏は、昭和初期に本校の教員でもあった。）本校関係戦死者遺族の家に出向いての手伝いもしている。

また、この時期の学校においては、日本国、皇室、祖先と神社を崇拝するための指導や行事が頻繁にあった。前述の本校の訓育方針にもそれについて詳細に書かれている。まず、毎朝始業前に、職員生徒一同で皇居遥拝が義務づけられた。遥拝

とは、遠く離れた所から拝むことで、皇居（アルバムには「宮城」とある）の方向に行われた。また、皇族が列席する行事への参加を御親閲として、創立30周年史にて「本校の光栄」として特別に取り上げて記録している。

神社の参拝は勤労奉仕の清掃も兼ねており、遠く鹿島神宮や千葉県の香取神宮まで出向いていた（潮来観光の遠足も兼ねていたよう）。このように授業と並行して様々な奉仕活動を担っていた。

勤労奉仕・銃後運動・御親閲等に関する記録

1929年 9月 18日 大元帥陛下陸軍大演習御統監のため水戸市に行幸あらせられる
県内男女中等学校生徒成績品出品参加の光栄に浴す

天覧成績品出品目録

名称	科目別	大きさ	学年	生徒氏名
大成高等女学校生徒				
嬰児服	手芸	縦0.6メートル 横0.3メートル	大成高等女学校1年	佐藤ヒロ 外3名
水戸市大成女学校生徒				
ベビー服	手芸	縦0.5メートル 横0.8メートル	家政科1年	大竹菊枝 外3名合作
窓掛	同	縦0.5メートル 横0.5メートル	本科3年	鯉淵あきの
袱紗	同	縦0.4メートル 横0.4メートル	専科1年	成美とき 外3名合作

1929年 11月 20日 大元帥陛下陸軍大演習御統監のため水戸市に行幸あらせられる
県内男女中等学校生徒成績品出品参加の光栄に浴す

1932年 4月 軍人後援会花の日運動に参加
軍人後援のために、向井町広小路を中心卒業生および上級生により金100円ほどの売り上げをなし



梨本宮殿下御親閲

た。

1933年 2月 陸軍愛国機献納寄付を実施
企業や一般人の方たちが国防献金等として集めたお金を軍に供出し軍用機を献納したもので、1932年の陸軍あいこく1号から始まり、瞬く間に全国的レベルに広がった。

1934年 1月 20日 梨本宮殿下御親閲に参加す
11月 17日 群馬県高崎市乗附練兵場で挙行された天皇陛下ご親閲に参加
埼玉、茨城、栃木、新潟、長野、群馬6県より中等学校の男女学生、青年団、訓練生等5万名が参加した。男子3万5,000名は分列行進を、女子1万5,000名は奉唱隊として「菊の香の妙なるこの日」を奉唱したという。下館高女の1935年3月発行の校友会誌第8号は、「御親閲拝受号」としてこの御親閲を特集している。

1936年 5月 東伏見宮妃（周子）殿下御親閲を仰ぐ
爱国婦人会（内務省と厚生省の管轄の組織）茨城支部第3回総会開催にあたり東伏見宮妃（周子）殿



東伏見宮妃殿下御視閲

- 下御来県の折県下愛国子女団の御視閲を仰ぐ。
- 本校愛国子女団結団式を挙行し、団旗を下付される
- 1937年 7月 北満州兵に慰問金寄贈、出兵兵士に千人針寄贈
- 9月 学校特設防護団結成
- 9月 25日 保定陥落祝賀旗行列を行う
- 11月 女学生第二愛国機号寄付金寄贈
- 12月 軍用袴下の裁縫奉仕
- 1938年 1月 朝日新聞社の公募歌「皇国大捷の歌」の発表会に合唱団として出場
- 傷病兵慰問のため菓子を寄贈
- 2月 11日 建国祭愛国行進に参加
- 3月 展覧会催し本校関係戦死者遺族および傷病兵士を招待
- 4月 1日 国家総動員法制定
- 5月 愛国子女団視閲を受ける
- 6月 軍用袴下の裁縫奉仕
- 9月 来水したヒトラーユーゲント（ナチスドイツの青年部）に刺繡を寄贈
- 日独同盟を結んだドイツより来日し全国を訪問した。
- 10月 慰問袋寄贈
- 1939年 1月 サイレンを備え付ける



ヒトラーユーゲント来水（偕楽園で迎えた）

- 2月 傷病兵慰問の手芸品を寄贈
- 5月 4日 明治神宮外苑において大成学園愛国子女団視閲を受ける
- 6月 農繁期勤労奉仕期間を設ける
- 7月 支那事変二周年記念式を行う
- 8月 青少年学徒に賜りたる勅語下賜される



農繁期勤労奉仕 茶摘み

- 10月 銃後後援強化週間実施される
- 12月 入営兵のお守り袋を寄贈する
- 1940年 5月 青少年学徒に賜りたる勅語の奉読式を挙行する
- 6月 勤労作業週間実施される
- 秩父宮殿下の詔書奉読を拝聴する



銃後運動 軍服のボタン付け



銃後運動 慰問袋製作

- 7月 防空防火規程を作成する
 10月 三国同盟に関する詔書の奉読式を挙行する
 10月 1日 大成学園、愛国子女団総会に参列する
 10月 19日 平安神宮遙拝式を挙行する
 11月 7日 近江神宮遙拝式を挙行する
 11月 10日 紀元2600年奉祝式を挙行する
 　　東京における奉祝式典に松浦教諭参列する
 11月 11日 国民奉祝日齊唱団に高女4年浦沢春子参列の栄に浴す
 　　慰問文及び習字成績を寄贈する
 1941年 12月 陸軍大臣東条英機からの感謝状が授与される
 1943年 5月 学徒動員される
 　　校内に防空壕が作られる
 　　日立製作所水戸工場、日立兵



感謝状

器工場に女子報国隊として参加し学年別に週1回登校する

1944年 1月 8日 武器製作のため本校、水戸高女、下館高女の3校で女子三交代の佐乙女工場（日立製作所内）を設立する

7月 学童の疎開始まる

8月 敵機の空襲により工場の疎開を始め日立兵器の学校工場となり体育館に旋盤を取り付けて機関銃の弾倉をつくる

11月 13日 茨城県達207号をもって看護婦養成所に指定される
 　　（看護婦規則第2条第1項3による　大成高等女学校看護婦養成所第1回卒業174名、戦争による看護婦の不足を補う）

● 戦時下での学園生活

戦火が直接生活圏内に及ぶまでは、戦時中といえども、生徒たちはそれなりに楽しみを持って学園生活を送っていたようだ。

1932（昭和7）年より始まった県下中等学校連合旅行（東京、伊勢、奈良、京都方面）は、戦時中といえども1941年まで続いている。1942年になると、卒業アルバムには鹿島神宮、香取神宮、内原義勇軍といった神社や軍関係施設見学や奉仕の写真が登場し、旅行の意味合いが変わってくる。だが、生徒たちは笑顔で様々な活動を盛んに行っていた。「市内見学」というタイトルのついた、市内の映画館（東宝）前に行列を作っている生徒の写真があり、映画鑑賞会も行われていたようだ。

1940年に作成された大成高等女学校の「訓育方針並ニ施設」の後半部に目を通すと、「教師ハ生徒ノ下校後又ハ日曜祭日其ノ他ノ休日ニ際シ映画館、公園、盛場、遊園地、海水浴場等ニ於ケル

生徒ノ状況ヲ精査シ四囲ノ誘惑防止ニ付キ万全ノ策ヲ講ズルコト」ということが書かれていたり、また、「父兄及教師ノ目カラ離レタル場所ニ於ケル外囲ノ誘惑ニ対シ自肅自戒常規ヲ逸セザル様努メシムルコト」ともあり、生徒自身が道を踏み外さないよう指導するいわゆる生徒指導が、当時から行われていたことがわかる。



市内見学

●創立30周年記念式

1940（昭和15）年は皇紀2600年（日本独自の記年法で、神武天皇即位の年、西暦紀元前660年を元年とする）にあたり、様々な国家的行事が催された。本校では5月に校内で皇紀2600年奉祝記念巖壇移植式を、11月には奉祝式を挙行し、この機に合わせて創立30周年記念行事を実施した。なお、この時以降、本学園では創立年を県から学校として認可を受けた1909（明治42）年と考え、周年事業を実施してきている。

創立30周年の主な記念事業としては、12月13日の追悼慰靈祭、14日の記念式典、記念展覧会および校史の編纂であった。翌1941年3月『創立三十周年史』として刊行され、学園の初期の様子を知る貴重な資料となっている。

追悼慰靈祭は、創立以来の学校関係者の物故者を追悼慰靈するもので、本校職員、卒業生、生徒の計92名の遺影を、本校雨天体操場の正面中央の祭壇に安置し、水戸八幡宮神官田所清邦により式が執行された。



学園創立30周年記念の追悼慰靈祭



創立30周年記念式典

●生徒数の変遷

1929（昭和4）年に高等女学校を併設したこともあり、この頃の生徒数は増加の一途をたどる。卒業生数で見ると、高等女学校併設直前の1929年3月には157名であったが、1939年3月には239名、翌1940年には254名、1945年には437名と急増している。在籍生徒数も、1938年には724名、1940年には970名、1941年以降は1,000名を超えていている。

1941年3月現在で、水戸市大成女学校の在校生徒数は、12学級、487名であった。それまでの卒業生数は3,122名であった。

一方、大成高等女学校の在校生徒数は、9学級、483名であった。それまでの卒業生数は398名であった。

	水戸市大成女学校 (1941年3月現在)							
	第1学年		第2学年		第3学年		計	
学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	
本科	3	115	2	84	2	92	7	291
専科	2	90	2	90			4	180
家政科	1	16					1	16
計	6	221	4	174	2	92	12	487

大成高等女学校									
(1941年3月現在)									
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計
	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	
本科	3	165	2	110	2	110	2	98	9 483
計	3	165	2	110	2	110	2	98	9 483

在校生の出身郡市別を見ると、水戸市大成女学校については、那珂郡 144 名、東茨城郡 101 名、西茨城郡 76 名、水戸市 51 名、久慈郡 44 名、新治郡 21 名、多賀郡 19 名という順で、それ以外の郡市は 1 桁にとどまっている。水戸市外からの通学生が多かった。

水戸市大成女学校

	本科1年	本科2年	本科3年	専科1年	専科1年	家政科	計
東茨城郡	19	21	17	23	18	3	101
西茨城郡	23	6	13	18	15	1	76
那珂郡	28	26	25	23	34	8	144
久慈郡	13	9	13	3	6	0	44
多賀郡	3	4	3	5	4	0	19
鹿島郡	0	0	0	3	1	0	4
行方郡	0	0	1	0	0	1	2
稻敷郡	1	1	0	0	0	0	2
新治郡	9	5	3	3	0	1	21
筑波郡	1	0	1	0	0	0	2
真壁郡	0	2	1	2	1	0	6
結城郡	0	0	0	0	0	0	0
猿島郡	0	0	0	0	0	0	0
北相馬郡	1	0	0	0	0	1	2
水戸市	15	9	12	6	9	0	51
日立市	0	1	1	2	0	1	5
他府県							
福島県	2	0	0	1	0	0	3
栃木県	0	0	1	0	0	0	1
新潟県	0	0	0	0	1	0	1
福井県	0	0	0	1	0	0	1
兵庫県	0	0	0	0	1	0	1
北海道	0	0	1	0	0	0	1
合計	115	84	92	90	90	16	487

大成高等女学校については、那珂郡 115 名、水戸市 102 名、東茨城郡 94 名、久慈郡 43 名、西茨城郡 40 名、日立市 28 名、多賀郡 18 名、新治郡 17 名という順で、それ以外の郡市は 1 桁にとどまっている。高女については水戸市内からの通学生も多かった。郡部に比べ、水戸市内では高等女学校志向が高かったと思われる。

大成高等女学校

	高女1年	高女2年	高女3年	高女4年	計
東茨城郡	28	22	22	22	94
西茨城郡	12	9	10	9	40
那珂郡	40	29	20	26	115
久慈郡	11	11	12	9	43
多賀郡	5	6	5	2	18
鹿島郡	3	2	1	0	6
行方郡	0	2	1	1	4
稻敷郡	0	2	0	1	3
新治郡	11	2	4	0	17
筑波郡	0	0	0	0	0
真壁郡	2	0	1	0	3
結城郡	0	1	0	0	1
猿島郡	0	0	0	0	0
北相馬郡	0	0	1	0	1
水戸市	39	13	24	26	102
日立市	12	8	6	2	28
他府県					
福島県	2	2	2	0	6
合計	165	109	109	98	481

戦時中の服装

第二次世界大戦の時期、国民生活の統制が強められた中、1940（昭和15）年に男子の国民服が制定された。そして翌1941年、女学生の制服が全国同じ国民服的スタイルに統一された。新入生は、ヘチマ襟でベルト付き上着の制服が標準となつた。翌1942年2月には衣料切符制度が実施され、制服は割当制となり、校服の調達もままならぬようになっていったため、揃った制服を着用することは困難となつた。割り当てられた既製服や古着を繕つてしのがなくてはならなくなつた。1943年に本科に入学した生徒は、ヘチマ襟のタ



モンペを着用した生徒たち

イプが標準だったが、お下がり等のセーラー服を着用する生徒も多かった。スカートは布が不足していたため、ひだは少なく筒型のものも多かった。靴も同様で、下駄、草履の生徒も多かった。さらに戦争が激化すると、報国隊として軍需工場に動員されるようになり、スカートでなく、裾を絞ったモンペ姿になった。

●学校が軍需工場化

戦況が悪化するにつれて、軍服調整や農繁期援農勤労奉仕などにとどまらず、学校の枠を超える生徒までが軍需工場に通年動員されることになった。1943（昭和18）年の「学徒戦時動員体制確立要綱」および「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に加えて、翌1944年1月18日に「緊急学徒勤労動員方策要綱」が閣議決定され、2月19日付文部省次官名で、これを「強力ニ実施シ戦力増強ニ挺身セシムルト共ニ戦局ノ現段階ニ処スベキ学徒ノ教育鍊成ヲ完カラシム」ことを命じた。3月18日に国民学校初等科を除き、4月より1年間学校における授業停止を決定。この時より翌1945年の終戦まで、生徒が実質的な授業を受ける機会はなくなったのである。日本全土がまさに戦時下の極限状態に陥った。

本校においては、1943年10月に創立35周年記念式を茨城会館において挙行し、文部大臣より祝辞を受けている。11月初旬には水府グラウンドで運動会が実施され、この年までは、まだ学生らしい生活が送っていたようだが、同時期に、空襲に備えて校内に防空壕が掘られている。

1944年になると、戦争はますます激しくなり、5月より本校の上級生は水戸中学生、水戸市立高女生とともに、勝田の日立兵器に工場動員された。報国隊の腕章をして機関砲等を作ったという。この時から勉強のため学校に通うのは週1回だけだった。8月には空襲を避ける工場疎開のため本校内に日立兵器の学校工場が設けられた。体育館

や昇降口、廊下等あらゆる場所に機械を据え付け、主に上級生が兵器を生産した。下級生たちは従来どおりに兵士の軍服作りを担当し、一人1日何十枚という割り当てを達成するために、厚地の純綿生地の裁縫に没頭した。同年8月23日に勅令第519号をもって女子挺身勤労令が公布、即日施行され、以後女子に対する容赦ない徴用が実施された。この年に女学校を卒業したばかりの女子たちは同窓会単位で挺身隊を組織させられ、日立製作所や日立兵器につくられた佐乙女工場に女子挺身隊として動員された。工場では機関砲や弾倉等を生産しており、水戸高女卒業生や下館高女卒業生とともに、昼夜3交代で武器の生産に従事した。工場動員の間、日立市会瀬にあった海岸工場に空襲があり多くの犠牲者が出了た。本校卒業生は非番だったため難を逃れたが、その惨状はすさまじいものだったという。

またこの頃には看護婦の不足が目立ってきたので、11月茨城県達により大成高等女学校看護婦養成所を設置し、看護婦の養成にあたった。

1945年夏には、校舎の天井板が全部取り除かれ、机や椅子は桜山の近くに移動され、重要書類や書籍類は水戸から少しでも遠いところに住んでいる先生方や生徒たちの家に分散して預けられた。生徒たちは、何もないがらんどうの校舎の中で、薄っぺらな座布団一枚の上に座り、防空頭巾と救急品の入った袋を背負って、胸には住所、学年、氏名、血液型等を記入した四角い布を縫い付け、仕事に励んだ。

●財団法人化

当時の私立学校は、国や自治体からの補助金といった資金援助が一切なく、経営的にも私財を投じるか生徒保護者に頼るしかない状況であった。このため、1945（昭和20）年7月、校長額賀三郎・キヨ先生は全財産を寄付し税制上も優遇措置のある財団法人の組織とし、経営を強化して学校の発

展を目指すことになった。

●空襲による校舎の焼失

1945（昭和 20）年 8 月 1 日夜半から 2 日未明にかけて水戸市が大空襲を受け、1、2 時間のうちに上市全体が廃墟と化した。本校も 5 棟 929 坪の全校舎を焼失し、わずかに大谷石の石塀と石蔵倉庫の半分の外郭だけが残った。これにより、創立当時から保管されてきた本校の多くの貴重な資

料が灰燼と帰した。石蔵は貴重な品々が保管されていた半分のほうが爆撃され、グランドピアノも卒業生名簿も失ってしまった。

鎮火してからすぐに、職員を中心に後片付けが始まった。生徒も灰掻きやモッコ担ぎをして、尽力した。夜に空襲警報が鳴ると、職員が学校警備のために出勤した。そういううちに終戦となり、学園はゼロからの再出発をすることになった。

職員、卒業生、生徒の協力で焼け跡の整理が進

女子挺身隊の生活

1941（昭和 16）年入学で英語は敵国語として廃止されて授業がなかった。卒業アルバムはなかった。

1944 年卒の生徒を中心として茨城高女卒生、下館高女卒生とともに、その年の 5 月より日立工場に動員された。6 月には三笠宮様が工場見学をされた。その翌日爆撃を受けた。

日立市会瀬の工場に向けた爆撃後、防空壕の近くは夏で遺体が腐ったにおいて大変だった。ちぎれて飛んだ足を多くの友人が見てしまい、怖くて夜間は一人でトイレにも行けなかった。

工場勤務の期間中、腸チフスが流行し茨城高女生が 3 名亡くなつた。

（1944 年卒業生の話）

報国隊の生活

入学した 1943（昭和 18）年には、徒歩で広浦まで遠足に行ったり、文化祭のようなものもあり体育館でなぎなたをやった記憶がある。授業でローマ字も習ったし、作法の授業もやった。2 年生の 10 月から報国隊として兵器工場に動員される際には、学校で壮行会を開いてもらった。工場の初日は入所式があり、「誓いの言葉」を生徒代表の矢口春江さんが読んだ。機械に髪を巻き込まれないように長い髪を後ろに束ねる指導があり、まさに命がけの活動だった。学生らしからぬこのような生活が続いたが、お給料が月に 50 円支給され、半分は学校に渡し、半分は本人がもらえた。その中から月 3 円 50 銭の学費、半年で 30 円の定期代を貯い、わずかなお小遣いにもあてていた。が、当時は電車通り（現在の国道 50 号線）のお店は、物不足のため伊勢甚等も軒並み戸締めで、お小遣いを使うあてもなかった。履物の駒下駄は大通りを歩くとすぐに歯が擦り減ってしまい、草履のようになつても履いていた。駅で空襲にあったときは、大手橋の下の横穴に隠れて難を逃れた。

（1946 年卒業生の話）



報国隊の腕章を付けた生徒（1945 年頃）

当時の学生生活

1943(昭和18)年に本科に入学し1946年3月卒業後、同年4月から家政科に入学した卒業生後藤春江様から、当時の資料をお借りすることができた。

- 1 昭和18年3月10日付の入学願書受付番号票
- 2 昭和18年4月6日付の合格通知書
- 3 昭和18年11月6日付の「大成学園体育鍛成会」のプログラム
- 4 昭和19年10月6日付の「学徒勤労動員出動に関する件」という校長名での保証人宛の通知(同年10月10日より翌20年3月20日まで勝田の日立兵器にて、本科2年生は大成報国隊第3部隊員として出動することになる、という内容)
- 5 学校主催の出動壮行会に対する生徒からのお礼の言葉の原稿(国語の鈴木利貞先生による鉛筆書きの直筆)

「非常時局下、待ちに待った出動の日がいよいよ参りました。学校におかれましては私達の為に盛大な送別会をお開きくださいまして、誠にありがとうございます。

学業を半ばにして学び舎を離れていく私達では御座いますが、学徒の意気を今こそお国の為に發揮するため御座います。私達一人ひとりはしっかりと?意を定めて元気に行って参ります。??しい学舎、そして??先生方や皆様方の面影は、職場に参りましても私達の心のよりどころであり、その御無事は日々お祈り申し上げずには居られないと思います。

簡単では御座いますが、これをもちまして本日のご挨拶を致します。」

6「大成報国隊」の腕章

- 7 昭和19年10月10日付の日立兵器入所式に向けて生徒代表用に書かれた「誓いの言葉」の原稿(鈴木利貞先生によるふりがなつき直筆)

「只今 殿より御懇篤なる激励の御言葉並に御諭しを下され我ら一同感極まりて身の置く所も無し

指折り数えて此の栄えある出動の日を我等は幾日前より数えしそぞ 去る九月下旬大本営より発表せられたりし大宮島及びテニヤン島の皇軍将士並に在留同胞の玉碎なされし報道は未だに強く強く我らの耳朶に残れり これ皆銃後一億の奮起心の及ばざりし為なるか悲憤の血涙滂沱と流れ落ちて止まる術を知らざりしなり。

米英の鬼断じて打つべし 今を持って撃たざれば三千年の光を放つこの国土を永遠に失うなり 大和撫子の血に燃えて咲き出む時は今なり その血もて鉄を打ち鏃をかけ銃身を研磨しベルトを回転せしめむ 母校の花の今ぞ紅に咲き出むとするなり。 この聖戦五年十年と続かば続け 吾等は唯増産報國の決意のもとに機械とともに碎けむのみ 憂吾等の闘う場所は至れり。

大君の為に又国家を大東亜を盤石の泰きに置く為に



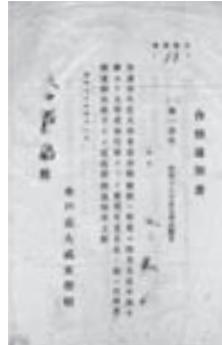
1 入学願書受付番号票



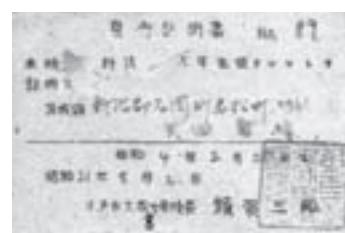
8 保険証



8 保険証（中身）



2 合格通知書



9 身分証明書

この小さき腕の力の續かむ限りひたすら國の向ひ行く
大目的に歩調を合わせて進まんとするなり。

東西をも弁えぬ無経験の者の集まりをご教導下さる
方々の並々ならぬご苦労を胸に体し絶対服従の鉄則を
守り言揚げせず諍はず工場の名譽の為母校の弥栄を
念じつつ持場持場を守り徹かんとす。

何卒御懇切なる御指導を垂れさせ賜らむことを切に
御願い申し上げます。

簡単乍ら本日の入所式にあたり一同に代わり一言奉り
てここに誓ひの文となし併せて御挨拶の詞と致します。
昭和十九年十月十日

水戸市大成女学校本科第二学年勤労報国隊代表
何の誰子」

- 8 昭和19年11月1日付の日立兵器健康保険被保険者証
- 9 戦後昭和21年8月2日付の身分証明書(学生証)

学徒動員中は、お給料が出たと聞いていたが、健康保険にまで加入していたことが判明した。危険な仕事であり保証も必須だったと思われるが、10月10日入所で健康保険組合加入が11月1日と時間差があり、急な動員で受け入れ側も間に合わなかつたために遅れたのだろうか。

められていった。また、折からの食料不足に対処して校庭に野菜畑が作られた。額賀三郎校長が率先して、人手がないときは一人で畑を耕して、寄宿舎生たちの食料確保に努めていたという。

多くの関係者の協力により、翌年4月には倉庫横に簡素な事務室1棟、校長宅が造られ、しばらくして、5、6名の生徒を収容する寄宿舎も建てられた。が、授業はすべて旧37部隊兵舎（水戸市文京：現茨城大学所在地）を借りて行われた。



戦災にも焼け残った大谷石の石蔵

●旧兵舎での学校生活

1945（昭和20）年11月、本校をはじめとして全校舎を焼失した水戸市内の学校（水戸中学（現水戸一高）、茨城高女（現水戸二高）、水戸高女（現水戸三高）等）が、旧37部隊兵舎（現茨城大学）と旧42部隊兵舎（現茨城大学附属中）を借りて仮校舎とし、授業を再開することになった。水戸駅から旧兵舎まで、多くの生徒たちが徒歩で通学していたし、茨城町、那珂町、石塚から舗装されていないでこぼこ道を1時間以上かけて自転車で通学する生徒もいたという。

机も椅子もないため、生徒は小板にひもを通して板のように首から下げ、床に正座して勉強をした。物資不足のため、割れたガラス窓も補修されず、ストーブもなく、風雨の日や冬は苦労を強いられた。天井板がなく、先生方の声は隣同士筒抜けだった。教科書は、英語や数学は新聞紙を四つ折りにしたくらいの粗末なものだった。兵舎とい

うことで南京虫やシラミがいて授業中に体をもがく生徒もいた。食料事情も悪く、農家の生徒は昼食を持ってきていたが、昼食を持ってこられない生徒は教室外に出ており、昼食時に生徒が揃うことはなかったという。服装も、ヘチマ襟の標準服に父親のズボンを直してはく者や、帯芯で作った手提げ鞄を持って登校する者もいた。先生方も放出物資の軍服軍靴を着用していたため、男女の区別もつきかねる状況だった。こうした中、1946年11月には天皇陛下が来水され、旧37部隊兵舎での授業を視察されるとともに、親しく学生生徒を励ました。

●地方分散授業

当時も本校には水戸市外の出身者が多く、寄宿や下宿に頼っていた生徒たちが多かった。空襲で寄宿・下宿を失い、交通機関の復興もまだのため通学が難しいこのような生徒たちのために、1945（昭和20）年12月中旬から翌1946年1月末までの短期間ではあるが、各地で分散授業を実施している。例えば石岡市富田地区では、民家の部屋を借り、27名の生徒が授業を受けていた。



1945年12月頃の石岡市富田地区での分散授業

第2部
大成女子
高等学校

I 大成女子高等学校の設立

1945(昭和20)年～1952年

■当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1945(昭和20)年8月15日、敗戦を契機としてわが国の国政全般は連合国軍最高司令官総司令部(以下GHQという)の占領のもとに置かれたこととなった。したがって、戦後のわが国の教育もこの占領という厳しい条件のもと、敗戦の荒廃の中で大きな改革を迫られることとなり、教育文化などを担当する民間情報教育局(CIE)がGHQの特別参謀部の一つとして設立された。

1946年にかけては、相次ぐGHQの指令によりそれまでの軍国主義的および極端な国家主義教育の解体の措置がとられ、自由主義的・民主主義的教育体制の樹立が進められ、1946年11月3日に新憲法が公布され、翌1947年5月3日より施行された。新憲法は、旧憲法に見られなかった教育の機会均等と義務教育の無償化を宣言した。続く1年間は、主としてアメリカ教育使節団の報告書の趣旨を尊重しつつ教育刷新委員会を中心として新教育制度に対する構想が進められ、1947年3月には教育基本法と学校教育法が制定された。教育基本法は、新しい教育の原則をさらに具体的に定め、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたとえ、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とした。学校教育法は、学校制度の単純化、義務教育の年限延長と中等教育の改造、男女間の差別撤廃、高等教育の普遍化等いくつかの特色を持つ近代化された新学校制度を樹立した。

こうして1947年度から義務教育としての新しい中学校が発足し、1948年度には高等学校、翌1949年度には大学といわゆる6・3・3・4の新学校制度がそれぞれ実施に移されたが、これとともに

に、教育委員会法、社会教育法等々の諸法令が年を追って公布施行され、新しい教育制度は次第に整えられ、1951年独立のためのサンフランシスコ講和会議を迎える頃には、新教育体制の骨組みはほぼできあがった。

教育内容については、1947年3月20日に発表された学習指導要領が、以後、日本の教育実践の基準と位置づけられるようになった。学習指導要領は、小学校、新制中学校、新制高等学校の各学校と各教科で実際に教えられる内容とその詳細について、学校教育法施行規則の規定を根拠に定めた。高等学校においては1948年度より実施され、その後社会情勢に応じて改訂を繰り返している。

GHQが1945年12月31日に出した覚書「修身・日本歴史及び地理の授業停止と教科書回収に関する覚書(三教科停止指令)」により、軍国主義教育と見なされた修身(道徳、礼法を含む)、国史、地理の授業が停止された。他教科においても、教科書のふさわしくない部分は墨で塗りつぶされ、いわゆる「墨塗り教科書」として使用された。地理、日本歴史は翌年にGHQの許可のもとに再開されたが、修身は再開されず、文部省は修身に代わる公民科の設置を計画したが、教科目の特設は実行されず学校教育全体の中で公民的指導がなされることになった。

1947年に発表された学習指導要領では、小学校における家庭科が男女共修となり、自由研究および新教科「社会科」が導入された。高等学校に対しては翌1948年に発表され、一般社会を必修とし、国史、世界史、人文地理、時事問題



墨塗り教科書
(『図解 教科書のあゆみ』日本私学教育研究所事業委員会発行より)

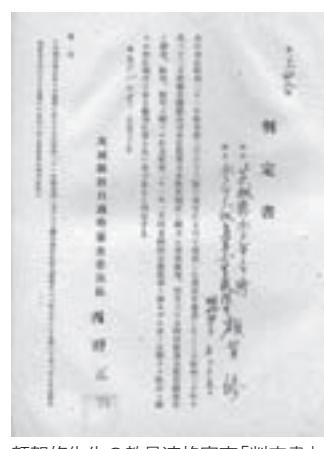
は選択科目となった。また、1時間の授業は60分とし（この60分には、教室を替える時間も含まれている）、週当り30～34時間、年35週以上学校において授業または指導を受けなければならぬとされた。

●「日本教育制度の管理」に関する指令－教職追放－

終戦後の日本においては前述のとおり、軍国主義的、極端な国家主義的な思想および教育の排除が厳しく実施された。1945（昭和20）年10月22日に出された「日本教育制度の管理」に関する指令は、教育関係者については、職業軍人、軍国主義者、極端な国家主義者および占領政策に積極的に反対する者は罷免することとある。いわゆる教職追放である。1946年5月、その実施に必要な法令が整備され、教職の適格審査が本格的に開始された。不適格者の排除は、審査会の審査によって判定される者と審査によらず一定の基準・条件に該当するものとして自動的に排除される者との2種類の方式がとられた。

こうして審査は進められ、1947年10月末までに約65万名が審査され、うち2,623名が不適格者と判定され、ほかに2,717名が審査によらず不適格該当者として自動的に排除された。

本校にも、「茨城県教員適格審査委員長」名での判定書が校長はじめ数名分が保存されている。（ちなみにこの委員長は西野正吉氏で、大正末から昭和初期に本校で英語の教員として教鞭をとり、その後県立高等女学校長や中学校長を歴任し、1948年県教育委員会教育長となり、民主教育の推進に尽力した人物。1958年には常陸太田市長と



額賀修先生の教員適格審査「判定書」

なっている。）いずれも「公職より除去に関する件に掲げてある条項に当らない者であると判定する」というお墨付きをもらっている。

●大成女子高等学校の設立

1948（昭和23）年3月の学制改革により、本校の組織も大きな変革を経験した。本校は中等学校という位置づけであり、中等学校は改編して高等学校および併設中学校として発足することになった。それにより、水戸市大成女学校および大成高等女学校は、大成女子中学校および大成女子高等学校となり、1・2年生は中学校の生徒となり、3・4年生は高等学校の生徒となった。

1947年の新聞には生徒募集広告が掲載されており、水戸大成高等女学校名で「新制中学1年150名、地域制なし、女子に限る、初6以上」とある。また、同年の別の新聞広告には、大成女子中学校生徒募集と並べて水戸市大成女学校の募集が行われている。「本科第一学年50名、専科第一学年50名」とある。新学制が小中学校においては1947年からの実施、高等学校においては1948年からの実施であり、1年の時間差があったためである。

戦後に新学制が導入されて以来高校入学者数が劇的に増加し、本校でも定員増を求められてきた。1949年の広告では「大成女子高等学校」の名で「高等学校1年150名、学区制に関係なく自由募集」となり、別科の募集もしている（1年制100名、2年制50名）。翌1950年には別科2年制の定員を100名と増加している。その後定員の変更が続き、1951年には中学校1学年50名、高等学校普通科・家庭科は1学年250名とし、別科は1部制に改められ100名とした。1952年には中学の募集を停止し、高等学校普通科・家庭科300名、別科100名とし、考査を3月初旬と3月下旬の2回実施している。1953年にはさらに定員が変わり、普通科・家庭科350名、別科100名となった。



1951年のサンフランシスコ講和条約調印記念のフォトカード

なお、旧制の大成高等学校は1949年に、水戸市大成女学校は1950年にその年の卒業生を送り出して廃止された。また、1954年3月の卒業生を待ち大成女子中学校を廃止した。

■学校法人化

私立学校は、これまで監督官庁の規制のもとに置かれ、官公立学校に比して軽視される存在とされていた。1947（昭和22）年3月公布の学校教育法は設立形態による学校の差別を廃止した。さらに、私学の自主性と公共性の確保を目的に1949年12月「私立学校法」が公布され、私立学校に対する所轄庁の監督権限を制限してその自主性を尊重するとともに、私立学校の設置者を学校法人に限定した。それにより教育の公共性を確保することとし、憲法第88条との関係を調整して私学に対する公の助成に道を開いた。この私学助成は戦前には例を見なかった画期的なことであり、1952年3月私立学校振興会法の公布により全額政府出資の特殊法人私立学校振興会が発足し、資金の貸し付けを開始した。

本県においては、私立学校法が施行される1950年3月に先立ち、2月21日県下9校の私立学校長および私学関係者が茨城会館に集まり、県に対し補助金の支給を求めて陳情書を提出している。

このような状況下で、財団法人大成学園は1951年3月3日学校法人大成学園となり、現在に至っている。

■旧兵舎での新しい学園生活

民主主義にのっとり、新しい時代の変化に即応した新学制が導入されたが、教育環境はまだ不十分なものだった。新制の大成女子高等学校および大成女子中学校が設立してもなお、旧兵舎での生活が続いている。時折米軍将校がジープで来校し、本校の授業の様子、校舎をはじめトイレに至るまでの教育環境のチェックを行い、額賀修先生に指示を与えて帰っていった。本校の裁縫の授業を見て、裁縫よりも民主主義を教えるように、という指示もあったという。教員たちも生徒たちも、この視察には大変気を遣い、全校を挙げて清掃を入念に行ったという。

このような状況下ではあるが、生徒たちは常に明るく勉強に運動に励んでいた。

のちに当時の授業を振り返って書かれた社会と英語担当の稻村宗政先生によると、「一般社会の授業は法制経済に相当するもので、ラジオや新聞等で調べた時事問題を織り交ぜながら講義したが、当時はいわゆる民主主義教育の始まりだったから話題も多く授業時間が少ないくらいに思われた。一方英語の方は、本科と別科については、使用する教科書も昔の中学程度の本だから、どうにもやりようがなかった」（『大成時報』第5号、1958年10月）とある。

新制の中学、高校に改められた後もしばらくは床に座り首から下げた画板にノートと教科書を広げての授業が続いているが、皆の協力で次第に机



旧37部隊兵舎でのクラス集合写真



旧42部隊兵舎でのクラス集合写真

や椅子も揃い、壊れた窓には板や紙が貼られ、徐々に学校らしくなっていった。1947（昭和22）年11月には水府グラウンドでの体育祭も再開され、旧兵舎敷地内の体育館の代用の建物に紅白の幕を張り、クラス代表による演劇発表会も催された。休み時間には、生徒たちは那珂川の近くまで散歩に出かけたり、同じ棟にいたろうあ学校の生徒とジェスチャーで交流も行った。

1950年12月に、市立高女（現水戸三高）が移転して空きができたため、旧37部隊兵舎より旧42部隊兵舎（現茨城大学附属中）へ移り、校舎・校庭ともに少しだけ恵まれた環境となった。なお、兵舎使用にあたっては家賃を支払っていたことが、行事誌に記載されている。

戦災で焼失したピアノを再び購入しようと生徒が一人20円ずつ寄付をして1951年にはピアノを



生徒の寄付により購入したピアノ

備えたり、学園生活を充実させるために様々な活動が行われた。

1952年には1月3日より中3・高3生徒対象に3日間課外授業を実施しており、中3生徒は同月23日に模擬試験を受験している。また、この年3月には、就職希望の生徒対象に、職業安定所より講師を招き、説明会を開催している。7月には夏季課外授業を実施している。この結果、茨城大学合格者が20名を超えていた。

こうして戦後のつらい時期を前向きに乗り越え、学園は平時の環境を取り戻すとともに、着実に発展していった。

旧兵舎での学園生活は、藤坂町（現水戸市五軒町）の本校内に校舎が4棟完成し終えた1953年2月まで7年以上にわたり続いた。

●新校舎の建設

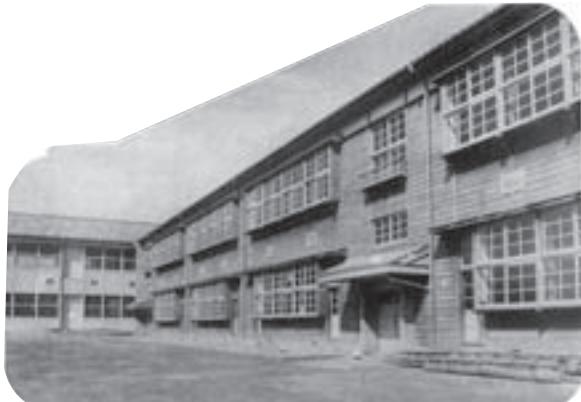
1947（昭和22）年1月には百里航空隊の建物や福原兵舎の払い下げ建築資材を23万円で確保し、平屋建201坪の校舎を計画した。その年の12月には財団法人日本私学団体総連合会より私立学校経営費貸付金の貸与を受けている。さらに、新制の高等学校が発足した年の1948年12月にも貸し付けを受けている。被災した他校に先駆けて戦後最初の校舎を竣工するに至った。1949年6月13日の『いはらき新聞』によると、この建築



仮校舎での演劇発表会

にあたっては、生徒も「私たちの校舎は私たちの手で！」と奮闘し、街頭で手作りの鼻緒等を売って建築資金として寄付したり、全校生徒で福原兵舎を壊しに行ったりと、母校のために大変尽力したことがわかる。この古い資材による建物は第一校舎と呼ばれ、職員室と4つの教室、形ばかりの校長室と応接室、事務室等があった。この校舎は全校生徒を収容する規模ではなかったため、生徒たちは交代で週1回だけこの校舎で授業を受けることができるようになった。

その後さらに校舎建設に着手し、1949年6月に247坪の第二校舎が完成した。これは新品の材料による待望の校舎であり、当時の新聞記事によると「文部省二型の設計」ということで、各教室に出窓があり、1階には各教室を結ぶテラスがあり外部に出入りが可能で、まさに最新型の校舎だったという。生徒たちが各自旧37部隊兵舎か



少しづつ復興が進む戦後の校舎

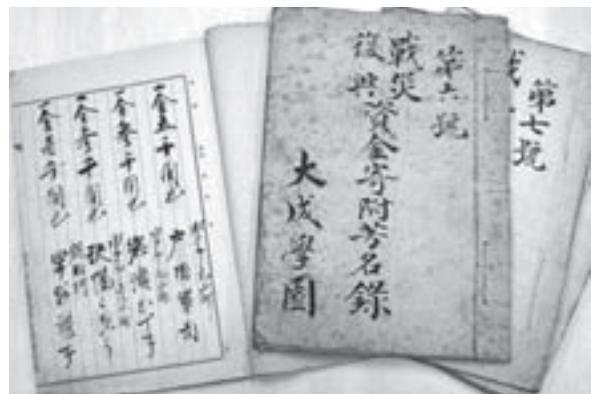


建設中の文部省二型の第二校舎を前にした生徒たち

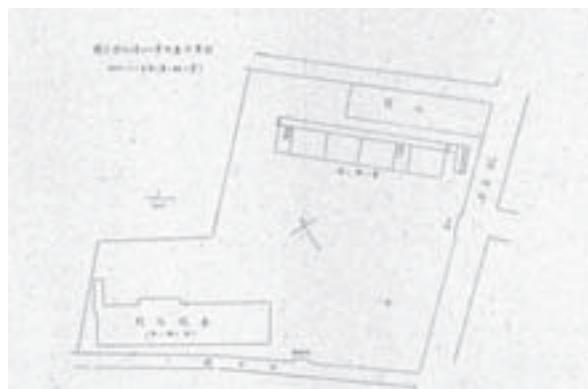
ら机・椅子を持って大移動したり、水はけの悪い校庭を整備するために那珂川から砂を運んだりして、皆が学園の復興のために協力を惜しまなかつた。

第二校舎完成後も、全校生徒を収容するにはほど遠く、上級生だけが校内の新校舎で授業を受け、下級生は、いまだに旧兵舎での仮校舎生活を送っていた。こうした中、校舎復旧を急ぐため1950年3月16日、3年の期限で校債を発行し、先生方が分担して卒業生や在校生の家を一軒一軒回り、校舎建設のための借り入れをお願いした。大宮町（現常陸大宮市）や太田町（現常陸太田市）から、石岡町（現石岡市）や遠く潮来町（現潮来市）まで足を延ばした。その結果、1951年7月に木造2階建164坪の第二校舎が完成（2年前完成の第二校舎をこれ以降第三校舎と改称）、1953年1月には木造2階建182坪の第四校舎が完成した。これにより、7年余の仮校舎生活に終止符を打ち、全校生徒がやっと校内で一緒に勉強できるようになった。

この戦後復興期の最中1949年に本学園は創立40周年を迎えていた。特別な行事等については記録されていないが、職員、保護者、生徒までもが復興のために一致団結し、学園がさらに発展することを願い力を尽くした特筆すべき時期であった。本学園が100年もの長い歴史を歩んでこられたのも、この時期があったからこそ、といつても



校舎再建のために寄付をくださった方々の芳名録



芳名録に綴じ込まれた建設予定の校舎図面

過言ではないであろう。

額賀三郎校長先生

旧42部隊兵舎を引き払った1953（昭和28）年2月3日のちょうど10日後の2月13日、創立者の額賀三郎校長先生が、帰らぬ人となった。大成裁縫女学校の創立以来44年間、実業教育だけでなく普通教育にも力を入れ、学園を発展させてきた先生は、戦災による全校舎焼失後も復旧に力を尽くし、生徒全員を校内に呼び戻してすぐに亡くなつた。温厚篤実で、教育の本道を地道に歩んで女子教育に専心すると同時に、県私学協会長として県内私学教育の発展に力を尽くした。この間、1938年に茨城県から自治功労者として、1939年に全国高等女学校協会から30年間女子教育に尽くした功労者として、さらに1940年に文部省から教育功労者としてそれぞれ表彰を受け、先生が女子教育に残した偉大な業績が広く社会に認められるに至つた。朝に夕に花壇の手入れや校内の片付けをする姿が生徒の思い出として語られている。また、運動部の合宿の折には自ら釣ってきた魚を生徒に差し入れ、「忍耐と精神の統一には釣りはよいのですよ」と生徒に話したこともあるという。激しい感情の流れを決して見せることなく温かい眼差しを常に生徒に職員に向けながら、真摯に女子教育に熱意を注ぎ続けた額賀三郎先生の立派な姿は、「一生懸命勉強して立派な女性にな

るよう」と生徒に遺した言葉とともに、多くの関係者の脳裏にいつまでも深く刻まれている。学校葬は1953年2月20日午後1時より3時まで校内で行われた。

この後は額賀修先生が第2代校長に就任し、初代校長先生の志を受け継ぐこととなった。



額賀三郎校長の学校葬
額賀三郎校長と筆蹟（現在、胸像の台座に刻まれている）



学校行事の再開

体育祭は、戦時中は1943（昭和18）年11月の県営水府グラウンドでの実施が最後だったが、戦後1947年には水府グラウンドで再開され、教員の仮装行列も加わった。1949年からは毎年校庭で開催されるようになった。また、クラス対抗の校内バレーボール大会が1948年5月に実施されている。

展示会については、戦前も1935年2月に第1回生徒作品展覧会を実施し、それ以降毎年2・3月には生徒作品展示会およびバザーを開催してい



1948年の運動会

る。それ以外にも、周年式典の際は生徒の優秀作品の展覧会を実施している。1950年2月4・5日に開催された展示会は戦後の物資不足を反映し大変盛況で、雑巾、枕カバーから焼き芋まで、早朝から並んだ人たちによって、あっという間に買い占められてしまったという。1957年から展示会は学園祭と改称しいつそう盛大な催しとなっていく。

旅行・遠足については、1947年10月には矢祭袋田遠足が実施され、戦前からの行事が復活している。生徒の服装は、セーラー服の者、ヘチマ襟共通服の者、モンペの者、スカートの者が混在して当時の状況がうかがえるが、生徒に笑顔が見られる。1948年5月8日には大洗、5月27日には日光、6月には別科生徒が松島に出かけている。1949年11月には東京遠足、筑波遠足という記録もあり、少しずつではあるが、やっと元の平穏な学園生活が戻ってきたようだ。1950年には箱根に1泊、1951年になって関西旅行実施の記録がある。往復鉄道のすし詰め列車で、米を持参し、



1950年の展示会とバザー 正門の掲示



1950年の展示会とバザー 室内風景

京都市内も半分は徒歩で見学した。これ以降は、毎年関西旅行が実施されている。

●夏時間と農繁休暇の実施

この当時、学園の生活にアメリカの制度を取り入れたものに、「サマータイム」があった。これは7、8月の間、時計の針を1時間進めることであった。アメリカの合理的な考え方によるこの制度も、新しい物好きの国民性からか、日本の生活にも進んで取り入れられた。しかし、1952（昭和27）年のサンフランシスコ講和条約発効により完全独立を果たした後は、実施されていない。

一方で、これと対照的な純日本風の制度が、「農繁休暇」であった。農事の忙しい時期に休暇を与えて農事手伝いの便宜を図ったもので1948年よ



1947年の袋田遠足



戦後の鎌倉遠足

り 1953 年まで実施した記録があるが、次第に都市部の生徒が多くなり、サマータイムと同様に立ち消えていった。

● 体育各部の復興

終戦直後は、運動の施設は荒廃し用具もほとんどなく、ボールを入手するのさえ困難だったほどだが、1946（昭和 21）年よりバレーボール部、陸上部、卓球部、バスケットボール部が練習を再開したようだ。

県でも 1947 年に県中等学校体育連盟が結成され、翌年には学制改革により高等学校体育連盟と改称し、高校体育の振興が進められることになった。

バレーボール部は 1947 年に石川県金沢市で開催された第 2 回国民体育大会に出場し、滋賀県代表の水口女学校に勝利したという新聞記事がある。翌 1948 年 6 月東京高等師範学校で行われた関東大会では準々決勝で惜しくも山梨都留高校に敗退、7 月 10 日の県大会にて参加 21 校中優勝、10 月の第 3 回福岡国体では卒業生による大成クラブが再び滋賀県代表に勝利している。翌 1949 年には関東高校、全日本高校、国民体育大会の 3 大会に出場権を得て、県代表として全校生徒の声援を受け善戦した。これにより戦前からの「バレーボールの大成」の復活を確固たるものにした。次いで 1952 年には第 1 回県高等学校総合体育大会



1946 年の卓球部

が開催され、各クラブが参加して活躍した。この時もバレー部の活躍は素晴らしい、国体出場こそ逃したが、関東高校、全日本高校には県代表として出場した。また、この年水戸市東町の県営コートで開催された皇后杯争奪全日本女子総合バレーボール選手権大会に県代表として出場し、高松宮妃殿下ご観戦のもと、3 回戦まで勝ち進んだ。

バスケットボール部も 1947 年に県大会水戸地区予選に出場し、水戸高女を破り地区優勝を果たしている。翌 1948 年には関東大会に出場し、惜しくも準々決勝で山梨都留高校に敗れている。

陸上競技部も 1954 年の県大会において、80m ハードル、400m リレーで入賞している。

● 文化活動の復興

体育系活動の復興と同時期に、文化系のクラブの活動も開始された。高校発足時にまず、音楽、書道、美術、文芸、生物、理科、生花、演劇、手芸、被服、珠算などのクラブがつくられ、JRC も奉仕活動を始めた。当時本校ではクラブが必修で、月曜の 6 時間目に活動を実施した。1952（昭和 27）年頃からペン習字クラブができ、多数の生徒がペン習字の練習に励んだ。文芸部は 1949 年 10 月に創部し、創作物をプリントで配布したり、茨城高校文芸部との合作『梅苑』を発行したりしてきた。1951 年には文芸部誌『いぶき』を発行し、また俳句の会を催したりと活動が充実していった。1951 年 10 月には新聞部により学校新聞『大成時報』が創刊され、翌 1952 年には第 2 号、1953 年 9 月に第 3 号が発行された。同年 11 月に



1949 年開催の第 4 回国民体育大会出場のバレーボール部と選手証、甘味品特別購入券



1951年発行 文芸部誌『いぶき』 第3号



1953年発行 学校新聞『大成時報』 第3号

は演劇発表会が実施されている。また、戦後初期のうちに英語好きが集まり ESS もでき、アメリカ駐留軍の青年が時折訪問し英会話を楽しむこともあったという。珠算部は、1953 年に 3 級、4 級、6 級合格の記録がある。

卒業生と母校

創立以来の家庭的な雰囲気は時を経ても変わらず、水戸大空襲で母校が焼けたと聞き、じっとしておられず遠方から訪ねてくる卒業生が数多くいたことが記録に残っているが、戦後多くの卒業生が頻繁に母校大成の門をくぐっている。1949(昭和 24) 年の『いはらき新聞』によると、学校はとても家庭的な雰囲気で、「時には赤ちゃんを連れて」「時には 50 歳くらいのおばあ様等が」訪問してくるとある。卒業生のご子息で、「母につれられて、よく大成の校門をくぐりました」と話される方もいる。新聞記事には、「母校は私たちのオアシスです」と書かれている。

生徒の奉仕活動

戦時中はお国のための勤労奉仕が学生たちに義務づけられており、様々な活動を行ってきた本校生だが、戦後は義務としてではなく、自発的な奉仕活動を実施している。

1951 (昭和 26) 年 12 月 19 日に本校 3 年生の

根本さん、小松崎さん、庄司さん、後藤さん、小松崎さん、大森さんら 6 名が水戸市三ノ丸の児童一時保護所を訪れ、子どもたちの前でミシンを踏んできれいな足袋を作つてみせて、好評を博した。生徒たちは自分たちのお小遣いを節約し、足袋 25 足分の布を買い、裏布や底、コハゼなどはめいめいが家から持ち寄り、学校が休みに入る 24 日から同保護所に日参して仕上げるという。なお、根本さんたちは以前からしばしば同所を訪れ、紙芝居やほころび繪いなどをして、喜ばれていた。



奉仕活動を紹介する記事 (1951 年 12 月 21 日『いはらき新聞』)

II 高度経済成長時代に向かう

1953(昭和28)年～1959年

当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1951 (昭和 26) 年、わが国は連合諸国との戦争状態を終結するサンフランシスコ講和条約を結んだ。これは翌 1952 年 4 月 28 日に発効し、この時点でわが国は完全に独立を回復し、敗戦後長く進駐していた GHQ も活動を停止した。日本の軍隊は終戦とともに GHQ によって解体されたが、朝鮮半島へと出兵したアメリカ軍の支援のため 1950 年に GHQ により警察予備隊が創設され、のちの 1954 年に自衛隊に改組した。

この時期は日本経済の復興期でもあり、1950 ～ 1953 年における朝鮮戦争中の朝鮮特需によって、経済が大幅に拡大した (神武景気)。

この好景気によって日本経済は第二次大戦前並みの水準にまで回復し、1956 年の経済白書には

「もはや戦後ではない」とまで記され、戦後復興の完了が宣言された。また、好景気の影響により、耐久消費財ブームが発生、三種の神器（冷蔵庫・洗濯機・白黒テレビ）が出現した。また、歌や映画といった大衆文化が開花し、1958年には東京タワーが完成している。

こうした中、1951年7月に学習指導要領の第1回改訂が実施され、自由研究が廃止され、教科以外のホームルーム活動、生徒会活動、クラブ活動をまとめて、小学校では「教科以外の活動」、中学校・高等学校では「特別教育活動」として実施を規定された。また、生徒指導および職業指導は学校教育における重要な任務として取り上げられるようになった。教科および特別教育活動の指導については、1単位時間は50分とし、週30～38単位時間（33単位以上が望ましい）、年35週以上、すなわち毎年1,050単位時間以上1,330単位時間以内を実施しなければならないとした。

1956年には高等学校の学習指導要領が改訂され、特別教育活動の指導時間数（週1～3時間）が規定された。また、社会科、理科の必修科目数が増加した。

●本校の教育

この頃は戦後から復興して経済成長期に入り、物心共に豊かになって若者の自由奔放な言動が問題視されつつある時代であった。このような中、本校で強調されたのは「大成の生徒として恥ずかしくない言動をするように」ということだった。ことあるごとにこの言葉が使われたと、卒業生は懐かしそうに語る。國の方針が大きく移り変わった時期にあっても、多くの生徒が校歌のとおり、「誠実・協和・勤勉の道」を「大成の名を誓いつつ」努め励んでいたことが、様々な記録からわかる。

戦後、本校はほかの私学同様に定員増を迫られてきたが、1954（昭和29）年より1958年までの5年間は、普通科・家庭科400名、別科50名で

落ち着いていた。1959年には別科を廃止し、普通科400名、家庭科100名の募集としている。

●家庭クラブ

1948年（昭和23）年に学校家庭クラブ活動（FHJ）およびホームプロジェクトが家庭科教育に取り入れられた。その後、各学校単位の活動が県単位に、県単位の活動がブロックへ、ブロック単位から全国的な組織へと発展し、全国連盟が1953年に誕生した。「創造・勤労・愛情・奉仕」を活動の柱として、研究的活動、奉仕的活動、社交的活動を実施している。本校はこの全国組織に発足と同時に加盟した。その年の全国大会が8月7日にお茶の水女子大学で開催され、本校からも生徒代表と担当教員が参加した。以後、毎年のように夏休み期間中に開催される全国大会に参加している。

もちろん、本校の家庭クラブの活動は全国組織設立以前から盛んに行われており、その活動の様子が1952年に新聞記事に登場している。5月24日の『毎日新聞』には「大成では、戦後は裁縫だけでなく文化的な家庭管理の研究に生徒が真剣に取り組んでいる」と、家庭クラブの栄養研究パーティーの写真が掲載されている。8月15日の『常総新聞』の記事には、「家庭クラブの生徒達はこの4月に入学した新入学生のためにせめてネクタ



家庭クラブの奉仕活動 老人たちを招待（1955年）



児童施設への慰問

いや運動服を作つてやり経費を節約してあげようと、今愛情を込めてミシンを踏んでいる」と書かれている。

全国組織加盟後は、それ以前から有志を中心として頻繁に行われていた児童施設への奉仕活動等も取り込み、ますます意欲的な活動となった。校内奉仕作業や新入生歓迎会、卒業生送別会などの行事を主催し、施設慰問などの校外奉仕も盛んに実施。資金獲得のためには、雑巾作り、卵販売など積極的に活動した。1957年からはホームプロ

ジェクト発表会が毎年校内で2回行われ、研究成果が披露されるなど、活動の幅を広げている。

●英語教育

1953（昭和28）年にはロバート・ブランズ先生を英会話課外の講師に迎えている。同年9月10日発行の『大成時報』第3号には、ブランズ先生による「平和のために外国語を」という寄稿文が掲載され、卒業アルバムの職員写真にも登場している。この頃より、本校ではコミュニケーション力向上を重視した英語教育がなされている。

●作法教育について

戦前の作法教育は「修身」の中で扱われており、道徳教育と同様に戦前の教育の象徴として扱われ、戦後の民主主義教育の流れの中で停止されていた。戦後しばらくして小中学校で道徳の時間が新設された翌年1959（昭和34）年、本校では長く礼法クラブの活動として残っていた作法教育が、全生徒対象に必修授業として復活することと

平和のために外国語を

1953年9月10日『大成時報』第3号
ロバート・ブランズ先生の寄稿文

戦争が終わって間もなく英語の勉強は大変盛んでした。さて日本が独立すると、たくさんの生徒さん達は英語の勉強から遠のいて勉強しようとしません。これはおそらく当たり前のことだと思います。しかし私は全ての生徒さん方に外国語とりわけ洗練された英語、支那語、フランス語、ドイツ語あるいは他の外国語を勉強するように切望致します。

今こそ平和のためにお互いの理解が大変必要な世の中です。又私たちの一部の者しか外国に行くこともできませんし、日本においても外国人の習慣、風俗、文化、思想を知る唯一つの方法は彼らの言葉を学ぶことなのです。あなた方も外国語の読本を通して世界の旅行者になることができるのです。

R.W.BRUNS



ブランズ先生



『大成時報』に掲載された寄稿文



礼儀作法の授業

なった。さらに、額賀あや子先生を中心とし、この作法の授業時間に限らず、生徒たちの生活態度全般の指導にも作法が大きく取り入れられた。これにより生徒たちは礼儀正しい立ち居振る舞いができるようになり、外部からの評価も高まった。校外に出ることの多い衛生看護科の生徒たちも、作法教育のおかげで患者たちからの評判がとても良い、と後の新聞に書かれている。

その後、一時期カリキュラムの変更から全生徒対象ではなくなったが、2007（平成19）年度から、全1年生対象に学校設置科目として完全復活している。

また、1959年『大成時報』第7号には、「校内外の風紀」と題して、生徒会より生徒の自覚を促す文章がある。「制服は学生時代でなければ着られないのですから、各自が自覚して、制服になじむようなまた上品な学生らしい態度を身につけるよう努めようではありませんか。（中略）先生への会釈、友人間の挨拶、また言葉遣いなど、まだまだ完全とは言えないと思います。話をしながら街を歩く時、また車内で話をする時などの言葉のはしからでも、その人の気品とか教養の多少がわかるとさえもいわれますので、十分に気をつけようではありませんか。そして毎日の生活に希望と、反省を持ちながら生徒一人ひとりが伝統ある大成女子高の生徒であるという誇りを持って行動し、本校発展のために力を入れて行きましょう。」

●学校行事の様子

体育祭は、1949（昭和24）年秋より校庭で開

催され、1955年頃からは昼休みの仮装行列が定例となり全校生徒を沸き立たせた。また、長い歴史のある通学班対抗、クラブ対抗、クラス対抗の3種のリレーも人気をさらった。生徒数が増加するに従い校内での開催が難しくなり、1958年には県営堀原グラウンド、1959年には警察学校グラウンド（現在の五軒小学校）で実施し、以後は学校外での実施となった。この時期は、体育祭を記念して手拭いを配布している。図案は1957年卒の松森さんによる。



1959年の体育祭

生徒作品の販売および展示を行って周辺住民からも好評を博してきた展示会は、1957年から学園祭と改称し、盛大な催しとなっていました。学園祭は生徒会、家庭クラブが中心となり教科も参加し、日頃の研究の成果や活動の状況を一般に公開した。1958年の『大成時報』第6号によると、展示発表の参加クラブは、華道、理科、JRC、食物、家庭クラブ、子供の部屋、美術、文芸、



1959年の学園祭

書道、写真、手芸、音楽、被服と多彩。食堂部は体育館に食堂を設け、生徒会と家庭クラブの援助で生徒一人当たり 30 円、馬鈴薯 2 個、米八勺の寄付により賄われ、売上金は学校の設備を買うために回されたという。また、例年どおり愛友養老院の老人を招待して、老人たちを喜ばせた。2 日間にわたる開催で、初日は 1,500 名、2 日目は 1,200 名の入場者数であった。

旅行・遠足については、この頃は卒業学年に宿泊を伴った旅行が実施されている。『大成時報』にも毎年、旅行の思い出が掲載されている。

●新制服の採用

1953（昭和 28）年、新しい教育体制のもと、創立の地である藤坂町に初めて全校生徒が戻った年に、新制服を採用した。濃紺のジャンパースカートに同生地のボレロタイプの上着を合わせて白襟を出すこの新制服は、家庭科の飛田しづえ先生を中心に校内でデザインされたもの。あわせの部分もなく鍵ホックで止めるだけと、物不足の時代にあって布等の材料が最も少なくて済む形として考案された。各家庭や知り合いに頼んで制作するのが一般的だったため、卒業アルバムの写真にもボレロの襟のデザインや裾のカーブ等に若干の違いがあった。1956 年頃から業者が採寸して制作を請け負うようになり、時とともに襟なしの統一した形となっていった。足元はまだ下駄の生徒もいたが、徐々に革靴となっていった。



1953 年の修学旅行と 3 代目の制服

●生徒会活動

戦前は校友会という名称で活動が行われていた生徒会活動であるが、体育祭、学園祭等の行事の実施、校内風紀問題への取り組み、通学団（1948 年）、通学班活動（1950 年）等も生徒会活動の一環であった。この時期、通学班会議は毎月のように実施されていた。

毎年 6 月に生徒会決算予算に関する評議委員会が開催され、総務、体育、衛生、図書、展示会、体育祭、印刷、クラブ費に対して予算配分されている。

1953（昭和 28）年、戦災による沖縄学校建設資金として、生徒会費より 1,000 円を送ることに決定したという記事がある。

このように活発な生徒会活動と思われる一方で、創立 50 周年を目前にした 1959 年 1 月には生徒会自らがそのあり方を反省している。『大成時報』第 6 号の論説によると、生徒会の現状は、行事のない時期は長過ぎる「冬眠状態」で、「自己批判とともに、欠点を是正する努力と、解決方法を発見することが要務」としている。また、一般生徒の活動の低調さも嘆き、そのために「体育祭も学園祭も盛り上がりに欠ける」と分析し、「伸ばそう！私達の力を」と、全生徒に呼びかけている。

また、1959 年 6 月には福島県の若松女子高校の生徒会役員 6 名が来校し、本校の生徒会と懇談している。生徒会役員選挙、組織、学校新聞、予算配分、生徒会室等について、活発な情報交換がなされた。

●運動部の活躍

バレーボール部は継続して活躍し続けており、1956（昭和 31）、1957 年にも県代表となった。1958、1959 年は県大会決勝で下妻二高に惜しくも敗れている。関東大会では、2 回戦で敗退した。

バスケットボール部は 1953 年に新しいコーチを迎えて、往年の全盛時代を夢見て再出発している。

寺田保三郎先生

1957(昭和32)年の6月、本校バレー部指導者寺田保三郎先生が公式戦中に突然倒れ、間もなく逝去された。本校が埼玉県久喜高校と対戦中の出来事であった。1939年5月に水海道高女より本校に移って以来18年間、本校バレー部を県下最強チームに育て上げたばかりでなく、本県高校バレー部発展の土台を築き上げた偉大な先生であり、本当に残念なことであった。雨の日も風の日もコートに立たない日ではなく、家族といふより生徒といふ時間のほうが長かったという。熱心な指導で部員たちから「お父ちゃん」と親しまれた。1953年に国体聖火が水戸を通過する際は、寺田先生が聖火ランナーの先導を務めている。



寺田保三郎先生



寺田先生の学校葬

卓球部は、1959年4月に土浦二高にて行われた第7回県下アームストロング杯争奪卓球選手権大会に参加し、3年生の関さんが女子の部で3位に入賞した。この年の部員は45名で、試験をパスした者のみが入部を許されている。

古参の部に加え、社会が安定するにつれて様々な部が新設されていった。1952年にはソフトボ



ダンス部の練習



ソフトボール部の練習風景

ル部が誕生し、80名以上の志願者がいたという。グラウンドをバレー部、バスケットボール部と分け合いながら懸命に練習をし、1953年には北関東高校ソフトボール大会に出場したが、下館二高に13-0で敗れている。その年の常磐女子高校との練習試合において、本校チームの打者のバットがウェイティングサークルの本校生に当たり負傷させ、それまで校内のガラスを割ったりして危険性が指摘されていたために、残念ながらこれを機に廃部となってしまった。(顧問の小沢栄弘元教頭先生が当時を懐かしみ、ソフトボール部の写真を数点ご貸与くださいました。)

1953年にはダンス部が発足し、行事の際には優美なダンスを披露して観客を魅了した。

1958年に鉄骨の体育館が建設されると運動部に参加する生徒が増加し、部の新設も行われた。この年体操部が誕生し80名余もの生徒が入部した。「マットワークを一通りやるだけでも1時間半かかる」ほどの混雑ぶりだった(『大成時報』第5号)。翌年の国体予選県大会では、参加19校中総合5位になっている。「水戸市内で平行棒を持っている学校は1、2校しかなく、器械体操の生徒は張り切って練習に励んでいる。」(『大成時

報』第8号)

翌1959年にはバドミントン部が発足し、その年に県大会に優勝しインターハイに出場した。こうして、運動部の活動も多彩となり、ますます盛んになっていった。

●文化部の活躍

文化部ではこれまで、音楽部、文芸部、新聞部、JRC、珠算部、演劇部、書道部、英語部、調理部などが活発に活動してきている。

1953（昭和28）年9月以降は休刊となっていた『大成時報』が1958年に新聞部が復活したことにより復刊し、第5号を発刊した。記事の内容は、生徒会役員の紹介、家庭クラブ役員の紹介、私塾時代の最初の卒業生町田ふくさんの復刊への祝辞、クラブの紹介、学園内ニュース、文芸作品の寄稿文等であった。新聞部はこの第5号発行後に座談会を実施し、部員8名、顧問に生徒会役員も交え、より充実した紙面作りのための研究を行っている。これ以降、しばらくの期間、新聞部は、年に2、3回の学園新聞『大成時報』を出し続けている。

奉仕活動を主に行うJRCは1959年、九州地方の水害に対して全校生徒に訴え募金箱を設けて募金活動を行った。善意の現金4,266円、学用品111点、衣類110点、日用品45点は、NHKたすけあい運動を通して災害地に送られた。また、約500名が集まる日本赤十字社茨城県支部の講習会が本校の新築体育館で実施された際にも、尽力し



校庭で行われた演劇部発表会



珠算部

た記録がある。

演劇部は第一校舎で机を並べ臨時の舞台を作つて毎年発表を行つていたが、1958年の体育館の完成により卒業記念の豪華な緞帳を

完備した舞台ができたので、音楽部、ダンス部などとともに毎年盛大なクラブ発表会を行うようになった。「源氏物語」や「修禪寺物語」等の名作を中心に発表していた。

音楽部は茨城県合唱祭、NHKラジオ唱和コンクール等の大舞台に向けて、練習を重ねている。1959年に毎日賞音楽コンクールで3位に入賞した。

文芸部は、文芸作品の制作活動のほか、文学作品の研究、水戸八景の碑に赴いての拓本作り、万葉集にゆかりの植物の展示会、先生による講演会等、意欲的に活動した。

珠算部は1959年頃には部員数が70名にも及んだ。就職試験等で必須とされることもあり、講習を希望する生徒が増えていた。毎日放課後において綿引朝香先生の熱心な指導と生徒の努力で、珠算検定3・4級に合格する生徒が激増した。

●生徒たちの様々な活動や表彰

1953（昭和28）年4月17日の『朝日新聞』には、本校の新入生が中学時代の貯金を水戸刑務所に送ったという記事が掲載されている。1年生の菅江さんは「私は今年中学を卒業し水戸市大成女子高に入学することができました。一生懸命勉強します。刑務所に収容されている人達も生まれながらの悪人はおりません。今ではきっと後悔し更生を誓っているでしょう。中学時代に貯金したわずかなお金ですが何かのお役に立ててください」と結んである。

同年9月10日発行の『大成時報』第3号には、

6月7日に社団法人日本歯科医師会が実施する口腔衛生強調週間において、本校から「きれいな健全な歯の持ち主として」高校3年大島さん、中学3年横山さんが表彰された、とある。「美しい歯の持ち主は必ず健康です。それ故外のだれよりも『美人』といはなければなりません。私たちもつとめて歯の衛生に心掛けようではありませんか」と、女子校らしくまとめられている。

1955年12月18日の『いはらき新聞』には、「師走の学園に明るい話題 被災の友へ全校で贈り物」という記事が掲載されている。12月14日未明の火災で家屋納屋等が全焼して学校に来られなくなってしまった生徒のために、同級生たちがホームルームの時間に呼びかけ、家庭科の3年生3クラスが一人20円の寄付を出し合い、真綿や布を購入し、家庭科の有志10名で布団を作り上げた。また、それを聞いた生徒会長たちも協力し全校生徒1,200名に「友情募金」を呼びかけたところ、瞬く間に7,000円が集まつたので、12月16日に生徒会長、同級生代表の久賀谷さん、校長先生、担任の井上幸之介先生の4名で、布団、生徒見舞金に加えて学校、職員見舞金を贈った。ご家族らは大変感激し、涙を流したと書かれている。

1957年12月29日には、JRC1年生の車田さんら70名の生徒たちが水戸駅の清掃奉仕活動を行っている。朝9時にめいめいが竹箒やちりとり持参で集合し、ホームから駅前広場に至るまで木枯らしに散り放題のゴミや木の葉を掃き、汚い看板のビラはがしまで行い、たっぷり1日がかりで活動を行った。夕方には見違えるようきれいになつた県都の玄関に、駅長さんや一般乗客も喜んだという。この活動は、「1958年こそ一人ひとりが公衆衛生を守りましょうとの無言の教訓となった」と、『毎日新聞』に書かれている。

1958年6月、衛生統計調査の成績が極めて優秀として、民政会館にて表彰を受けている。

同年9月1日には、3年生の5名（川崎さん、



被災の友へ（1955年12月18日『いはらき新聞』）

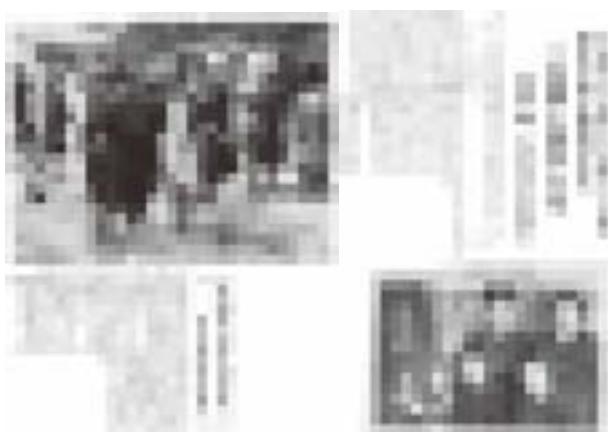
関さん、大津さん、石井さん、江幡さん）が夏休み中に実社会経験を積むためにアルバイトをして得た俸給を集め、学校に美術教材のビーナスの石膏像を寄贈した。これに感激した額賀修校長先生は、

『大成時報』第5号の中で、お礼を述べてい

る。「酷暑の中を一日中立ち続けて得た人生初めての貴重なお金を出し合い、学校に品物を送るなどとは、なかなかできないことです。学校も体育館の建築等で教材の購入等に手のまわらぬことを考えてくださったものと思います。誠に得た贈り物です。皆さんの気持ちを活かし十分に利用したい。」

1959年1月には2年生の会沢さんの俳句が、『朝日新聞』の「茨城俳句新年雑詠」に選ばれ、掲載された。「工場の煙も見えず お正月」選者は本校の武石佐海先生であった。

同年3月の『いはらき新聞』には「花と少女とお巡りさん」という見出しで、泉町交番に2年間も花を飾り続けてきた本校生3名が卒業の挨拶に交番を訪れ、お巡りさんたちとなごやかな時を過



JRCの奉仕活動（1957年12月30日『毎日新聞』） 交番に花（1959年3月『いはらき新聞』）

お化粧の指導

卒業年度生対象のお化粧関連の記録は、さかのぼると1934（昭和9）年3月の卒業生が資生堂ドルックスの化粧品を卒業記念として配布されたとある。

『大成時報』第6号によると、講習会は資生堂主催で1959年1月20日に「台所の能率化、洗濯の仕方、お化粧の仕方」というテーマで、本校体育館にて実施された。「例年通り」という記述があり、毎年恒例だったことがわかる。1961年の実施にあたっては『産経新聞』の記事になっている。



お化粧の講習会

ごしたという記事が掲載された。

●進路状況

1952（昭和27）年7月に、中3・高3生徒対象に夏期講習会を実施している。この年度の卒業生の進路状況は、上級校進学者については、茨城大学5名をはじめとして、女子栄養大学、東京女子体育大学、武蔵野音楽学校、その他短期大学、看護学院等に進学している。就職者は、農林省、茨城県庁、土浦市役場、水戸専売局、常陽銀行等が記録されている。年々増える上級校進学希望者の指導を充実させるために、前年度上級校進学者父兄との懇談会を開き、課外指導その他について熱心な討議がなされている。

1958年10月発刊の『大成時報』第5号には、進路指導関連の夏期講習会実施の記事が出ていた。就職希望者対象には、7月23日から8月5日まで職業指導講習が行われ、講師は水戸公共職業安定所所長、望月学園園長、富士銀行水戸支店長、日産観光バス専務理事、商工会議所事務局長等であった。また進学希望者には、7月23日から31日と8月21日から28日までの計2週間、補習指導があり、2年生には英数国理、3年生には英数国理（化学、生物）社を開講した。生徒は酷暑の中を一生懸命補習に努めて効果をあげたと

ある。

1959年1月15日時点では、64名が就職を決めている。主な就職先は、常陽銀行、常磐相互銀行、電電公社、日本紡績、東洋紡績、伊勢丹、西武、志満津、伊勢甚、建設省土木出張所、日立工機、石塚観光、日立製作所等であった。

1959年夏休みには、3年生対象の職業指導講習、全学年対象の学力補習が実施されている。この年度は、大学進学者63名、就職者285名であった。

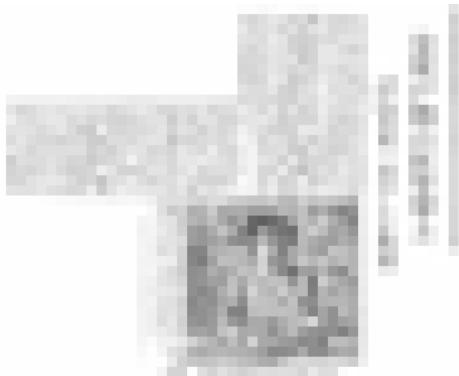
この頃は、卒業を控えた3年生のために様々な講習会が開かれている。

1960年2月8日には水戸税務署主催の「租税教室」が開かれ、税務署の課長、係長より所得税や法人税についての説明がなされた。その際、国税庁より講本『租税教室』が配布された。

そのほかに、一般常識を高めるため年5回くらい著名人を招き課外講座を実施しており、1959年の第1回目は太田二高校長の山野先生による「欧米を巡りて」で、国民性、風俗、将来の移民等の内容で多大な感銘を与えたという。

●卒業生の動向

1959（昭和34）年1月に、大成高等女学校を1942年に卒業した安達一枝さんが、本校初の医学博士となつた。医師、歯科医師の卒業生はたく



安達さんの医学博士取得を紹介する記事（1959年4月30日『いはらき新聞』）

さんいるが、学位を取得した卒業生はこの時が初めてであり、新聞部員と額賀修校長が、インタービューのために埼玉県大宮鉄道病院を訪問している。安達さんは、本校在学中は4年間無欠を通し、バスケットボール部に所属しながら医大を目指した努力家であった。同年4月30日には本校講堂において博士祝賀式を盛大に挙行した。その後、同窓会活動にも多大なご協力をいただきしており、本学園創立100周年記念事業委員会の委員長でもあった。

また、大成女子中学校出身の若菜さんは、1959年時点で司法修習生として裁判官になるために研修中で、『大成時報』第6号に手記を寄せている。「一週間のうち5日は、もとの37部隊の兵営まで桜並木の下を通り、お友達とお互いに、将来の夢と希望を語り合ったものでした。人間各自が、各自その置かれた場にあって、少しでも世の中の人のためになる様に一生の目標をたてる、この夢は、どんなに私達を勇気づけ、人生を甲斐のある、楽しいものにしてくれることでしょう。（中略）あの桜並木を思い出すたびに考えるのです。」

●同窓会の開催

1958（昭和33）年8月には、同窓会が2件開催されたと『大成時報』第5号に記録がある。15日には1956年家庭科卒の三十余名が本校図書館に集い、卒業後の各自の生活を報告し合った。本

校からは校長先生と井上先生が出席した。また、24日に大成高等女学校第1回生（1933年卒）の同窓会が午前11時より駅前「偕楽」で開かれた。会員14名が集い、本校からも校長先生が出席し、25年前の昔話に花が咲き、午後5時に閉会し、その後一同揃って額賀キヨ名誉校長の病床を見舞った。

1959年1月3日には、1958年卒業生3クラスが学校にて同窓会を行い、それぞれが元担任のもとに集い、卒業後の様子を伝え合ったり、思い出話に花を咲かせた。



高等女学校第1回卒業生の同窓会（『大成時報』第5号）

●教員研修の充実

本校ではこれまで、公開授業とその後の研究協議会の実施、茨城大学教授を講師として迎えた研修会等、様々な学習指導研究会が盛んに実施され、教員の指導力向上のための努力がなされてきた。

1950年代後半には、本校の教育内容をいっそう充実させるため、教員研修の新たな試みがなされた。1959（昭和34）年11月、私学研修福祉会が主催する全国私学研究集会東京大会に全職員が参加し、各教科に分かれて研修を行った。これまでも県内外の研究会に参加し、全国各地の優良校や実験校などの視察を続けてきたが、全職員の同時参加は初めてのことで、各分野で研修を積み意見交換を行い、有意義な1日となった。この研修を生かし、学園外の動向にも目を向けながら、魅

力ある私学であり続けるために学習指導研修会を行うこととなった。

■中学高校連絡会

1959（昭和 34）年 1 月、出身中学校の恩師に本校の授業を公開し、高校における勉強ぶりを見ていただき、さらにその後に本校生と出身中学校の恩師の懇談を行う中学高校連絡会が開かれている。これは戦前においては「小学校連絡懇談会」として実施されていた。これに先立ち、前年末に本校教員があらかじめ中学校の先生たちと生徒個別の種々の問題について話し合う機会があったため、盛会となった。その後もこの会は毎年実施されている。

■校舎の増設

この頃の日本は、朝鮮戦争による特需景気により経済が第二次大戦前並みの水準にまで回復しつつあった。

本校も好景気の中で設備の充実を目指した時期であり、同時に、出生率の増加に伴い生徒数が急増する時期で、校舎増設が必要になってきた。

1954（昭和 29）年 3 月に図書館（木造平屋建 20 坪、その後音楽室に変更した）が完成し、4 月には調理実習室のユニットキッチン・ガスの設備が完成した。また、11 月には第五校舎（木造 270 坪）が新築された。戦後約 9 年間で相次いで進められた 5 つの木造校舎の建設が、これにより完成し、学園は戦災前にも見られなかった立派な姿に復興した。



1958 年竣工の体育館

しかし、戦後初期の建物は廃材を利用したものであり、学習の場として不便なものもあった。行事のたびに、鉄筋の校舎があれば、独立した体育館があれ

ば、と学園関係者は切望した。

こうした願いの中で、1956 年 9 月、鉄筋 3 階建の本館を新築した。図書館を含む建物であった。さらに翌 1957 年 11 月に第四校舎が拡張されて、理科実験室のある 4 階建の校舎が完成した。そして、1958 年 11 月には待望の軽量鉄骨の体育館が落成した。1 階には 140 坪の競技室にバレーボール 1 面、バドミントンコート 2 面が設置され、中 2 階には観覧室、映写室が、2 階には 38.9 坪のギャラリー、舞台には演劇等にも対応したフットライトスポットを設け、地下室には椅子置き場、化粧室が配置された。これは講堂としての使用にも耐え得る電器設備を備え、同年度の卒業生から贈呈された綾帳、在校生父兄からの寄付による椅子も完備し、翌年の創立 50 周年を迎えるにふさわしい施設となった。11 月 17 日には落成したての体育館でクラブ発表会が開かれ、演劇クラブは「若い炎」と「虫めずる姫君」を、ダンスクラブは「民謡磯節」と「乙女の祈り」ほかを、体操クラブは高校女子徒手体操規定種目等を演じた。

同時期に、木造モルタル 2 階建の礼法室・音楽室も新築された。この校舎は 1 階が音楽室、楽器練習室 2、器具置場 1 からなり、2 階は礼法室（和室 2、洋室 1、玄関 1）が設置された。1959 年 6 月 4 日にはグランドピアノが搬入され、新しい音楽室に華を添えた。

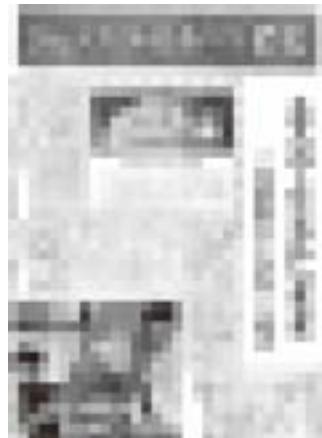
こうして学園は創立 50 周年を契機に、木造校舎時代から鉄筋校舎時代への転換期を迎えたのである。

■教員の活動

1958（昭和 33）年に生物担当の川上先生が、教育委員会主催の発明展覧会で毎日賞を受賞した。ポリエステル系の樹脂を使って魚の標本を作成する研究で、簡単に持ち運びもできる利便性の優れた標本で、さらに安価にできる方法を研究中ということであった。この研究は、翌 1959 年東京・

三越における全国発明発見展覧会で、多くの出品作品の中で佳作に入選した。

世界史担当の石原先生が文学博士となつた。論文は「日明交渉史の新研究」であった。



川上先生の研究成果を伝える記事
(1958年7月15日『いはらき新聞』)

●その他出来事

1959（昭和34）年7月発行の『大成時報』第7号によると、映画会についての記述がある。これによると映画会は年5回開催の予定で、4月には新入生歓迎映画会として「どろんこ天国」を、6月には「富士山」を上映とある。

1959年、本校では自動車を購入し、様々な用途に活用している。中学校訪問、家庭訪問、お葬式、お見舞い、またある時は、「Hさん（生徒）が盲腸になり、家が山奥であったために学校の車で病院に連れて行き無事に手術を済ませ、家族の人達も大変喜んでいたという美談もあります。」（『大成時報』第6号より）この時点で本校で運転免許を持っているのは、「小川先生、山本さん、3年6組の坂場です」とある。

●創立50周年記念事業と施設の拡張

1959（昭和34）年11月4日創立50周年の式典が、前年竣工の本校講堂（体育館）にて挙行された。明治期と大正期の卒業生、町田ふくさんと折本美つさんから生徒時代の思い出話があり、小神野三男四先生や谷先生からもお話があり、1,800名にも及ぶ全生徒で母校の昔をしのんだ。

また、50周年記念事業として、翌1960年より新校舎の建設に着手し、1961年3月に地上5階、地下1階の鉄筋コンクリート校舎創立50周年記

念館が完成した。視聴覚室を含み、タイル貼りのモダンな建物に完成した。

創立50周年の校長挨拶

創立50周年のお祝いを学校役員教職員生徒と共に内輪ではありましたが挙行できましたことは誠に喜びに耐えません。

現在鉄筋校舎2棟、木造5棟、体育館、礼法室等大部分の施設が完成し、教職員66名、卒業生1万3千47名、生徒千8百余名の大学園となりました。それを目の当たりに見るに創立者が豊富な理想を描きながら事実は生徒13名、普通住宅の8戸、6戸を教室として出発したみすぼらしい創立当時を思い出すとき、つくづく創立と守成とは一朝一夕の苦労ではなかったと万感胸に迫るものがあります。

この50年の歩みはもちろん平坦な順調な道ではありませんでした。幾多の苦難もありまた歓喜もあり険しい道がありました。思い出すと大正5年10月の暴風は明日から使用するという新校舎を一瞬にして吹き倒し無惨な残骸を見たとき手も足も出ない有様でした。その工事の主任の大工が腰を抜かし這って歩いた… 今思えば滑稽な姿が目に残っております。また昭和2年の新築校舎の際は建築費の支払いができず処々を金策したが思うようにならずその延期方を交渉し学校と建築業者との間を6、7回も往復してやっと解決したら晨をつげる元旦の鶏鳴を聞いて我に帰ったこともあります。中でも戦災により全部を灰にし荒涼



創立50周年記念館



学園創立 50 周年記念式典

と残煙を見た時は再起不可能かと悲痛の心情でした。一苦一難を経るごとに僅かずつ前進し今日を迎えるに至ったのであります。これ偏に関係各位のご指導とご父兄の熱烈な母校愛、そして教職員生徒の一糸乱れぬ協力努力の賜で誠に感激にたえないものがあります。

この 50 年の喜びを単に過去を回顧してお祝いするに終わらせるだけではその意義も極めて薄く、これを契機として次の時代に力強く飛躍致したいと思います。

尚来年は 50 周年記念館として地下 1 階地上 4 階の特別教室を建設し、かくて全校舎の完了と併せて 51 周年記念式を盛大に挙行致す予定です。

最後に関係各位の絶大なご指導とご協力を切にお願い致します。

III 学園の拡張

1960(昭和35)年～1969年

● 当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1960 年代は、岩戸景気のさなかに始まり、オリンピック景気からいざなぎ景気と続く高度経済成長期で、国際競争力の強化・拡大を目指して企業の大型合併が多数行われたり、旧西ドイツを抜いてアメリカに次ぐ GNP 世界第 2 位の経済大国

に躍り出て「エコノミック・アニマル」と揶揄された頃である。東名高速道路の全面開通やアポロ 11 号による人類初の月面有人着陸など、世界中が経済発展への道を走り続ける時代であった。

戦後の一時期においては、体験的な学習を重視しそれを中心に教育活動全般を考えていこうという問題解決型学習やコア・カリキュラムといわれる教育理念(考え方)があったが、この頃になると、学問的な成果に基づいた知識が必要だという考え方が多く主張されるようになった。やがてそれは知識詰め込み型の教育になり、ペーパーテストで知識を問う受験戦争の過熱につながっていった。

小中学校の学習指導要領は 1958 (昭和 33) 年に告示され、同年より道徳の時間が設置された。高等学校においては 1960 年 10 月に学習指導要領が告示され、1963 年度より改訂実施された。道徳は導入されず、外国語が必修となったほか、必修の科目数が大幅に増加した。

● 県内私学の動向

この時期は中学卒業者の人数変動が大きく、特に私立学校が対応を余儀なくされ不安定な経営を強いられている。まず、1960 (昭和 35) 年には県立高募集定員が 250 名増員したが、翌 1961 年の県内中学卒業者は終戦の年 1945 年生まれで前年よりも 1 万人少なく、その少ない生徒を県内私立高等学校 10 校で分け合う形となる。そこで、本校校長が会長を務める茨城県私学協会では、県立高が定員を超えて受け入れていた「もぐり入学」の廃絶を県教育委員会に要求している。一方 1963 年より 1968 年は戦後ベビーブームにより生徒数が激増する。学級増に伴い施設の拡充や教員の増員も必要になる。これらを可能にする資金を確保するため、私学協会では県の助成を受けて社団法人私学振興会を結成し対応することとした。こうして、少しづつ県内私学の教育環境整備が進められていった。

● 本校の教育

1960（昭和35）年には募集人員を普通科450名、家庭科100名の計550名とした。だが、翌1961年の中学卒業者は激減し、430名の入学にとどまった。一方、1963年には募集人員を普通科650名、家政科（この年より家庭科を家政科に名称変更）50名に、1966年には普通科650名、家政科100名に変更した。1963年から1968年は戦後ベーブームにより生徒数が激増し、1962年から10年間は毎年入学者が900名を前後していた。

この時期の本校は、校地校舎等の施設および家庭科関連設備、理科実験設備、図書館蔵書の充実等、教育環境が整っていった。そして創立時から女子の地位向上を目指してきた本校ならではの家庭科関係教科の指導を中心としながら、同時に、高等女学校時代の教育を受け継いだ進路指導も充実したものとなっていました。

具体的には、家庭クラブ主催の行事が数多く取り入れられ、地域を良くするために活発な活動を続け、温かい人間性と豊かな社会性養成に努めていた。また、入学した第1学年1学期に学習習慣をつけさせ、基礎学力を向上させることを重視し、適性に応じた進路指導を行うために能研テスト（適性）の受験を勧め、クレペリン検査の実施、課外の計画実施を行った。進学希望者には第2学年より進学クラスを編成しその目的達成に努めた。就職希望者には商業珠算等を選択させ、その指導に万全を期すとともに職業指導専任教員を置いて、就職斡旋に努力している。

1968年度にはこれまでの2学期制を3学期制に変更し、学力考査の機会を増やし指導の徹底を図ることとした。また、創立記念日を5月13日に正式決定した。

● 道徳教育の強化

教科「道徳」は、GHQが1945（昭和20）年12月31日に出した覚書「修身・日本歴史及び地

理の授業停止と教科書回収に関する覚書（三教科停止指令）」により、実施を停止されていた。このため日本における道徳教育は、特別活動の一部としてホームルームにて担任がそれぞれの判断で実施してきていた（小中学校においては、1958年に学習指導要領にて道徳の実施が規定されている）。これに加えて本校では、1953年より加盟した「家庭クラブ」活動が、道徳・奉仕の精神や作法という日本の良き伝統を守る役割を担ってきたようと思われる。が、戦後しばらくすると、PTAより「戦後の子は野放しにされすぎている」という声とともに、新しい道徳教育への要望が寄せられるようになった。生活指導会議を設け校内で検討をし、4月よりテストケースとして導入した。その結果、良い成果が得られることが認められ、これを積極的に進めるため、1960年より1年生において必修科目と位置づけた。テキストに『人格の建設』（日本学校教育研究会編）を採用し、個人としてのあり方を考える、倫理への理解を深める、社会生活への準備を促す、という3つの項目を柱として授業が進められた。なお、2・3年生はホームルームの中で実施した。この道徳教育の必修化は、県下初の試みとして注目された。

その後本校の道徳教育は、「現代女性教養講座」や「ライフスキル」として、時代に合った形で受け継がれ、本校生徒の良識育成の伝統は引き続き重要視されている。

なお、2009（平成21）年1月現在、茨城県は県立高校1年次での教科「道徳」を必修化している唯一の自治体となっている。

● 家庭クラブ

1960年代から1970年代にはホームプロジェクトの研究内容が向上し、中央地区の発表会にも参加し好成績を収めるようになった。夏休み中に開催される全国高等学校家庭クラブ研究大会には、会長、副会長、教員が必ず参加し、各県の代表に

よる発表を見学し、その後校内で報告会を実施した。このような活発な活動のためには、全校生徒が家庭クラブ活動を十分に理解する必要があるが、このためにまず家庭クラブが新入生歓迎会を主催し、前年度のホームプロジェクトのクラスごとの作品発表をして見本を示している。また、大成女子高等学校家庭クラブ幹部研修会を茨城女子短大内の生活センター（後述）にて実施し、各クラスの家庭クラブ委員2名が参加し、様々な研修を行っている。外部講師も招いており、1968（昭和43）年には徳川幹子先生を迎えて「しあわせのために」と題する講演を聴き、一同深い感銘を受けた。

学園祭には家庭クラブの部屋を設けて活動の状況を紹介し、子供の部屋の開設、食堂の運営、老人の招待など多方面の活動を行った。

年明けには、3年生の希望者対象にテーブルマナー講習会を企画し、東京・お茶の水の学生会館に出向いて、大人としてのマナー習得にも努めている。

また、1958年より卒業記念として母校にひな人形を購入し寄贈しようという計画が始まり、下級生に受け継がれて5年がかりで1962年に完成了。当時の生徒主導によるひな人形購入計画は、新聞で毎年経過が紹介されるなど、地域社会に明るい話題を提供した。以後、現在に至るまで、先輩たちが残したひな人形と母校愛を伝える学校ひなまつりは、恒例の行事となっている。

1969年には、学園祭の売り上げ等でこれまでに蓄積された資金により大型バス「家庭クラブ号」を学校に寄贈し、生活センターへの往復

新聞記事となった本校のひなまつり
(1958年2月23日『毎日新聞』)

や各部の活動などに活用されることとなった。

●行事について

1950年代までは体育祭は毎年実施されていたが、1960年代に入ると変更があり、体育祭と学園祭が、若干の変則はあるもののほぼ1年おきに実施されている。

1960（昭和35）年は校舎建築のために、体育祭も学園祭も実施しなかったが、音楽会を実施し、一般生徒の演奏、音楽クラブの合唱に加え、卒業生で武蔵野音楽大学在学中の栗橋さんと友人の加藤さん、水戸二高の村田先生がゲストとして出演し、見事な美技を披露した。

学園祭は1962、1964、1967、1969年に実施された。1962年は、校内ののみの行事として一般公開はしなかった。NHKの黒沢さんがピアノ演奏会をしている。一般公開の際は相変わらずの盛況ぶりで、入場者数は1964年4,500名、1967年2,700名、1969年3,000名であった。各クラブ等の発表も毎回新たな試みがなされ、生徒の意欲は素晴らしい。数学部の「紙とエンピツのささやき」と題した難問早解き競争、まだクラブに昇格していない社会科の勝田市（現在のひたちなか市）の遺跡発掘採取土器の展示やインドビハール州飢餓の報告、生物部の空気中の細菌量の研究、JRCの点字の実演や「鶴を折って施設に贈ろう」などであった。これらは、毎回好評の家庭クラブの食堂・売店や、演劇、コーラス、ダンスの発表に匹敵するものであった。



学園祭の食堂

敵する感激と賞賛の言葉をいただいた。また、特に1969年の学園祭は、学園創立60周年記念学園祭で、「60年の伝統を顧みさらに前進を」という統一テーマで盛大に実施された。校内にとどまらず、2日目には五軒小学校を第二会場として「音楽と演劇」発表会が催された。演劇クラブ、ダンスクラブ、バトンクラブ、コーラスクラブ、ブラスバンド部などが日頃の練習の成果を発表し、姉妹校茨城女子短期大学のマンドリンクラブも参加し、熱心な演奏を披露した。

体育祭は1961、1963、1965、1966、1968年に実施し、警察学校にて、のちには県立堀原運動公園等で盛大に開催された。仮装行列、体育部の模範演技等も加え、華やかな祭典となった。1963年の閉会式ではその年新設したブラスバンド部が国旗降納の際に国歌を、引き続き「螢の光」を演奏し、参加者に大きな感動を与えていた。1965年には広い県立堀原運動公園で実施し、スタンドには父兄や一般の観覧席を設け、多数の観衆が迫力ある見事な演技に見入ったという。1968年の実施はメキシコオリンピック開会式当日でもあり、生徒たちもオリンピック選手さながらの入場行進を行い、多彩な競技に参加し、また声援を送った。

1963年、待望の学校を挙げてのクラスマッチが再開された。校技であるバレーボールを学年単位で競い、決勝戦は学年の対抗戦であった。この



この頃の体育祭

年は、5月20日から18日間にわたって熱戦が繰り広げられた。以後、毎年5月に実施されるようになった。

旅行・遠足についてこの時期は、1年生は水郷遠足、2年生は勿来五浦、大谷石採掘所、奥久慈等の遠足、3年生は関西旅行が実施されている。『大成高新聞』には、遠足の感想や座談会が掲載されており、食べてばかりの1日だったとか、乗り物に乗るだけの1日だったとか、バスガイドさんが本校の卒業生で一緒に校歌を歌ったとか、新しいクラスの友人と仲良くなるにはいいきっかけになったなど、様々な感想が書かれている。関西旅行については、後輩のためにより良い旅行にするため座談会を開き、生徒たちなりに旅程や宿泊施設の内容を検討し、まとめを学校新聞に掲載している。



この頃の修学旅行

● NHK テレビ出演

1968（昭和43）年6月2日日曜日の朝のテレビ番組「十代とともに」に、本校3年生の栗原さん、板倉さん、山崎さん、木砂さんの4名が学校を代表して出演した。『大成学園新聞』第32号に詳細が書かれている。「テーマは汽車通学で、水戸一高生4名、水戸商業生4名と共に、NHKのスタジオで大いに意見を述べ合った。この朝テレビに精神を集中して見ている私達には、堂々本校の4名の仲間が、臆せず、たじろがず、それぞれの意見を述べ、汽車通の長所短所等にいたるまでいろんな角度から意見を交わし、考えを述べたこ



『大成学園新聞』第32号に掲載されたNHKに出演する生徒たち

とは、まことに喜びであり感激でもあった。これからも、私達は大いに自信を持ち、ファイトを燃やして、内外諸般のことわたり、しっかりした考えを身につけ意見を述べていくようにしたい。先生はじめ、本校生の大多数が見た、よろこびの番組であった。」

■水泳訓練

1967（昭和42）年7月には、生徒の希望もあり、県立スポーツセンターポールにて水泳訓練を実施した。施設の関係で3年生のみの短期間の実施であったが、効果が十分にあがったという。翌1968年6月末には、各学年2日ずつの全校生徒対象の水泳訓練が実施された。参加生徒の意気込みはものすごく、元気な歓声を上げながら楽しく事故もなく日程を終了している。翌1969年には7月中旬に同様に実施した。



水泳訓練

■『なでしこ』復刊

1967（昭和42）年3月、校誌『なでしこ』が

復刊した。創立以来校友会誌として、学校の運営、行事、学芸、研究等多方面の記録を収録した貴重な資料であり、華麗な原色の表紙は他校生徒の羨望の的であったという。巻頭言で、校長が「年1回の発行であるが、皆さん方のご協力により、内容の充実した雑誌にすると同時に、長く継続刊行されんことを切に願うものである」と書いている。それから2009（平成21）年現在も、本校の様子を知る貴重な資料の一つとなっている。



『なでしこ』の復刊

■生徒会活動

生徒会の最大の仕事の一つに予算会議があり、各クラブの代表参加のもとに予算が決定されていた。この頃には、生徒会は役員とホームルーム委員で構成される評議会、生徒の規律の向上を目指す生活委員会（服装班、交通班、規律風儀班）、校内放送や視聴覚資料の管理を行う視聴覚委員会、学習資料センターとしての図書館利用を促す図書委員会、生徒の健康管理を行う衛生委員会、校内美化に努める環境美化委員会、新聞を作成し校内の様子を生徒に伝える新聞委員会からなっており、各委員会が毎月実践目標を決定し月ごとに反省会を開いた。

服装班はアンケートを実施し生徒の希望をまとめ、頭髪に対するリボンの使用等、職員会議にかけてもらうよう働きかけるなどしている。交通班は、泉町四丁目から藤坂町間の交通整理を継続的



生徒会による交通整理

に実施し、それが全校挙げての活動となっていました。その結果、県警の交通講演会開催や泉町四丁目の信号機設置という成果につながった。

また、1964（昭和39）年の東京オリンピック開会式には、生徒代表として生徒会長鬼沢さんが参列して、のちに学校新聞にその様子を寄稿している。1968年には念願の生徒会室が本館2階にでき、さらに活発な生徒会にするために努力している。

●運動部の活躍—金メダリストの輩出—

戦後20年以上が経過した創立60周年頃には、運動部では、バレーボール部、卓球部、ダンス部、体操部、バドミントン部が活躍し、陸上競技部が1963（昭和38）年にしばらく途絶えていた活動を再開した。

バレーボール部は、1960年6月日本で初めての6人制バレーボールの試合に県代表として出場している。9人制では1961年に県大会優勝、徳島インターハイ出場等、相変わらずの活躍をしている。また、この年、東京オリンピック代表候補選手として本校2年の佐々木節子さん、本校卒業生で当時実業団最強チームの大阪鐘紡淀川工場勤務の飯野登久子さんが選ばれている。

卓球部はシングルスにおいて健闘し、1960年には水戸地区大会で準決勝に進み、県一般女子新人戦大会では3位に入賞している。

バドミントン部は1960年8月に久留米市で行われたインターハイに県代表として出場し、1回戦で惜敗したが、11月の新人戦大会では表彰台を本校生だけで独占する快挙を成し遂げている。1962年まで4年連続でインターハイ出場を続けた。

体操部は団体で全国大会出場、平行棒個人で本県1位になるなど、躍進している。

1963年にはバントワーリング部ができ、県大会で優勝するほど力をつけており、東京オリンピックの聖火リレーにも華を添えた。

1965年にはテニス部も部員70名の大所帯として発足し、3年後にはインターハイ出場を果たした。各部員たちが日々練習に励み、それぞれの大会で素晴らしい結果を残すに至っている。

陸上競技部は1964年に800mと円盤投げで関東大会に初出場し、1966年にも関東大会に2名の選手を送った。

この時期の運動部関連の話題の中でも特筆すべきは、県大会優勝の常連校として活躍していた本



東京オリンピック聖火リレーに参加するバトン部とプラスバンド部



オリンピック金メダリスト佐々木節子選手が水戸市の大通りをパレード

校バレーボール部から、オリンピック金メダリストが輩出されたことである。1964年開催の東京オリンピックに出場した本校卒業生の佐々木節子選手は、「東洋の魔女」として女子バレーボール界の頂点に立ち、全校に大きな喜びをもたらしたのである。

●文化部の活動

1960（昭和35）年、美術部は市内高校連合美術展に出品し伊勢甚で展覧会を開催し、水戸観光ポスター展に入選している。

書道部は1960年に関東甲信越書道全国大会に参加し特選となり、また、立正大学全国高校展にも入賞しカップを贈られている。

1963年にはプラスバンド部を新設した。県内初の女子バンドということで話題となり、この年のうちに青少年赤十字のパレードや広告祭等、様々な催事に出演するようになった。翌年には全国学校音楽コンクール地区大会で優勝し、県代表になっている。

ほかに茶道、生花、園芸、数学、理化等の部が新設され、幅広い活動が展開されるようになった。園芸部は1965年卒業生の寄贈による温室や花壇で様々な美しい花を育てている。季節ごとにさつき、ペチュニア、菊等の花を咲かせ、それだけでは飽き足らず、3年もの歳月をかけベコニアの種の掛け合わせに成功している。学園祭では「家庭



当時の書道部の様子

と温室」をテーマに、家庭において自分で種から作り上げて花にする楽しさ、育て上げた花の楽しみ方や飾り方まで説明し、家庭での花作りを理解してもらおうとするなど、植物との多様なかかわり方を提案している。校庭を花で埋めたいと、意欲的に活動していた。

新聞部は1963年7月には途絶えていた『大成時報』を『大成女子高新聞』第21号として復刊し、広木稻太郎先生指導のもと「郷土のプロフィール」として地元の史跡等を紹介するなど新しい試みも取り入れ充実した活動となっている。その後も毎年7月と11月の年2回発行を続けている。茨城女子短期大学発足後の1967年には『大成学園新聞』と改称した。1968年には、水戸工業高校、那珂湊水産高校、水戸第二高校など、他校新聞部が担当の先生とともに本校新聞部を来訪する機会が複数回あり、新聞部同士の交流が盛んに行われた。

JRCは種々の奉仕活動を継続的に実施しており、同時にその名前についての説明と様々な奉仕活動の内容を学校新聞に掲載し、普及活動を頻繁に行っている。

演劇部は毎年秋の発表会に向けて練習を重ね「夕鶴」「イワナガ姫」など、意欲的に演じ続けている。

生物部は1960年の夏休みには3泊4日の尾瀬観察旅行を行い、この貴重な経験を『大成時報』第10号に寄稿している。



茨城県吹奏楽連盟の機関紙に紹介された本校プラスバンド部

文芸部も1960年の夏休みに笠間、鹿島、太田などの古寺を訪ね、同じく『大成時報』第10号に寄稿文を寄せている。また、文芸誌『やまと』を創刊し、創作活動も重視している。

理化部は日頃から身近な疑問から始まる様々な研究を行い、食品の色素について4年間継続して研究し学園祭で発表したり、化粧品や鏡、人造繊維を自作したりと、部員不足に苦しみながらも地道に活動を続けている。

いずれのクラブも、地道に活動してきた成果を、学園祭だけでなく、様々な機会に披露している。

●進路の状況

生徒の卒業後の進路の状況を見ると、この時期、進学、就職とともに次第に増加していくのが顕著な傾向である。卒業生の進学率の推移は、1960（昭和35）年度15.4%、1966年度20.0%、1969年度29.5%で、一方、就職者の推移は、1960年度48.5%、1966年度64.5%、1969年度56.5%である。

このような状況に対処し、進路指導を重点目標とし、生徒の希望、能力、環境などに応じ最も適切な進路を選択させ、その目的を実現できるよう万全の指導体制を整え、鋭意努力を続けている。

夏休みには就職希望者対象に、電話の知識、日常作法、簿記、雇用者との座談会等を熱心に行い就業のための心構えをつくり、大学進学希望者には課外授業を実施し、実績を積み上げてきた。

また、学校新聞にも毎号のように、進路に応じた日常生活の過ごし方、教科学習のキーポイント等、進路指導部からのアドバイス記事や努力の結果希望の進路に進むことができた卒業生からの寄稿文が掲載されている。

●生徒たちの様々な活動や表彰

1961（昭和36）年12月18日の『新しいばらき新聞』に「施設の子と“土曜の天使” 二年間毎週欠かさず」という見出しが、本校JRCの活動



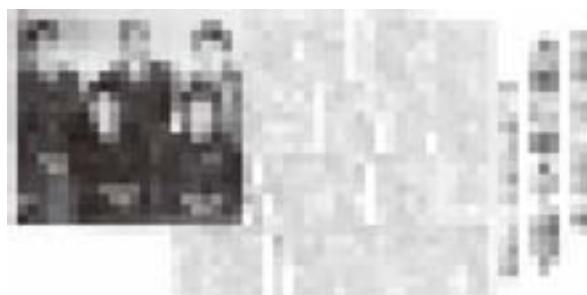
JRC部の施設訪問（1961年12月18日『新しいばらき新聞』）

を紹介している。

1964年3月6日の『いはらき新聞』には、本校生2名が県肢体不自由児協会から表彰された記事が掲載されている。「苦難に耐えて通学し体不自由の二人表彰」という

見出しが、本校3年生中村さん、関さんが「全肢体不自由児の範」として表彰されたことが書かれている。中村さんは2歳の時に電車にひかれて右足を失ったが、明るく前向きな性格で、義足でほかの生徒と何でも同じに行い、3年間無欠席で優秀な成績で卒業式を迎えた。卒業後は身体障害者職業訓練所に入り、機械製図関係の技術を身につける予定という。関さんは生後間もなく足が不自由になり松葉杖で通学した。やはり前向きな性格で在学中にそろばん3級を取得し、就職も地元企業に内定している。

同じ年、1年7組では夏休みにクラス奉仕して得た金額にクラス全員が小遣いを出し合って、「恵まれない人に現金を寄託」という記事がある（日付、新聞社は不明）。1,650円が新聞社に寄託され、それが日赤県支部に送られたという。



表彰を紹介する記事（1964年3月6日『いはらき新聞』）



駅に花を届け続けた本校生たち（1965年2月7日『産経新聞』）

1965年2月の『産経新聞』には、星さんをリーダーとする2年8組の生徒65名が、4月から毎月一人20円を出し合って、月に2回水戸駅に花を届けているという記事が掲載されている。駅長は、この行いに感謝状を贈り、現場の各部署に花を飾り、無事故を誓っているという。

1967年2月8日の『産経新聞』には、「香典の一部を寄付 母を失った岡本さん姉弟 事故防止の施設費に」という見出しが、本校1年岡本さん姉弟が太田地区交通安全協会に現金1万円を寄付している。「おそろしい事故をなくすためにはまず交通事故防止施設を増設してもらうことだ」と姉弟で話し合い、父親からも賛成してもらえたために寄付することになった。同協会ではこの好意に感激し、横断歩道の設置と学童用横断旗の購入費の一部に役立てることにしたという。

1967年12月20日の『読売新聞』には、「女子高生がお手柄」として、本校3年横山さんが鉄物工場の火事をぼやのうちに消し止めたことが掲載されている。水戸市在住の横山さんは、毎朝4時



香典を寄付した本校生徒（1967年2月） ぼやを消し止めた本校生（1967年12月20日『読売新聞』）

過ぎに起きて新聞配達の手伝いをしているが、その途中で工場の柱が燃えていることに気づき、50mほど離れた会社員宅に駆けて行き、家人を起こし、一緒に工場経営者に連絡する一方、みんなでバケツで消火にあたり、消防車が駆けつける前に消し止めた。工場の2階には従業員が住んでおり、工場内部の油等に燃え移る危険もあったため、皆、横山さんの機敏な処置に感謝しているという。

●同窓会なでしこ会の創設

これまで本校の同窓生は、人生の節目に母校を訪ねたり、毎月13日に母校を訪れ額賀キヨ先生を囲んで昔話に花を咲かせたり、毎年11月3日に集い同窓会の日と定めたり、様々な形で同窓会活動を行ってきた。

1957（昭和32）年8月の『毎日新聞』には、「大成の同窓会はなでしこ会という」という記述があり、また、「晴れ着に日本髪の花嫁姿の卒業生が結婚式の当日学校に来るというのも変わった伝統だ」と書かれている。

1962年より後述のとおり、同窓会でも学園創立者ご夫妻の胸像建立に向けての募金活動を始めることとなった。初回卒業生の町田ふくさんと有志のメンバーが中心となり、趣意書の作成、発送を行い、その年の11月には目標に近い募金を集めることができた。その際、古い卒業生に向けた郵便物が多数戻ってきてしまったという。

1964年2月には、同窓会が茨城放送を通じて放送を流している。詳細については不明だが、時



額賀キヨ先生を訪ねる教え子たち



なでしこ会総会

期からみておそらく創立者胸像建立に関する情報を告知したものと思われる。

そうした活動を経ながら時とともに卒業生が増え、1967年当時教頭の 笹島菊次郎先生の提案で、正式な会則等を定めた同窓会を本校に設立するに至った。

同窓会名簿は、1930年に作成されていたが戦火で焼失し、それ以降は整理されていなかったため、60周年を機に再度同窓会名簿を発行することになった。

● その他の出来事

この時期は、水戸市消防本部の指導のもとで年2回、退避訓練が催されている。1964（昭和39）年12月23日に同年度2回目の退避訓練が催された記録が『大成高新聞』第22号にある。火災期にあって退避要領の会得のためということで、整然と行われた。

『大成高新聞』第24号によると、1964年冬、「ハ



退避訓練

ダカの健康法」を説き全国を行脚している「ハダカの王様及川裸観さん」が本校を訪れた。7年前にも来校しており2度目の訪問であった。裸観さんは「全身顔にせよ」と書いたタスキをかけ「薄



及川裸観さん

着は健康の基」と大書きした旗を手にして、ワハハワハハと笑いながら全国を歩き、人生最大の幸福は健康であることを皆に伝えるために健康普及活動を行っていた。東京・日暮里に「ニコニコ会館」を開設し、健康体操の指導、健康相談に一生を捧げたという（1986年没）。

●図書館について

学校新聞には「図書館だより」のコーナーがある。読書好きな先生からの読書の勧め、お薦め図書について、新入荷図書の紹介等が書かれている。1959（昭和34）年には「貸出期間が丸1日なのは短すぎる」という苦情が寄せられていたが、その後大作もどんどん入荷され蔵書数が増えるに従い、貸出期間が延長されるようになっていった。

1967年11月の学校新聞には、「旺文社特選名作セット」の入荷について紹介され、その一部として夏目漱石、森鷗外、井上靖、ドストエフスキイ、シェイクスピア等の名作40冊ほどのタイトルが紹介されている。

●マイクロバスの運行

1964（昭和39）年10月には、20人乗りのマイクロバスが購入され、運動部の選手や家庭クラブの慰問の送迎その他多方面に利用されて、多大の効果をあげた。その後1969年6月に、家庭クラブが学園祭等の売上金で大型バスを購入し、学園に寄贈した。この「家庭クラブ号」の導入により、マイクロバスは廃車となった。



家庭クラブ号

■校地拡張・施設整備

1961（昭和36）年の50周年記念館落成後も、施設の整備が進められた。この頃はいわゆる団塊の世代の高校入学期にあたり、急増する生徒を受け入れるため、さらなる施設拡張が必要になっていた。近隣の土地を順次買収すると同時に、新校舎の建設が進められた。1963年3月に鉄筋コンクリート5階建の第六校舎が竣工した。第一調理室、被服室および普通教室を備えていた。翌1964年3月には本校創立の地の西側に第七校舎が竣工、地下1階、地上4階の鉄筋コンクリートの建物である。また、同年11月には水洗の第5手洗いが新築された。

1970年3月には第九校舎（木造）が竣工した。



この頃の校舎

■中学校招待懇談会

本校生が中学在学中にお世話になった恩師を招待し、本校の活動の様子を知っていただくための

招待会が、引き続き実施されている。その年度により名称が異なっているが、時期は毎年11月頃であった。

1966年12月6日：中学校招待会

1967年11月16日：中学校との懇談会

1968年11月中旬：入試説明会

なお、この時期、「入学案内」のリーフレットが作成されている。2色刷りで、本校の歴史と現状、各科の特色、募集要項、奨学金、教員組織、進学実績、就職実績、クラブ活動等の情報が黒で



当時の入学案内

書かれ、本校の特徴的な施設や、学園祭やクラブ活動の生徒の写真が紫のインクで印刷してある。二つ折り～三つ折りにしたリーフレットの間に、入学願書、成績証明書用紙が挟み込まれて1セットとなっていた。それ以前は、募集人員、募集期間、考查日、連絡先等を記載した「募集要項」が、単独の用紙で、または校誌『なでしこ』の巻末に掲載されていたのみであった。（過去にもこのような「入学案内」があったのかもしれないが、2009年現在で、現存しているものでは1960年入学者用が最古である。）

また、この頃にはすでに大成学園奨学金を設け、学業、人物およびスポーツの技能が優秀で中学校長の推薦する生徒に学費を免除するほか、大学進学者の中で人物、成績共に優秀で学費不足の者に奨学金を支給することにしている。

●教員研修

各教科の研究授業を引き続き行い、各年度初めに発表する学習指導の重点目標を達成するためには、批評会を実施し、授業改善に心がけている。茨城大学や茨城女子短期大学から講師を招き、適切な指導が行われた。また、各教科の教員が茨城県教育研究会に属し、他校と交流しながらより良い学習指導のあり方を研究している。一方、生活指導についても重点目標達成のために、ホームルームを生活指導の重要な場としてクラスごとにホームルーム運営委員を任命し、運営委員生徒とともに、望ましい運営のための研究、研修を行い、ホームルーム公開も継続的に実施している。

●新制服の採用

1961（昭和36）年4月から、戦後採用されたボレロタイプの制服を改め、ステンカラー白ブラウス、ジャンパースカートに背広タイプの上着の濃紺サージの制服を採用した。1980年代まで、制服を自作する家庭もあり、新入生用の制服案内には、ブラウス、

上着、スカートの価格とともに、型紙の製図方法まで図示してある。翌1962年11月には生徒の意見も取り入れ、オーバーの型や色が定められた。



4代目の制服

●学園創立者胸像建立

1965（昭和40）年1月に、本学園創立者の額賀三郎・キヨ先生の胸像が校内に建立され、同月17日には除幕式が3,000名の参列者のもとで盛大に行われた。



学園創立者の胸像建立

これは、1962年3月にキヨ先生が県教育功績者として茨城県から表彰を受けた際、教職員が相談しキヨ先生の胸像を制作し祝いとして贈ったことがきっかけとなり、その年の卒業生一同が三郎先生の胸像基金20万円を寄付し、さらに同窓会でも募金を行い、三郎・キヨ両先生の胸像として建立することとなった。日展評議員小森邦夫氏に制作を委嘱し、創立50周年記念館の西庭に台座を建設し、見事な両先生の胸像が安置され、除幕式挙行に至った。

創立者額賀三郎・キヨ先生の胸像は、現在も当時と同じ牡丹桜の下で、生徒たちを見守り続けている。この牡丹桜は、キヨ先生が1962年に県より教育功績者として表彰されたのと同時期に校内永年勤続者表彰を受けた職員12名が、記念のために校庭に植樹したもので、4月の半ばから末頃に濃いピンクの美しい花を咲かせ、見る者たちを喜ばせている。

●額賀キヨ先生の表彰

額賀キヨ先生は、胸像建立のきっかけとなった県教育功績者表彰より8年前の1954（昭和29）年12月には産業教育功労者として、さらに1965年11月には文部大臣より教育功労者として表彰され、続いて1966年11月には多年にわたりわが国の教育文化に尽くされた功績が認められて、勲



額賀キヨ先生の学校葬

5等に叙せられ、宝冠章を授与された。2年連続で天皇・皇后両陛下よりお言葉を賜り、本学園にとっても大変な栄誉となつた。

その後額賀キヨ先生は元気に過ごしていたが翌1967年の夏頃より体調を崩し、8月1日に近親者や卒業生の方々の手厚い看護のかいもなく、悲しくも逝去した。

額賀キヨ先生は創立以来これまで、本学園においては「女先生」と尊敬を込めて呼ばれていた。教育を通じて女子の地位を高めたいという大望を胸に秘め、学園創立時から自ら教壇に立ち、裁縫や礼法の授業を担当し、また良い先生を探して本学園に招いた。1935年前後には、大妻女子大学創立者の大妻コタカ女史も月1回ほど礼法指導のために本校を訪れていたという。キヨ先生は裁縫・礼法とともに徹底した指導を実践し、厳しい中に温かさを保って生徒たちに接してきた。また、常に人道的で生徒職員に対する配慮が大変緻密だったという。同時に、学校の経営が充実するために、様々な努力を払い続けた。夫の三郎校長亡き後は、名誉校長として、2代目校長を支え続けた。

■額賀校長・副校长夫妻の海外視察

1964（昭和39）年7月には、額賀修校長が私立中学高等学校連合会主催のアメリカ・カナダ教育視察団に副団長として参加し、両国の教育事情について学んできた。翌1965年には額賀あや子副校长が学園の宗武彦理事とともに日本私立学校

連合会主催の海外視察に参加し、12か国の教育について詳しく視察した。さらに1968年には校長がアイルランドのダブリンで開催された第17回世界教育者会議に日本代表として出席し、各国の教育者たちと交流を深めてきた。

このように広く海外にまで目を向けた研修や視察を経験したことは、学園の教育のあり方に大きな刺激をもたらした。

■教員の活動

大成学園理事、同事務長として長年本学園に勤続していた小神野三男四先生が、1964（昭和39）年にロータリークラブより表彰を受けた。さらに1967年春の叙勲で、教育の発展、特に女子教育の振興、地方文化の向上等に寄与した功績に対して、勲5等瑞宝章を授与された。戦災ですべてを失った本学園がその後盛況を迎えるに至ったのは校長先生の陰の助言者として先生の活躍に負うところが大きいという。誠実、謙虚で、89歳の高齢でありながらも研究心にあふれ多才な方で、85歳の時点で本校の美術クラブの顧問でもあった。

1965年11月には額賀あや子先生が、産業教育振興中央会から産業教育功労者として表彰を受けた。額賀あや子先生は、1935年本校に着任し、それからの30年間一貫して女子教育に没頭した。本校の家庭科教育が高い水準に達し、設備も含めて充実し、授業面でも優れた成果を収めているの



本校の女子教育に尽くした額賀あや子先生



額賀修先生の表彰

は、ひとえに先生の尽力の賜であり、教育界でも、また一般からも高く評価されている。額賀あや子先生の肖像画は現在も額賀キヨ先生の肖像画と並んで、本校の作法室に飾られ、生徒たちの活動を見守っている。

1968年6月26日には額賀修校長先生が教育功労者として藍綬褒章を受章し、文部省で灘尾文部大臣から親しく褒章状と褒章を手渡された。続いて校長先生ご夫妻は、宮内庁北の間で天皇・皇后両陛下にお目にかかり、ねぎらいの言葉をいただいた。これは額賀修校長先生が、多年にわたり教育事業に携わり、幾多の困難を克服し常に施設の充実を図り、子弟の教育に邁進した功績を認めら

れたためで、学園にとっても大変な栄誉であった。

●創立60周年記念事業と施設の拡張

1969（昭和44）年11月11日に、東町運動公園（県立スポーツセンター）体育館にて60周年記念式典が盛大に挙行され、その3日後の14日に市内神崎寺において物故された教職員、卒業生、在校生の慰靈祭が執行された。また、15・16両日実施された学園祭は、60周年記念学園祭として近隣の五軒小学校講堂も借りて、多彩なステージ発表がなされた。

また、30周年記念誌以来となる60周年記念誌の編纂および同窓会名簿の作成もされた。

この年3月に、姉妹校の茨城女子短期大学の脇に2階建の生活センターが竣工した。これは、生徒の生活に関する実習の場を提供するために計画され、1階は管理室、食堂、研修室4室、浴室等、2階は宿泊研修室8室となっており、延べ873.42m²に及び、松の緑に囲まれたモダンで美しい建物であった。建築費用は3,420万円。以後、大量炊事の実習、家庭クラブやクラス単位の宿泊研修、夏期においては各クラブの合宿等いろいろな面に



学園創立60周年記念式典

利用された。

またこの年、4月に衛生看護科を設置した。これに伴い、3月に鉄筋2階建の第八校舎の第1期工事が完成した。1966年に完成した温室を移動しての建築であった。同年9月には第2期工事が完成し、3階建となった。594.72m²の建物で、1階には管理室、医療機械標本模型室、教室があり、2階には看護実習室、看護管理室があり、3階は教室であった。建築費用は1,781万円であった。備品は580万円、図書は476冊1,136万円で、県下に誇る充実した施設となった。

●衛生看護科の開設

1969（昭和44）年4月、本校に衛生看護科が設置された。全国的な看護婦不足の中、茨城県高等学校編成審議会や茨城県医師会等、関係機関の全面的な支持のもとに、県内初の高等学校看護科の設置となった。これは本学園創立60周年記念事業の一環でもあり、専用の校舎、設備、教職員を設けての発足であった。看護婦を目指す志願者141名のうち、志の高い将来ある少女たち46名が晴れて第1回生として入学した。なお、詳細については、「看護科の歩み」の項に譲る。

●茨城女子短期大学の開学

大成学園は、1967（昭和42）年4月、那珂郡那珂町（現那珂市）東木倉に茨城女子短期大学を



茨城女子短期大学設立

開学した。学園創立以来60年間、社会の発展に貢献できる女性の育成に努めてきたが、この伝統と教育の成果を継承し、さらにそれを発展させ、真理の探求と人間形成の道を推進し、家庭婦人としても、社会の指導者としても文化国家の重要な担い手となる人材を育成するために、茨城女子短期大学を開学する運びとなった。

これ以降『大成学園新聞』と改称した学校新聞の中に、「茨城女子短期大学便り」のコーナーが設けられ、授業の様子やキャンパスライフについて写真付きで紹介されている。

N 創立70周年を迎えて

1970（昭和45）年～1979年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1957（昭和32）年10月4日、ソビエト連邦による人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げ成功が報じられた。それまで宇宙開発のリーダーを自負していたアメリカは、科学教育や研究の重要性を再認識し、大きな予算と努力を軍事・科学・教育に割くようになった（いわゆるスプートニクショック）。1969年7月のアポロ11号による月面着陸等により成果を出したこの社会傾向が、日本社会にも大きく影響し、教育においては「現代化カリキュラム」といわれる濃密な学習指導要領を採用するに至った。

高等学校学習指導要領は1970年10月に改訂され、1973年度から実施された。学校行事と特別教育活動をまとめ特別活動とし、教科・道徳と合わせ、教育課程編成を3領域とした。また、時代の進展に対応した教育内容を導入し、教科学習内容を増大した。必修クラブが導入された。

「現代化カリキュラム」は学習内容の程度が相当高く盛りだくさんだったため、次第に大量のついていけない生徒を生んでいった。生徒の学習内容不消化から生じる意欲減退、学校忌避が問題と

なり始めた。このため1976年に学習内容を削減する提言が中央教育審議会でなされ、その後のゆとり教育につながっていった。

●本校の教育

1973（昭和48）年に、これまで就職者向けと進学者向けの2コース制だった普通科を、2年次にA（就職志望者向け）、B（短期大学志望者向け）、C（4年制大学志望者向け）の3コースに分け、本人の将来への希望、適性、能力に応じた徹底した指導を導入している。カリキュラムの特徴としては、Aコースは、初期には家庭科の授業内容が充実しており商業も必修であったが、のちに就職試験に備え、国語も重視するようになっていった。B・Cコースは一貫して入学試験に向けて、数学・外国語の授業内容に力点を置いていた。また、計画的に課外指導も重視し、実力のさらなる向上を図った。こうした将来を見据えた指導に加えて、進学率の向上から力不足で高校に入学てくる生徒の増加に対しても、基礎力強化および学習意欲向上のための工夫研究に力を入れている。

学習指導と並行して、「健全で幸せな家庭を担う女性としての素質をつくる」という本校の創立以来の校風を大切にし、「作法」の授業や「家庭クラブ」の活動を核として、生徒の人間形成を重視した様々な教育活動を実践している。

●英語教育

1970（昭和45）年から英会話講師として、ジェイムズ・V・レパヴ先生を迎えた（1982年まで）。これは、額賀修校長が海外旅行を何度か経験し、自ら実用英語の必要性を痛感したことから、「読む」「書く」を中心の英語の授業に加えて、「聞く」「話す」を重視した課外授業の実施を強く望んだ結果、実現することとなった。姉妹校の茨城女子短期大学の講師でもあるレパヴ先生が来校し、毎週火曜日、土曜日の放課後、2・3年生の希望者を対象に、



レパヴ先生と生徒たち

ロンドンで出版された洋書をテキストとして用い、実用英語の訓練を意欲的に重ねた。当時から本校では、試験対策にとどまらない会話も重視した活動的な英語教育を実践している。

1960～1970年代には、たびたびロータリークラブ青少年交換留学生が本校に来校した。本校生との交流会を実施し、また、本校生の案内で偕楽園を訪問したりした。同世代の若者がお互いの国の文化を理解する良い機会であったと同時に、生きた英語を話せる機会もあり、生徒たちにとつても大変有意義な時間となった。



本校生と共に常磐神社を訪れたロータリークラブ交換留学生たち

●必修クラブの設置

1973（昭和48）年度より学習指導要領の改訂で、クラブ活動が必修となった。本校では、事前のアンケート調査や話し合いにより、22のクラブを設置し、活動を始めた。

茶道／タイプ／珠算／美術／コーラス／写真／料理／生花／演劇／数学／書道／読書文芸／ペン習字／

洋裁手芸／ギター／バスケット／バドミントン／卓球／バトン／バレー／ボール／剣道／フォークソング

翌年より、生徒の希望により、以下のクラブが加わっている。

生物／落語／空手／郷土史／民謡／囲碁将棋／テニス／マンドリン／人形劇／看護／工芸／英会話

調和の取れた人間性の育成を目指し、生徒の興味の幅を広げるのに一役買った必修クラブの活動は、平成に入り「総合的な学習の時間」が新設されるまで続けられた。

●生活目標の設定

1979（昭和 54）年より、校訓に即した生活目標が定められた。かつての生活目標は、学校週番が定めたり、生徒会が必要に応じて提示していた時期もあったが、この年より、校訓を生活の中に具現化するものとして、次の項目が生活目標として定められた。

1. まじめですなおに生きる誠実の心
2. 仲良く努力し合う協和の心
3. 進んで努力する勤勉の心

今日においてもこの生活目標は各教室に掲げられ、古くから大切にされてきた本校生のあり方の規範として、日々の生活に取り入れられている。

●家庭クラブ

この時期も家庭クラブは活発に活動しており、4月の新入生歓迎会の企画実施に始まり、校内幹部研修会の企画実施、県幹部養成研修会への参加、ホームプロジェクトの研究および全国大会への参加、学園祭への参加、ホームプロジェクト校内発表、テーブルマナー教室への参加、ひなまつりの企画実施で終わるというサイクルであった。その間にも、家庭クラブ週間での研究と募金、廃品回収等により、校内にゴミ箱や鏡を設置したり、植樹を行ったりと様々な奉仕活動を行い、社会に役立つ女性としての素養を磨く機会を提供してい



本校で開催された家庭クラブ茨城大会

る。また、1978（昭和 53）年 12 月より、東京から講師を招き着付け教室を開催するようになった。これ以降、家政科の生徒を対象に、毎年実施されている。

毎年 8 月に開催される全国高等学校研究発表大会は、1979 年には水戸市の県民文化センターを会場に開催された。その際には本校から係生徒が参加し、本部役員の総務で大会運営の企画にあたり、当日の係は受付、救護、記録、報道と活躍した。なかでも救護係の親切な看護に対し、礼状が寄せられている。

また、1979 年 12 月には、家庭クラブ中央地区研究発表大会が本校で実施され、やはり本校生が盛会のために大いに尽力した。

●夏服の制定

1978（昭和 53）年、夏の制服を切り替えた。白いシャツカラーのブラウスに、明るい紺色で深い V ネックのサマーウールのジャンパースカートであった。ベルトには大成を象徴する T 文字のバックルが付いている。このデザインは前年暮れから



T バックルの付いた夏服

生徒会役員、先生方による「夏服委員会」を組織し、家庭科の被服の先生を交えて検討してきた。多くの議論を重ねた結果、やっと決まった。この年の入学生から着用することとなった。

行事の充実

学校での活動の中でも、特別活動は特に生徒の人間形成のうえで貴重な経験となるものである。この頃の学校行事の特徴は、生徒数の激増と授業時間確保のために実施の回数が減ってきた学園祭、体育祭、芸術祭を、3年1サイクルの3大行事として1970（昭和45）年より実施したこと、卒業までにどの行事も経験できるようにしていった。時期は10月であった。

1970年に第1回を実施した芸術祭は、芸術企画委員の先生方8名と生徒会が実行委員会を結成し話し合いを重ねた結果、第1部：合唱の部、第2部：アトラクション、第3部：プロの芸術家の鑑賞会という構成で実施することになった。合唱の部は、課題曲と自由曲について学年ごとに毎週土曜日に予選を行い、各学年、優秀な3クラスのみの芸術祭出演とした。クラス全員参加であり、クラスの団結が自然に強まっていき、自主的な練習が盛んになっていった。互いに他クラスに対抗意識を燃やし、始業前、休み時間、放課後と、歌声が校内に響き渡り、楽しい明るい雰囲気に包まれた。各クラスの頑張りは素晴らしく、予選会場の体育館は、拍手の連続であったという。アトラクションの部は、ピアノ、ダンス、日舞等について希望者を募り、やはり予選を行った。生徒職員から選ばれた審査委員によって公平に出演者が選ばれた。プロの芸術家については、東京ハーパー重



第2回芸術祭

奏団が素晴らしい演奏を披露した。最後は全生徒による「今日の日はさようなら」の合唱で幕を下ろした。お昼を挟み午前午後と1日中文化センターにおいて開催された第1回芸術祭において、生徒職員ともに芸術の秋を満喫した。なお、1973年には東京室内管弦楽団を迎えた音楽鑑賞、1976年には演劇鑑賞であった。この年より合唱の部が「校内合唱祭」と名称を変えて単独で実施するようになったため、芸術祭は外部団体の発表を鑑賞する機会となった。1979年には創立70周年記念事業の一環として、創立70周年記念歌「大きな輪になろう」の発表や映画鑑賞という内容での実施であった。

体育祭は1971、1977年に実施された。1971年は天候に恵まれず、予行演習日も本番も途中で雨が本降りとなった。途中で生徒の意見を求めるべくまでも「実施したい」ということで、県営グラウンドの都合で8日後に再度実施ということになった。長引く実施にも生徒たちの競技に対する熱意が続いたのは、生徒会を中心とした運営委員の力が大きかったという。1977年の体育祭は、1974年竣工の市民体育館および青柳グラウンドで実施されている。室内ではバスケットボール、クラブ発表、屋外では競走、仮装行列、バレーボール等を行っている。

学園祭は、1972、1975、1978年に実施されている。1972年の実施においては、衛生看護科も参加し、身体各部の図解、実習器具の展示、血圧測定コーナー、やせるためのアドバイスコーナー



1970年代の学園祭



1年生の宿泊学習

等もあり、白衣姿の清潔で美しい生徒の説明も加わり、大好評であった。1978年の学園祭は、創立70周年記念の校舎改築のため公開はせず、校内ののみの開催となった。1日目は校内発表、2日目は文化センターにおいて、午前中は校内合唱祭、吹奏楽部の発表、午後は新東京フィルハーモニー交響楽団を招いての演奏会を実施した。芸術祭と学園祭を合わせたような実施形態であった。

旅行・遠足に関しては、これまで1・2年生が学年別に県内各所を訪れ、3年生が修学旅行を実施していたが、1975年に2年生の遠足が宿泊学習に代わり、1978年より、1年次5月に宿泊学習、

2年次秋に修学旅行、3年次5月に社会見学という実施形態となった。宿泊学習は、初年度は群馬県の国立赤城山青年の家に出かけている。その後は県の施設（白浜少年自然の家や、大洗研修所、西山研修所等）を利用している。修学旅行はこの時期に、中学時代に関西に行っている生徒も増えてきたため、関西から四国、中国地方と変わり、さらに1973年より九州北部へと変更になった。社会見学は成田／鹿島方面や国立博物館等、日本を代表する施設・設備等を見学している。

クラスマッチは毎年5月に、体の鍛錬とクラス員相互の親和を目標に実施されている。この時期は種目も多くなり、バレーボール、バスケットボ



笠松運動公園でのクラスマッチ

クラスマッチの感想

3年 工藤ひとみ

来た。とうとうクラスマッチの日が。緊張感に包まれて家を出た。笠松運動公園に着くと、心なしか、胃まで痛くなってきた。ソフトボールの試合に出なくてはいけないからだつた。試合の順番を待つ時間の何と短かったことだろう。

グラウンドに散り、それぞれの守備につくと、体育の時間や放課後に、多少練習したくらいの自信など、跡形もなく崩れ去った。あとは、（ボールが来たらどうしよう）その不安だけだった。そんな逃げ腰ではどうしようもない。私のところに2回ほどボールが来た。が、両方とも落としまった。みんなの歓声も耳には入らず、静寂の中に一人取り残されたようだった。（今度こそ、今度こそがっちり取ろう。）そう思っていたときボールが飛んで来た。私の守備外のボールだったが、だれも追おうとしない。私は必死になつてボールを追いかけた。返球するとき勢い余つて転

び、その時にランナーが二塁を回っているのが見えた。結局、反撃も相手には及ばず試合に負けてしまった。一生懸命に応援してくれたクラスのみんなに悪くて、顔も上げられなかつた。（なぜあの時、全力を尽くさなかつたのだろう）考えれば考えるほど自己嫌悪に陥ってしまった。そんな私をクラスのみんなは慰めてくれた。「だいじょうぶだよ、気にしなくていいんだから。」その時ほどクラスのみんなを身近に感じたことはなかつた。今まであまり話したこととなかつた人でさえ、まるで十年來の友人の様に感じられた。試合には負けてしまったが、私はそれ以上の何かを得ることができたように思い、嬉しかつた。

最終結果、私達のクラスは総合で一位だった。ソフトボールの分をみんながカバーしてくれたのだ。

来る時と違い、帰る時の何と足取りの軽かつたこと。

（『大成学園新聞』第42号より）

ル、卓球、高跳び、幅跳び、砲丸投げに分かれてクラスの名誉をかけて争い、校内はクラスマッチ一色となり熱い雰囲気に包まれた。1979年には笠松運動公園での実施となり、種目が変更されている。バレーボール、ソフトボール、バドミントン、100m競走、400m競走、1000m競走、800mリレー、1600mリレー、砲丸投げ、走り幅跳び、走り高跳びなどである。

●読書感想文コンクール

校内読書感想文コンクールが毎年実施されている。夏休みに書かれた生徒の作品を、生徒、顧問の先生の選考委員が審査して選び、入選作品を学校新聞や生徒会図書委員会発行紙の『書架』にて紹介している。校内の上位入賞者は、茨城県読書感想文コンクールにも入賞している。読書感想文を書くにあたってのアドバイスも、『書架』には次のように書かれている。

「読書感想文を書くには読みを深めること、作者の問題を自分の問題として考えること、それによって自己の考えを深め、自己の成長をはからなければならない。読書によって身につけるものは大きい。読書に親しみ、人生に生きる知恵を身につける機会を数多く持つて欲しい。」

生徒会図書委員会では、通常の図書館管理活動や新規購入希望図書調査、この読書感想文選考活動、広報誌作成活動のほか、盲学校の図書委員会とともに読書会を持つなどして、他校とも情報を交換している。

●進路指導

この時期になると在家庭は減、就職が多く進学が激増し、本校においても1970年代後半には、進学、就職とともに卒業生中の40%を超える、1978(昭和53)年には進学者が半数を超えた。

高校進学率がほぼ100%となり、高校における進路指導が、国の施策においても重視されるよう

になり、1975年には進路指導主事が置かれた。単に就職先を斡旋したり進学先へ割り当てるだけの進路指導ではなく、生徒の長い一生を考慮したうえで指導を行うようになっている。

本校の進路指導の要点は以下のとおり。

- ・社会のために勤労し、勉学のために進学する認識の強化
- ・進路の決定を母親や教師に頼む依存型の打破
- ・推薦入試待ちと就職先のホワイトカラー好みの転換

また、外部講師による将来に向けての意識を高めるための講演会・講座等も、引き続き開催されている。一時期、ドルショック等で採用を中止する企業もあり混乱も見られたが、依然として就職率は希望者に対し100%を維持している。



進路ガイダンス（職場説明会）

●生徒会活動

この時期も、5つの委員会を設けて堅実に活動を行っている。夏に短大隣接の大成学園生活センターにて2泊3日で幹部研修会を実施し、短期間ではあっても寝食をともにした生徒の自主的で積極的な活動と関係先生方の助言により、より良い生徒会のあり方について理解を深め合っている。こうした活動により校風の高揚に努めるとともに、生徒からの意見を投書箱やアンケート等を使って求め、それを反映させるために教職員に働きかけ、夏の制服や靴の改正を実現している。また、救ライ募金運動や東パキスタン台風被害に対する救援募金活動など、校外にも目を向けた温か



生徒会役員選挙実施

い活動も行っている。

1971（昭和46）年から生徒会役員が、評議員選挙から立候補による全員選挙に変わった。生徒数も多く通学範囲も広いために、これまでずっとホームルーム委員の互選で決定していたが、全校生徒による総選挙による要望が強く、他校の生徒会の情報等も参考にホームルーム委員等で構成される評議員会で慎重に検討し、職員会議でも可決されたため、実現されることとなった。これに伴い選挙管理委員会が設置され、候補者の推薦、届け出、告示、運動開始、立会演説会の実施、選挙など、公正な選挙運営のために活動している。これにより、生徒が正しく明るい選挙に慣れ他人に

左右されず適任者に投票する習慣が身につければ、将来社会に出ても公正な行動がとれる有権者になるであろうと、期待が込められた。

●運動部の活動

この時期の運動部は、狭い練習場を分け合って使っていたため不自由が多かったが、各部ともに部員自らが厳しい練習を望み、成果をあげている。

バトン部は人数が膨らみバトンが足りないながらも代用品で練習を重ね、4年連続地区大会最優秀賞を受賞し、1979（昭和54）年にはインターハイに出場するほどに成長している。地域のイベント等に出演する機会も多く、黄門祭りパレード、近隣事業所の体育祭等に、自分たちでデザインから作成まで手がけた衣装で張り切って参加している。

テニス部は東町スポーツセンターのコートを借り、その往復も含めて体力づくりを中心にトレーニングに励んでいる。インターハイの水戸地区予選では優勝することもあり、大健闘している。

陸上競技部も校内にとどまらず水戸八幡宮の階段を利用したり、ロードレースが行われる千波湖に出向き、トレーニングに励んでいる。県新人戦

藤坂町通りの交通問題

大通りから本校に続く藤坂町通りが、通学生で大混雑することは、これまで生徒会交通班にとって悩みの種であった。信号機を取り付けてもらうよう働きかけて設置にこぎ着けたり、これまで様々な取り組み、努力がなされてきた。原則として右側通行にはなっていたが、あまり守られなかつたのが実情であった。

1971（昭和46）年11月初旬、茨城放送の「電話で一言」のコーナーで、本校生徒の通学路について苦情の声が放送された。「大成女子高校生の通学路にあたる藤坂町通りが、生徒に両側の歩道を占領され、一般市民の通勤や買い物が不便であるとか、大成の生徒の歩き方は小学生にも劣る」という一主婦のお怒りの内容だったという。

生徒会交通班は、これをきっかけに通学方法をさらに見

直し、右側通行を徹底することとした。

こういう状況に対して11月下旬に、『いはらき』に本校生の投稿記事が匿名で掲載された。「2千7百人の生徒が毎日ひしめきあって狭い歩道を通学するのは致し方ないことで、現在は本当に仕方なく右側通行をしているが、大成の生徒だけに我慢を強いるのではなく、交通戦争の中、通学の時間帯のわずか30分だけでも、他の地域で実施しているように車両進入禁止にしていただくことはできないか」というものだった。

この投書の意見が採用されて、スクールゾーンとして進入禁止になった形跡はないが、このような現状に対して、生徒会は引き続き啓蒙運動を実施し、12月の『大成学園新聞』では「右側通行を守るだけでなく、お互いの安全と他者への迷惑除去という原則で、皆でより良き社会を目指そう」と、生徒に呼びかけている。



茨城国体とバレー部員たち

で800m走や砲丸投げで優勝や2位、1971年にはインターハイに出場するなど、日頃の努力の成果を發揮している。

卓球部は地下の狭い練習場でありながら水戸市内大会で個人1位、市内一般の部でもダブルス優勝など、優秀な成績を収めている。

スケート部員も全関東フィギュアスケート大会に優勝、インターハイ、国体に出場するなど、めきめきと力をつけてきている。1975年には、全国高校スケート競技選手権大会で、団体で3位を獲得している。



創部の年に国体に出場した水泳部員たち

1979年創設の水泳部は、創部の年に県で総合優勝し、国体に出場している。市民プールで練習し、着実に成果を出している。

ダンス部は校内発表のほか、全国ダンスコンクールに出場し、1977年には全国3位に入賞す

るなど、一目置かれる存在となっている。

バレー部はこの時期も活躍し、1970年には宿敵中村高校、久喜高校を破って関東大会で優勝し、国体に出場している。国体解団式の際に優秀選手として全員表彰されたことも栄誉であった。また、1974年の茨城国体にも県代表として出場し、県民の期待を背負い全国3位に入り、本県の総合優勝に大きく貢献した。再三にわたり合宿を実施し、また、寺院での座禅に取り組んだり、大松博文先生を囲んでの「バレー部と精神力」のディスカッションを開くなど、心技両面での向上を図った結果の成果であった。卒業生もモスクワ、メキシコ等ユニバーシアード大会において日本代表選手として活躍し、後輩の励みとなつた。この間の1972年には、バレー部後援会が結成され、会長に本県参議院議員の竹内藤男氏、副会長に本校OG安達一枝氏をお迎えし、賛助金等も集め、広く支持をいただくこととなつた。

●文化部の活動

吹奏楽部は発足以来毎年定期演奏会を開催し、その実力を外部に向けて発信し好評を博している。1970(昭和45)年の第5回定期演奏会は、「歌のおばさん松田トシ先生」をゲストとして招いて

文化センターで盛大に実施された。

園芸部は、温室ばかりでなく花壇の整備も盛んに行い、校内の美化にますます貢献している。

演劇部は、自作の脚本を用いたオリジナル劇で文化センターでの水戸地区研究発表会に出演するなど、活動の場を広げている。

JRCは、5月には身体障害者スポーツ大会のお手伝い、6月には献血活動、夏休みには赤塚駅での冷水サービス、12月には児童施設でのクリスマス会参加等を行い、好評を得ている。冷水サービスについては新聞記事になっており、知名度も上がってきている。そのほかにも授業前の毎朝の校内清掃、月2回の病院花壇の手入れ、月1回の施設慰問、国際セミナーとして海外のJRC団員との交流活動など、精力的に活動を行っている。1972年には継続的な献血運動の協力に対し、日本赤十字社茨城県支部より感謝状が贈られた。



JRC部による赤塚駅での冷水サービス活動

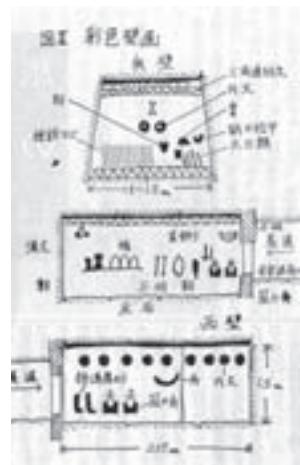
生物部は部室でザリガニや金魚の飼育をする一方、夏期には八溝山、奥鬼怒、さらには志賀高原まで植物観察の研修旅行を実施し、成果を文化祭で披露した。また、校内スミレ展を開き多種のスミレを紹介し、身近な自然への興味を促した。

理化部は化粧品の自作を引き続き行い、工夫を重ねて学園祭で「20円化粧水」として20cc入りの瓶で販売し好評を得ている。

文芸部は、横瀬夜雨や長塚節など県内出身の作家の生家を訪問するなどの取材旅行を行い、紀行

文を作成している。また、平将門をはじめ、県内の歴史上の人物について調べて発表するなど、意欲的である。

考古学部は1973年に創部し、「郷土のプロフィール」として県内史跡の訪問記を『大成学園新聞』に連載するなど、活動が盛んに行われている。また、毎年夏休みを利用して古墳の発掘を行っており、1973、1974年の8月には虎塚古墳の発掘に参加し、白と赤の鮮



考古学部が発掘参加による研究成果を発表

やかな壁画を目の当たりにして感動した様子も同誌に寄稿している。

コーラス部も各種合唱祭への参加をはじめ、活動が活発化してきている。

数学部は毎週土曜日午後に難問に取り組み、学園祭でも数学の楽しさの普及に取り組んでいる。

そのほかに、英会話部、手芸部、茶道部、生花部も地道に活動を継続している。

中学校への広報活動

中学生に本校の特徴を伝える学校案内は毎年作成されているが、この頃から情報量が増え、三つ



1970年代の学校案内

折り A5 判だったものが三つ折り B5 判となり、さらには 12 ページ A5 判のカラー冊子、創立 70 周年の頃には 12 ページ B5 判のカラー冊子となつた。内容としては、本校の特色、奨学金制度、進路状況、主な行事、クラブ活動、および姉妹校の茨城女子短期大学情報等が、写真付きで掲載されていた。中学校との懇談会も、毎年 11 月に実施され、1973（昭和 48）年には生徒募集説明会という名称になっている。

●生徒たちの様々な活動や表彰等

茨城県教育委員会が主催する「高校生の船」に、本校生も参加するようになった。船内での集団活動、他県の青年団体との交歓、教育施設の見学等の体験を通して、相互の連帯感を強め、郷土愛、社会参加への意識を高め、たくましく心豊かな青年になることを目標にして実施された制度であった。本校からも、校内で推薦を受けた 3 ~ 4 名の生徒が毎年参加している。日立港を出発し、苫小牧、釧路、函館を巡り、船内および各地で研修を行った。

この頃より長期の休みを利用して海外短期留学に参加する生徒が増えてきている。中には交換留学制度を利用する生徒もあり、アメリカに留学し、さらにアメリカから学生を受け入れて海外との交流を深めている。

1979（昭和 54）年、県警察本部、県防犯協会主催による全国防犯運動標語県審査において、3 年永井さんの標語が多く応募の中から佳作として入選し、表彰されている。

「ほらあなた　自転車のかぎのかけわすれ」

●水泳訓練

引き続き、東町プールにて水泳訓練を実施した。導入初期は全学年対象であったが、1971（昭和 46）年からは 1 年生のみの実施となった。技能別に上級、中級、初級に分かれて指導を受け、人工



水泳訓練

呼吸法を習い、最後に 1 クラス 10 名ずつ選手を出し合いクラス対抗リレーも実施し盛り上がった。

●卒業生の動向

1970（昭和 45）年 7 月に、1967 年の卒業生が佐々木入水（ひとみ）の芸名で、コロムビアレコードから吟詠歌謡第 1 号としてデビューしている。デビュー曲は「武士魂」で、桜田門外の変をテーマに水戸浪士の魂と意気地を詩吟と歌謡でミックスした魅力あるメロディーに剣舞を織り込んだ迫力あるものという。佐々木さんは 5 歳の時から水府流（吟詠、詩舞、剣舞）の宗家に師事し、1967、1968 年には水府流の全国コンクールで優勝している。1970 年 7 月、フジテレビにも出演している。

この頃の卒業生から海外に留学する者も出てきており、学校新聞や広報誌にて抱負を語っている。

1974 年卒の渡邊さんはアメリカのカリフォルニア大学に留学し、「大成で学んだ作法が世界人類の共通語としてアメリカ大陸でも役立っています」とうれしい報告をしているし、1979 年卒の和田さんはパリのソルボンヌ大学に入学し、「同時通訳者を目指して頑張りたい」としている。

そのほかにも、アメリカの州立大学に留学する生徒が少しづつ出てきている。

●同窓会活動

1967（昭和 42）年に正式に発足した同窓会なでしこ会は、毎年 11 月第 3 日曜日に、学校また

は近隣の施設において総会を開いている。東京にも支部があり「ななくさ会」として本校の教員OBも交えて毎年親しく交流の機会を設けている。本校からも3年に一度は校長が出向いている。全体としての同窓会以外にも、卒業年度ごとの同窓会が、頻繁に開かれている。

この時期のなでしこ会役員

会長 根本八重子（七会村 旅館経営）

副会長 安達一枝（水戸市 耳鼻科医院長）

副会長 横川みのる（水戸市 主婦）

●教員の活動・表彰

文部省による教員の海外派遣に本校からも参加するようになり、1977（昭和52）年に大塚武男先生がヨーロッパへ、1978年は額賀密先生がアメリカへ赴き、各国の教育事情視察を経験した。これにより視野が拡大し、より充実した教育活動を実践できるようにという期待が込められていた。また、このほかにも年に数名の先生方が夏休みを利用して海外旅行に出かけ、自己研鑽に役立てている。

1970年8月、桐原先生が理化教育功労者として表彰された。大阪市厚生年金ホールで開催された日本理化学協会総会において、坂田文部大臣列席のもと、日本理化学協会会長より表彰状と記念品が授与された。

1977年、学校長額賀修先生が私学教育振興に対する偉大な功績により勲4等旭日小綬章を受章した。

1978年、教頭笛島菊次郎先生は多年にわたり茨城県および岩手県両県の教育界で活躍された功績により勲4等瑞宝章を受章した。同年、家庭科の飛田しづえ先生は、長年本校の家庭科教育において強い信念のもと着実な実践をされ、茨城県教育委員会、茨城県産業教育振興会より表彰された。また、家庭科の田所タケ先生も家庭科教育の功労が認められ、産業教育振興会より表彰された。

1979年10月、校長額賀修先生が、本県教育の発展に尽くした功績により第16回「いばらき賞」を受賞した。これは茨城新聞社が創刊2万5,000号を記念して制定した賞で、毎年、本県の政治、経済、文化、スポーツなどの各方面で活躍し功績の著しい人たちに贈られる賞であった。学園創立70周年にあたる年の受賞でもあり、本学園にとつても大変な栄誉であった。



受賞した左から笛島菊次郎先生、飛田しづえ先生、田所タケ先生

●その他の出来事

1971（昭和46）年1月に保健室が改築された。生徒増加に伴い、手狭となった保健室が装いを新たにし、ベッド10床を設置し、心地よい休養の場となった。

●施設設備の充実

1970（昭和45）年に創立者胸像の前庭が造営され現在の姿となり、園芸部や美化担当者の手により常に周辺に季節の花を配置し、美しい空間となっている。また、1971年には胸像の西側に生徒ホールが新築され、パンや牛乳が販売されるようになった。

1977年8月には短大の構内に40名宿泊可能な合宿所が建てられ、夏休みを中心とした活動のために望ましい場を提供できるようになった。

●創立70周年記念事業

1979（昭和54）年10月5日午前10時より、茨城県民文化センターにて創立70周年記念式を挙行した。県知事をはじめ多数の来賓を迎え、短大学生・高校生徒・幼稚園児らが参列した。同日



学園創立 70周年記念式典

午後には、県下各界の方々・保護者・卒業生等を招いて、水戸京成ホテルにて祝賀式を催した。

その後の10月9日には、県民文化センターにおいて学園創立70周年記念大成女子高芸術祭が開催された。午前の部は、学年の予選を勝ち抜いたクラスによる合唱の発表、吹奏楽部の発表、そして茨城女子短期大学のコーラス等で盛り上がった。また、生徒会を中心とした記念歌募集に対し、たくさん寄せられた作品の中から審査の結果選ばれた3年生の畠木さんの詩に、井上孝行先生が作曲された創立70周年記念歌「大きな輪になろう」が発表された。午後の部では、多彩な照明の中でのダンス部、バトン部の発表の後、生徒会の選んだ映画「エリックの青春」が上映された。生徒が主役の、素晴らしい芸術祭となった。

創立70周年記念事業として、短大においては1978年の体育館の竣工に始まり、音楽の集団教育施設であるML教室の新設、旧体育館の図書館への改装がなされた。体育館は白で統一された美しい外観で、1階は1,257m²でフロア面積714m²、ステージ70m²、2階は474m²、計1,731m²の規模で、屋内体育施設兼講堂としての設備が整えられている。会議室2、クラブ室3、事務室、体育指導員室、医務室、更衣室、シャワー室等がある。また、800名分の椅子が格納台車に納められている。これにより体育の授業、クラブ活動、全学的な行事が可能となった。ML教室は保育科の音楽指導のための施設（Music Laboratory）で、この教室だ

けで電子ピアノが37台配備され、個人レッスン室の44台とともに、技能の優れた教員を効率良く養成するための一助となった。図書館は、床面積330m²で、ハンドル駆動ラックを導入し、固定書架3分の1の面積で同数の本を納めることができるようになった。全学生はもちろん、司書コースの学生の実習にも活用できるように広く造られ、5万冊の蔵書を目指している。これにより、短大はさらなる教育の充実が期待されることとなった。

高校においては、改築した50周年記念館につなげて新館を建設し2号館と称した。特別教室のためのこの校舎は、1階は職員室、更衣室、印刷室で、今までの手狭な職員室の倍以上の広さがある。2階は図書室および美術室。図書室は学習資料室として十分な広さとなり、勉学、読書の場として静かな雰囲気と豊富な資料が用意されている。美術室は明るいアトリエとなった。3階には作法室茶室。36畳と8畳の和室と洋室、4.5畳の茶室、水屋もあり、さらに広い玄関も設けられている。教養の間として奥ゆかしいたたずまいの部屋に仕上がっている。4階には視聴覚室を配した。一度に3クラスが学習できる150名定員の客席が用意され、ステージにはスクリーンとピアノ完備。映写室には数種類の映写機が設置され、そのほかの教具とともに音感教育の充実が期待される施設である。隣にはピアノ室があり、ピアノレッスンのための個室も設けられている。新しいこの建物



当時の校舎

は、多様化した生徒の指導に対応する本校の豊かな特色ある情操教育を強力に推進する場として活用されている。

創立 70 周年記念歌「大きな輪になろう」

1. みどりのいちょうに かこまれた
長い歴史の 大成に
高い理想を かけつつ
学んだわれらの 母や姉

2. 野辺のやさしい なでしこを
いつもの心に えがきつつ
あすの社会の しあわせを
求め歩もう 若き日々

3. 笑顔あふれる 青春に
誠実 協和 勤勉の
校訓 高らに うたいつつ
大きな輪になろう あすのとも

爆発。政治では第3次中曾根内閣が発足し、社会党土井たか子が主要政党で日本初の女性党首となった。バブル景気成長期に向け誰もが浮かれ始める1年であった。

1987年4月には、国鉄が分割民営化しJRとなる。また、大韓航空機爆発事件が起こり、エイズ問題も深刻化する時期であった。

1988年、いよいよバブルが大きく膨らみ始めることとなる。世界ではイラン・イラク戦争が停戦し、ソウルオリンピックが開催されるなど明るい話題が続いた。

1989年、昭和天皇崩御により元号が平成となる。世界ではベルリンの壁が崩れ、アメリカとソ連による冷戦も終結に向かう。また、オウム真理教などによる凶悪犯罪がニュースを賑わすようになる。一般市民にも消費税(3%)が導入されることとなった。

1973年施行の「現代化カリキュラム」は学習内容の程度が相当高く盛りだくさんで、大量のいわゆる「おちこぼれ」生徒を生んでいった。この時期1970年代末から1980年代においては、校内暴力が社会問題としてたびたびマスメディアに取り上げられるようになり、教育の荒廃が顕在化していた。こうした状況の中、1978年8月に学習指導要領が改訂され、高等学校においては1982年度から実施された。「ゆとりある充実した学校生活の実現=学習負担の適正化」がモットーであった。大学入試においては、1979年より、国立大学入学志願者を対象として共同して実施した基礎学力をみるための大学入試共通第一次学力試験(通称:共通一次試験)を実施するようになった。

ゆとり教育の主な柱

- ・指導要領内容の半減と授業時間の削減で「ゆとり」「精選」を強調。
- ・「知、徳、体の調和のとれた人間形成」を主張。
- ・教科、特別活動での道徳教育を強化(社会奉仕・勤労体験学習、家庭・地域との連携などを力説)。

V バブル経済期

1980(昭和55)年～1989(平成元)年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1986(昭和61)年12月から1991(平成3)年2月までの4年3か月間に及ぶ期間は「バブル景気」と名づけられた。バブル景気の始まりは1985年のプラザ合意により急激な円高が進んだこととされており、金融緩和が進んだことが大きな要因であった。

土地や株価がどんどん上昇し、多くの投機家が「土地神話」「株長者」などを満喫した。それは、大都市圏だけでなくリゾート開発が盛んに行われた時期でもあった。

しかし、バブル投機を満喫した投機家たちの大半は、バブル崩壊に伴いほとんどの財を失い多額の負債を抱えることとなった。

1986年には、ハレー彗星の大接近、三原山の

- ・君が代を「国歌」と明記し、「国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」と規定。
- ・高校において「国語Ⅰ」「現代社会」などを設け、必修単位数を削減。

●本校の教育

青少年の非行が問題化し学校教育のあり方が問われる中で、本校でもその対策として教育の目標、計画、実践、その反省の積み重ねにより、新しい望ましい学園づくりに教育の原点に立って、心新たに対応してきた。

1980（昭和55）年、1981年には「規律ある生活をしよう」、1982年より1988年は「明るく楽しい高校生活をきずくための教育活動を推進する（将来への希望を持ち積極的に努力し、互いに仲良く励まし合って明るく楽しい充実した生活を築く）」ために各人の意気を高揚させようと、特技ある者や善行をなした者を広く生徒の中から見出して表彰、賞賛する「小さな善行運動」を繰り広げた。わかりやすい授業を通して生徒に学習意欲を起こさせ、自主的に学校行事に参加し、日常生活の中でも規則を守り、他人に迷惑をかけない望ましい高校生像づくりに努力した。

1989（平成元）年からは、「規律を守り、節度ある楽しい高校生活を築くための教育活動を推進する」ことに主眼を置いている。

●行事の様子

3大行事は、1980年代においては体育祭、学園祭、芸術祭の順に実施されていた。

学園祭は、1981（昭和56）、1984、1987年の3回実施された。1981年には一般公開をし、クラスや部活動等の参加団体が工夫を凝らした展示、発表を披露した。喫茶店、フォークコンサート、ゲーム、迷路、お化け屋敷等、楽しい催しのほか、「遺産相続」という風変わりではあるがためになる展示もあった。衛生看護科は、せんぶりやかり

んといった薬草から作った薬酒なども紹介して、以前にも増して好評だった。同窓会なでしこ会と生徒会主催のバザーでは、前日から予約ができるほどの好調な売れ行きだった。1984年は校舎建築のため一般公開もなく日程も1日のみの実施となったが、サブタイトルを初めて導入し「すぐうるJACK84」とし、クラス参加も多く盛況であった。1987年は全校生徒から公募した「がーるずふえすていばる'87」をサブタイトルに、やはり校内だけの公開となったが、華やかな祭典となった。この年はディスコが大人気で、数団体がオリジナルディスコを開いている。生徒会は予選まで実施してカラオケ大会本選を開き、盛り上げに一役買った。



学園祭でのディスコ

体育祭は1980、1983、1986、1989（平成元）年の4回実施された。1980年は堀原運動公園にて、1983、1986年は笠松運動公園、1989年は水戸市立陸上競技場で開催された。実施形態は生徒会を中心に検討され、クラス対抗から紅白対抗、4ブロック対抗や学年対抗にしてみたりと、クラスを



当時の体育祭の様子

離れて協力し合う協和の心を生むように努めた。また、盛り上げるためにムカデ競走、障害物競走、でかパン競走等の種目を導入したり、仮装行列にユーモア賞を設けたりと、様々な工夫がなされた。

芸術祭は1982、1985年に文化センターにて実施された。校内の合唱発表会、吹奏楽演奏、ダンス部、バトン部のアトラクション、それからプロの演奏家等による鑑賞会、映画鑑賞で構成された。1982年には、本校の1978年卒業生の石田真己子さんの独唱と張曉輝さんの笛の演奏を、1985年には張曉輝・周志薇さん夫妻による胡弓の演奏と中国舞踏、斎藤昌子さんと男性カルテットフリーダムの演奏を鑑賞した。

1986年より毎年、文化センターにて芸術鑑賞会を実施するようになった。初年度はミュージックアカデミーフィックスによるミュージカル「マイフェアレディ」の上演。1987年には発起座によるモリエール作「スカパンの悪だくみ」、1988年は本校卒業生吉田美菜子さんの箏曲と日本新交響楽団による演奏を鑑賞した。1989年には前年に竣工した体育館において「大成学園創立80周年記念芸術鑑賞会」として、寺内タケシとブルージーンズを招いて行われた。

1年生対象の宿泊学習は、1980年から1984年までは白浜少年自然の家や、さしま自然少年の家等の県の施設で2泊3日で実施されていた。内容は多彩で、そば打ち体験、野外炊飯、オリエンテリング、サイクリング、キャンプファイヤー、キャンドルサービスなどを通じて、集団の規律、責任、公共心や友人との心の融合を養うために実施されていた。2年生対象の修学旅行は、往復新幹線を使い、別府、阿蘇、熊本、長崎、オランダ村、太宰府、博多等を4泊5日で訪れていた。3年生対象の社会見学は、国立歴史民族博物館、国立西洋美術館、国立博物館等の県外の文化施設を訪れ、地域の人々の活動を歴史の流れの中で理解することを促した。1980年代に入ると、東京の大学巡



芸術鑑賞会

りのコースも導入され、進学意欲を高める工夫がされている。

1985年にはつくば市で開催された科学万博を全学年で見学した。この年より1年生の宿泊学習は廃止となり、県内の遠足となった。1年生の遠足が、1988年に東京ディズニーランドに変更された。1983年に開園した生徒たちに人気のディズニーランドで、新しい友達と親交を深めてもらう狙いがある。以後、2009年現在に至るまで支持される施設である。

クラスマッチも実施形態に試行錯誤の跡があり、種目や競技場所等も変わっていった。その後1982年より、5月に学年別、9月には全校で、場所も笠松運動公園や水戸市立陸上競技場等の外部施設も使用した実施となり、年2回にわたる盛大な行事となっていました。種目は、校技のバレーボール、それからバスケットボール、ソフトボール、卓球、バドミントン等の球技に加え、リレー、大縄跳びなども加わった。



この時期のクラスマッチ

●国際化教育の推進

留学生受け入れ

1980（昭和55）年7月に、YFU（Youth For Understanding）短期交換留学生ロバータ・コナーさんが来校した。滞在中は書道体験等をしながら、生徒と交流を持っている。生徒たちは、片言の英語でもコミュニケーションをとることができ、「英語を話す喜び」を味わったという。のちにロバータさんから手紙が届き、「夏休み中に日本滞在中の経験をもとに『日本の学校とアメリカの学校』という研究をまとめたが、もっと日本の文化について皆さんと共に学びたかった」と書かれている。双方にとって、大変貴重な体験となったようだ。

1985年4月から、AFS（American Field Service）留学生を受け入れることになった。これまでも短期の留学生は時々受け入れていたが、このAFS長期留学生制度は4月から翌年2月半ばまで本校生の家庭にホームステイしながら通学するロングステイで、様々な方々のお陰で実現できた。いずれの留学生も本校で日本語はもとより、書道、お茶、お花、武道等の日本文化を特別カリキュラムで学び、生徒参加の行事にはすべて参加し、大満足で帰国するのが常だったようだ。そして、その年の文集『なでしこ』に、1年間の体験について寄稿文を寄せることも定例となっていた。留学生を受け入れたクラスでも、何事にも積極的な彼女たちから大いに刺激を受け、語学学習にとどまらず様々なパワーをもらう生徒が少なからずいたようだ。

留学生の様子や指導については、書道の指導を10年間担当した野内伊三郎先生が寄稿くださったので、そちらに譲る。

AFS留学生の受け入れは、1997（平成9）年4月まで続いた。11か月という長い期間、実の娘と同じように受け入れてくださったホストファミリーの方々にはご苦労も多々あったであろうが、本校の生徒にとっても、教員にとっても、多くの



留学生のセラ・フィッシャーさんと野内伊三郎先生
ことを学べる良い経験となった。

本校で受け入れたAFS年間留学生

- | | |
|--------|--|
| 1985年度 | マーチン・シュイナー（真阿珍・首位那亜）、
カナダ・ケベック州 |
| 1986年度 | ウェンディ・キャンベル（有縁出伊・俠鈴）、
オーストラリア |
| 1987年度 | ジャン・リッピングール（美人・立品
芸瑠）、アメリカ・モンタナ州 |
| 1988年度 | セラ・フィッシャー（世羅・妃紗）、ニュー
ジーランド・クライストチャーチ市 |
| 1989年度 | ニコール・ラブランク、アメリカ：途中
転校 |
| 1990年度 | リンディ・スミス（凜出伊・須美寿）、ア
メリカ・オレゴン州 |
| 1991年度 | イルバ・ニベリエ（伊瑠馬・二辺梨枝）、
スウェーデン |
| 1992年度 | キャサリン・サイクス（笠林・才久寿）、
ニュージーランド・クライストチャーチ
市 |
| 1993年度 | ポーラー・ウィルソン、ニュージーランド：
途中転校 |
| 1995年度 | マリー・アン・カレン、オーストラリア・
パース市 |
| 1996年度 | カレン・ジェイン・サンプソン、オース
トラリア |
| 1997年度 | エマ・カルホン、ニュージーランド |

4回生のセラ・フィッシャーさんは、帰国した後も野内先生と本校クラスメートと交流があり、手紙のやり取りにとどまらず、互いに訪問し合っている。セラさんは帰国後、旅行会社に日本語ガイドとして勤務していた際に、ニュージーランドを訪れた本校の石川豊先生の案内を偶然担当し、「私は水戸の大成女子高で勉強しました」と言って石川先生をびっくりさせている。現在ニュー



偕楽園の梅と留学生

AFS留学生（野内伊三郎先生寄稿文より抜粋）

（野内先生は1985（昭和60）～1994（平成6）年の本校在職期間中、各留学生に、日本語指導と週2時間の書道指導を担当した。留学生名の後のカッコ内は彼女たちの名前の漢字表記で、野内先生ができるだけ原音に近く良い意味を持った漢字で表現したものである。）

私は1985年3月31日里美高校で定年退職、翌日から大成女子高に専任の教諭として務めることになりました。当時はまだ狭いながらも校庭があり、4月8日満開の桜の花びらを浴びながら着任の挨拶をしたことを、つい昨日のことのように鮮明に且つ懐かしく思い出しております。

そのうちその年から預かることになった海外留学生の指導についての相談があり、私は『なでしこ』23号（1994年3月発行）114ページに書いたような次第で、爾後毎年書道を教えることになりました。

書道の授業は毎週1日で2時間授業でした。教室は図書館の一隅。筆・墨・硯・文鎮・下敷き・墨汁・紙などは、泉町に美術・工芸などの専門の店がありましたので、買いました。

言葉の壁はもちろんありましたが、どの子も初めての体験に興味津々で、腕前もかなり上がっていき、最後には力強い筆致で立派に条幅が書けるようになりました。そのうち一番良くできたのを掛け軸にしておみやげにして上げました。セラ・フィッシャーの結婚式によばれてニュージーランドへ行ったとき、案内された自宅に、自作の条幅が掛けてあり、「先生、これ見て」といわれ、涙が出そうになるほど嬉しかったことを思い出します。

また校長先生のご許可を得て、「せっかく日本へ来て覚えた技術なのだから、時々練習するように」と上記の書道用具一式に手本を添えて、帰国際のお土産にしてあげました。

そうそうこんなこともあります。三夜さんの紫陽花の

満開の頃を見計らって、授業を半分にして連れて行って日本の初夏の美しい所を見せてやったりもしました。また彼女たちの帰国はみな2月中旬でしたが、私の最後の授業日の昼食には学校から徒歩2分くらいの近くの「仁平庵」という食堂へ連れて行って、その店の得意の「天ぶらうどん」をご馳走してあげましたが、みな1年近い滞在で日本食になれてきていること也有って、だれも「美味しい、美味しい」を連発していたのでこれも私の恒例行事（私主催のささやかなミニ送別会）の一つになりました。

「仁平庵」の「天ぶらうどん」のあの最後のしめくくりは、日本三名園の一つの偕楽園。歩いて20分くらい。2月の初めにはいつも早咲きの梅花が咲いていました。あのかぐわしい花のかおりを最後のプレゼントにしようと思って、「花に鼻をくっつけるようにして匂いを嗅いでごらん。素晴らしい匂いでしょう。これが日本の匂いですよ、忘れないように思いっきり嗅いで。」

日本各地の高校に分散して学んでいた留学生たちは、最後に東京に集まってから一緒に同じ飛行機で帰国するようです。いつも2月中旬の午前中の上野行きの特急での帰国になることが多く、私もできるだけホームでの見送りにかけつけました。わざわざ水戸駅まで見送りにきてくれた最も親しかった人達との別れに、みな大粒の涙を流しながら去っていった可愛い娘たちよ、いまどうしているだろうか。

里美高校において、ショートステイではありましたが、同じエイ・エフ・エスの留学生を扱ったとき、学校宛に送られてきた資料で、多数の希望者の中から厳選された彼女たちは、必ずしも成績トップとは限らず「3」が混じっている子も多く、作文や面接などを基にして、気立ては優しく、向学心旺盛で、どこへ行ってもたじろがぬしたたかさを持った、しかも個性味たっぷりの子供たちが選ばれてきたのだなと思いましたが、大成のロングステイもやっぱりそうだったと、1年間ずつつきあってきたあの子たちの一人ひとりを思い出しながら、独り合点しております。

ジーランドの高校で日本語教師をしているセラさんは、これまでに数回、修学旅行で生徒たちを引率して日本を訪れているという。

本校生の海外留学

外国人留学生受け入れの一方で、本校生も海外留学に参加している。夏休み等の長期休業を利用した短期留学への参加者が多いが、1年間の長期留学の生徒もいる。アメリカ、イギリス、ニュージーランドといった英語圏以外にも、西ドイツ、フランス等でもホームステイを体験し、国際交流の経験を積んできている。

教員の海外研修への派遣

1980年代後半より国際教育交換協議会主催の海外研修に、本校教員が参加している。ほぼ全員が研修体験記を文集『なでしこ』に寄稿している。各先生が、この経験がその後の教員としてのあり方にどう影響を与えたか自己分析している。

1986年 大畠勝義先生

1988年 鈴木允夫・内田伊与子先生

1990年 照山佳子先生

1991年 真崎節・石井有美先生

1992年 山口裕子・小川石根先生

1993年 鈴木英哉・旧橋昭子・大津雅幸先生

1995年 野沢和弘先生

●家庭クラブ

従来どおりの活動としては、5月の新入生歓迎会、1学期の家庭クラブ週間にはオアシス運動（挨拶の言葉の頭文字をとったもので、オ「おはようございます」、ア「ありがとうございます」、シ「失礼します（失礼しました）」、ス「すみません（すみませんでした）」を日頃から言えるように心がけようという運動）を実施し、同時に1円玉募金を行い、恵まれない人のために茨城新聞社を通して寄付したり、国連身体障害者年にちなみ県内



テーブルマナー講習会

の身体障害者施設を見学したりと、校内に限らない奉仕活動を継続している。また、母の日には「1日お母さん」として、家事その他をお母さんの代わりにやり、お母さんに対する感謝の気持ちを表し、その後感想文を残している。8月には校内幹部研修会を生活センターで実施し、全国大会や県幹部研修会の報告やホームプロジェクトの中間報告、社会勉強のために外部研修として縫製工場等の見学をしている。11月には1・2年生による校内ホームプロジェクト発表会の実施、3年生対象にテーブルマナー講習会（この時期は、中央ビルの伊勢甚ゴールデンホールで実施が定例化）、着付け教室の実施、1月には3年生の反省会、2月にひなまつりを実施して、1年を終了していた。

1980（昭和55）年には、全国高等学校家庭クラブ連盟主催の「全国高校生料理コンクール」に入賞している。

1985年4月から1987年まで、本校家庭クラブが茨城県社会福祉協議会より「児童・生徒のボランティア活動普及事業協力校」の指定を受けた。1986年8月には茨城県社会福祉協議会による県下大洪水の災害救助活動に参加している。

●進路状況

一時期進学者が就職者を上回ったが、ただ単に「大学卒」という肩書きが欲しい進学者が減り、

資格を身につけるために進学する意欲を持つ者が少しづつ増加傾向にあった。薬学部を目指し合格する者が目立つ年があり、また、体育や音楽といった関係の大学に進む者が目立つ年もあり、それぞれが自分なりに将来を見据えた選択をするようになっている。

就職については、手堅い金融関係を目指す者が増え、進路指導部より買い手市場下での就職活動のあり方が示され、意欲的に就職活動を行っている。

●生徒会の活動

前期生徒会は、3大行事の運営を意欲的に行っている。企画、運営管理、プログラムやポスターの作成、演目の時間配分、次回に向けての反省等、先生方の力を借りながらも、主体的に動き、学園全体の盛り上がりに大いに寄与している。一方後期生徒会は、3年生送別会、新年度の予算作成がメインの仕事であるが、その時々の生徒会が思い思いに自主的な活動を行っている。毎朝、全校に向けてその月の目標と注意事項を呼びかける「朝の呼びかけ運動」や、三宅島災害募金の実施等。1987（昭和62）年の学園祭で得た模擬店の収益から、精神薄弱者施設内原厚生園に16ミリ映写機（17万円相当）を寄付している。

●運動部の活躍

バレーボール部は1981（昭和56）、1983年県内の試合すべてに優勝、1983年には春の選抜大会で全国3位の成績を収めた。1986年には9年連続インターハイ出場となり、同年、日中友好青少年交流日本代表として中国に遠征し、活動の範囲を広げた。また、毎年多くの部員が、県バレー ボール協会より優秀選手として表彰を受けている。

バスケットボール部は、体育館内ではなく校庭での練習を続け、少しづつ力をつけている。

長年2回戦突破が目標であったが、1988年の新体育館の完成により練習が室内でできるようになり、県大会地区予選でベスト8入りを果たした。

卓球部は部員不足に悩みながらも年間を通してほぼ休みなく練習をし、技術向上に努めて県大会出場を目指し、1989（平成元）年県新人戦で団体でベスト8に入賞するまで力をつけている。

軟式庭球部は、1983年には県大会でベスト32に勝ち上がったが、それ以降は県大会出場を目標に、スポーツセンターでの練習に励んでいる。新体育館が完成すると旧体育館にテニスコートができる、練習環境が格段に向上した。

体操部は、関東大会出場を目指し日夜練習に励んでいる。1987、1988年には県高校体操優秀選手賞受賞者が出ている。

水泳部は創部以来、毎年インターハイや国体に出場している。1986年には国体平泳ぎで個人3位となり、士気もますます高まっている。

ダンス部は、始業前と放課後の基本レッスンに加え、創作、衣装作りと内容の濃い活動をしている。そのかいあってその素晴らしい演技が認められ、1981～1983年および1985、1987年に、全日本女子体育実技研究発表会で日本一に輝き、ドロシィ・エインズワース賞を獲得している。1983年には雑誌『セブンティーン』より取材を受け、また、テレビ取材も受けている。1987年に中国のスポーツ少年団と交流し、1988年日本代表としてドリルチーム世界大会（東京で開催）に出席。1989年には再び日本代表としてドリルチーム世



ダンス部が世界3位に

界大会(名古屋で開催)に出場しダンスプリシジョン部門で3位となっている。

陸上競技部は1985年茨城県女子駅伝大会で5位に入賞。1986年走り高跳びでインターハイ出場および1987年水戸地区優勝、1988、1989年100mハードル、槍投げで関東大会に出場している。

バドミントン部は県大会でベスト8に入るなど検討しており、関東大会に毎年出場できるように張り切って練習し、1988年に念願を果たしている。

バトン部は1980、1981、1983、1984年にマーチングフェスティバルやバトントワリング茨城県大会で金賞を受賞し、関東大会に出場している。1980年代後半は部員が少なく、各種コンテストに出場することができなかつたが、水戸黄門祭りや日立製作所工場の運動会等の周辺地域のイベントに参加し、1985年には筑波科学万博で演技を披露している。「笑顔で明るく楽しい部」をモットーに頑張っている。

剣道部は1979年創部で、2年目の1980年に県大会に入賞するという快挙を成し遂げている。その後、1985年県大会3位を獲得している。1989年には水戸地区では最強のチームとなっている。

ボーリングは部組織ではないが、1989年に小沼さんが関東地区ボーリング選手権大会に出場し、6位に入賞している。

●文化部の活躍

JRC部は、各種募金活動、夏休み赤塚駅での冷水サービス、あけぼの学園の行事の介助、年末の老人ホーム清掃、校内外合宿等をメインに活動



バドミントン部が関東大会に出場

している。1981(昭和56)年より手話の習得に取り組み、実際にろうあ者の方々と手話で話をする機会を持ったり、1987年には他校JRC部とともにフィリピンJRCと交流する機会を得て、活動の幅を広げている。

吹奏楽部は、1987

年県コンクールにて

2部門で銅賞受賞、

1988、1989(平成元)

年には2部門で銀賞

受賞。1989年茨城



吹奏楽部の模範演技

県マーチングフェスティバルで金賞を受賞し関東マーチングフェスティバル大会に出場。毎年開催する定期演奏会を中心に、朝夕練習を継続している。

演劇部は、1989年に第3回茨城県高等学校演劇祭に第3学区A(水戸地区12校参加)代表として出場し、見事に優秀賞を受賞した。日頃は、柔軟体操、発声練習、ストップ・スローモーション、空間構成、寸劇等の練習を積み、技術や表現力の向上に努めている。

数学部は部員が一人になった年もあるが、顧問の児玉先生の勧誘活動で一気に9名に増え、存続の危機を脱し、地道に数学の面白さに没頭している。学園祭での催事も工夫を凝らし、事前に綿密に設計した手の込んだ迷路等で大好評を得た。

茶道部は週に2回、お点前や礼儀作法の練習をし、月に1回お茶会を開いている。和菓子も食べられるし女性としてのたしなみも身につくので、一石二鳥と部員が語り、和気あいあいと活動。学園祭や私学祭でも、着物を着てお点前を披露している。

生花部はほとんどが初心者で入部してくるが、季節の花を用い、先生に指導を受けながら楽しく生けている。家に帰って復習をするなど、腕を上げるために個々人が努力し、1年もたつと多くの花を生けられるようになっている。

コーラス部は少ない部員数に加え、掛け持ち部員も多いながらも、同窓会なでしこ会総会や、3年生を送る会、学園祭での発表を目標に、オペレッタに挑戦したりしながら練習している。1989年の毎日新聞社主催茨城県音楽コンクール合唱部門で、優良賞を受賞している。

園芸部は、花壇の手入れ、水やりのほか、珍しい草花を育てて展示したりと、校内の美化と豊かな情操の育成の一助となっている。

考古学部は、1984年より頻繁に『なでしこ』に研究成果を掲載している。1984年「古墳の研究」、1987年「那珂国造と愛宕山古墳」、1988年「水戸・勝田の遺跡」、1989年「水戸八景巡り」。また文集『あけぼの』の作成も手がけている。

理化部は、薄層クロマトグラフによる食用色素の研究や実験解説ビデオの作成などのテーマで活動を行っている。ビデオ作品「自由落下運動の測定」「重力の加速度による単振動の周期の測定」の2本を仕上げている。

生物部は、八幡宮や千波湖といった身近な環境の生物の観察に始まり、夏休みは尾瀬等で湿原植物観察を行い、また、顕微鏡での生物観察、プランariaの飼育と再生実験など、多彩な活動を意欲的に行っている。

美術部は、普段は個々に制作活動を行い各種コンクールに出品したりしているが、芸術祭には部員全員で巨大壁画を制作したり、部員の作品をまとめて作品集を制作したりしている。

『校内ニュース』の発刊

1979（昭和54）年より、『校内ニュース』が発刊されるようになった。主に、部・クラブ、その他各種校外コンクールにおいての本校生の活躍の様子を全校生に紹介し、学校活動の理解を深め、学園の仲間意識や自分たちの誇りを高めることを目的として発刊された。

スキー教室の実施

1981（昭和56）年より、冬休みを利用して長野県の菅平高原スキー場にて、希望者を対象にスキー教室を実施するようになった。事前に校内で指導や体力づくりを経ての実施で、概ねがもなく、各自の目標を達成できている。

校内弁論大会の実施

1983（昭和58）年より校内弁論大会を学年別に実施している。優秀作は校誌『なでしこ』に掲載し、また校内選考で選ばれた原稿をNHK「青年の主張」に寄せ、審査を通った生徒が茨城県大会に出場した。このうち1983年11月の大会には2名の生徒が審査を通過し、そのうち3年生の高野さんが特別賞を受賞している。

第3代校長に額賀良一が就任

1984（昭和59）年7月、高齢の額賀修校長が第一線から引退し、額賀良一先生が校長に就任した。額賀良一校長のもとで、前校長時代にあった新校舎建設の計画が具体化していった。

新制服の採用

1985（昭和60）年4月に、冬の制服に新しいデザインを採用した。明るい花紺無地のブレザー、ベスト、ボックスプリーツスカートの三つ揃いで、白いワイシャツにえんじのリボンを襟元



5代目の制服

に付けた。

●施設設備の充実

1985（昭和60）年3月、衛生看護科が使用している第八校舎を改築し、同年12月には木造の5号館と9号館を撤去。翌年3月には鉄筋3階建の5号館が竣工した。この校舎には、給湯設備があり明るい調理実習室を配しており、これまでの調理室と合わせて授業の同時展開ができるようになった。さらに、和洋中華の食器を全面的に新しく整えるなど、家庭科の設備も一段と充実した。

また、1986年12月には理科実験室を中心とした7号館が完成した。実験室は、生物、科学、物理の3室に分かれています。それぞれにプロジェクトが備えられ、自動式のスクリーンにより視聴覚を通しての教育が有効に展開できるようになった。また、写真用の暗室や機材を揃えるなど、理科教育の充実を図る設備が整えられている。

1988年度には図書館の全面的な見直しを行った。その結果、開架式の書棚を大幅に取り入れた図書館に模様替えをした。ブラウジングコーナーの設置、大型掲示板の取り付けなどにより、図書館利用が一段と便利になった。

さらに、時代の要請に沿う形でOA機器が導入され、1989（平成元）年には校務の中に情報処理係が設けられた。試験問題の作成や採点処理をはじめ、生徒の個別情報の管理など、その他多方面にわたって利用され、事務処理時間の短縮など、校務に変化が見られるようになったのはいうまでもない。

近代的な設備を整えて建てられた校舎は、学園の成長と発展を現しているようであった。それは、3代にわたる校長のもと、着実に創立以来の女子教育が理想に近づいていくようでもあった。

●校旗の新調

1986（昭和61）年3月1日、第38回卒業式が

挙行された。その席上、卒業記念として新しい校旗が学校に寄贈された。最初の校旗が、現在の天皇が皇太子として誕生された記念事業として、1934年1月に作成されたことは既述のとおりである。それ以来、戦争、復興、発展の52年の年月を学園とともに歩み続けた。しかし傷みが激しくなったため、この年度の卒業生が2代目の校旗を作成することを決めて、晴れの卒業式の場での寄贈となったのである。



2代目の校旗と額賀良一校長

●生徒の様々な活動、表彰等

1980（昭和55）年には、全国青少年読書感想文コンクール県大会において、1年の杉山さんが優秀賞に輝いた。

1981年、日本書写教育会主催の第24回全国硬筆作品展において3年生の大越さんが最高賞の郵政大臣賞を受賞した。この大会は規模が大きく、



硬筆で郵政大臣賞（『大成学園新聞』第44号）

全国より6万点余の応募があり、これまで毎年入選はしてきたが、最高賞を受賞したのは快挙であった。

●卒業生の動向

多くの卒業生が各方面で活躍中であるが、この時期に新聞紙上で話題になった卒業生がいる。

1974（昭和49）年卒の飯野さんは、青年海外協力隊員として1984年よりバングラデシュに派遣され、現地で2年間生活改善普及員養成学校の指導者として活躍する予定であるという。

1975年卒の菊地さんは、県内の建築設計事務所に勤務するキャリア5年の二級建築士で、すべての図面をこなし、10名の社員の中の紅一点で頑張っている。

1924（大正13）年卒の村井長子さんは、戦後間もない1949年の混乱期に民生委員活動に入り、親身になって不幸な家庭の相談に応じた。34年間の愛の活動に対し、厚生大臣表彰を受けた。

●同窓会活動

同窓会なでしこ会の発足以来、毎年11月に総会を主に校内、時には外部の会場で実施してきた。年々新しい校舎に代わり外観を変えていく母校も、校内に入り、変わらぬ恩師や職員そして後輩である在校生とふれあい、大成時代の思い出や今の様子を伝え合い、共に校歌を唱和するうちに、お互いに「誠実・協和・勤勉」のもとに過ごしてきた同じ「なでしこ」としての親しみを感じ、温かい気持ちで母校を後にしている。

この時期のなでしこ会役員

会長 根本八重子

副会長 安達一枝 横川みのる 田所タケ

理事 高木よし子 鈴木智恵子 森しげ子 寺門美

津子 大島真知子 小室キミエ

監査 細川房子 成田和子

事務局長 谷口紀子

国際障害者年である1981（昭和56）

年の学園祭には、同

窓会の発案でチャリ

ティ即売会が開か

れ、戦争直後のバ

ザーのように多くの

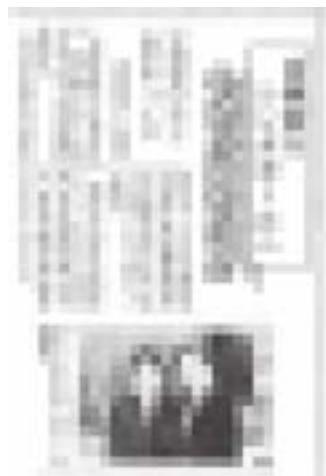
人々で賑わった。多

くの卒業生が自宅に

眠っているまだ使え

る品々を持ち寄り、

日曜日の午前10時



なでしこ会の活動（1981年12月2日『いはらき新聞』）

から売り出し、お昼にはほとんど売り切れるほどであった。この収益金9万5,950円は、全額茨城新聞社を通じて「希望の翼」に寄付している。なお、このことは、『いはらき新聞』に記事として掲載された。

1989（平成元）年度より、同窓会報『なでしこ会会報』を発行することとなった。学園創立80周年の節目の年に、同窓会の動きや母校の様子、会員の消息などを知らせるための広報誌である。これ以後、毎年卒業生の同窓会入会式に合わせて、2月に発行されている。

●その他の出来事

1987（昭和62）年5月に「バイシクルエイド」が来校した。

「バイシクルエイド」とはイギリス人によるチャリティ活動で、4名で1つの自転車のチームをつくり、1986年秋から1987年秋まで1年間かけて4大陸（オリエンタルルート、アメリカルート、アフリカルート、オーストラリアルート）をそれぞれ走破し、世界平和と第三世界の飢餓・貧困への支援（自助のための長期的援助）を呼びかけたもの。日本には長崎から上陸し、約6週間かけて札幌まで日本を縦断する途中、通過県の県知事を訪問し、チャールズ皇太子のメッセージを伝え、

募金活動（10円玉募金）を実施した。20代前半の男性2名女性2名からなるこのチームが、県内のボランティア団体の呼びかけで本校を訪れ、先生方、生徒会役員、JRC、HR委員、吹奏楽部、ダンス部、留学生のリッピングールさんが参加した。JRCと生徒会役員が10円玉募金を手渡し、彼らのスライドを見たり、ダンス部の発表を見てもらったりして交流した。生徒会役員がライダー4名の胸になでしこバッジを付け、固く握手を交わした後、興奮冷めやらぬ生徒たちに囲まれ、記念撮影等を行った。最後にライダーたちは校庭を自転車で1周し、本校を後にして福島県いわき市に向かって6号国道を走っていった。



バイシクルエイドのライダーたち

●教員の活動

1980（昭和55）年4月に本校教諭の鈴木茂乃夫先生は、長らく県教育界で活躍した功績により、勲5等に叙せられ、双光旭日章を受章した。先生は歴史の大家として知られ、著書も多く世に出している。その際に先生は「教育は私の生涯の仕事です。これからも生徒たちが好ましい人間に成長する努力を、一生懸命助力していきたい」と述べている。

●大成女子高等学校父母の会の発足

1982（昭和57）年、以前から保護者会という名称だった生徒の父母の集まりを、大成女子高等

学校父母の会と定め、同年5月の総会で初代会長として大網義明氏が承認された。学校と家庭の位置づけを明確にし、連絡、相互理解、協力が約束された。1983年には地区懇談会が実施され、各地区独自の切実な問題等を



父母の会会報

学校と保護者双方で解決するために役立てられた。また、4年後の1986年10月には、父母の会の役員をした方々が子どもの卒業後も学校に協力する趣旨で大成会を組織し、活動を開始した。さらに2年後の1988年5月には、卒業生全員の父母が参加する大成女子高等学校後援会が結成された。こうして、保護者と学校が組織的に情報交換をしながら、より良い学校にするために団結しようという協力体制が整ったわけである。

●体育館の新築

従来の体育館が老朽化し使用に支障を来すようになってきたため、創立80周年記念事業の一環として、新体育館の建設を計画した。当初、旧体育館の敷地に予定していたが、規模的に合わず、校庭に建設することになった。

これが現在の体育館で、地下1階、地上2階の構造で、延床面積3,354.47m²、外観はピンクのタイル貼りである。細部にも様々な工夫が凝らされている。床材は体育館に最適の桜材で下部にスプリングを内蔵し、膝腰への負担を軽減している。2階ステージは可動式で、面積を最大限に活用できる構造。音響設備も充実し、様々な行事への対応が可能である。これまで全校生徒が集まる広い施設がなく、卒業式は県民文化センターを利用していたが、竣工後最初の1989（平成元）年の卒業式よりこの体育館を使用することになり、久しぶりに校内で実施できるようになった。また、

1階には45名が一斉に使用可能なトレーニングルームも完備している。この体育館で生徒たちは授業や部活動にいそしみ、健康的な心身づくりに役立てている。

体育館は1987（昭和62）年12月に着工、翌1988年11月に竣工した。同月28日に竣工式、29日にアトラクションを実施した。

新体育館竣工に伴い、創立者胸像前庭が改造された。

なお、旧体育館は取り壊され、その跡地にテニスコートが造られた。



竣工した体育館

創立80周年記念事業

創立80周年記念式典は、前年に竣工した体育館において、1989（平成元）年11月7日午前10時30分より200名余の来賓を迎える全校生徒・教職員参加のもとで挙行された。校長式辞で、今日に至った先輩方の尽力と功績を称えるとともに、「80周年を節目とし新たな出発の日としたい」と、将来への期待と抱負が示された。理事長、父母の会会員の祝辞に続き、生徒代表が挨拶し、歴史と伝統に輝く大成女子高等学校で学べる誇りと今後の発展に向けての誓いが述べられた。続いて勤続20年以上の22名の教職員が表彰された。謝辞として39年間奉職された潮田先生が戦後の寒い教室での思い出と今の整備された教育環境を比

較し感慨の深さを述べられ、最後に本校を象徴する校歌を斉唱の後、厳かに慶びを込めた記念式典を終了した。

式典に続き、会場を中央ビル伊勢甚ゴールデンホールに移して祝賀会が行われた。式典に参列された来賓の方々や本校教職員が参加した。華やかな記念の雰囲気の漂う中、集う全員で創立80周年を心から祝い、なごやかな談笑を繰り広げた。



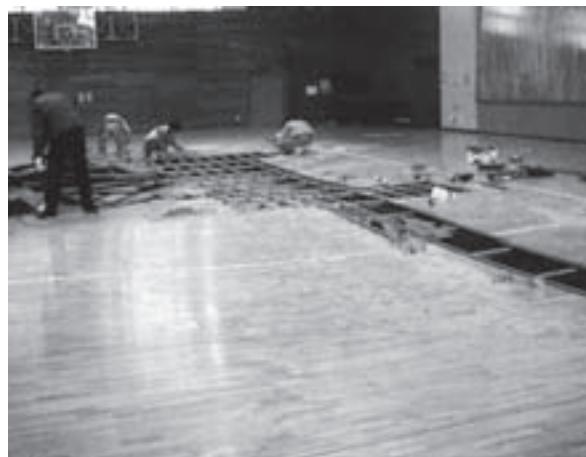
学園創立80周年記念式典

記念芸術鑑賞会

式典2日後の11月9日午後1時30分より、創立80周年記念芸術鑑賞会が寺内タケシとブルージーンズを招いて、体育館にて開催された。式典の厳粛な雰囲気とは打って変わって、ダイナミックなエレキギターのサウンドが交錯する演奏が行われた。ゲストの寺内タケシさんは本県土浦市出身で、5歳の時からギターを手にし、天才的な演奏家として多くの人々に親しまれている。率いるブルージーンズの演奏は、ポピュラーな曲からクラシック、さらには民謡とレパートリーが広く、その演奏は多彩であった。七色の舞台から弾かれる強烈なビートは、体育館のすみずみにまでこだまして、会場を興奮のるつぼと化していく。さらに演奏の合間に織り込む語りは、エレキギターの旋律とともに人の心を魅了し、創立の記念にふさわしい芸術鑑賞会となった。

この時、生徒たちが大興奮の末ジャンプし続け

た結果、竣工1年の体育館の床が沈むというハブニングがあったが、その後無事に修復された。



床の修復工事

●創立80周年記念誌の発刊

これまでに発行された創立70周年記念誌に加え、1979（昭和54）年から1989（平成元）年までの10年間の本校の歩んだ足跡を、文章記述や写真などで振り返り、校史の性格を持った記念誌として作成した。

VI

バブル経済崩壊以降

1990（平成2）年～1999年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

1980年代末には、バブル経済に沸く国民のテンションが頂点に達したが、次第にバブル崩壊に向けての不安定なニュースが舞い込み、1991（平成3）年バブル経済が崩壊し、日本経済は平成不況ともいわれる「失われた10年」に突入する。1991年には湾岸戦争、雲仙普賢岳の噴火、1995年には阪神・淡路大震災、1999年には東海村での臨界事故などが起こった。

また、この頃には女子高校生の間で茶髪ブーム、携帯電話などが出始める。バブル崩壊は経済の崩壊でもあり、固定概念の崩壊でもあったのかもしれない。

教育界では、様々な問題が表面化していた共通一次試験に替わり、大学入試センター試験が実施されるようになった。臨時教育審議会で答申が進められていた「ゆとり教育」が取り入れられ、1989年3月に学習指導要領が改訂された。再び体験的な学習の重要性が主張され、教科の学習内容をさらに削減し、生活科の新設、道徳教育の充実などで、「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」「個性を生かす教育」をモットーとした。また、道徳教育を学校教育の基本にかかわる問題として拡充し、君が代齊唱、日の丸掲揚について、義務づけを強化した。高等学校では1994年より実施され、具体的には、社会科が地理歴史科と公民科に再編されたほか、女子のみ必修であった家庭科を男子にも必修とした。1992年から学校5日制が導入され月1回第2土曜日が休業日となった。また、1995年より第2土曜日に加え第4土曜日も休業日となった。

この頃入学してきたのは団塊ジュニア世代であり、価値観も多様化してきた。いじめ、引きこもりなどの問題も多くなってきたのもこの頃からである。本校でもこれに対応した取り組みを行うこととなった。

●本校の教育

この時期においては、ゆとり教育で授業時間数が削減されたのに伴い、各種文化行事が実施されるようになった。講演会、弁論大会、芸術鑑賞会、映画会、ダンス発表会等、生徒の様々な個性を開花させるために多彩な内容で実施し、心豊かな人間の育成を目指した。

1994（平成6）年には普通科の見直しが行われ、従来のA（専門学校、就職）・B（短大進学）・C（4年制大学進学、Bから2年次以降選択）から教養コース・進学コース・特別進学コースに改称された。教養コースは、専門学校・就職・在家庭の希望者に沿う教育内容を念頭に置き、まんべん

なく広く全教科を学ぶと同時に、家庭科を充実させ、商業では情報処理を履修した。進学コースは短期大学を希望する者に向けて、英語を強化している。特別進学コースは、4年制大学を希望する者に向けており、志望分野別に数学や外国語等、入学試験対策に力点を置いた授業を展開するようになった。

さらに1999年には多様化する生徒たちの進路に対するニーズに応えて、進学コースの見直しが行われた。教養コースが廃止され、進学コースは2年次より科学・医療系、国際文化系、日本文化系、保育・福祉系、ビジネス系のいずれかのクラスを選択し、将来の進路に合わせてカリキュラムが展開されるようになった。

団塊ジュニア世代が入学した1990年代初めには入学者数は約650名ほどであったが、その後減少し後半には約350名ほどになっていった。

■英語助手の採用

1994(平成6)年より話せる英語を目指したオーラルイングリッシュの導入にあたり、外国人の英語助手(ALT: Assistant Language Teacher)を交えた授業が始まった。本校のALTの先生は、得意分野を持つ人材に恵まれ、英語以外の面でも積極的に生徒とかかわり、本校生のパワーアップに貢献してくれている。

■研究紀要の創刊

学園創立80周年を翌年に控えた1988(昭和63)年に、かねてからの懸案であった記念事業としての式典、記念誌の発行だけで終わらせるのではなく、何かほかの事業をという話が持ち上がった。そして、「研修・研究の紀要を発刊し、これを継続事業として推進していこう」ということに学校の方針が決まった。

それを受け、紀要編集準備委員会が発足した。その後紀要編集委員が任命され、委員会が活動を

始めた。9名のスタッフで委員会は構成され、当時社会科の重鎮であった軍司邦夫先生を中心に精力的に先生方に原稿依頼等を働きかけ、また何度も会議を開き、先生方から提出していただいた原稿を基に、約2年の歳月を要し1990(平成2)年3月10日に記念すべき創刊号発刊の運びとなつた。「……教育の理念は変わらなくても、教育内容は時代とともに少しずつ変わっていきます。従って研修ということが、教育にたずさわる者にとって常に求められているゆえんであります」という教員である以上誰もが胸に刻んでおかなくてはならない言葉で締めくくられている、当時の額賀良一校長の「紀要の発刊に寄せて」が巻頭を飾った。実践研究・資料・教材研究などが4篇、海外研修講座記録が4篇というのが、栄えある創刊号の内容だった。

1994年発行の第3号より、2年に1度の刊行となり、2004年発行の第8号よりホームページでの公開も始まった。さらに、2006年の第9号より完全にホームページのみの公開となり、現在に至っている。



紀要バックナンバー

■教育相談委員会の設置

全国的に「不登校」や「いじめ」が社会問題化し、若年層の凶悪行動が増加傾向を示す中、本校においても従来の生徒指導だけでは生徒・保護者の要望に応えられない状況が、特に平成に入って

から顕著になってきた。そのような時代の要請に応える形で本校の教育相談委員会も校務分掌の一環として外部より小松正先生をお招きし、1998(平成10)年に発足した。

当初本校の事情をよく理解しているという理由で、卒業生の教員が各学年から1名ずつ抜擢され相談係として配備された。しかし、1・2年に偏つて問題を抱える生徒が出たため、2年目からは学年付きを取り払い、どの学年にも対応する係として再スタートを切った。相談室(2部屋)を開設するにあたり、カウンセリングを日本で最初に学校教育に導入した茨城キリスト教学園よりご指導・ご助言をいただいた。さらに、本校全職員へのカウンセリングの浸透の意味もあり、講師として茨城キリスト教学園高等学校校長・井坂光宏先生をお招きし、研修会を実施した。また、額賀良一校長の、これからは教育相談が重要になってくるというひと言により、毎年各学年より1名ずつ研修会に参加して、報告会も実施した。

当初開店休業状態であった相談室も、人間関係(友人関係)での悩みによる相談が残念ながら以後年を追うごとに増加した。2007年度は、この種の相談件数が全体の6割を超えるまでになった。現在は専門のカウンセラーとして外部より成瀬元夫先生を招聘し、坂本先生の後を継承した菅谷先生を中心とするカウンセリング係と、生徒の心の強さ向上を図る指導を実践するライフスキル係の2本立てで、教育相談委員会は構成されている。これらの先生方の努力と、養護教諭・学年との連携により教室に戻ることができる生徒も増加してきた。

●進路状況

1990年代の進路の特徴は、全国的に進学者の増加と就職者の減少であり、本校においても同様であった。バブル崩壊後1993(平成5)年頃からいわゆる「就職氷河期」に入り、就職率が40%

台から20%台に急落した。就職が難しくなっていること、モラトリアム的風潮が強くなってきてること、団塊ジュニア世代を対象とした大学創立ラッシュの影響も考えられる。進学率は1990年代初期の40%台から後半は60%台へと上昇した。

この頃の本校の進路指導は、1・2年生対象に卒業後の進路について考える機会を提供する進路ガイダンス、実際に企業や学校の担当者が本校生を対象に説明を行う進路懇談会、いよいよ進路が決まった3年生を対象に、好ましい未来のための心構えを啓蒙する講演会などを組み合わせて、個性や適性に応じたきめ細やかな進路指導が実施されていた。



進路ガイダンスの様子

●学校行事

3大行事

1990年代は、撫子祭(学園祭)、芸術祭、体育祭の3大行事が規則的に実施されている。全体的な準備は生徒会を中心とした実行委員会が行ったが、どの行事も3年に1度の実施であるため生徒全員にとって最初で最後の経験となり、抜けがないように準備をするのに苦労したようだ。前回の実施ビデオを見たり、先生方を質問攻めにしたりしながら、全員で協力して成功させていた。クラ

スや部活動などの個別の準備に関しても、生徒たちの感想文から、高校生活のうちのたった1度の実施だからこそ本当に皆で協力して頑張った、とある。思い出深い経験として、生徒に記憶されているに違いない。

学園祭は1990（平成2）、1993、1996、1999年に実施された。1990年の実施は名称を「撫子祭」と変更し、9年ぶりの一般公開となった。

この時期の学園祭では、体育館において東京・共栄学園を招いてのバレー・ボール招待試合、父母の会の和太鼓演奏、ALTのマクレイン先生のバリトン独唱、留学生のカレンさんと桜井先生による琴の合奏等があり、好評を博した。



撫子祭「占いの館 魔血呼の森」

芸術祭は1991、1994、1997年に実施された。芸術週間を設け、校内、校外の様々な人たちの努力の結晶を鑑賞する行事となっている。校内展示には、書道の部、デザインの部、写真の部、美術の部があり、団体と個人が参加した。また、校内発表には、1年生の合唱発表会でメダルを獲得したクラスによる演奏、コーラス部、個人器楽演奏、ダンス部、バトン部、演劇部の発表があった。

期間中、プロの芸術家による芸術鑑賞会が主に県民文化センターで催され、生徒たちにとって貴重な機会を提供している。なお、芸術鑑賞会は毎年実施されている。

体育祭は、1992、1995、1998年に実施された。

水戸市立陸上競技場が主な開催場所だが、1998年は雨天のため本校体育館での実施となった。毎回クラス対抗戦やブロック対抗戦と異なる対戦方法をとったが、リレー、綱引き、大縄跳び、ムカデ競走、キャタピラ等、皆が力を出し合い、大盛り上がりとなっている。仮装行列も応援合戦も各チームが工夫を凝らし、その年の話題の人や映画なども取り込み、準備にも力が入った。



体育祭

その他の行事

クラスマッチは、1980年代から1991（平成3）年までは、春の学年別と秋の全体の年2回実施していたが、1992年より年に1度の実施となっている。1年生は本校体育館で、2・3年生はそれぞれ外部会場での実施であった。各生徒が、この行事を通じてクラスの団結が強まることを実感している。



クラスマッチ



1年生 東京ディズニーランド

旅行・遠足については、1年生の遠足は主に5月に実施され、新しい環境で新しい友人をつくるための良い機会となっている。東京ディズニーランドが人気であった。2年生の修学旅行は、1990年より片道のみ航空機を使い、1991年からは九州を鹿児島まで南下し範囲を広げた。長崎平和公園の原爆資料館を訪れるにあたり、事前に映画「この子を残して」を見たり先生方より様々な話を聞いて学習していたが、実際に平和公園で様々な資料を見てショックを受けいろいろと考えを深める生徒が多かった。学びの要素のあるまさに修学旅行であった。3年生の社会見学は、年によって行き先が異なっていたが、1993年3月開館の江戸東京博物館、同年4月開園の東武ワールドスクウェアをいち早く取り入れるなど、学びとともに一般社会の話題性も重視しつつ実施している。



2年生 九州



予餞会

卒業生を送る会は、1995年より「予餞会」と名称を変更し、時折ゲストを招いたりして、卒業生と過ごす楽しい時間としている。1995年には、吉本興業の若手お笑い芸人5組を招いた。今では有名になっているココリコ、ペナルティ、DonDokoDon等も、この時来校している。

●茨城県産業教育フェア

文部省等が主催する全国産業教育フェアが、1991（平成3）年より実施されるようになった。これは、全国の専門高校生の作品の展示等各種行事により、産業教育に対する理解・協力を促し、高等学校における産業教育の活性化を図るのが目的であった。茨城県では翌1992年より県教育委員会等の主催で実施し、本校の家政科および衛生看護科の生徒も、この催事に参加するようになった。



衛生看護科 血圧測定

家政科は、被服製作部門からはコンピュータミシンを使っての巾着作りの体験コーナー設置やファッショショーンショー、生徒作品の展示、食物部門からは手作りクッキーの販売等を行った。

衛生看護科は、血圧測定体験コーナーの設置や、人形を使っての心肺蘇生体験ショーなどを行った。

●国際交流活動

留学生を長期間受け入れてくれる家庭を継続して保持することは難しいため、この頃の本校ではAFS等の長期留学生受け入れとは異なる方法を取り入れ、生徒および教員の国際的な経験値を上げることに努めている。

その一つは1996（平成8）年に専用線接続したインターネットを利用した国際交流活動で、1998年より様々な試みを始めている。

世界の水質を調査公表し合うAT&T主催の“Global Water Study”や、New York City University主催の“School Link”といった国際的なプロジェクトに参加し、各国の生徒たちが同じテーマに沿って情報交換をし、語学だけにとどまらない幅広い交流を行った。

また、タイの中学校のバスケットボール部顧問



“School Link”の交流相手からの贈り物を開ける生徒たち

の先生から古いボールやユニフォームの寄付をしてほしいというメールが届き、本校バスケットボール部員が英語で書いた手紙を添えて、ボールやユニフォームをタイに発送することもあった。タイの中学校側からは感謝状と本校のユニフォームを着た部員の写真が送付され、生徒たちに少しではあるが身近な国際協力の実例を示すことができた。

2000年には、4月と8月に短期留学生を受け入れた。春休みからゴールデンウィークまでの1か月間、すでにそれ以前から英語の授業でも電子メールやFAX通信で交流していたニュージーランドのクラヌイ高校から1名の生徒を受け入れた。この生徒はすでに日本語を勉強中だったため、生徒たちにとても比較的コミュニケーションをとりやすかった。夏休みにはカナダの中高合同女子バスケットボールチームが交流試合のため本校を訪れ、本校バスケットボール部生徒の家庭に1週間滞在した。いずれも授業や校内外の活動に参加し、また、ホストシスターとディズニーランドに行くなど、楽しいふれあいの時を過ごしている。

●生徒会の活動

生徒会は、生徒参加行事の企画実施のほか、様々な活動をしている。1990（平成2）年には、生徒会新聞『PINK FRESH』を発行、また、運動部壮行会で三三七拍子を行い好評であった。そのほかにも、服装班がリボンやカバンの自由化を実現させたり、被災地への募金活動も行っている。1994年には、第二学区高等学校生徒図書委員会研修会に参加し、読書会で他校生徒と意見交換をするという貴重な経験もしている。

●運動部の活躍

バレーボール部は、1990（平成2）年には県大会に優勝し全国大会出場を果たしているが、その後しばらく県2位であった。1997年に14年ぶり

に春の高校バレーに出場し全国ベスト8となって以後は、1998年に8年ぶりにインターハイに出場しベスト16、1999年の春の高校バレーでは全国準優勝を収めるという快挙を成し遂げた。また、1992年には県主催による韓国遠征、1994年には同じく県主催の韓国との交流試合に参加している。



バレーボール部 韓国との交流試合に参加

バスケットボール部は、水戸地区大会優勝の常連であり、県3位がこの時期の最高記録。1996年にはアメリカ遠征、2000年にはカナダチームの受け入れと交流試合も行っている。

卓球部は、個人では水戸地区で優勝、団体も優勝という記録を残している。インターハイ出場が目標である。

陸上競技部は、各種目で個人で活躍する選手がおり、水戸地区で、走り幅跳び優勝、3000m1位、槍投げ1位、砲丸投げ1位、いわい将門マラソン1位という成績を収めている。一方団体でも、ひたちリレーマラソン1位は快挙である。部員の加藤さんはホノルルマラソンに参加し、年齢別2位となった。

水泳部は、1991、1997年以外は、全国大会に出場し続けている。1999年には、矢口さんがパラリンピック全国大会で優勝し、日本の頂点に立った。また、1992年にはオーストラリア、

1993年にはシンガポールに遠征している。2002年のインターハイ指定校に選ばれ、部員一同、乗りに乗っている。

ダンス部は、1990年には3年連続世界大会に出場するという成績を収めた。以後は、1993、1994年ともに全日本高校大学ダンスフェスティバルに入賞し、近隣地域のイベントにも参加し、創作を意欲的に続けている。

バドミントン部は、1991、1994、1998、1999年に関東大会に出場している。それ以外の年も、水戸地区では優勝もしくは上位に入賞している。常に県大会優勝を目標に、練習に励んでいる。



壮行会で激励されるバドミントン部員たち

体操部は、ほとんどの生徒が高校入学とともに始める初心者で、一瞬の油断が大けがにつながるため、気を引き締めて練習している。1993年に関東大会に出場しており、それ以外の年は県で3～6位を保っている。1999年には部員数4名と苦戦中であるが、県外大会出場を目標としている。

ソフトテニス部は、1993、1994年には関東大会に出場し、そのほかの年も水戸地区優勝、県大会4位などの結果を残している。他校と合同でプロの指導を受け、実技講習会や審判講習会に参加して二級審判のライセンスを取得するなど、技術力、判断力、体力を磨き、総合的な実力アップに努めている。

剣道部は、1990年代前半は、水戸地区優勝、県大会個人4位、3段に2名合格など、好成績を

収めている。後半は部員数の不足に悩みつつも、各選手が格闘技としての厳しさ激しさと、広くてスプリングのきいた床の環境的に恵まれた練習場のありがたさを日々実感しながら、稽古に励んでいる。目標は関東大会出場。

バトン部は、1990年代前半は、県マーチングフェスティバルソロ優勝、関東大会金賞、県大会チーム金賞、優秀賞など、大きな大会で活躍してきた。後半は部員数減少に悩みながらも、校内外のイベント参加を中心に、楽しく練習に励んでいる。

部組織以外でも体育関係で生徒が活躍している。ボーリングでは1990、1991年と小沼さんが活躍し、全日本ボーリング選手権大会女子4位になっている。馬術では、1991年に中島さんが国体に出場している。



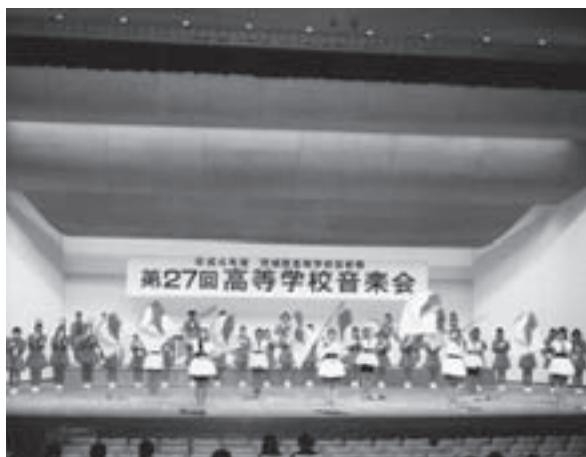
イベントに出演するバトン部員

■文化部の活躍

JRCは、1990（平成2）年より日本テレビ「愛は地球を救う」に参加。継続して行っているのは、あしなが募金、赤い羽根共同募金等の募金活動、赤塚駅の冷水サービス、月に1度の「校内クリーン作戦」など。校外で他校JRCと共同で行う活動も多く、交流も盛んである。1995年には福祉事業団主催の研修に参加し、ボランティアについて学ぶ機会も持っている。ほかに、海の日に大洗海岸清掃に参加したり、新しいお手伝い先も積極

的に開拓しており、部員自らが「縁の下の力持ち」と称する地味な活動ながら、意欲的である。

吹奏楽部は、吹奏楽部門とマーチング部門両方の活動を行っており、双方とも好成績を収めている。吹奏楽部門では、県コンクールおよび東関東コンクールで金賞、銀賞を獲得。マーチング部門は1991年より1998年まで連続して関東大会出場を果たし、銀賞3回、銅賞1回を獲得している。コンクール出場以外でも、毎年行っている定期演奏会、校内の撫子祭、茨城女子短期大学樹林祭のほか、水戸芸術館の五軒サマーナイト、1998年のゆうあいピック等、様々なイベントにも参加して好評を得ている。



茨城県芸術祭での吹奏楽部員

史学部は史跡巡りツアーを中心に活動。1997年からは茨城県の歴史に関する冊子『史林』の作成に取り組んでいる。「自分が住んでいる地域の歴史」という大きな主題に基づき個々がテーマを決め、探求し文章にしている。学園祭では、皆で1テーマに共同で取り組み、研究成果を展示している。

茶道部は、校内の撫子祭を中心にして、茨城県産業教育フェア、水戸市産業祭等、外部のイベントにも参加している。抹茶が好きな人、和菓子が好きな人、茶の湯を趣味としている人等、動機は様々なながら、たしなみのある女性になるために、



茶道部の練習風景

地道な練習を重ねている。

コーラス部は主に NHK コンクールを目標に活動し、1991 年に奨励賞を受賞している。また、1993 年から 1995 年には茨城県合唱コンクールで銅賞を獲得している。1990 年に全日音研全国大会の合宿に参加して志を同じくする多くの人々と交流するという貴重な経験をした。

演劇部は毎年水戸地区高校演劇発表会に参加している。1995 年には地区 3 位、1996 年には、武石さんが水戸地区大会男優賞を受賞している。

理化部は実験を中心に活動している。授業では扱いきれない教科書に掲載されている実験を順次行っている。学園祭でも、「楽しい化学実験」として、見学者を巻き込んで実験を行っている。

美術部は展覧会への出品を目指し活動し、水戸地区、県展に入賞している。芸術祭にも出品し腕を磨いている。

生物部は、日頃は野外観察や生物飼育（イモリ、タナゴ、メダカ）を中心に活動している。夏休みには尾瀬や清里等に研修旅行に行き、現地で採取した生物等をまとめて展示作品を作成している。

数学部は以前と変わらず難問を解き続けて、学力も精神力も伸ばしている。この時期、名物顧問の児玉先生が退職し、宮坂先生に受け継がれ続いていったが、1995 年を最後に活動を停止している。

写真部は、週に 2 回集まり、白黒写真の撮影、

現像、引き伸ばし等を行っている。夏休みには塩原や山中湖等の景勝地に研修旅行に出かけ、日頃とは違う被写体に挑戦している。

書道部は各種展覧会に向けての作品制作、拓本作り、篆刻等を行っている。展覧会に入選もして成果を出している。

英会話部は 1999 年創部。スピーチコンテストへの参加や他校と合同での研修会参加を主な活動としている。ALT の先生にも協力をいただき、国際人を目指して活動に励んでいる。

マンガ研究部は 1994 年創部。学期に 1 冊の部誌の発行、イラスト展示会、他校との交流を中心に活動している。

パソコン部は 1995 年に同好会から昇格して創部。ワープロソフト、ドローソフト等を使用して文書やイラスト作成、ホームページ作り等を通して、パソコン操作の熟練を目指している。

琴同好会は 1999 年結成。父母の会総会、撫子祭、ひな祭り等の催事に演奏するために練習を重ねている。

新聞同好会も 1999 年結成。学校新聞『大成 NEWS』の発行のために日々校内のすみずみにまで目を向けている。

● 生徒たちの様々な活動や表彰

この時期は、学校を挙げて国際教育に力を入れ始めた影響もあり、海外留学を経験する生徒が増えている。毎年 1 年間の長期留学生を送り出し、また、夏休みを中心に 6 週間ほどの短期留学を経験する生徒も多い。それぞれが学校新聞や文集などで、体験記を発表している。

それらの成果もあり、外部の英語関連のコンテスト等で入賞する生徒も増えている。

放送コンテストで活躍する生徒もいる。1991(平成 3) 年の NHK 全国高等学校放送コンテストにおいて、小室さんが県大会朗読部門 1 位に輝いた。また、この頃佐藤さんも県大会アナウンス部門で

優勝している。1996年同コンテストアナウンス部門において県知事賞を受賞した平本さんは、県代表として全国大会にも出場した。

絵画展においては、愛鳥週間ポスター展、緑化運動ポスター展、交通安全週間ポスター展等に毎年入賞者がいる。県高等学校芸術祭デザイン部門、書道部門も同様で、美術部、書道部の生徒が活躍している。

また、読書感想文全

国コンクール県予選においても、毎年入選者を出している。喜ばしいことである。

1995年、環境美化委員会の生徒と先生方が手入れを続けてきた本校の「花いっぱい運動」が、第23回花と緑の環境美化コンクールにおいて、ダイナミック茨城協会長賞、花き園芸協会長賞を受賞した。5月に種植えから始めて丹誠込めて育てた美しい花壇は、見る人皆の心をなごませた。

1995年、衛生看護科の鈴木さんが中央産業教育振興会特別研究文（全国大会）で佳作を受賞している。



入選作の愛鳥週間ポスター
片根さんの作品



スキースクール

家政科生徒は、自分で縫った浴衣をうまく着られるために着付け教室で和服の着方の基本を学んでいる。その上級者編として、振り袖を制限時間内に鏡なしで自分で着るという「きもの装いコンテスト1994」に、3名の生徒が参加している。事前に校内で練習を重ね、当日はホールの舞台で観客の見守る中での演技となり、ショーとして開催されている。

●同窓会の活動

同窓会は、1990（平成2）年の撫子祭においてもバザー「ハッピールーム」を開催し、売上金13万6,513円すべてを「いのちの電話」に寄付した。この翌年より悩みの電話相談を24時間態勢で受け付けるために後援を求めていた社会福祉法人「いのちの電話」には、卒業生や生徒もお世話になることがあるかもしれないということで、役立てていただこととなった。

この時期は毎年総会が開かれ、初めて同窓会に参加するという卒業生が増えている。また、会報も発行されていた。1995年には、副会長の横川みのるさんが退任し、新たに成田和子さん（1940年卒）が就任した。また、1998年にはなでしこ会結成30周年を迎える、副会長の田所タケさん（1930年卒）が退任し、新たに鈴木智恵子さん（1942年卒）が新副会長となった。

●その他の出来事

毎年冬休みに実施されているスキースクールは、1980年代は長野県の菅平高原スキー場で実施してきたが、1990年代になり常磐自動車道と磐越自動車道が整備されると、移動時間の大幅な短縮が図れる福島県猪苗代スキー場、後半には雪不足のために北上し山形県蔵王スキー場で実施するようになった。初心者から上級者まで、講師陣から丁寧な指導を受け上達している。本校体育科にスキーの元国体選手糸川明子先生がいることも、スキー指導のうえで心強い限りである。

この時期の同窓会役員

会長 根本八重子

副会長 安達一枝 成田和子 鈴木智恵子

理事 荒沢古美子 高堀久子 出沢和子

石川満佐子 石塚きよ

●教員の活動

ALT のマイケル・マクレイン先生は 1996（平成 8）年に、専門の声楽で、水戸芸術館が主催する「茨城の名手・名歌手たち」に出演した。これは、1990 年の開館以来、水戸芸術館が毎年継続している企画で若手音楽家の登竜門として広く知られているオーディションである。また、これに関連して、マクレイン先生は NHK の地方局コーナーに登場して本校の PR をしてくれた。

●事務棟の建設とインターネット専用線接続

1995（平成 7）年に、インターネット専用線接続と学内のネットワーク化を促進・管理するため、鉄筋コンクリート 3 階建の本館を新築し、1996 年 1 月末に竣工した。手狭で IT 化への対応が難しくなっていた 1 号館から事務部門を本館に移した。正門を入ってすぐ右側に位置し、エントランスホール正面のステンドグラスを配したミーティングスペースには、本学園の広報資料等を常備している。2 階の大会議室は 100 名を収容することができ、各種会議や研修に利用している。また、外部からのお客様をお迎えする 5 つの応接室は、窓を大きくとった明るい室内が好評である。現在建物内には、上記のほか、ネットワーク管理室、入試広報室、教育相談室等がある。

事務棟の竣工とともに、本学園がインターネット専用線接続を完了し、パソコン教室、図書室、職員室から利用できるようになった。通商産業省の実験校「100 校プロジェクト」を除くと、この時期にインターネット接続をしている学校は全国でも数校であった。学園のホームページを作成し

世界に向けて情報発信すると同時に、学園に居ながらにして生徒たちの視野を広げ、また、情報モラル等の教育にも役立てている。インターネットを利用した語学教育も始まった。

●創立 90 周年記念事業

創立 90 周年記念式典は、1999（平成 11）年 10 月 7 日 10 時から本校体育館を会場として行われた。

式典に続き、会場を水戸京成ホテルに移して祝賀会が行われた。式典へお招きした来賓の方々や本校職員が参加した。

また、『創立 90 周年記念誌』も発行した。



学園創立 90 周年記念式典

VI 新たな百年に向けて

2000(平成12)年～2009年

●当時の社会情勢と教育を取り巻く状況

バブル経済崩壊後の平成不況、いわゆる「失われた 10 年」の間に、日本の社会は大きな変化を余儀なくされた。企業では能力主義や成果主義が多く取り入れられ、非正規雇用社員の増加が社会問題となった。終身雇用が当たり前でなくなるのと相前後して、年金制度や医療保険制度に対する信頼も揺らぎ始めた。個性重視が叫ばれ、「ナンバーワンよりオンリーワン」という言葉がもてはやされるようになったのもこの頃である。経済活動や社会のグローバル化はますます進み、製造業

で新興国との競争を強いられたり、国際社会において「顔の見える貢献」が求められるなど、国や文化・言語を超えてのコミュニケーション能力が必要な時代となった。

教育界に目を転じると、2002（平成14）年より新学習指導要領が施行され、「ゆとり教育」がスタートした（高校では2003年より学年進行で実施）。学習内容の削減により基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせること、「総合的な学習の時間」などにより、自ら学び自ら考える「生きる力」を育むことが目標とされた。優れた実践により一定の効果があがったとする報告がある一方、基礎学力の低下や学力の二極化など、多くの問題点も浮き彫りとなった。

■ 本校の教育

本校ではこれらの変化に対応すべく、学科・コース・系を細分化して生徒一人ひとりの進路希望に応じてより具体的な学習ができるようにしたり、海外研修（修学）旅行の導入やスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）の指定を受けることにより、国際理解教育・外国語教育に引き続き注力する体制を整えるなど、額賀修一第4代校長を迎えて多くの改革を行っている。少子化により15歳人口が減少を続ける中、中学生やその保護者、社会から必要とされる学校となるために、さらなる努力を続け、進化を試みている。

■ 特徴的な各科・コースの教育内容

1999（平成11）年より普通科進学コースの見直しが行われ、2年次より科学・医療系、国際文化系、日本文化系、保育・福祉系、ビジネス系（2006年より国際情報系に変更）のいずれかのクラスを選択し、将来の進路に合わせてカリキュラムが展開されるようになっている。また、教科指導のほかにも、その分野に関するイベントへの参加や独

自の行事の企画実施を通して、楽しみながら将来に向けた素養を育成することにも努めている。

科学・医療系は、子どもたちに科学を楽しんでもらう活動を行っている。「青少年のための科学の祭典」や撫子祭での「わくわくサイエンス」のイベント、大成学園幼稚園では工作教室を開いている。



青少年のための科学の祭典

国際情報系は、英語とコンピュータの授業を多く行い、英語検定やワープロ検定の合格を目指し毎日頑張っている。ブリティッシュヒルズ語学研修では、2日間オールイングリッシュの合宿を行い、英語力を高めている。



ブリティッシュヒルズ語学研修

日本文化系は、日本人が大切にしてきた和の心にふれている。笠間の陶芸美術館や天心記念五浦美術館を見学したり、3月にはお茶会も開く。日本文化の奥深さに毎日感動しながら勉強に励んでいる。



お茶会の練習

保育・福祉系は、幼稚園の先生や保育士を目指す生徒が多い。このため幼児安全法や家庭看護法の講習、介護の体験を通して、保育や福祉についての学習に取り組んでいる。撫子祭では、子どもたちに楽しんでもらえる企画を準備している。



幼児安全法の講習会

普通科特別進学コースは、行事や活動がたくさんある。大学の先生の授業「コロキウム」、プラ



プランジャパン

ンジャパンを通じて行う発展途上国の女の子を支援する「ナディアプロジェクト」、五軒小学校で学童保育のボランティアも楽しんでいる。勉強と様々な活動を両立させて、夢の実現のために頑張っている。

家政科は、食物や被服の技術を毎日磨き、検定にも合格している。ファッションショーをプロデュースしたり、保育園を訪ねる授業もある。家政のスペシャリストになるという夢に向かって全員が走り続けている。



ファッションショー

看護科は、5年一貫教育で最短で看護師になることができる。看護・医学の知識と、確かな技術を習得するために、同じ夢を持つ仲間と学習している。社会へ出るための礼儀や、人を思いやる心を養うために、先生方の熱い指導を受けながら努力している。



中学生の体験学習で説明する看護科の生徒たち

■学校設定科目「現代女性教養講座」の実施

導入の経緯と目的

90周年を迎える節目の1999（平成11）年に、本校の原点である「社会で役に立つ女性の育成」を再確認し、さらに時勢に合った女性の育成を目指し、新しい時代の女子校として進化すべく、教育内容を検討してきた。その一環として、これまでの学校教育では本格的には扱わなかった「大人として生きていくための下地作り」に着目し、特に女性としてのあり方に焦点を当てた「現代女性教養講座」を立ち上げた。

同講座の目指すところは次のとおりである。

- 社会生活を送るうえで基礎となる様々な知識を伝え、自分で考えさせる機会を与える。本校の生徒が将来、自ら考え、主体的に判断できる「自立した大人」になれるための「教養」を養成することが主目的。
- 近い将来社会に出ていく世代に対し、狭い学校社会のルールよりもむしろ、一般社会での常識・ルール、しかも最新の情報を伝え、身につけさせることにより、成人として実社会に対応するための下地を養う。
- 「女性」であるということを大切に、今後、大人の女性として自立して生きていくために準備しておきたいことにも重点を置く。
- できるだけたくさんの「人生の先輩である自立した女性」と出会い、目指すべき姿を模索させる。
- 1997年より具体化してきた「総合的な学習の時間」の新設（2003年度より）に備え、教科横断的・総合的学習形態の実験フィールドとする。

実施形態

初期には、「講義→感想文」のセットで数多くのテーマを実施したが、生徒の理解状況を考慮し、現在では1テーマにつき「事前学習→講義または体験授業→事後学習+まとめ」という3セットでの授業に転換し、年間に扱うテーマ数も精選して



「色を味方に付ける」

いる。卒業時にも印象深い授業の一つとして思い出されるなど、人気の授業となっている。

女子だけを教育する大成学園は、これから大人として活躍していく女子生徒たちに、何があっても一人でしっかりと生き抜いていき、次の世代に命をつなげていく本当の力を、これから身につける義務がある。この意味で、現代女性教養講座は、本校の教育の原点である。

■スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール

はじめに

大成女子高校でスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（以下SELHi）の指定に向けた動きを始めたのは2005（平成17）年の春。初めは学校の個性の一つとして「英語教育」を売りにできれば、と考えたことがきっかけである。

SELHiの申請にあたっては、研究開発計画書の作成と提出が最初の関門であり、A4用紙22枚に及ぶ研究開発計画書は、明確な研究開発課題と具体的な授業の活動内容が求められた。研究テーマの明確化のため、まず夏期休業中におおまかな計画を書き出した。ライティング力の向上を研究開発課題の中心にし、その課題解決のための様々な活動を列挙。それら活動内容を具体化し、何とか計画書の形ができたのは11月末である。しかし、申請書類としての体裁を整えるため、12

月の提出期限直前には夜中の2時まで計画書を作る作業が続いた。最終的には額賀修一校長の手助けて体裁を整えることができ、提出期限ぎりぎりで申請。申請後に内容の間違いに気づき、わずか1ページの差し替えをするために、田中先生がわざわざ東京の文部科学省まで出向いた。こうして様々な方の助力をかり、何とか申請にこぎ着けたが、この時点での研究指定への期待は非常に小さかった。

年が明けて2006年になり、1月末頃SELHi研究指定校の内定通知が到着。この時、若干の研究開発課題などの訂正を求められ、それら事務処理を経て、同年4月、めでたく研究指定校の通知が届いた。

研究開発課題について

「初級学習者にも効果的なライティング力向上に重点をおいた英語各科目の統合的指導方法の研究。コンピュータネットワーク等を利用した、学習意欲を高めるコミュニケーション方法の開発」という研究開発課題を設定した。これまでの本校の英語を眺めると、訳読中心の授業による「読むこと」の指導がすべてで、表現力を養う活動がほとんど行われておらず、わずかにオーラルコミュニケーションの授業で表現活動が展開されていたのみ。そこで、「書くこと」での表現と、それを口頭で発話できるようにするため、音読活動を工夫することで「話す」力を伸ばす授業を研究開発したいと考えた。

英語の授業の変化について

訳読中心の授業から音声活動を重視した授業へと変貌してきている。現在の英語の授業は、読解活動や語彙の習得など複合的に学習目標が設定された様々な音読活動や、日記を書くことなど身近な話題を表現することで、英語を書くことへの抵抗感を減らしている。こうした英語の基礎を身に

つける学習活動から、学校設定科目である「コミュニケーション論」でのプレゼンテーション活動まで無理なく英語の力を伸ばしていける授業の形態を工夫してきている。その活動を支える様々な教材の開発は本校の財産であり、また、他校でも本校のプリントが使用されるなど、普及活動を通してさらなる工夫が加えられることが期待される。

英語の授業での大切なこと

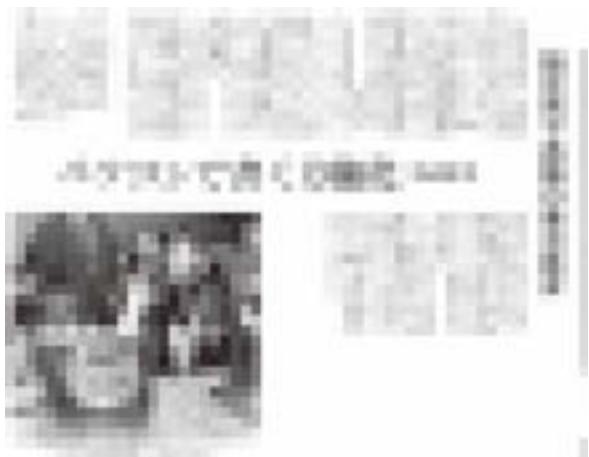
この研究を通して、英語学習の動機づけを与えることの重要性と、同時に難しさを認識した。その中で得られたことは「楽しさ」と「達成感」を生徒にどれだけ与えられるか、ということである。授業の様々な活動は楽しいほうがいいに決まっている。樂しければ続けられる。しかし、楽しいだけの遊びでは学習は成り立たない。英語を学び、その学んだことを使えるようになることが重要である。「できた!」という達成感が大切になる。「楽しさ」と「達成感」が得られる英語の授業が重要である。この2つが得られる授業こそ、学習の動機づけになり、学力の向上へとつながる。そのためには、学習の各活動は「生徒ができること」を与えることであり、それがいかに効果的に作用するかを研究し、教材や授業の展開方法を工夫していくことが基本である。

研究開発活動の成果

大きく分けて2つの成果がある。1つは内面的な成果である。英語の教師の意識の変化が、大きな成果である。意識の変化には授業の展開方法に対して、訳読中心の授業への疑惑と音読を重視した音声教育を重んじた授業への疑惑の、2つの疑惑を持ち得たことである。その結果、実際に生徒に「音読させること」と「ただ板書するだけの文法・語句語法解説」の間に視線を向けるようになった。どちらも大切だ、どちらも捨てられない、という意識は持てるようになり、それだけでも大き

な成果といえる。授業の工夫を常に意識するからである。

もう1つは外的な変化である。これは様々な人々とのつながり、人脈の拡大である。小・中学校教員とのつながり、他の高校とのつながり、大学とのつながりなど多様な人間関係が築かれた。高校教員同士のつながりは、茨城県内の高校への研究状況の報告や茨城県高等学校教育研究会（高教研）での活動などで培われてきた。また、他県高校の教員とのつながりも持つことができた。京都の蘭部高校や東京の広尾学園は、本校のSELHi中間報告会に参加してくれた。また、山形の高畠高校は、本校の研究開発課題に興味を持って接してくれた。大学の先生方についても、本校の運営指導委員を務めてくれた元流通経済大学の瀬谷先生、茨城大学の君塚先生、慶應義塾大学の児馬先生、茨城女子短期大学の内桶先生のご支援は心強かった。また、同様に元水戸第二中学校校長の土門先生、佐藤先生、元五軒小学校校長の池田先生、現五軒小学校校長の砂川先生にも運営指導委員として、英語の専門家とは異なった視点で、貴重な助言をもらった。さらには白百合女子大学の倉住先生には、文部科学省の実地調査官としての務め以上のご支援をいただいた。文部科学省の池永氏、西村氏からも様々なご配慮をいただいた。



本校の英語教育を紹介する記事（2007年8月4日『読売新聞』）

こうして築かれた関係はSELHiのおかげである。また、SELHiを理由に多くの方々が本校に目を向けてくれたことも大きな成果である。結果、新聞の記事として本校の英語教育内容が掲載されるなど広報面での効果もあった。

最後に

SELHi研究開発活動を通して、多くの方々からご助言をいただいた。時には厳しく、ご指導いただきこともあった。一つひとつの助言から、少しずつではあったが授業の改善がなされていき、この3年間で本校の英語の授業は大きく変化した。生徒の抱える問題点も明らかにされ、語彙指導など、取り組むべき活動を具体化する教材がでてきた。SELHiを一つのきっかけととらえて、今後、さらに英語教育の質の向上を目指し教育活動を進めていく。

● ジュニア・インターンシップについて

2006（平成18）年に教育基本法が改正され、教育の目標に「個人の価値を尊重して」「職業及び生活との関連を重視し、勤労観を重んじる態度を養うこと」とあり、進路指導およびキャリア教育が教育の目標に位置づけられた。

また、ハローワークも中学生・高校生のジュニア・インターンシップ（就業体験・職場体験）を奨励し、企業（事業所）へ受け入れを積極的に働きかけている。こうした中で水戸市近辺の多くの中学校でも職場体験と称して実施しているようである。

本校では、2004年から2年生を対象にジュニア・インターンシップを実施している。この体験は、役割と責任の自覚や集団生活の向上、向上心・個性の伸長を目標にし、事前・事後の学習も含め、仕事の厳しさや楽しさ、働くことの意義、マナー、人とのかかわりの大切さを学ぶものである。

2004年は本校にとって、初めての計画であり

戸惑うことが多く、手探りの中での実施となった。こうした中で、何とか形作ることができたのは、企業（事業所）が私たちよりノウハウを持っていたことである。

2005年からは特別進学コースも加わり、小学校や幼稚園等の教育機関や公的機関への希望が増えるようになった。これも近隣の学校の協力により解決することができ、2年目にして現在のジュニア・インターンシップを形作ることができた。

このような形のほかにも、夏期休業中などを利用したセルフ型ジュニア・インターンシップも併用して実施している。

実施計画

現在は2年生の2学期（研修旅行関係の準備）以外の総合学習を利用して展開している。前半（1学期）に働くことの意義等を講話を通して学び、研修旅行（2学期）後は事業所の希望調査やマナー研修を実施している。そして2月のジュニア・インターンシップ終了後は、情報科の先生方の協力のもとプレゼンテーションを行い、年間計画が終了する。

実施人数と事業所数

2005年	15 事業所	35 名
2006年	44 事業所	79 名
2007年	40 事業所	82 名

まとめ

ジュニア・インターンシップを通して、生徒たちは大きく成長し、進路選択にも影響を与えることができた。なかには自分の考えていた職場との違いを知り、進路選択肢から外す生徒もいた。少しではあるが社会を体験することによって、厳しさだけでなく喜びを知ることができたことは大きな収穫である。

また、働くことを通して、両親への感謝の念も

生まれたようである。

今後は、さらに実施クラスや実施期間を増やすことによって発展させていきたい。



ジュニア・インターンシップのプレゼンテーション

● 礼法授業の実施について

本校は創設以来、作法を導入して女性の礼儀を育成してきた。現代社会では人間関係が希薄となり、生活の根底である礼儀作法が重要であるため、2007（平成19）年から1年生対象に学校設定科目として礼法を再開した。

礼法の内容

1. 礼法の基本、上座、下座
2. 基本動作（歩く、向きの変え方、椅子の腰かけ方）
3. 室内出入り（ドア、襖）
4. 物の持ち方、受け渡し（食べ物、重い物、座布団、賞状）
5. 訪問、来客（手土産、茶菓の勧め方といっただき方）
6. 冠婚葬祭、贈答（のし、水引、神拝と玉串、仏拝と焼香）
7. 公衆道德
8. 服の着方、たたみ方
9. ことば、敬語
10. 食事（日本料理、西洋料理）

年中行事の内容

- 端午の節句

- 七夕
- 中元
- 盆
- 彼岸
- 月見
- 敬老の日
- 七五三
- 歳暮
- 正月
- 七草粥
- 鏡開き
- 節分
- ひなまつり（本校ひなまつり）

礼法は小笠原流礼法を基礎に作法室で行っている。礼儀は精神が形に表れるので、心を落ち着かせて、お辞儀、立つ、座る、歩く、跪座の姿勢、膝行、膝退といった立ち居振る舞いの初歩的な理論と動作や、日常のマナーを身につけている。

年中行事は日本古来の伝統文化の由来といわれ、意義などを理解させ、豊かな心を育成している。

生活習慣に定着している行事や基本的な礼儀作法を学ぶことによって、人とのかかわりや対応がスムーズで、自信を持って行動できる女性を目指している。

●進路ガイダンス

進路指導部主催で、3年間で10回の進路ガイ



礼法の授業風景

ダンスを行っている。各学年ごとの目標は以下のとおりである。

第1学年：自己を見つめて適性を知り、将来の仕事を考え、準備を始める。

第2学年：進学か就職かを確定する。進学の場合には学校種も確定する。

第3学年：志望校、就職先を決定する。

進路ガイダンスの実施内容は以下のとおり。

第1回 進路決定までの流れについて

第2回 進路適性検査振り返り（クラス別に実施）

第3回 インターネットでの仕事研究（クラス別に実施）

第4回 職業別ガイダンス

第5回 2～3学年の進路計画

第6回 大学・短大・専門学校・就職の違いについて

第7回 上級学校入試形態・就職試験について

第8回 県内学校ガイダンス・フリーター防止講演

第9回 各学校・就職別ガイダンス

第10回 進学・就職面接について

実施は、第1学年（第1～4回）、第2学年（第5～7回）、第3学年（第8～10回）である。

学習指導とも関連を持たせており、「長期休暇中課題と事前指導」→「実力テスト」→「実力テスト事後指導」→「進路ガイダンス」のサイクルを基本としている。実力テストの事後指導には、進路ガイダンスの指導目標に応じた独自の「振り



面接試験の講習会

「返りシート」を準備し、回答させることで、進路意識を高めている（実力テストはベネッセコーポレーションの「進路マップ」を利用）。

●学校行事

1990年代は体育祭・撫子祭・芸術祭を3大行事として3年で一巡する形で実施していたが、芸術祭が「芸術鑑賞会」として毎年の行事となったのに伴い、体育祭・撫子祭は2大行事として実施されるようになった。

さらに、2005（平成17）年より撫子祭を、各科・各系ごとに日頃の学習の成果を発表する場と位置づけ、毎年実施することになった。この前年から、1日目は校内ののみの発表、2日目は招待客を生徒の家族、女性の友人、地域の幼稚園児・小学生とその家族に限定して公開している。また、外部からプロのアーティストを迎えて、芸術鑑賞の場としても、来場客だけでなく在校生も楽しめる文化祭



創立100周年記念撫子祭



創立100周年記念撫子祭

にしている。2009年の実施は、学園創立100周年記念文化祭として、工夫を凝らした展示・発表が多くの参加団体で見られた。また、3日目には「ソナーポケット」を迎えて記念コンサートをひたちなか文化会館大ホールにて実施し、招待した中学生を含め、大好評を博した。

芸術鑑賞会は2004年まで実施され、プロの芸術家の公演を通して生徒に様々な刺激を与えた。2005年以降は、撫子祭のゲストとしてプロによる芸術を鑑賞して、芸術鑑賞会は文化祭に吸収合併することになった。

体育関係行事は、毎年度初めのクラスマッチと隔年の体育祭を実施していたが、2005年よりクラスマッチと体育祭を融合させ、新たに「スポーツフェスティバル」という名称の全校行事として、ひたちなか市総合運動公園体育館等の広い外部施設にて開催している。どのクラスも総合優勝を目指して、熱い戦いを繰り広げている。



スポーツフェスティバル

旅行・遠足については、1年生の遠足は人気の東京ディズニーランド観光、2年生はハワイ研修旅行、3年生は東京近郊で話題の文化にふれる社会見学を行っている。



3年生の遠足（「ライオンキング」観劇）

講演会では、野球解説者の大久保博元（デーブ大久保）氏、元アナウンサーの東海林のり子氏、動物ものまねの江戸家小猫氏、全盲のエッセイスト三宮麻由子氏らが来校した。生徒たちが自分自身について考えるよい機会となった。なかでも、



防犯講演会で護身法を学ぶ

現在は「夜回り先生」として有名な水谷修氏の薬物に関する講演会のインパクトは大きく、その後も水谷氏の著作を読む生徒が多かった。そのほかに、犯罪から身を守る防犯講演会や携帯電話安全利用講習会等も毎年実施されている。

●研修旅行の実施

1999（平成11）年に普通科進学コースを志望分野別の5つの系に分け、行事等もその目標達成に見合ったものに再編してきたのは前述のとおりだが、旅行も学科・コース・系ごとの研修を主体に企画し、2000年より「研修旅行」という名称で実施するようになった。

初年度はハワイと九州の選択制としたが、2001年9月のアメリカ同時多発テロ事件の影響でその後しばらくは国内研修旅行に変更となり、2005年より全員がハワイ研修旅行を実施するようになった。訪問場所や見学・体験内容を学科・コース・系ごとに企画し、観光で終わらない本校ならではの充実したプログラムを毎年実現している。また、実施前学習、実施後学習を取り入れ、より学習効果が高まる工夫を重ねている。

2006年に文部科学省よりスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）の指定を受けてからは、英語によるコミュニケーション能力の向上を目標とした授業を展開し、その重要なプログラムの一つとしてハワイ研修旅行を位置づけている。なお、2009年は新型インフルエンザの世界的流行のために中止となった。

●各科・コース・系のハワイ研修旅行

普通科の国際情報系と特別進学コース等の生徒はホームステイを体験し、ハワイの人種や文化の多様性、生活習慣の違いなどを学べることはもちろん、親切にしてくださるホストファミリーへ何とかして気持ちを伝えたいという思いから、英語への学習意欲を増した生徒が大勢いた。特別進学

コースはこれらの模様をウェブサイト作成によつて伝え、国際情報系は英語を用いたプレゼンテーションを課題としている。



ホストファミリーとの対面

保育・福祉系の生徒たちは、現地の幼稚園を訪問し子どもたちの笑顔にふれる。園の授業計画やカリキュラムを知り、日本とハワイの教育の違いを感じつつ、それぞれに独自の良い所があることを体感している。

家政科では被服分野の学習の一環となるようなプログラムを組んでおり、ハワイアンキルトやマ



幼稚園訪問



マキニ（お守り）作りの体験学習

キニ、レイ作りに挑戦している。これも例年、ハワイの伝統文化にふれることができるよい機会となっている。

看護科は現地の医療制度や看護システムについての説明を受け、病院施設を訪れた。実際に検査室や手術室の中を見学しながら、使用している器具等について理解できることは非常に貴重である。日本の病院では見られないスタイルとサービスが印象的で、考えさせられることも多くあると、プレゼンテーションや記録に残している。

生徒たちは皆、ホストファミリーをはじめとするお世話になった方々とのふれあいを通じて、日頃見失いがちな人の優しさや温かさを実感している。ハワイの人たちの持つ“ALOHA”的心、ホスピタリティにふれられることは多大な収穫である。



病院訪問

●家庭クラブの現状

2009（平成21）年現在の本校の家庭クラブ活動は、家庭クラブ週間において募金活動を行い、施設や新聞社へ届けたり、オアシス運動（既述）の推進、県家庭クラブ幹部研修会への参加、ホームプロジェクトの研究発表等を行っている。2008年には中国・四川省大地震の緊急支援・義援金として茨城県国際交流協会に寄付をした。

今後も、校内外の奉仕活動や募金など、身近なところからの活動を実践し、家庭クラブ活動の伝統を守っていく。

●家政科の活動

着付教室

家政科の生徒たちは、1年次に制作した浴衣を自分で着られるために2年次に着付け教室に参加している。専門の先生に、きれいに着付けるためのポイントや美しい立ち居振る舞いの作法、たたみ方を教えていただき、和服を最初から最後まで自分で扱える喜びを味わう。参加生徒の中から本格的な和服の着付けを習い始める者が毎年おり、「きもの装いコンテスト」への出場につながっている。2009（平成21）年11月の「全日本きもの装いコンテスト関東大会」学校対抗の部には3名の家政科3年生が出場し、大学生や専門学校生のチームが参加する中、見事4位に輝いている。



きもの装いコンテストに出場

立食パーティー

フードデザインの授業のまとめと先生方への日頃の感謝のために、学年末に立食パーティーを行っている。メニュー決定から食材の手配、調理、招待状の作成と案内まで、すべて生徒が自分たちの手で行っている。美味しい料理と、学習の成果



立食パーティー

により「おもてなしの心」が身についた生徒たちの様子に、先生たちも大満足の行事となっている。

課題研究発表会

3年次の「課題研究」では、それぞれが「調理」「被服」「保育」「手芸」などの分野に分かれて、より専門性を高めた学習を行っており、家政科の下級生に向けて、この授業での学習成果を披露する「課題研究発表会」を実施している。家庭情報処理の授業で習得したプレゼンテーションの技法も取り入れ、毎年魅力的な発表会となっている。

●いばらき産業教育フェア

1992（平成4）年より県教育委員会等の主催で実施されているいばらき産業教育フェアには、第1回より継続して本校の家政科および衛生看護科（のちに看護科）の生徒も参加しているが、2008年より名称を「いばらきものづくり教育フェア」と改めての実施となっている。なお、2010年は、文部科学省主催の全国産業教育フェアが茨城県で開催されることになっている。



いばらきものづくり教育フェア

生徒会の活動

各期の生徒会しそれぞれが、学校行事の企画運営のほか、「元気に挨拶をしよう！」「身だしなみを整えよう」などの目標を設定し、その達成のため

に精力的に活動している。

2000（平成12）年前期の生徒会の目標は「校歌を堂々と大きな声で歌おう」というもので、当時の主流だった「校歌なんてダサイから歌わない」「馬鹿みたいだから歌いたくない」という態度を変容させるために、行事のたびに校歌を取り入れ、声が小さい時はもう一度歌ってもらったりし、また時には「堂々と歌う方がよっぽど格好いいんだよ」など、生徒に向けて話をして、努力を続けた。その成果が実り、この生徒会が引退する際には、体育館いっぱいに全校生徒の校歌が響き渡り、加藤生徒会長を中心とする役員7名は、涙を流して喜んだという。

2005年にはNHK水戸放送局の地域情報番組「いばらきわいわいスタジオ」の「熱風スタジアム」に生徒会が出演し、本校の魅力を視聴者にアピールして好評であった。



生徒会が「いばらきわいわいスタジオ」に出演

●運動部の活躍

水泳部は「競泳」「飛び込み」「水球」と、それぞれが違った競技で活動している。しかし目標は共通で、それぞれが自分の記録に挑戦することである。関東大会、インターハイ、国体への連続出場を多くの先輩から引き継いでいる。2009（平成21）年には、田山さんが100m自由形において大会新記録でインターハイに優勝するという快挙を成し遂げ、国体では3位に入賞した。畠岡さんも飛板飛込でインターハイ6位、国体4位と活躍し

た。この2名は、9月3日に茨城放送の番組「夕刊ほっと」に出演し、競技の感想や今後の抱負を話している。



水泳部インターハイで大活躍！

剣道部は1974（昭和49）年に創部以来、県大会で上位入賞したこともある。部員は少ないが稽古の内容を工夫しながら、大会に1つでも多く勝てるよう、日々努力している。

陸上競技部は、自己ベストの更新をモットーに毎日練習に励んでいる。個人種目が中心なので、練習や大会は常に自分との戦いである。自分たちの大会だけでなく、友愛ピックなどに補助員として参加し、地域の人たちにスポーツの楽しさを伝える活動もしている。

硬式テニス部は、元気いっぱいボールを追いかけコートを駆け回っている。青空のもと大きい声を出しながら、気持ちのいい汗をかき「青春」している。ボール1球に全力集中し、部員一丸となり楽しく元気な部活を目指している。

卓球部は、1930年創部で、2009年に79年目を迎え、県大会3位の記録を残したこともある。近年は大きな実績を残せずにいるが、先輩たちの実績に少しでも近づけるように、毎日練習に励んでいる。

バドミントン部は、地区大会優勝、県外大会出場を目標に基本ストロークの習得、ノック練習、ゲーム練習を毎日行っている。

フットサル部は、2008年より部活動に昇格し、よりいっそう熱心に日々の練習に取り組んでい

る。5月の大会ではその成果が表れ、3位となった。今後は茨城県リーグでの優勝を目指す。

バスケットボール部は「絶えず全体に気を配る・常に自分に厳しく」をモットーに、毎日練習に励んでいる。練習の時には声を出し合い、試合では明るく正しく元気良く、大成らしいバスケットを表現できるように頑張っている。県で1番のチームになるのが目下の目標である。

バレーボール部は全国での活躍を目標に、1年生から3年生まで一緒に寮で生活をしながら日々練習に励んでいる。部員全員が一丸となり、目標に向かって頑張っている。

ダンス部は、校内行事での発表のほか、外部組織やお祭りでの演技、神戸で開催される全日本ダンスフェスティバル等で、日頃の練習の成果を発表している。2002年には茨城県で開催されたインターハイの総合開会式チアリーディング部門に参加し、他校との合同練習や取材等、新たな体験をすることができた。

ゲートボール部は2004年に同好会として発足し、その年7月のジュニア大会で全国3位となった。翌年には正式に部に昇格し全国準優勝となった。2006年にはついに全国優勝を果たし、その実績を認められ、11月にはシンガポールで開催された青少年国際交流大会にも参加した。外部講師の方から指導を受けて技術を磨き、校外の様々



ゲートボール部全国優勝！

な方たちと交流する経験を通して、大きな自信につながる1年となった。残念ながら3年生が卒業すると部員が集まらず、2007年より休部となっている。

スキー部は、冬期は冬休みや週末を利用して、オフシーズンには体力づくりを中心に、練習を行っている。冬休みは北海道のスキー場で山形県の高校と合同合宿をして心身共に鍛え上げている。2006、2007、2008年には3年連続で山口さんが、2009年には平井さんがインターハイと国体に茨城県代表として出場した。また2009年には平井さんがオフシーズンのトレーニングとして行っているクライミングで、他校生とペアで夏の国体に出場し、全国2位となった。



スキー部クライミング部門 国体で準優勝！

■文化部の活躍

JRC部は、青少年赤十字の「人間として社会のため人のために尽くす責任を自覚し実行する」「助け合いの精神を養う」という理念に基づき、継続的に活動している。他の学校のJRCとともにボランティアを行ったり、乳児院を訪問したりしているのは、創部以来変わらない。

演劇部は、発声や即興劇を中心に活動し、撫子祭と演劇部発表会で、成果を披露している。将来俳優を目指し4年制大学の演劇科に進む者もあり、将来につなげるために真剣に取り組んでいる。

茶道部は、裏千家のお盆立てを中心に練習して

いる。毎月1回のお茶会はとても楽しく勉強になっている。

華道部は、花の美しさを引き出せるように工夫しながら、一生懸命花を生けている。古来から伝わる日本の文化に、じっくりとかかわる貴重な機会となっている。

コーラス部は、外部講師の堀江先生指導のもと、楽しく活動している。様々なコンクールや音楽祭に出場したり、近くの保育園のクリスマス会にも参加し、聴く人の胸に響くよう、歌に込められた心を大切に、歌い続けている。2007（平成19）年のなでしこ会設立40周年記念パーティーでは、野口雨情の孫・野口不二子さんと交流し、茨城の歌について見識を深める機会を持った。

箏曲部は、本校の卒業生でもある小山田先生のご指導のもと、活動している。初心者の部員がほとんどだが、弾き出すと琴の調べに夢中になると、様々なジャンルの曲に挑戦し、外部施設で



なでしこ会のパーティーで歌うコーラス部



学園創立100周年記念式典での箏曲部のデモンストレーション

の演奏を行って多くの方たちに楽しんでもらっている。

史学部は、歴史上の出来事や人物のエピソードを聞いたり、自分たちの生まれ育った地域の歴史を調べている。継続して『史林』という部誌を年に1度発行しており、2009年度は11号発行を迎える。バックナンバーは県立歴史館に所蔵されている。

パソコン・写真部は、一人ひとりがそれぞれのやりたいことを中心に明るく楽しく活動しているので、とても充実した時間を過ごすことができている。

書道部は、日本や中国の古典作品を学び、展覧会につなげている。展覧会の前には互いに作品を批評し合い、技術の向上を図っている。今後はほかの時代の作品や、美術工芸にかかる分野にもチャレンジしていきたいという。

吹奏楽部は「奏者と聴衆がともに感動できる音楽」を目指し、「逃げない、負けない、諦めない」をモットーに、日々の練習に励んでいる。合奏はもちろん、合唱、マーチング、演劇など様々な活動を行っている。2008年には2年連続出場の日本管楽合奏コンテスト全国大会にて優秀賞、全日本吹奏楽大会in横浜でヤマハ賞を受賞と、大きく躍進している。2009年には東関東吹奏楽コンクール高等学校Aの部に県代表として出場した。女子高ならではの明るい大成サウンドを目指し、頑張っている。様々なイベントにも出演し、学園創立100周年記念式典での演技および演奏も、大



五軒サマーナイトでの演奏

変好評だった。

BMC 部は美術マンガ部で、部員の作品を載せた冊子を年 3 回発行している。絵画を通して一人ひとり自分の実力を向上するため、日々活動に取り組んでいる。

理化部は、実験を通して科学の楽しさ味わう活動をしている。「青少年のための科学の祭典」に出席したり、文化祭では「わくわくサイエンス」の実験ブースを出展し、子供たちにスライムや万華鏡のサイエンスを楽しんでもらっている。



学園創立 100 周年記念式典での理化部のデモンストレーション

● 生徒の活動や表彰

教科「情報」の導入により、学習を続けてきたワープロの知識および技術を確認するために、全国商業高等学校協会主催のワープロ検定に挑戦し、合格する生徒が多数いる。毎年 4 級から 1 級まで受験者がおり、最難関の 1 級はこれまでに 2 名合格している。いずれも全校集会で表彰されている。

本校の非常勤講師である清水谷登志美先生の発案で、歴代の制服作成を、生徒と共に歴代制服作成の会が 2009(平成 21)年 4 月に結成された。記念式典までの 3 か月余りの間、放課後を利用して、家政科 2・3 年生の生徒有志 7 名と清水谷先生で、大成女学校時代から現在の大成女子高等学校までの制服で、現存していない 4 種類の制服を作成した。清水谷先生の懇切丁寧な指導により、本学園の歴代制服は記念式典直前に晴れて完成し



歴代制服作成の会のメンバー

た。自分たちで制作した歴代制服を身につけた 7 名の本校生徒と茨城女子短期大学生および大成学園幼稚園児たちにより、学園創立 100 周年記念式典の印象的なオープニング「大成学園～100 年の軌跡～」が可能となった。

2009 年 11 月、『茨城新聞』の水戸市市制施行 120 周年記念特集の「水戸から羽ばたく若い力」という欄に、この年のインターハイで 100m 自由形に大会新記録で優勝、国体では 3 位となった水泳部の田山さんのインタビュー記事が写真付きで掲載された。試合等で他県を訪れる機会の多い田山さんが、水戸の若者として、他都市と比較しながらこれから水戸市に期待する要望を述べている。



田山さんの記事 (2009 年 11 月 3 日『茨城新聞』)

●同窓会の活動

この時期の同窓会は、これまで毎年発行してきた同窓会報を、5年に1回の発行に変更した。2005（平成17）年には17年ぶりに同窓会名簿を作成し、来る学園創立100周年に備えることになった。また、役員も一新し、若いメンバーで運営していくことになった。

この時期の同窓会役員

会長 塙富子

副会長 照山史子 鈴木祥子 根本陽子

2007年には、なでしこ会発足40周年記念パーティーを水戸三の丸ホテルで実施し、翌2008年4月に同窓会報40周年記念号を発行した。同窓会報初のカラー印刷で、現在の大成女子高等学校の活動の様子も織り込み、充実した誌面となった。

なでしこ会の役員は、学園創立100周年記念事業委員会の実行委員として、度重なる夜にまで及ぶ会議の中心メンバーとして企画運営に携わり、同窓生ならではの人脈を生かし、式典・記念パーティーの成功のために、大きく尽力した。



なでしこ会 40周年記念パーティー

●その他の出来事

本校の父母の会が学園創立100周年を記念して、制服リカちゃんを企画、制作した。本校の現在の制服を着た9.5cmの大きさのリカちゃんで、キーホルダーになっている。パッケージには、校歌と歴代の制



制服リカちゃん

服を着た本校生の写真が施され、卒業生を中心に人気となっている。

●教員の活動

学園創立より30年以上の間、額賀キヨ先生を中心に生徒に対して指導されてきた小笠原流礼法を、学園創立100周年となった2009（平成21）年、学園の職員一同で学ぶ機会を持つことになった。小笠原流礼法は、鎌倉時代より受け継がれてきた日本の武家の礼法で、武士の心得、武士の精神を具体化したもので、日本人が後世に伝えていくべき「他人を敬う心を基本とする良き伝統」である。創立者額賀三郎・キヨ先生の学園創立の思いと、本学園の存在意義を再確認する機会とするためにも、弓馬術礼法小笠原流の宗家、小笠原清忠先生より、直々にご指導をいただくこととなった。礼法指導の先生たちだけでなく、全学園職員が礼の心を学び、次世代に伝える努力をしていくことで心を一つにしている。

この職員礼法研修会は、日本経済新聞から取材を受け、2009年10月9日の夕刊全国版1面のコラムに写真入りで紹介された。



職員礼法研修会（2009年10月9日『日本経済新聞』）

●学園創立100周年記念事業

記念式典

記念行事として、2009（平成21）年7月11日、茨城県立県民文化センター大ホールにおいて記念式典を開催した。

式典においては、多くの来賓、関係者が臨席され、心の込もったご祝辞を頂戴した。続く発表の

部では、本校の教育活動の一端を皆様にご覧いただいた。短い準備期間ながらも精一杯の練習を重ねた、茨城女子短期大学、大成女子高等学校、大成学園幼稚園の学生・生徒・園児の演技が、参集者全員に強い感動をもたらした。



記念式典

記念パーティー

記念式典の翌日7月12日、水戸プラザホテルにおいて記念パーティーを開催した。記念パーティーにおいては、大成学園の数多くの卒業生が参加し、創立100周年にふさわしい大同窓会となった。最年長である92歳の女学校卒業生から、現役の茨城女子短期大学生に至るまで、幅広い年代の多くの方たちが旧交を温めた。大成女子高校卒業生の井上さんとご家族によるオカリナ演奏、大成女子高校ダンス部OGによる演技、大成女子高校旧職員による合唱等のアトラクション、そし



大成学園の発展を祈り万歳三唱でお開きとなる

て記念式典に続く大成女子高校卒業生桐原さんの司会も好評であった。会場入口に展示された歴代の制服や年代順の写真も、多くの卒業生たちに懐かしい大成での日々を思い起こさせた。

新聞掲載

学園創立100周年を広く一般の方々に知るために、2009（平成21）年の5、6、7月に毎月1回、『読売新聞』朝刊茨城版に記事および広告を掲載した。歴史的な流れの中で学園の教育活動を振り返った内容で、5月は大成裁縫女学校、水戸市大成女学校、大成高等女学校について、6月は大成女子高等学校、茨城女子短期大学、大成学園幼稚園の成立について、7月は学園の現況を中心に報告した。

また、記念式典直前の7月9日には、『茨城新聞』朝刊に2面の見開き広告を掲載し、広く告知を行った。



広告を掲載（2009年5月10日『読売新聞』）



広告を掲載（2009年7月9日『茨城新聞』）

●父母の会・後援会・同窓会主催による 『地球のステージ』

本校の父母の会・後援会・同窓会主催により、精神科医の桑山紀彦氏による『地球のステージ』を、水戸市民会館にて、2年連続、全生徒参加で鑑賞した。これは、「ライヴ音楽と大画面の映像、スライドによる語りを組み合わせた、まったく新しいタイプの“非営利”コンサート・ステージ。世界で起きている様々な出来事を、講演形式ではなく、音楽と大画面のビデオ、スライドに写しだし、語りと曲で構成していく映像と音楽のシンクロステージ」というもの。



『地球のステージ』のチラシ

ステージ1に始まり、現在はステージ5まであり、本校では2008（平成20）年にステージ1、2009年にステージ2を鑑賞し、今後も続編の鑑賞を予定している。

日頃ふれることのない途上国の少年少女たちの生活を垣間見ることで、生徒たちは大きな刺激を受けている。

●今後の展望

2009（平成21）年に学園創立100周年を迎える101年目となる2010年の新入生を対象に「T-12 Project」をスタートさせる。「T-12」とは入学者に対する12項目の約束であり、変化の激しい現代社会の中で、変わらずに輝き続けることのできる女性を育てるためのプロジェクトである。

[T-12Project] 12項目の約束

- 学校全体 01 女性としての資質が高まります
- 02 自分の目標、スタイルが必ず見つかります

03 勉強と部活動、両方全力で取り組めます

普通科 04 勉強が好きになり、学力が必ず向上します

05 英語検定準2級以上に合格できます

06 普通科の枠を超えた学びが可能です

家政科 07 未来のフード・ファッショングのスペシャリストを養成します

08 家政分野の検定で、1級を取得します

09 「安心・安全・環境」の授業が受けられます

看護科 10 看護師資格が必ず取得できます

11 看護教育を通して、豊かな人間性が育ちます

12 進路の希望を実現できます

普通科は、これまでの特別進学コースと進学コースを合わせた“いいとこ取り”的プログラム「I.C.E. (Integrated Comprehensive Education)」で、1コース制となる。

家政科は2コース制となり、2年次から一人ひとりの希望に応じて、より専門性を高めた「フードデザインコース」と「ファッショングデザインコース」に分かれて学ぶ。

また、平日は毎日15時15分（看護科は週1回16時15分）で終了するため、部活動や大学受験のための課外授業、目標実現のための活動に、余裕をもって取り組める。

普通科においては「医療看護系国語（仮称）」「医療看護系数学（仮称）」「発達と保育」「コミュニケーション論」、家政科では「生活環境論（仮称）」を実施し、希望進路の素



T-12Projectの説明チラシ

養を養うことができる。

放課後は部活動に全力で取り組みたいという生徒のために、早朝課外授業がスタートする。勉強も部活も両方頑張る生徒を応援していく。

2・3年生についても、2010年度より土曜日は原則月1回登校し、授業を行う。平日は毎日6時間授業となり、部活動などに取り組む時間が確保される。

授業料（月額）の変遷

大成裁縫女学校（1909年）

当時の米価*：4円

本科・専科・家政科：資料なし 別科：1円

水戸市大成女学校（1919年）

当時の米価：10円60銭

本科・専科：3円30銭 研究科家政科：3円

大成高等女学校（1929年）

当時の米価：10円40銭

授業料：4円

大成女子高等学校（1948年）設立当初

当時の米価：1,487円

授業料：150円

大成女子高等学校（1962年）

当時の米価：4,882円

授業料：1,700円

大成女子高等学校（2008年）

当時の米価：11,300円

授業料：22,000円

*米価は、青森県弘前市の株式会社菊富士会長板垣重信氏による『米価四代暦～1俵（60kg）あたり～』による。

授業時間数の変遷

大成裁縫女学校（1909～1919年）

資料なし

水戸市大成女学校（1919～1950年）

週6日制で週36時間（午前8時より午後3時まで）

大成高等女学校（1929～1949年）

本科：週6日制で週33時間（午前8時より午後3時まで）

補習科：週6日制で週31時間

大成女子高等学校（1962年）

普通科・家庭科：週6日制で週34時間（午前9時より午後3時30分まで）

大成女子高等学校（2008年）

普通科・家政科・看護科：週5日制で週31～33時間（午前8時45分より午後3時15分／午後4時15分まで）

VIII

看護科の歩み

■衛生看護科について

●全国的な動き

1950年代より全国的な規模で、医療需要の増大と看護婦（現在は看護師に改称）不足、高校進学率の向上、高校教育の多様化などの機運が高まり、1960（昭和35）年8月文部省看護学視学委員会の総括意見の中に、「准看護婦教育を織り込んだ高校ができないものか」という考えがあり、別の医療制度調査会の答申の中にも看護教育機関の一つとして、高校が対象としてあげられていた。

この結果、全国に先駆けて1964年4月、神奈川県に県立二俣川高等学校が単独校として創設され、翌年の1965年には全国17の高校に衛生看護科が設置された。

●本校衛生看護科の開設

茨城県においては、1960（昭和35）年には看護婦不足数は1,000名余に達し、県民の健康保持のため憂慮すべき状態であった。こうした中、茨城県高等学校編成審議会および茨城県医師会、水戸市医師会、茨城県衛生部など関係機関の全面的支持のもとに本校に衛生看護科を設置することが

決定し、1969年4月1日をもって文部省の認可があり正式に発足した。保健婦助産婦看護婦法の准看護婦養成所の指定を受け1学級40名の定員、専任教員1名、外部講師2名でスタートした。この年には衛生看護科を設置する高校は、全国で89校に増加している。

初の衛生看護科とあって、志望者も多く、看護婦を強く希望している1回生46名の生徒を入学させることができたのは、本校にとって誠に幸運なスタートであった。

当時の事情を故額賀修校長は、衛生看護部発刊の研究紀要に以下のように寄せている。

「昭和41年の高等学校編成審議会で、他県には高等学校の衛生看護科が設置されているのに本県には未設置であり、病院の中には看護婦不足のためベッドを閉鎖している所もあるようになり、そのような現状にかんがみ、水戸・県南・県北・県東の各地区に4校の設置を答申したのであります。水戸地区では市内の県立高校と接触したのでありますが、実業教育の引き受け校がなく、審議委員の一人として本校で引き受けたわけあります。はじめてなので不安もありました。病院実習、外部講師の件等、学内で処理できない問題も多々あることを知りましたが、県の経済的援助の方針、県医師会の全面的な協力に励まされ設置を決意したのであります。」

発足の年の専門科目（看護概論、基礎看護技術、解剖生理、病原微生物、薬理）については、専任教員1名（内田伊与子先生）と外部講師2名で担当した。高校生としての普通科目、学校行事、学年行事などと、看護教育の両立にはいろいろと問題があり、創設期には内外ともに何事にも調整が必要であった。

●第1回生卒業まで

2年目に入ってからは、専門科目として成人看護、母性看護などが増え外部講師も10名を超え、

また初めての病院実習開始に向けて、対外的な折衝が多くなった。こんな状況の中で2人目の専任教員が着任し、2年生の担任としての重責を十分果たした。一方で2回生を迎える一段と活気を帶びてきたが、2年生の戴帽式、病院実習などすべてが初めてのこと、ユニフォームの選定、実習病院である水戸協同病院、水戸済生会病院との打ち合わせなどに追われて、第1回目の戴帽式を挙げる運びになったのは7月2日であった。とにかく高等学校では県下初めての行事だということで、各新聞社のフラッシュを浴び、本校独自のデザインの若草色の高校生らしい、初々しいユニフォーム姿が翌日の新聞紙上を賑わした。2学期に初めての病院実習が開始した。



衛生看護科第1回生の戴帽式

3年目に入り、いよいよ全学年が揃い、教員もさらに1名増となった。第1回生の卒業の年を迎える、まず大きな問題は「進路」と「准看護婦試験」であった。“高校での准看護婦教育で、どんな卒業生が誕生するのか”と周囲の目は厳しく不安であったが、求人は多方面から数多くあり、まずまずの出足であった。県が水戸市内に100名定員の看護婦養成校を設置し、本校の第1回生を待っていてくれたため、生徒の努力次第で上級資格取得の道が開かれたことに安心した。最後の難関である資格試験は、卒業式終了後の3月第2日曜日であった。外部講師の先生の指導により、卒業式の後も試験間近まで補習講義を実施した。何のデータもない未知の世界への挑戦であり、受験に臨む

教員も生徒もその不安は大きかったが、3月下旬、全員好成績で合格したという知らせに歓声が沸き、皆手を取り合って喜んだ。ここに本校から准看護婦を世に送り出す一つの道しるべができたのである。



第1回生の病院実習風景



この頃の生徒たち 一校内実習と病院実習—

■設立 20 周年まで

その後1回生が築いた足跡が2・3回生と引き継がれ、一部教員の移動があったが徐々に指導体制も整えられてきた。戴帽式には、年々中学校関係者の出席も増え、生徒たちの大きな励みになっている。

1976（昭和51）年春、衛生看護科で初めて教育実習生を受け入れた。名古屋保健衛生大学の学生で、「看護」の高校普通免許取得が目的である。引き続き千葉大学から同年秋、1978、1980年に教育実習生を受け入れたが、その後「卒業生に限る」という条件を理由に辞退している。

発足20年を経過していく中で、一つの時代の流れを感じさせられた出来事として、県の看護婦等修学資金の全面廃止がある。発足以来希望者全員に貸与されていたが、1979年から定員の枠内にと制限され、1986年度の入学生（18回生）から打ち切りになったのである。理由として、県の予算の見直しがあり、衛生看護科の卒業生はほとんど県内の2年課程に進学するので、そこで貸与を受ければよい、また、もう一つの理由として、県内の看護婦不足は徐々に解消されているという

県からの説明であった。金額は少なくともよいから希望者全員に貸与してほしい、という希望は受け入れられず、その後の生徒募集への影響が懸念されたが、大きな変動は見られなかった。しかし、本校ではこの修学資金制度廃止に代わるべき対策として、特待生制度を設け優秀な生徒の確保に力を注いだ。

故額賀修校長は研究紀要の中でこれらの事柄にふれ、次のように指摘している。

「運営してみると、種々の問題が出てまいります。第一は病院実習であります。病院の御好意によって実習が実施されているのが現状でありますので、これを法的にうらづけすることができないものか。第二は外部講師の報酬でありますか、学校財源の関係上薄謝程度しかできず、御好意に甘んじている次第であります。これらの人件費にたいする県の補助は望めないものか。第三は看護婦等修学資金の打ち切りであります。」

また、1980年の第11回全国高等学校衛生看護科・専攻科研究協議大会が水戸で開催されたこと

は意義深いことであった。茨城県が当番で、県下の衛生看護科設置校である県立岩瀬高、土浦第一女子校と本校の3校で協力し、全国からの250名を超える参加者の会場、宿泊、接待などを本校が担当した。この大会を契機に3校間の理解、協力体制が深められ、その時発足した教育課程研究会が月1回、会場は3校持ち回りで長期にわたり継続した。この大会が本校衛生看護科教員にも多大な影響を及ぼしたのである。

衛生看護科の職員組織は、本校の場合当初は教科主任が看護学校の教務主任と同様の業務を担当していたが、1985年に専任教員が4名に増員されたのを機に1987年から学科主任を新たに設けて、教科主任と業務を区分した。学科主任は学科全体はもちろん、対外的な折衝、特に外部講師の派遣や病院実習の依頼などを行い、教科主任は主として教育課程の編成、施設設備の管理等を行い、学科主任を補佐することにした。なお、1989（平成元）年度より学科主任を科長と改称した。さらに職員に関して特筆すべきことは、「看護」の高等学校教員免許状を取得している本校の第1回生（菊池郁子先生）が衛生看護科の教員として着任したことである。過去に実習助手として在職した卒業生はいるが、教員としての着任は関係者の長年の希望もあり、設立20年目を記念する意義であることであった。

● 1990年以降の衛生看護科

平成に代わった1990（平成2）年頃の時期は、衛生看護科も一つの転機を迎えた。1989年度は教育改革のスタートという認識をもって運営にあたってきた。3月25日付文部省・厚生省令第1号「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令」に始まり、その後10年間にわたり、その対応に追われたといつても過言ではない。

本校では、准看護婦試験との関連を考え、1990

年度から徐々に移行を始め、新学習指導要領の開始の1994年の入学生から指定規則に合致させたのである。

講師会での説明、実習病院との連絡会、看護臨床実習指導要項の改訂など新学習指導要領の「看護情報処理」新設の準備とも重なり、校内外の研究集会が多くもたれたのである。

また、生徒減少に伴う生徒募集対策のため、1993年度より衛生看護科でも推薦入学制度を導入した結果、人気があり応募者は年々増加傾向となつた。

普通科を志望する中学生が多数を占める中で、優秀な生徒に多く志願してほしい、と願うのはなかなか難しいが、努力を惜しまず良い結果を出していくことが必須であった。そのための試みとして、中学校へ向けて衛生看護科を正しく理解してもらうため、1995年夏休みに初の体験学習を実施したところ、1日で衛生看護科を志望する中学3年生130名の参加が見られた。

一方では、1985（昭和60）年に修学資金制度が廃止された後設けられた特待生制度が、10年



病院実習に臨む生徒たち



中学生の体験学習の様子

目によく実を結んだ。その結果1995年の卒業生の中から、衛生看護科発足以来初めての4年制大学（茨城県立医療大学）への推薦入学合格者を1名出している。

●衛生看護科の教育内容の変遷

衛生看護科の教育目標は、学校の教育方針をふまえて、「豊かな人間性を備えた有能な職業人の育成」と「看護に関する基礎的な知識、技術を学ばせ、看護に携わる者として必要な能力と態度を養う」ことである。本校は衛生看護科の創設者である故額賀修校長が、“本当に看護婦になりたいという生徒を優先したい”という方針を基に、衛生看護科を第1志願とすることを重視した。入学選考には学科試験のほかに、当初は面接による意思の確認と共に医師による健康状態のチェックを実施していたが、その後、健康診断票の提出に替えた。

看護職を目指す目的意識の強い生徒を優先しようという選考基準は、現在も変わっていない。1991（平成3）年から導入している推薦入試でももちろん、本校衛生看護科を第1志望とし、成績・人物ともに優秀な生徒を選考している。このような教育目標の実現に備えた教育課程が編成され、実践されているのは当然のことである。

この学科で履修する看護に関する教科・科目については、これまでの学習指導要領には記載がなく、1966（昭和41）年に「参考例」を作成し、これに準じて教育課程を編成するように文部省からの指導であった。本校の発足時には、この「参考例」に基づいた本校の特色を生かしたカリキュラム編成がなされたのである。

1970年10月15日文部省告示の新学習指導要領では初めて、内容を看護系と医学系とに分類し、系統的に整理し、教科が5科目新設された。この新カリキュラムは1973年度5回生から実施された。

1978年8月30日に示された新学習指導要領では、従来の「看護実習」の内容のうち、現場実習以外の実習を関係の各科目の内容に含めて再構成を図り、それまでは「看護実習」の中に含まれていた校内実習をすべての関係各科目の内容に移し、座学と実習とを一体化して指導することになった。

この改訂で病院実習は独立し、「看護臨床実習」と科目的名称を変更した。すなわち高校衛生看護科のカリキュラムの中で、1つの柱として「看護臨床実習」が位置づけられたのである。改訂に合わせ「看護臨床実習」の評価の問題について研修を重ね、評価表・記録・試験など試行錯誤の結果、第14回生から実施、ようやく軌道に乗ったところで、次の改訂を迎えることになった。

1994年に学習指導要領が改訂された。この改訂では、保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部改正（1989年3月29日文部省・厚生省令）に伴い、看護の教科・科目的標準単位数が大きく変更された。

例えば（1）看護臨床実習の単位増（10単位→17単位）、（2）成人看護の単位減（12単位→4単位）である。この2科目については、1989年に告示されてから、本校ではすぐ移行措置に取りかかり、「看護臨床実習」については1994年度完全実施に向けて内外の調整を行ってきた結果、1995年7月から新カリキュラムによる1994年度入学生（第26回生）を初の病院実習へ送り出すことができたのである。

そのほか、「看護情報処理」の新設に対応して、教員の校内外の研修、テキストの作成など、専門分野の教員の協力、助言を受けながら1994年入学の1年生の後期から授業開始の運びになり、1995年度（2学年前期）で2単位を修得した。

教育目標実現のため、教育課程の編成が重要であることは言うまでもなく、専門科目の教科はもちろん、進学に備えての普通科目5教科の充足の

ため、「保健」「家庭」の2教科を代替、また課外・補習を実施した。1995年4月からは、週5日制が月2回実施されることになり、本校の場合週時間数が34時間から32時間になるので今まで以上にカリキュラム編成に創意工夫が必要とされた。

また、資質の高い看護職の育成を目指し、最良の教育を施すことを最優先事項としてとらえ、1995年度より衛生看護科の専任教員を1名増員し、教諭5名、実習助手1名の職員構成となった。主として病院実習の指導強化を目的とした。1985年以来10年ぶりの増員であったが、本校の職員数は他校に比べて恵まれており、よりきめ細やかな指導をすることができた。

●施設・設備の変遷

1973（昭和48）年度から県単費による運営費補助金（年間150万円）が支給されることになり、主として校費で購入できない高額な備品に活用し、1982年までの10年間に、実習室の器械戸棚、ベッド等と、視聴覚教材のOHP、テレビ、ビデオ、ビデオ教材、映写機、実物投影機などを購入した。

1985年までに、印刷機、コピー機、ワープロなどを備え、教材、試験問題、会議資料、文書作成などの能率化を図った。1987年には、1学年から3学年の各教室にモニターテレビを設置し、専門科目の授業に限らず、普通科目の授業でも活用された。

1988年には、看護用品（清拭車、洗髪車）などを中心に補充した。

1989（平成元）年からは、発足当時の模型をはじめ、破損の著しい備品を毎年少しづつ補充したり、新しいビデオ教材、パソコン等を購入した。多額な費用を出してもあまり利用価値がないものより、基礎的・基本的な知識・技術が修得でき、教育効果が高まるよう、備品購入の際は十分検討を重ね内容の充実を図るよう努力した。

●衛生看護科の入学志望者および進路状況

入学志望状況をみると、1969（昭和44）年度の141名は例外として1977年度までは2桁の志願者であった。衛生看護科の存在があまり知られていなかったということ、第1志望という条件や、県西、県南に各1校ずつ衛生看護科が増設されたことなどが関連していたのかもしれない。1978年を過ぎ1989（平成元）年まで、平均すると約3倍を超える志願者を維持している。看護に対して社会の期待や認識が高まりつつあったのと、衛生看護科の実績が少しづつ理解されてきた結果なのかと考えられる。

この時点まで、衛生看護科には生徒減少の影響は顕著に表れていたが、志願者数ばかりではなく、質の向上につながる入学選考を検討してきた。

進路状況を見ると、年により多少の差はあるが、大きな変動はほとんど見られない。平均すると、就職が約20%、進学が定時制も合わせると80%で、進学先は2年課程の看護学校が圧倒的に多い。そのうち、地元の茨城県立水戸看護専門学院へ進む者が最も多く、毎年クラスの約半数の20名前後の卒業生が入学していた。

そのほか主な進学先は、3年制の看護短大の聖母看護短大、東京女子医大看護短大に一般入試で合格。1978年には本県初の国立看護短大である筑波大学医療技術短期大学部へ推薦合格を果たしている。2年制看護短大では、1973年度卒業の3回生が神奈川県立衛生短期大学へ一般入試で合格、公立短大への突破口を開いた。その後東海大学医療技術短大、埼玉県立衛生短大、千葉県立衛生短大、聖隸短大など公私立短大へ一般入試、推薦入試とも合格者を出し後輩への励みになっていた。

2年課程では、慈恵医大、順天堂大、東京女子医大、東京都立、国立系の看護学校など多数県外へ進出し、看護婦免許取得後そのまま病院に残り活

躍している者、U ターンする者など様々であった。

准看護婦として就職する者では、2 年制の定時制への進学者は各進学校の近くの病院または学校が母体となっている病院に就職し、進学しない場合は、ほとんど自宅から通勤可能な医院、病院を選んでいた。

准看護婦制度の改善が叫ばれていた当時、進学を熱望する准看護婦が多くなると考えられたが、それに反して 2 年課程の看護学校が 3 年課程へと昇格する例が増えている状況であった。現実の問題として、例年多数の卒業生を受け入れた、県内の東京医科大学、県外では慈恵大学系列のすべてが 3 年課程に昇格して、卒業生の進路に大きく影響を及ぼした。それに代わって 1988 年度には県立岩瀬高が看護専攻科を、その後 1991 年度に水戸市医師会が 2 年課程の定時制を設置し、それぞれ 40 名の定員であるが、地元志向の本校生徒たちにとっては朗報であった。

当初は県立水戸看護専門学院も含めて岩瀬高、水戸市医師会の 3 校を併願できたが、のちには入試日が 3 校同一日になり、生徒にとっては厳しい選択を要求されることになった。

卒業生の動向としては、卒業生の追跡調査を設置 10 年を経過してから 1 回実施しただけでその後調査をしておらず、詳細な資料がないので、把握している範囲で主なものを述べてみたい。

1・2 回生では実習病院、国立病院などで婦長をしている者、それ以後の卒業生では病棟主任、また臨床指導者に任命されている者も数多くいる。また、看護婦の資格だけにとどまらず、保健婦、助産婦の資格を取得している者も多い。先に述べたように、「看護」の高校免許を取得して、母校の衛生看護科教員になった者もいる。また、1995 年 4 月、第 1 回生が本校卒業生としては初めて茨城県衛生部医務課に着任、看護行政に携わっている。発足以来、何かと注目や批判の的であった第 1 回生であったが、本県初の衛生看護科

の卒業生としてのプライドを失うことなく、そのパイオニアとしての責務を果たしていることは頗もしい限りである。卒業生の活躍は、本校教職員にとっても、一つの自信につながるものである。

このような、将来の目標となる卒業生が大勢いるので、本校の衛生看護科に入学した生徒たちのほとんどが初めから明確な目的意識を持ち、初心を貫く努力をしている。このことは、茨城県准看護婦試験に第 1 回生から第 33 回生まで、卒業生全員が受験して、その結果毎年 100% の合格率を維持していたという実績にもはっきり表れていることである。

●准看護婦制度の課題

高校衛生看護科として避けて通れない准看護婦制度の問題は、長く大きな懸案事項であった。それについて、当時衛生看護科長だった内田伊与子先生が、「高等学校衛生看護科の歴史」の中で、次のように書いている。

「1987（昭和 62）年 4 月 28 日に注目の『看護制度検討会』の報告が出され、准看護婦制度の在り方については意見の一致を見ず、引き続き検討を行うことを提言する、とある。ということは、准看護婦は廃止には至らず、存続と決めたわけでもなく、引き続き検討ということである。その理由は当面の看護職者の需要状態の問題があるが、“それらを考慮しながら、将来看護婦の比率を高めるための計画をし、順次、准看護婦学校・養成所の、看護学校・養成所への移行を促進する措置を講ずるべきである。また、必要に応じ准看護婦から看護婦になるための 2 年課程の看護学校・養成所の増設を進めていくことも必要である”と報告では述べてある。すなわち専攻科の推進にふれている。さらに、准看護婦養成所の入学資格は、高等学校卒業生に変更と述べている。1986 年で高等学校の入学者が 93% を占めている状況では当然のことであろうが、“その際、高等学校衛生

看護科については、その設置の経緯、実績および現状を考慮し、別途検討する必要がある”とも書かれてあったが、その後何ら検討されてはいない。

しかし、このような方向づけがなされて、21世紀の保健医療に対応し得る看護職者の養成確保を合言葉に、その後具体的な教育計画と実践がなされてきたのである。

職業学科として衛生看護科でも、老人問題など社会的問題を無視できない。当然のことながら、1989(平成元)年の指定規則の改正に伴う教科『看護』の改訂で『老人看護』の位置づけがはっきり示されている。また、看護臨床実習の単位増など病院実習の強化が要求され、本校では、1994年度入学生から実施している。

次に1994年4月26日に発足した『少子・高齢化社会看護問題検討会』の報告書についてふれる。この検討会は厚生省健康政策局看護課において行われ、報告書は同年12月16日に発表された。

この検討会は1994年4月26日～12月16日の間14回にわたり、(1)少子・高齢社会に対応した看護のあり方、(2)必要とされる看護の予測、(3)看護マンパワーの資質や養成のあり方、(4)関連職種間の役割分担の明確化等を目的として開かれた。同年9月26日には、准看護婦問題について有識者から意見聴取が行われ、高等学校衛生看護科の代表者による報告については、入学状況、教育内容、進路状況などから衛生看護科は高等学校における職業教育として有効に機能しており、『看護婦(師)の養成に寄与している』との評価を得ている。

報告書には、准看護婦養成所とは別に高等学校衛生看護科について、次の文章が載せられた。『高等学校衛生看護科の生徒の約80%は、看護婦を目指して短期大学、専攻科、養成所などに進学していることから、衛生看護科は看護婦の養成に寄与しており、今後とも専攻科の充実や大学、短期大学への進学機会の拡大を図る必要がある。』

また准看護婦問題については、賛否両論あり各方面より何年もかかって議論されてきたが、同検討会では、准看護婦養成について、『養成を廃止すべき』と『制度の改善を図りつつ継続すべき』との両論があり、結論が先に持ち越された。この問題は今後引き続き検討されるということである。衛生看護科教育に携わる本校としては、現状では“看護婦になりたい”という強い目的意識をもった中学生を受け入れ、『質の高い准看護婦教育を施し、専攻科、看護短大、看護大学へと入学させることである』と考える。

そのためには、中学校から衛生看護科へのより一層の理解を得ることも必要であろうが、同時に、高等学校という恵まれた学校環境の中で、人間教育を重視した看護教育を目指し、社会、医療現場、看護教育界の変化に対応できるよう努力を重ねることが必要である。

また、報告書にも書かれているように、衛生看護科生徒の進学の道を拡大すべく高等学校の専攻科の充実が重要になる。前述したように1994年度衛生看護科設置校のうち、専攻科設置校は48校(34%)であり、今後の増設が期待されているところである。

しかし、専攻科は2年課程看護短大と比較し教育課程はほぼ同じであるが、短大から4年制大学への編入学は可能だが、専攻科からは高等学校であるためそれができないという問題点がある。今後検討されるべきであろう。』

■看護科について

●看護科5年一貫教育スタート

本校衛生看護科は、茨城県で最初の衛生看護科として設置されて以来、第1回生から准看護婦試験100%の合格実績を誇り、県内の看護婦需要に応えてきた。が、2002(平成14)年4月の准看護師教育カリキュラムの改正に先立ち、本校においても前述のような課題について様々な議論を繰

り返した結果、名称を「看護科」と改め、高等学校看護科（3年）と専攻科看護科（2年）を合わせた5年一貫教育システムをスタートさせた。修了と同時に看護師国家試験の受験資格を得ることができるものである。

近年の医療技術の向上や数々の社会問題の表面化に伴い、看護師にはより多くの能力が求められるようになった。少子高齢化が急速に進む現代、新しい専門知識や技術の修得は不可欠であるが、医療倫理に関する問題への対応力、患者とのコミュニケーション能力、豊かな人間性や社会常識など、総合的に質の高い看護師の育成が望まれている。

本校の場合、入学時より「国家試験合格」に照準を合わせ、きめ細やかな指導とゆとりある学生生活との両立を図ることで、無理なく確実に知識と技術を修得することができる。1・2年次には一般教科と専門教科の学習に加えて校内実習を行い、3年次より近郊の病院・医院における臨床実習を行っている。2007年卒業の第1回生から翌々年の2009年の第3回生に至るまで、全員が看護師国家試験に合格するという快挙を成し遂げ、卒業生の多くは地元地域に大きく貢献をしている。

時代のニーズにいち早く対応し、「豊かな人間性」と「看護の心」を併せ持った優秀な看護師を育成する使命を負い、これからも看護科は邁進し続けていく。



卒業式を終えた専攻科看護科第2回生



学園行事で案内役を務める専攻科看護科2年生

●施設・設備について

5年一貫教育を始めるにあたり、在宅看護をはじめとした数々の実習が可能な最新設備を備えた新校舎が竣工し、3年次からの臨床実習に活用されている。



新しくなった看護棟

●看護科の進路状況

看護科の卒業生には、助産師や保健師、養護教諭といったさらなる資格を得るために茨城県立中央看護専門学校助産学科等に進学する者がいる。その他は全員が、看護師資格を生かし、水戸済生会総合病院、国立病院機構水戸医療センター、日立製作所水戸総合病院等の総合病院に就職している。

●看護科の行事

看護科には、普通科・家政科とは異なる独自の行事がある。これらの行事を一つずつ経験していくうちに、心身両面から、看護師になるための準備が自然と整っていく。生徒たちにとって、いずれも想い出深い行事となっている。

2009年度の行事例

- 4月 在宅看護論臨地実習オリエンテーション 専攻科2年
 第1回校内専門模擬試験 看護科2・3年 専攻科1・2年
 ユニフォーム試着調整 看護科1年
 看護関係奨学金説明会 看護科生徒全員／看護科対面式 看護科生徒全員
- 5月 国家試験対策模擬試験 専攻科2年
 専攻科2年生臨地実習開始 専攻科2年／体育校外授業（筑波山） 専攻科1年
 就職説明会 専攻科2年／いばらき看護の祭典出席（右写真） 看護科1年
 看護師国家試験対策ガイダンス 専攻科2年
- 6月 戴帽式（右写真） 学校行事／体育校外授業（ひたち海浜公園） 専攻科1年
 看護科3年生臨床実習開始 看護科3年
- 7月 三者面談 専攻科1・2年／水戸医療センター見学 看護科1年
 卒業生による国家試験対策講習会 専攻科2年
- 8月 つくば病院オリエンテーション 専攻科1年
 リエゾン精神看護学 特別授業 専攻科2年
- 9月 第2回校内専門模擬試験 看護科2・3年 専攻科1・2年
 専攻科1年生臨地実習開始 専攻科1年
- 10月 看護情報処理 水戸済生会総合病院見学 看護科2年
 看護研究発表会（グループ発表） 専攻科1・2年
 専攻科進級説明会 看護科3年／専攻科交通安全指導 専攻科1・2年
- 11月 いばらきものづくり教育フェア参加 看護科3年
 第2回茨城メディカルラリー参加 看護科1年
 外部講師招聘事業「メディカルフットケア」（右写真） 看護科1年
 ケースレポート発表会（個人発表） 専攻科1・2年
- 12月 水戸協同病院キャンドルサービス 看護科3年
 特別講義「洗髪の技術」 看護科1年
 第3回校内専門模擬試験 看護科2・3年 専攻科1・2年
 特別講義「救急看護学」 専攻科2年
- 1月 国家試験激励会（右写真） 看護科生徒全員
- 2月 看護師国家試験受験 専攻科2年／専攻科2年修了判定会議 専攻科2年
- 3月 テーブルマナー講習会 看護科3年／特別講義「洗髪の技術」 看護科2年



衛生看護科の研究発表会（看護科となってからは「ケースレポート発表会」と改称）

◎生徒全員が、病院実習の記録からレポートを作成し、発表する。この校内発表会終了後に、優秀作品を県の「産業教育振興会主催教員生徒研究論文・作文」に提出する。県で優秀な作品と認められると、全国組織の産業教育振興中央会に進む。これまでに、本校から数点が、中央会コンクールで佳作に入賞している。

衛生看護科 3年生による研究論文本校代表作品

- 1980年 鈴木孝子さん「両尿管結石患者の手術後の看護」優秀研究に選ばれる
- 1981年 山下優子さん「脳梗塞による半身に麻痺のある患者看護」優秀研究
- 1983年 永井聖子さん「無気肺の患者の看護」
- 1986年 田代美貴さん「喉頭腫瘍による喉頭全摘出手術を受けた患者の術前術後の看護」
- 1987年 高橋知勢子さん「右突発性大腿骨頭壊死の術後の看護」
- 1988年 藤根紀代子さん「脳内出血患者の看護」
- 1989年 小野寺清美さん「肝障害・高血圧患者の看護」
　　緑川いずみさん「左大腿骨内側骨折患者の看護」
- 1999年 米川智子さん「子宮体癌患者の看護」
　　佐藤麻美さん「左視床出血患者の看護」
- 2000年 飯岡佑紀さん「肺性心と食欲不振を伴う老人患者の看護」中央会佳作受賞
- 2001年 佐藤梨香さん「慢性腎不全患者の看護」中央会佳作受賞
- 2002年 山田七瀬さん「急性心筋梗塞患者の看護～社会的背景を通して～」中央会佳作受賞
- 2003年 石田優理子さん「急性膀胱炎患者の看護～安静状態からADL拡大に向けての援助～」

看護科 3年生による作文本校代表作品

- 2004年 小泉沙弥香さん 「看護臨床実習で学んだこと」

看護専攻科 2年生による研究論文本校代表作品

- 2006年 助川亜沙美さん「骨盤骨折患者の看護」
- 2007年 米光栄さん「日常生活の自立に向けて」
- 2008年 堀彩香さん「悪性リンパ腫患者の看護」
- 2009年 高堀希さん「糖尿病への指導を受けたことがない患者の看護」

コラム集

部活動の変遷

バレーボール部は排球部として1930(昭和5)年頃に創部。支えてくださった多くの方々のお力添えにより、全国レベルの部として大きく成長し、現在に至っている。

大成女学校時代：1940年 神宮大会に出場



1956年 県大会で優勝した際のチーム



1983年 第14回全国高等学校バレーボール選抜優勝大会で全国3位に



全国高等学校バレーボール選抜優勝大会での全校応援



大成女子高等学校時代：1948年の夏合宿
学校の校舎内で寝泊まりした。炊事は制服の生徒たちが手伝いで参加してくれた



1964年 東京五輪金メダリストの本校卒業生佐々木節子さん来校



1999年 第30回全国高等学校バレーボール選抜優勝大会で全国準優勝
2002年 全国高等学校総合体育大会（インターハイ）で全国準優勝



選手とともに、力を出し切る！
全校での応援



1949年 第4回国民体育大会に出場 三郎校長が一緒に写っている貴重な記念写真
右下は茨城県のワッペン



1970年 国体解団式で、全員が優秀選手として表彰される



2009年 全国での活躍を目指し、全員一丸となり健闘を続けている



大成女子高等学校バレー部 70 年の軌跡 元顧問 石川 豊

●設立から現在にいたるまでのあらまし

本校バレー部は、1930（昭和5）年頃つまり大成高等女学校時代に創設され、次第に発展への道をたどっていたが、1939年5月に寺田保三郎先生が、水海道高等女学校から転任され大きな躍進を遂げたのである。寺田先生は本校バレー部にとっては全く産みの親であり、バレー部のために一身を捧げられたものと言ってもよいと思われる。常に部員からは「お父ちゃん」と呼ばれ、親しまれていたほどだった。先生は茨城県バレー部協会（1947年発足）の初代理事長も務められバレーの発展・普及に貢献された。1957年6月8日、第11回バレー部関東大会が本県で開催された初日、水戸工業高校で第1回戦・東京竹田高校に勝利し、第2回戦・埼玉の強豪、久喜高校と対戦中、第1セットを先取し第2セットに入った時、突然倒れてしまって意識不明となった。以前から健康を害しておられたのに、無理をされて出場されたためか、医師の治療の甲斐もなく、その夜20時遂に永遠の眠りにつかれてしまったのである。先生にとってその18年間は終始一貫バレー部のために尽くされたものであり、本校バレー部の基礎は固く・固くきずかれたものである。

二代目監督は、中川三男先生である。先生は県庁の職員でありながら献身的努力をされ、1951年4月から1963年3月まで12年にわたりバレー部を育てた親と言える。特に日紡貝塚（現在は廃部）から1964年に我が国で開催された東京オリンピックに出場し、「東洋の魔女」として見事「金メダル」を獲得した佐々木節子選手を育てられた事は特筆に値する指導者であった。

中川先生の後をうけて、三代目の樋口寅太先生が1963年4月からバトンを受け継ぐことになった。先生は日体大出身で九州男児にふさわしいガッチャリ型で、指導者たるの素質を十二分に發揮され日々昼夜を問わず努力精進された。特に1970年開催の第25回岩手国体（関東で1チームのみ参加）では、関東ブロック予選で見事優勝し本国体では地元の優勝チームに接戦敗退したが、5位と入賞し輝かしい記録を残した。

また1974年本県開催の茨城国体では低身長の選手が多い中で、監督は練習場の鬼と化し高校生（人間）の限界を超える猛練習に猛練習を重ね「見事優勝」代表権を獲得！…。本国体では価値ある第三位「銅メダル」に輝いた。筆者たる小生もコーチとして生徒と寝食を共にし頑張り、指導者としてのあり方を勉強することができた。

1975年茨城国体の終了後に国体時代コーチであった

四代目、石川豊（旧姓・井原）が監督に就任したわけだが、前年の国体の強化トレーニングのため、一年生全員が退部してしまい、現役部員は二年生の5名のみのスタート、そして5名だけの寮生活となった。最初の新人戦の試合は、部員を一人補充して大会に参加する状態である。当然、勝利は困難であり、県大会の水戸地区予選の決勝で敗退してしまった。

しかしながら、その冬・ワンシーズン、体力作り・基本練習そして新入生の獲得とよく耐え・頑張り、翌年の関東予選においてはベスト4に入り、関東大会の連続出場の記録を継続することができた。その後着々と力を蓄え、1982年第14回春の高校バレー選抜大会に見事全国第3位・銅メダルに入賞した。

また、目標であった10年連続インターハイ出場（9年連続は達成）の記録は残念ながら達成できなかったが、インターハイ10回出場を契機に引退し、後継者として戸澤勉先生にバトンタッチし後をゆだねた。

戸澤勉先生も数年間、勝つことに苦労したが努力に努力を重ね、春の全国選抜高校バレーにおいて準優勝・銀メダル、また全国総合体育大会（インターハイ）において3位、そして2002（平成14）年地元茨城県大洗町で行われた全国総合体育大会において堂々と準優勝・銀メダルに輝いた。見事な快挙であった。その後2007年に諸事情により退職されたが、現在新しい先生の頑張りに期待するところである。

通算して、国体十数回・インターハイ25回・関東大会52回出場（関東NO.1）の実績をふまえ、今後の記録の更新と、まだ成し遂げてない全国制覇を掌中に収めもらいたいと念願し、学園全体で応援し、全員で感動・感激を勝ち遂げられるような学園を代表するバレー部活動になることを期待し、先輩卒業生各位に敬意を表したいと思う。

●部員の信条

一に練習、二に練習、三に練習、の気構を忘れるな
コート外にも練習の場を求めるよ
苦しい練習を自ら求めよ
習慣になるまで同じプレーを繰り返せ
へばつた時こそ技術は伸びる
練習後の反省を忘れるな
叱られ易い選手になれ
ファイトなき者はコートを去れ
一人は皆のため、皆は一人のために生きよ
自分にあったプレーを身につけよ

吹奏楽部はプラスバンド部として1963(昭和38)年に創部。以来、常に様々なジャンルの音楽活動に挑戦し続け、近隣のイベントにも積極的に参加し、地域の人々と音楽の喜びを共有している。秋山千賀子先生、伊藤豊先生、大山忠男先生、萩原健先生をはじめ、多くの方々に育てていただき、全国レベルの演奏者を擁するまでに成長している。

1964年 東京五輪聖火パレードを先導する



1967年 茨城県吹奏楽コンクールに出場し、入賞するようになる



2008年 町内の五軒サマーナイトコンサート



2008年 ひたち海浜公園でのパレードに参加



1966年 第1回定期演奏会開催



1988年 この頃から県マーチングフェスティバル大会で金賞の常連校となる



2007年 聖母幼稚園でのクリスマスコンサート



2010年 第42回定期演奏会でのパフォーマンス



史学部

部顧問 小澤俊幸

私の管見の及ぶ限りでの本校における歴史に関する部活動には、史学部の前身で、昭和40年代から活動していた考古学部がありました。そして1992(平成4)年に名称が変更され史学部となりました。前顧問の照山教諭のあとを受けて、1994年から顧問に就任いたしました。「史学とはどんな活動をするのか」、生徒達になかなか理解されず、当初は部員が集まりませんでした。本格的な活動が始まったのは、1996年からでした。指導目標は、水戸周辺における郷土の歴史に関心を持ち、巡査を通じ知識を深めるというものでした。これを受けた活動内容は、月に数回集まり、自分のテーマを研究する。また、その研究したものを持ち寄って発表する。さらに週に一度顧問の講義を聞いたり、野外活動をする。学園祭では先生方と協力し、テーマを発表・展示するというものです。翌1997年より各自が研究・調査したものを記録に残してみようということで冊子の作成を始めました。「茨城県の歴史について」という大きな主題に基づいたものでした。この『史林』と名付けられた1998年3月発行の創刊号には、前校長額賀良一先生の「巻頭言」が掲載されました。2000年3月発行の『史林』第三号より、前年度に実施された夏季巡査と称する日帰りの史跡等見学について掲載するようになりました。この頃より部活動は、

この冊子作成・発行に主眼が置かれるようになりました。併せて夏季巡査も生徒達の発案により一層内容を充実させていました。そして2002年3月発行の『史林』第五号より、茨城県立歴史館閲覧室に資料として保存されることになりました。このことは、茨城県で最高の権威のある場所がこの冊子の意義を認めてくれた証だと考えられます。一年おいて、2004年4月発行の『史林』第六号より、冊子のサイズがA4判になりました。また、2005年4月発行の『史林』第七号には、新校長額賀修一先生の「第七号の発行によせて」という題名の文が、校長就任を記念して掲載されました。以後2008年4月発行の『史林』第十号まで続いています。さらにその間、「巡査資料」、「日本文化系見学事前指導資料」の掲載なども追加され、内容も充実度を増しました。2008年度より指導目標も、「茨城県内の郷土史に関する事項を調査・見学することにより、ふるさとに対して興味関心が湧くようにしたい。」という現実に即したものに変更しました。

これからも週一回の部活動(私の講義)の内容を充実させながら、また夏季巡査も日帰りではなく一泊二日などにも発展させたいと考えています。そして、それらのことにより県内唯一の高校生作成・発行の歴史関係冊子の内容も一層充実させていくと思っています。

大成女子中学校の思い出

(1951(昭和26)年に大成女子中学校を卒業し、現在ブラジルサンパウロ市在住の野澤由紀子(旧姓更科)さんが、中学校時代の思い出を送信してくれたので抜粋する。野澤さんは、日系3・4世の子供たちに日本語を教えるボランティアを永年続け、現在、自分史の執筆に取り組んでいるという。)

私が新制中学に入学したのは教育基本法が制定された翌年、昭和23年だから、まだ一般には新制中学なるものの概要がつかめてはいなかった。新制中学は高等小学校のイメージだったのか、母は私を村の中学に入れようとしたかった。自分たち姉妹が東京の女学校を出ているので、水戸の大成女子中学へ入学させた。問題は通学だった。奥ノ谷まで歩いて40分、超満員のバスでさらに一時間行くのは乗り物酔いのひどい私には苦痛だった。また週に2度は旧兵舎の方に通わなければならず、そこまでは16キロあった。結局、少し小さめの自転車を買ってもらい、自転車通学することになった。当時、国道は砂利道で、中古のタイヤはよくパンクして遅刻した。大雨、雪の日は欠席することも多かった。通いだしてすぐ二人の通学仲間もでき、帰りは待ち合わせて帰った。学校のある大工町を出ると、町外れで芋飴を10円買う。それから、千波湖の長い上り坂を息を切らしながらペダルを踏んだ。3人のおしゃべりは数キロ続き、(中略)石岡へ向かう国道を奥の谷まで行く。そこから県道に入り下土師の家へ帰るのだ。いったい何時間かけて走っていたのだろうか。

通学よりも、女学校という女の子ばかりの世界の友達関係の

ほうが、結構大変だったかもしれない。戦後の教育の影響で何事もクラスの多数決で決めることが浸透していた。いじめの問題はなかったと思うが、年齢的にグループ時代である。いろいろな情報をキャッチしては、共有したり、まことしやかに流したりする。少女小説全盛の時代でもあって、夢と現実の間で、結構悩んだりもしていたのだ。(中略)

中学3年の時、水戸駅にNHKのテレビ列車がやってきた。テレビ放送開始前で生放送を放映するためだった。私と*さんとが選ばれて、「ブライムスの子守歌を」二重唱した。二人は声質が似ていたので、ハーモニーがよく合った。残念なことに、私たちにはその映像は見えなかった。(※この方のお名前等の情報をご存知の方は、本学園までお知らせください。)

学生生活の楽しみの一つは学友との旅行で、1学年が大洗、2学年は東京の二重橋前、3学年の修学旅行は日光で、中禅寺湖畔の写真が少女時代の大好きな思い出としてアルバムに秘められている。



当時の大成女子中学校の生徒たち

第3部
茨城女子
短期大学

I 茨城女子短期大学の開学

● 茨城女子短期大学の開設準備から開学へ

1965(昭和40)年6月の本学園理事会において、理事長から短期大学の設置について提案がなされ、財政上の検討・生徒の進学傾向等の検討が行われ、2年先の1967年度の開学を目指し諸般の準備をすることとなった。

短期大学の設置基準に則り、まずは文部法令に記載されている基準に従い、校地面積は最低1万6,500m² (5,000坪)の確保が必要であり、物色中当時の那珂町役場のご好意により、統合中学校成立後の五台中学校敷地跡3万887m² (約9,360坪)を得ることができ、1966年1月に登記を完了し、設置申請にかかる諸種の手続きを進め、同年9月25日に申請し、文科が同年12月に保育科が翌1967年2月に設置が認められた(文科英文専攻20名、国文専攻20名、保育科40名)。

1967年4月18日入学式が挙行され、文科英文専攻7名、国文専攻8名、保育科50名、合計65名で発足した。

本学園は、創立者額賀三郎・キヨ夫妻の女子教育に対する深い認識と高い識見に基づき、1909(明治42)年に大成裁縫女学校として発足し、爾来100年、「集大成を旨として温良貞淑の女徳を学



短期大学開学の頃の本館

び、時代に適応できる堅実な女性の育成を目的とする」ことの校是のもとに、「誠実・協和・勤勉」の校訓を規範として、教養を高め、ことに女性としての人格の向上を目指し、社会の発展に貢献し得る子女の育成に堅実な努力を続けてきた。

本学は、このような伝統と教育の成果を継承し、さらにそれを発展させ、真理の探究と人間形成の道を推進し、家庭婦人として、また社会的公正、社会的義務、責任を自覚し、行動する市民として文化国家の重要な担い手となる人材を育成しようとするものである。本学学則の総則に「本大学は、教育基本法および学校教育法に従い、広く知識を授けるとともに深く国文教育および保育に関する専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を養い、明朗で知性に富み穏健かつ情操豊かな女性の育成を目的とする」とあるように、本学が追求する女子教育は、戦前の婦徳、良妻、賢母型の男性原理を超えた女性的心性を根底とする精神の豊かさにあり、心身共に健全で社会性にも富んだ女性像にある。



中庭でくつろぐ学生たち

● 開学 10 周年

1979(昭和54)年に茨城女子短大の開学10周年の記念事業は完成した。第一は新体育館の建設であり、1978年3月に建築面積1,731m²の最新式

の諸設備を完備した建物が竣工した。次に新図書館の完成であり、機能的な設備と、当時2万5,000冊の蔵書を誇った。そしてML教室の新設である。これはコロムビア製の「エレピアン」を使用したもので、親機の機能によって子機全体をコントロールし、音楽学習、特に鍵盤楽器の学習の効率の向上を目指すものであった。

短大が発展を続けるためには、開学以来10年間の回顧と分析が必要であるため、1979年3月

には『茨城女子短期大学十年史』が刊行された。

そして1979年10月5日には茨城県民文化センター大ホールで大成学園創立70周年記念式典が盛大に行われたが、その一環として本学の開学10周年記念式典も行われ、永年（10年）勤続者として本学教職員4名が表彰された。

なお、10月9日に茨城県民文化センター大ホールで大成女子高校の芸術祭が催され、本学保育科2年生が全員出演し、合唱を披露した。



体育館



本館

開学10年の回顧と展望 初代学長 額賀修

本学は開学以来、今春で12年を経た。開学のころは、その後全国を席巻した大学騒動がようやく萌し始めたころであり、一方では高度経済成長の結果としての物価の騰貴もようやく目立って、地方から東京の大学に子女を進学させることについて、父兄の不安と負担が募り始めた時代である。そして、開学の母体となった大成女子高校の父兄や地域周辺の声として、短大設立の要望が潮騒のように聞こえてきたので、それに応えるために本学の設立を思い立つたのである。

時流としては、大学のマンモス化が全国の風となり、その弊害も識者の間で指摘されだしたので、新設短大の構想としては、規模の小さい、そして教授と学生との交流が充分な、したがって、青年前期の困難な教育を父兄より託されても、それに応えられるような、信頼を保ち得る学園を創ってみたいと思った。幸いにして、関係者各位の理解と協力を得て、ほぼ私の意図に沿う短大の設立をみた。設置学科は文科・保育科の2科とし、さらに文科は英文専攻・

国文専攻とすることにした。

キャンパスとしては水戸市の郊外、那珂川の清流に臨んだ、そして豊かな緑と太陽に恵まれ、一面静寂な思索の場として、理想的な場所をえた。さらに、私の教育方針に全面的に賛同協力を約束をして下さった多数の優秀な教員諸氏をえて、本学は昭和42年の春開学の運びとなつた。以来10年幾多の曲折はあったが、本学の歴史は発展の歴史であった。

短期大学は、もともと職業人の養成を目的とするものである。もちろん、一般大学の使命である研究と教育も、同時に短大に課せられるが、短大では本質上重点はより多く後者の教育に置かれなければならない。本学のめざす少数教育は、まさにこの使命に応えるためのものである。



額賀修

近年の志望者増は、この精神・特徴が世間に浸透し共鳴をえた結果であろうと思っている。教育のこと、もとより難事で、目的と結果の不一致も到底避けることはできないが、私共はこの目的の達成に全力をつくすつもりでいる。就職戦線でも、本学の評価は年と共に高まっている。不況による就職難に直面した今春の卒業生でも文科70%強、保育科80%強の就職率をみた。

今秋には本学園創立70周年、本学開学10周年の記念式典が挙行される予定である。これをさらに発展の一転機として捉えようと思いつかの施策を試みている。

その一つは、新体育館の建設で、建築面積1,731m²、最新式の諸設備を誇るものが今春3月に完成した。

2番目としては、図書館の拡充である。司書養成コースがあるので、その実習のためにも図書館機構設備は完ぺきを期さなければならない。これまで本館3階にあった図書館を1階に移して、独立の図書館にするために現在工事中である。これが完成すれば、大学活動の心臓部としての機能を充分に果たしてくれるだろう。

その3は、ML教室の新設である。本学の保育科は入試の際に、受験生の音楽についての力を問わない。したがつ

て、新入生の中には、入学時までほとんどピアノを習っていない学生が2、3割はいるようだ。この学生たちの指導のためには、私共も苦心を重ね、音楽教師も12名の多数を擁し、ピアノも40台を備えているが、もとより完ぺきとは言えない。そこで今回MLを開設することに踏み切った。外国語教育におけるLLに相応するものであり、全国に先駆けた導入であると自負している。夏期休暇中には、その全容を整えるはずである。

次にあげられるものは、本学10年史の編さん・刊行である。今後の発展の途を探るためには、開学以来今日までの回顧と分析が必要である。幸いに創立当時よりの職員も多く、資料的にも恵まれて、今春3月『茨城女子短期大学十年史』の刊行をみた。A5判374頁でオレンジ色の布クロス装丁の美本である。

これらの計画が完成すれば、私の理想とする短大像に一歩近づくこととなる。これを契機として、今後の10年を充実と躍進の時期としたい。関係各位の理解と協力を切に願うものである。

『茨城女子短期大学新聞』1979(昭和54)年6月より

II 新たな校舎の完成

2号館の活用進む

1981(昭和56)年12月14日に竣工した2号館は、鉄筋コンクリート2階建、総面積1,300m²の広さを持つ建物で、開口部の多い明るく斬新なデザインは、純白を基調として、オレンジ色でア

クセントをつけた軽快な色調の外装と相まって緑の多い周囲の環境に美しく調和している。1階には、音楽室、ML教室、工作室等があり、2階には、ピアノレッスン室(8室)、ピアノ練習室(35室)、絵画室等がある。現在は2階のピアノ練習室は取り除かれ、多目的演習室となり、一部はキッズルームとして活用されている。



創立当時2号館の完成デザイン画



2号館

手作りの教育を守って 2代学長 菊池實

私事にわたるが大成学園の創始者額賀三郎、キヨ両先生と私の家との交際が始まったのはもう半世紀も前の昭和初期のことであった。私もほぼ同じ頃から額賀修先生にご交誼を願うことになった。今から20年程前、本学の開学式にご招待を受け、田園の中のモダンな設計の校舎に感心したが、そのときは私が学長に就任することになろうとは夢想だにしなかった。人の運命はわからないものである。

太平洋戦争に敗れたわが国は主として米国の指導により、封建国家を脱皮して民主国家になるための教育改革が行われた結果、多大の効果を収めたが、反面ヒズミも大きくなり社会的問題となってきたことはマスコミなどでよく報ぜられるところである。政府も遂に臨教審を設けて戦後の教育制度を見直し、今後の社会の進展にわが国が適応してゆけるような教育制度を作りたいと審議が行われている。この議論の中で短大も論議の対象になっているようだ。

今日、短大は国公私立を併せて546校(59年)あり、その8割以上が私立であり、また学生の9割は女子である。4年制大学と併設されたものが多く、短大単独というのは私立では30余校に過ぎない。従って短大といえば女子短

大というイメージが強い。これは敗戦後の学制改革のとき、昔の高等女学校に併設された専科とか家政科(いわゆる花嫁学校)を基として作られたものであるため、女子短大はまた花嫁学校とのイメージも強い。しかし、女子にも高等教育が受けられるようになった今日、短大に対する社会のニーズは強いものがある。今日の短大はいろいろなコースを設け、それぞれ特色をもっているが、今後ますます社会の進展に伴い多様化が望まれている。本学は数少ない単独の短大で規模が小さく、それだけ教員と学生との交流が緊密で、いわゆる手作りの教育ができる所に特徴がある。将来教育改革の波がどう影響してくるかわからないが、この手作り教育の線だけは守り通したいものである。

『茨城女子短期大学報』1985(昭和60)年7月より



菊池實

● 3号館完成

1985(昭和60)年3月、3号館が完成し、新年度より使用できることになった。場所は、本館と体育館をつなぐ中間にあり、1階外側の廊下が通路になっており、雨天の際など大変便利になった。

建物の外壁の一部は、反射ガラス張りで、モダンな外観も学生たちから喜ばれている。建設当時、2階はワープロ演習室にあて、1階はタイプ室となっていたが、現在では2階は専攻科の研究室および講義室となり、1階は実習室となっている。



左から本館、3号館、体育館

● 開学20周年記念式典

1987(昭和62)年11月14日、本学体育館において、開学20周年記念式典が厳粛に挙行された。

本学園理事、評議員、旧・現教職員、同窓会会員、在学生等約410名の出席者があった。

式典次第

I、開式のことば

I、君が代齊唱

I、学長式辞

I、感謝状贈呈

I、祝辞

感謝状受領者代表

同窓会会长

学友会会长

I、校歌齊唱

I、閉式のことば

式典当日は気遣われた天気も晴れて、肌寒いが陽光の射す恵まれた日和となった。

学長式辞においては、「地域に根ざした女子教育機関としての地位を着実に固めつつあり、誠実・協和・勤勉の校是に基づいた個性を尊重する少数教育主義による心の通ったふれあいの教育、手作り教育の姿勢は貫きたいと考えています」と、本学の歴史と功績を称え、将来への期待と希望が述べられた。

退職功労者への感謝状贈呈では、事務局長の呼名により、次の方々に感謝状が贈られた。

吉葉誠之 元教授

茂木清文 元教授

磯貝信太郎 元教授（欠席）

小林健道 元教授

熱田緑 元教授

椎名力之助 元教授

林収正 元助教授（准教授）

海野積善 元庶務課長

本学の草創期から職を奉じられて、本学の充実と発展のために歩まれ勇退された旧教職員への感謝状贈呈に、満堂の拍手がそのご功績を称えた。

祝辞は、感謝状受領者を代表し、謝辞を兼ねて、吉葉誠之元教授が、往時を顧み、現在の発展を喜び、万感こもるご挨拶をされた。

続いて卒業生を代表して後藤久枝同窓会会长の在学中の思い出を交えた感激的な祝辞が述べら



開学 20 周年記念式典

れ、次に在学生を代表して、山崎陽子学友会会長による謝辞が述べられた。

最後に校歌を齊唱し、教務部長の閉式の言葉で、感動の余韻が漂う中、厳かに慶びを込めた創立 20 周年記念式典は終了した。

記念品として、『茨城女子短期大学二十年史』とシチズンの置時計（黒）、それにテレホンカードが贈られた。

感謝状贈呈者には、三の丸ホテルにて、本学理事・評議員の方々には芳野山荘にて会食をしていただいた。

開学 20 周年を迎えて 3 代学長 宮澤治正

本学は今年で、開学 20 周年を迎えることになりました。人にたとえれば成人に達する歳月が経過したわけですが、保育科 40 名、文科 40 名の定員でスタートした本学も、現在は総定員 460 名を擁する程になり、一応の設備と内容をそなえた短期大学へと成長しました。まさしく、地域に根差した女子教育機関としての地位を、着実に固めつつあるといつてもいいでしょう。

しかしこの 20 年の間に、教育の現場やそれを取り巻く社会状況が大きな変化をきたしてきました。

非行・校内暴力・いじめに代表される諸問題が露呈し、一時はその責任の所在さえも判然とせぬ状況が見られ、学

力偏重は一向に改善されず、管
理化の度合いだけが深まっています。今日ほど教育問題全般が
問い合わせられている時代はないといつてよく、臨時教育審議会の
設置をはじめ、様々な改革が試
みられているとはいえ、国公立
大入試制度に見られる混乱のご
とく、いまだ成果をあげるには
至っておりません。

宮澤治正



また、男女雇用機会均等法の施行により女性の社会進

出が図られる一方で、社会は円高による産業構造の転換を余儀なくされています。今後も低経済成長の傾向は続くと予想され、一層の能力主義・専門職化が促進されていくものと思われます。まさに混迷の時代の到来といえるでしょう。

さらには若年人口の減少による就学者数の激減という状況を近い将来に控え、教育関係者の関心は高まらざるを得ません。

これらに対処する方向で、おのずと私立の短期大学も教育の在り方を問われる訳ですが、有用な改善は盛んに取り入れつつも、無用な迎合だけは避けねばなりません。結局のところ、独自の一貫した理想～本学の場合、それは誠実・協和・勤勉の校訓に基づいて、個性を尊重する少数教育主

義による心の通ったふれあいの教育～を実践していくことで、はじめて人造りともなり、そこに私学の私学たる存在理由があるものと思われます。

将来、教育の改革がどのような影響を及ぼすかと、マスプロ大学には真似のできない、本学の特色である手作り教育の姿勢は貫きたいと考えています。女子教育機関の忘れてはならない使命は、なにより情操面と学力との均衡を図り、次代を担う女性の自覚と誇りを育てることではないでしょうか。

学生諸子にも勉学に励むはもとより、積極的な学校運営への参加を期待します。

『茨城女子短期大学報』1987(昭和62)年7月より

●故学長 宮澤治正先生大学葬

1989(平成元)年2月10日午前10時30分より、本学体育館で故学長宮澤治正先生大学葬が厳粛に執り行われた。会葬者は本学教職員はじめ大成学園幼稚園児、そして多数の卒業生も計報を聞いて参列した。茨城大学時代からひたすら教育者養成のための美術教育にご尽力され、1987(昭和62)年からは本学学長、および大成学園幼稚園園長としてご活躍された。



宮澤先生の遺作「夕映え」

学長に就任して 4代学長 堀籠平吾

このたび、第4代学長に就任いたしました堀籠平吾であります。

顧みますと、本学には昭和47年11月より、昭和52年3月まで約6年間、非常勤講師(栄養学)としてお世話になりました。次いで昭和58年4月1日付で茨城大学を定年退官し、昭和58年4月2日付で本学教授(栄養学、生物学、生活科学)に迎えられました。

昭和63年4月、宮澤学長のもとで教務部長をつとめさせていただきました。この年は私にとって激動の年と申しても過言ではありません、その一つは、「樹林祭」が中止の止むなきにいたったことでした。次いで、翌、昭和64年1月7日に天皇陛下の御崩御の報があり、1月20日に宮澤学長の急逝、2月10日に同学長の大学葬と、本学は驚きと悲しみの一色に包まれました。こうしたなかで平成元年2月17日付をもって、計らずも学長に就任いたし、大任を担うことになりました。もとより浅学非才の身でご

ざいますので、教職員の皆様ならびに、ご関係方々のご支援、ご指導、ご協力を賜りますようお願いいたします。

次に、本学の経緯と教育環境についてみると、本学の源は、明治42年、本県初の女学校として設立された大成学園であります。昭和42年に大成学園の一環として茨城女子短期大学が誕生いたしました。一貫した建学の精神のもと、礼法を中心とした「躾」の教育であり、さらに時勢の進展に即応し、近代的な明るい女性像を目指しております。

学風や教育目標達成に大きな影響を与えるものの一つとして、自然環境があります。本学は、市井の騒音から離れて閑静であり、然も、緑に囲まれ、また近隣は小学校、高



堀籠平吾

等学校等があり一大文教の地を形成しております。然し、反面、交通の便に難色があり、これを取り除くための努力がなされ、徐々に解消されたとはいえ、まだ十分とはいえない。今後課せられた大きな課題であると思います。

次に、施設設備関係については現在までに着々と充実し、本学教育の進展に寄与いたしました。さらに本年の秋頃から来年秋にかけて、新校舎の建築が計画されており、

一層の充実と発展とが期待されております。

学生諸姉、教職員の皆様共々一体となって魅力とゆとりのある学園、開かれた愛される学園を目指して意欲的な活動が展開されることを願って止まないものであります。

学長就任にあたり、お願いと期待とを申しまして、挨拶をいたします。

『茨城女子短期大学報』1989(平成元)年7月より

III 環境・設備の充実

● 専攻科福祉専攻を設置

1990(平成2)年、わが国の急速な高齢化に伴う社会的要請に応えるため、本学に専攻科福祉専攻(定員20名)を設置した。授業は週4日制で少数精鋭の有資格者養成を目指した。本学保育科で2年間学習すると幼稚園教諭2種免許状、保育士資格が取得できるが、さらに専攻科に進学することによって、1年間で介護福祉士の資格も取得可能となった。なお、初年度の入学者は6名であった。2009年度からは介護福祉専攻科と名称を変更した。



介護実習室

● 1号館竣工披露

1991(平成3)年5月12日、竣工した1号館の21教室で1号館竣工披露が盛大に行われた。学園関係者、学生はもとより、本学と関係の深い各機関・団体等の方々にも多数ご参加いただいた。

小グループに分散して建物を見学した後、祝賀会に移り、江幡学園理事長、堀籠学長の挨拶、和田洋子県生活福祉部婦人児童課長からの祝辞、そして浅川泰郷那珂町長の乾杯の音頭で、盛大なまたなごやかな祝宴となった。

現在の本館はもともとは1号館と呼ばれていたが、新しい1号館が完成したことにより、本館とした。



1号館竣工披露



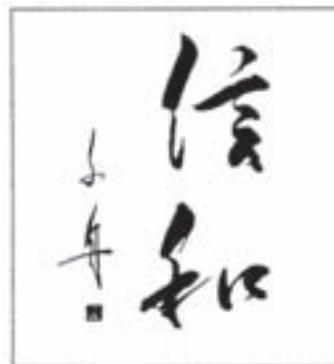
1号館

●故学長 堀籠平吾先生大学葬

1992（平成4）年3月24日午後1時より、水戸市斎場において曹洞宗円通寺住職により、故学長堀籠平吾先生大学葬が厳粛に執り行われた。葬儀当日は、前日までの雨も上がり、生前の堀籠先生の人柄が思い起こされるような穏やかな日和となった。葬儀委員長額賀良一、葬儀副委員長小野孝尚・柴田和子・芹澤悟、葬儀委員岡田忠軒・小林真鏡・上田忠義。弔辞は、本学教職員を代表して小野孝尚、本学学生を代表して学友会会长櫻井知恵子であった。

堀籠平吾先生は、本学に1972（昭和47）年から1977年まで非常勤講師として勤務され、1983年4月からは、教授そして教務部長を歴任され、さらに1989年2月から本学学長ならびに大成学園幼稚園園長に就任され、本学の発展のためにご尽力をいたしましたが、入退院を繰り返された後、1992年2月24日午前5時40分に水戸市の協同病院で逝去された。

葬儀の会葬者は本学学生、大成学園幼稚園児、本学教職員、関係各界の方々、また多くの卒業生が訃報を聞き駆けつけてくださいました。



堀籠先生の書(1973年3月)、号の「千舟」は以前千波町舟付に住んでいた縁で使用していたという

学長就任に際して 5代学長 額賀良一

本年3月、前学長堀籠平吾先生のご逝去に伴う人事で学長に就任いたしました。顧みて非才その任の重さを承知していますが、昭和42年の開学に関与した者として微力ではあっても最善の努力をする所存ですので、よろしくお願い致します。

日本の社会・経済的発展に高等教育機関が果たしている役割は大きく、毎年短大・大学卒の多くの学生が社会に巣立ち、社会・経済を支える主要な柱となってきていることは昭和20年以前と異なっているところです。学問の府としての位置付けに限られた時代とは異なり、卒業後の学生の社会的貢献を配慮した教育が要求され、特に短期大学にあってはそれに対応する必要があることは当然です。実社会に直結した学問、国際化・情報化時代に適する人物の養成等に応えるため、「開かれた大学」としての社会的責務を果たさなければなりません。

しかし他面、大学の在り方を考えるとき原点となる中世ヨーロッパの大学に遡ってみることも意味があります。現在大学という言葉は、英語のユニヴァーシティの訳語とし

て用いています。原語はラテン語のユニヴェルシタスで、本来「団体」或いは「組合」を意味する言葉でギルド（同業組合）の同義語として使われていました。つまり、教師と学生のユニヴェルシタスが語源です。学徒の組合・任意団体としての大学が現実に社会の中に定着するためには、他の社会的勢力との関係なしには有り得ないわけで、その自治について教会・都市・領主・国主などの承認を得ながら現代に至ったわけです。中世の大学、宗教改革時代の大学、フランス革命を契機とする近代国家成立過程の中での大学と発展してきましたが、団体的原理と国家的原理の対立の狭間で「学問の自由・大学の自治」は受け継がれてきました。時代の変化或いは世俗に超然とするいわゆる「閉ざされた大学」としての性格が残っている面があるとすれば、この歴史性に起因するもの



額賀良一

かも知れません。

学問は本来、即現実に役立つものばかりではありません。学んでいる学科がすべて就職に結び付くとは限りませんが、それぞれ人格形成の上で重要なものです。勉強したことはすべて将来人間性の深いところで結び付き必ず自らを高めるものとなると考え、役に立つ科目と役に立たない科目と分けることなく努力するべきです。言い換えれば、就職して社会の組織に飲み込まれてしまう前に、関心をもった分野の研究に没頭すること或いは視野を広げる多角的な読書をしておくことが大切と考えます。

現在の短期大学制度は昭和 25 年に暫定的な制度として始まり、昭和 39 年学校教育法の上で恒久的な制度として、大学制度の枠内に位置づけられました。しかし、科学

技術の高度化、社会・経済の複雑化・高度化、また社会の国際化・情報化の進展にみられる昨今の変化に適応するため、平成 3 年 2 月短期大学教育の改善についての答申が出されました。その答申に基づき、同年 6 月短期大学設置基準が改正されました。

新基準による展開は平成 5 年度入学生以降のことになりますが、本学においても本年より教育課程の全般的見直し学則変更の準備にとりかかっています。時代の進運に伴う制度の改正は当然必要ですが、学校の基本は学徒のユニバーサルシタスです。前学長が言っていた「学園の活性化」は、学生の皆さんの意識に負うところが大であると思います。明るい活気のある学園づくりに協力を期待しています。

『茨城女子短期大学報』1992(平成 4)年 8 月より

● 専用スクールバス運行セレモニーの開催

1992(平成 4)年 3 月 25 日、専用スクールバス運行セレモニーを開催し、本学玄関前～勝田駅西口間で試乗を行った。

交通問題の解消は、本学学生が充実した学生生活を送るために不可欠なこととして、かねてから検討を重ねていた。そこで勝田駅を拠点とし 1 年間の試運転の後、1993 年 4 月から本格的な運行の運びとなった。

本学専用スクールバスは、本学関係者に限定されている。運賃も安価で、学生生活にも支障のないように運行時間が設定されている。定刻運行が



専用スクールバス

実施され所要時間も水戸駅からよりも短縮され、予測どおりに利用者から好評を得ている。

● 開学40周年記念行事

2006(平成 18)年 11 月、額賀良一学長より「平成 19 年度に開学 40 周年を迎えるにあたり、同窓会の要望も入れて、学外で記念式典を開催したい」旨のお話を受けた。

まず、会場を確保(水戸京成ホテル: 2007 年 11 月 18 日)、次いで、小野孝尚教授を委員長に



開学 40 周年記念式典



式典には400名が参加した

教職員および同窓会役員で「記念事業実行委員会（委員21名）」を立ち上げ、式典開催まで7回の会議を重ねた。

広報面では、歴史ある本学の存在を周知させる機会ととらえ、新聞広告、放送広告、本学ホームページ、タウン誌を最大限に活用した。

また、記念品は会費制したことから、「記念冊子等編集委員会」で刊行する『茨城女子短期大学四十年史』および記念出版2冊子に加え、電波式置時計、ロゴ入りのクリアファイル・手提げバッグをセットにした。

講演は海野富江講師（本学ダンスサークル）が取り持つ縁で、俳優・創作童話作家である佐野浅夫氏（テレビ3代目水戸黄門）にお願いすることができた。

式典当日は来賓に関宗長県議会議員・小宅近昭市長はじめ那珂市関係者、本学園役員を迎える、在学生・同窓生・現旧教職員を含め400名が参加した。

式典では学長の式辞に始まり、関県議、小宅市長、後藤同窓会会長に祝辞をいただき、開学40周年を厳粛に祝うことができた。続く、佐野氏の講演では、「佐野浅夫語りの世界」と題してプロの技を堪能することができた。

休憩時間を持ち、懇親会は内桶真二准教授編集の「写真でみる沿革」のスライドに合わせ、30回卒業生の小見さんがピアノ演奏を、加藤智子講師には飛び入りでスライドの説明をいただき、また黄門祭り「格さん賞」に輝くダンスサークル有志による踊り、佐野氏の好意による特別参加、山崎由美子講師（親子）のピアノ連弾があり、なごやかな雰囲気のうちに閉会した。

式典とは別に、40周年記念事業の一環として、11月5日に同窓会主催による「長須与佳（尺八・琵琶）コンサート」を本学体育館で開催（一般参加者を含め約450名）、本学図書館では5月から12月まで「写真でみる40年のあゆみ」を展示、また、11月27日に茨城県立図書館で「開学記念秋季公開講座（武田昌憲教授、成井恵子准教授の2講座）」を開講した（参加者168名）。

開学40周年記念事業は滞りなく終了、2007年度を顧みると卒業生が頻繁に来学、教職員との活気あふれる交流があり充実した1年となった。

最後に、同窓会役員（実行委員）の労を惜しまない協力、また、同窓会より多大な資金面の援助があったことを特記しておきたい。



同窓会主催の長須与佳コンサート

第4部
大成学園
幼稚園

I 大成学園幼稚園の開園

大成学園幼稚園は、1967（昭和42）年に設立した茨城女子短期大学の保育科学生の教育実習園として、1971年開園した。

■教育方針の構築

大成学園幼稚園は、茨城女子短期大学附属幼稚園として開園し、園長は短期大学学長が兼務した。創設者額賀三郎・キヨ夫妻の精神を受け継ぎ「誠実・協和・勤勉」とする教育理念と、教育基本法に基づいた大成学園幼稚園の教育方針を明確にした。

■教育理念

誠実：まじめで素直に生きる誠実の心

協和：仲良く協力し合う協和の心

勤勉：進んで学ぶ（遊ぶ）勤勉の心

■教育方針

望ましい環境の中で、一人ひとりの発達に即した経験や生活を通して、心身の調和的発達を目指し、将来成人としての活動に必要な、人間性豊かに生きる力を育むことを目的とする。

■教育目標

- 自立の精神を養い、物事にくじけない子どもを育てる。
- 明るく元気に遊び、仲良く仕事のできる子どもに育てる。
- 豊かな生活経験を通して、創造力や思考力を育てる。
- 心情を豊かにし、素直に育てる。
- 生活のきまりややくそくを守る子どもに育てる。
- 日常生活に必要なことばが正しく使えるようにする。
- 基本的な生活習慣が身に付く子どもに育てる。

■努力目標

- 生活環境（遊びの環境構成・生活内容）の充実を図ることを努力する。
- 園と家庭との連携を丁寧に図ることを努力する。

II 大成学園幼稚園の保育

1964（昭和39）年、文部省より幼稚園教育要領が示された。

時代の流れの中で、社会変動とともに、保育もまた変化をしてきた。特に、幼児を取り巻く社会環境（国際化・情報化・少子高齢化）、家庭環境の変化などにより、新しい時代の教育のあり方が問われるようになった。

「平成」に入り、24年ぶりに幼稚園教育要領の見直しが図られ、いつの時代の変化にも対応できる幼児を育てることに重点が置かれた。

そこには、「生きる力」という文言が強調されて表記されていた。

1985年、教師主導の保育から幼児を主体とする新たな保育觀に変わる転機が訪れた。画一的な教師のかかわりから脱することであり、幼児が主体的な生活を展開していくための理解と、そのような生活の中で、幼児が身に付けていく育ち「生きる力」について理解が深められた。

■主体的な生活を展開していくために

- 一人ひとりの幼児に目を向けること。
 - 幼児の興味関心に寄り添うこと。
 - 一人ひとりの幼児の育ち（発達）の違いに目を向けること。
 - 幼児の育ち（発達）の意味を問うこと。
 - 幼児の興味関心、育ち（発達）に応じた環境を提供すること。
- 新しい保育觀にどのように向き合っていったらよいのか戸惑いを感じたことも確かであった。

けれども、幼児の姿にじっと目を向けていると、 “何かが変わっている” ことに気づくことができた。 “生き生きとした表情がある” “幼児が自ら遊びに動き出している” “友達と会話を交わし、自分の思いや考えを伝えながら楽しんで生活をする” “自分たちの生活に必要な環境を工夫してつくりだしている” など、幼児の姿の変化と生活の広がりが生まれてきた。

また、自分でできることに自ら喜んで取り組む姿勢 “自立に移行する姿” が見えてきた。

いろいろな友達・環境にかかわり、遊びや生活体験を重ねながら、社会性や道徳性、言葉や表現力等、幼児がその時期に身に付けていく育ち「生きる力」が見えてきた。

日々、幼児の育ち（発達）を問い合わせながら保育が続いている。

●常に大事にしたい保育のあり方

①幼児と共に生活し共に共感しながら

「幼児と共に生活し共に共感する」ことで、幼児の思いや考え、行動の意味することがよく見えてくる。

すなわち、幼児の内面を理解することになる。幼児を理解するうえに立って行う保育を大事にしている。

②集団ならではの生活と遊びの体験

保育者や友達の話に耳を傾けたり、歌を歌ったり、運動的な活動をみんなと一緒に共有する時間も持っている。その一面では、一緒に過ごす難しさが生じることもあり、思いもよらない葛藤体験をしながら理解をめぐらす場面も出てくる。お互いに刺激を受け合って育ち合う姿がある。

③多様な生活体験

園の生活には行事も多くあるが、日常の保育とかけ離れたものではなく、幼児の生活と関連づけながら行うものとしている。

園の近くには歩いて行ける農場があり、放牧さ

れた牛等を観察することができる。また、イチョウの広場やドングリなどの木の実を見つけ、想像性を膨らませながら遊びを楽しむことができる。

冬には白鳥やいろいろな渡り鳥が飛来する公園が近くにあり、スクールバスを利用して出掛ける。

春は親子で遠足に行き、陶芸にチャレンジし、思い思いの作品作りを楽しんだり自然博物館へ出掛ける。

秋には園児のみの遠足で、観光農園でリンゴ狩りをする等、自然と触れ合う体験をしている。

年長組になると、1泊2日の宿泊保育を行ったり、美術館や芸術館、科学館等へ行き、社会と触れ合う機会を持っている。

④幼児の発達と必要性に応じたカリキュラム

体力と調和のとれた体力づくりをするためのプログラム

1993（平成5）年、講師指導のもと、サッカーを導入。

2001年には、幼児体育を導入し1クラス30分ずつ保育に取り入れている。

希望者による課外クラブも行われている
英語に親しませるためのプログラム

1994年、ネイティブスピーカーによる英会話を導入。

外国籍の子どもを受け入れる機会もあり、英会話を始めるきっかけともなった。1クラス30分ずつ保育に取り入れている。

希望者による課外クラブも行われている。

⑤家庭との連携

幼稚園生活の中において、家庭との連携を図りながら幼児の成長を支えていくことは大事である。

幼稚園だより 幼稚園の教育や生活のねらいを伝えている。

個人だより 個人の生活の様子を担任から伝える。また、家庭からの連絡等を受けている。

個人面談 7月と12月、保護者と面談（希望者）

を行っている。

保育参観（加）日と保護者会 保護者も幼児と一緒に保育に参加する。また、保護者会を通して

生活の様子について具体的に伝え、理解を深めている。さらに、保護者の意見を聞く場にもなっている。



幼児体育：運動種目を数多く体験しながら体力と調和のとれた体力づくり



英会話：カード遊び・リズム遊び・絵本の読み聞かせ等の活動から興味が広がっていく

III 大成学園幼稚園の行事

大成学園幼稚園の主な行事

4月	第1学期始業式 入園式 預かり保育実施 家庭訪問 弁当・給食開始 保育参加日	10月	クラス役員会 フリー参観日 園外保育 サツマイモ収穫 避難訓練（火災）
5月	クラス役員会 幼年消防発会式 春の親子遠足 給食試食会／新入保護者希望者 フリー参観日 避難訓練（原子力）	11月	秋の遠足／園児のみ 作品展／親子でチャレンジ 避難訓練（原子力）
6月	保育参加日 見学月間（幼児体育・英会話） ※寄生虫卵検査・歯科検診・内科検診 園外保育 ジャガイモ収穫 避難訓練（火災）	12月	お楽しみ会 保育参観日／保護者会 誕生会（8月～12月） 消防訓練（通報・消火・避難） 第2学期終業式 個人面談／希望者 冬季休業中の預かり保育実施
7月	宿泊保育／年長組 保育参観日／保護者会 誕生会（4月～7月） 第1学期終業式／夕涼み会 避難訓練（地震） 個人面談／希望者	1月	第3学期始業式 白鳥見学 クラス役員会 避難訓練（地震）
8月	夏季休業中の預かり保育実施	2月	節分 一日入園／説明会 生活発表会 誕生会（1月～3月）
9月	第2学期始業式 祖父母を招いて遊ぶ日 スポーツフェスティバル 来年度入園に関する幼稚園説明会 教育実習及び看護科臨地実習開始 ・茨城女子短期大学保育科1年生 9月～11月 ・大成女子高等学校看護科専攻科1年生	3月	ひな祭り 保育参観日／保護者会 お別れの集い／年長親子 お別れ会 修了証書授与式 第3学期終業式 春季休業中の預かり保育実施

●入園式

毎年9月中旬、幼稚園募集案内が家庭に届いた頃、願書が配布される。

願書受付・入園手続き・一日入園および説明会と進み、4月には入園式を迎える。

入園式は、幼稚園の遊戯室で挙行される。真新しい制服を身に付け、式に臨む幼児たちは大変賑やかである。親元から離れられず、不安な表情を見せており、幼児の姿もある。その保護者の気持ちも同じ様子にあるようだ。

式の中で、年長組に進級した幼児が新入児を迎える話をすると、緊張している様子も見せているが、

幼児なりに精一杯に責任を果たす。その姿に興味を示す新入児は、じっと聞き入っている。

式の流れ

- 入園許可
- 園長式辞
- 歓迎の言葉
- 園歌
- 保護者代表挨拶
- 職員紹介

新しい生活の始まり



年長組 欽迎の言葉



入園式



初めての登園

●遠足の実施

○春の親子遠足

春は親子で遠足に出掛ける。新入・進級当初でもあり、新しい友達と、また、保護者も新鮮な気持ちで参加する行事となっている。

新緑の美しい季節となり、なるべく自然とのかかわりが持てる場所で、体を動かして遊び、大勢がゆったりと過ごせることを配慮した計画を立てている。また、新しい施設や公園、身近に高速道路ができ、遠足の場所に広がりが出てきた。

春の親子遠足実施場所

大洗町 アクアワールド大洗水族館
日立市 神峯動物園
鹿島市 潮験はまなす公園
水戸市 森林公園
十王町 パノラマ公園
岩井市 自然ミュージアムパーク
笠間市 芸術の森公園
笠間市 北山公園



親子で陶芸に挑戦

○秋の遠足

同じクラスの児童同士のつながりや異年齢の児童とのかかわりを通して、さらに、縦のつながりを育していく機会にもなっている。

計画がある中で、年長組の児童たちは、どのように活動を進めていくか、異年齢の友達の面倒をどのように見ていくかを相談し合って展開していく。自然の変化が気持ち良く感じ取れる季節であり、いろいろな疑問を持ち、探究心が揺すぶられながら遊びが広がっていく。

秋の遠足実施場所

笠間市 芸術の森公園
大子町 広域公園とリンゴ狩り
那珂市 県民の森・植物園
水戸市 くれふしの里古墳公園
ひたちなか市 国営ひたち海浜公園
水戸市 少年の森 ブドウ園



リンゴ狩り

楽しい時間

新緑の中ローラー滑り台が走り抜ける



●園外保育

園内における保育活動から園外に向けて活動を広げている。

特に、四季折々の自然とのかかわりを重視し、その中で体験活動を広げながら、五感を通して（見る・聞く・かぐ・味わう・触れる）気づいたり発見したり、疑問に思ったりする等の探究心とともに、豊かな感性を育むことを目的として保育活動に取り入れている。

また、歩く・体を動かす活動になることから、体力と健康的な体づくりにもなっている。

園外保育実施場所

- ・茨城県立水戸農業高等学校：四季折々の樹木の変化や動物の観察ができる。
- ・茨城県民の森：四季折々の樹木や草花や起伏のあるコースが体力をつくりだす。
- ・千波湖～偕楽園公園：四季折々の草花や文化に触れることができる。
- ・一の関溜池親水公園：白鳥やカモ等冬鳥の観察ができる。



イチョウの広場で



冬鳥が飛来する公園



ランチタイム

広がる活動体験



牧場見学



偕楽園公園

宿泊保育

1999（平成11）年8月、茨城県立児童センターこどもの城にて第1回目の宿泊保育を実施。翌年より、7月の実施となる。保育の流れの一貫として位置づけた。

趣旨

- ・親元から離れ、友達と一緒に寝食を共にしながら、一人で泊まれることに自信が持てる。
- ・規則ある生活を体験しながら、基本的生活習慣の自立を図る。
- ・園生活とは違った遊びを体験しながら、楽しい思い出づくりをする。

毎年7月、年長組の幼児たちが宿泊保育を行っている。

家庭生活、幼稚園生活の中で身に付けてきた、手洗い・うがい・排泄・歯磨き・食事・着替え・

身の回りの整理整頓・入浴などは生活にとって基本的な大事な習慣である。

一つひとつ細かに指示を受けながら行うのではなく、自分で考えながら行えるようになることは、幼児自身にとって、嬉しい成長と自信を感じることであり、自立するきっかけとなっていく。また、さらに家庭への啓蒙を図ることにもなっている。

幼稚園生活の思い出づくりが広がる体験もある。

みんなで食事、大勢の友達と一緒に入る風呂や枕を並べて寝る等、家庭生活とは違った体験である。

また、海岸での遊びや花火・松林の中での遊び・家庭に持ち帰るおみやげ作り等、園生活とは違った活動が広がっている。

親元から離れて一人で泊まることに、不安を見せている幼児もいるが、一日を過ごし終えると、その表情は自信に満ちている。

第9回宿泊保育（2007年度）

- ・期日 2007年7月8日(日)～9日(月)
- ・参加者 年長組50名 引率者9名
- ・日程

7月8日(日) 1日目	7月9日(月) 2日目
<p>10:30 幼稚園集合・出発 11:40 大洗わくわく科学館 見学・かんたん工作 昼食 14:15 茨城県立児童センターこどもの城入所 おやつ 15:00 海岸散歩 17:00 夕食 18:30 花火 19:00 入浴 20:00 グループ活動（絵本・おみやげ作り） 20:30 就寝</p>	<p>6:30 起床 朝の集い（体操・散歩） 掃除 荷物の整理 7:30 朝食 9:00 松林の中で遊ぶ（アスレチック） おやつ 10:30 茨城県立児童センターこどもの城退所 11:10 幼稚園到着</p>

思い出の宿泊保育



わくわく科学館：おもしろ工作に挑戦



入所式



砂浜での遊び



みんなと一緒に夕食



みんなで花火



就寝準備



松林の中のアスレチック

夕涼み会と第1学期終業式

夕涼み会は夏の行事として、1986（昭和61）年8月に行った。短大のグランドを会場にして、午後4時から、歌やフォークダンス、職員（当時4名）による楽器演奏（マンドリン・アコーディ

オンなど）を楽しみ、保護者の協力のもと、短大の調理室でカレーを煮込み、広いグランドでカレーライスをみんなで食べた。

日の暮れた頃、映画を映したり、花火をしたりして楽しい時間を過ごした。

1998（平成10）年より、7月に行う。また、保護者の意向で、保護者主催の行事となった。

遊びのコーナー（おたますくい・三角くじ・つかみどり・輪投げなど）を設けたり、飾りを付けたやぐらを建て、その周りを年長組の幼児たちが、共同製作をして完成させたおみこしを、威勢のよいかけ声に合わせて担いだり、みんなで盆踊りを

踊ったりした。

浴衣を身に付けた幼児たちの姿が、更に夕涼み会を賑やかに彩った。夕食はおにぎり弁当を食べた。

午後7時、辺りが暗くなり始めた頃、打ち上げ花火が夜空に色を添え、第1学期が同時に終了した。



輪投げコーナー



くじ引きコーナー

賑やかな夕涼み会



わっしょい おみこし



第1学期終業式

■スポーツフェスティバル

精一杯身体を動かしながら、一人ひとりが持つ力を発揮する。

友達と協力し、そして競い合う。短大の芝生のグランドが会場となり、伸び伸びと身体を動かしながら、演技や競技に取り組むことができ、心身のたくましさが培われていく。

1998（平成10）年10月より、運動会からスポーツフェスティバルと名称が変わった。

日常の保育の中に、幼児体育の時間（2001年）があるため、5歳児（年長組）は、組体操の演技をする。きびきびとした動きや移り変わる演技の様子は、一段とその場を盛り上げていくようになった。

スポーツフェスティバル 2007年度プログラム

1	オープニング 開会式	全園児・親・祖父母
2	親子体操	全園児・親
3	親子のきずな	年長親子
4	なんばん倒れるかな	年中親子
5	初めてのおつかい	年少個人
6	そっとはこんで	祖父母
7	おみやげいっぱい	入園前の幼児
8	それいけ アンパンマン	年少親子
9	およげおさかなくん	年中個人
10	風になれ	年長団体
11	ようこそ いちねんせい	修了生
12	リズムダンス「ミッキーマウスマーチ」	年中・年少
13	組体操	年長団体
14	フォークダンス	全園児親子
15	閉会式	全園児・親・祖父母

[昭和でのひとコマ]



開会式



4歳：玉入れ



4歳：大玉ころがし



5歳：綱引き

一人ひとりが力を發揮して・
競い合って・楽しんで

[平成でのひとコマ]



開会式



3歳：親子競技



4歳：リズムダンス



5歳：組体操

●作品展と親子でチャレンジ

版画展・彫塑展は2001（平成13）年より作品展へと名称が変わり、毎年11月に実施している。身近な素材や自然物、教材を使って作品を制作し、展示する。

日常生活の中で、いろいろな遊びを繰り返し行いながら創意工夫する力が増し、また、自然と触れ合う体験を重ねながら幼児たちの感性も豊かさを増してきている。

そのような豊かな力を形に表現し、展示することが作品展である。また、日常の遊びに使われたものを展示する工夫もしており、クラスの生活の様子等もうかがえる。

3歳・4歳・5歳の制作した作品からは、各年齢の成長と発達の様子が分かり、保護者にとって、その成長を知る機会にもなっている。

また、この活動には大成女子高等学校普通科保育福祉系コース（2年生）の生徒も参加し、その交流活動を通して、制作した作品も一緒に紹介している。

各学年共通:絵画（体験画、観察画、お話しの世界、デザインなど）

3歳児:身近なテーマを持ち、個人制作に取り組む。

4歳児:身近なテーマを持ち、個人制作に取り組む。

5歳児:友達とテーマを持ち、協力して作品を制作する。

高校生との交流活動:動物園、クリスマスツリー、飛び出すカード、ハロウィン、お祭り等

●親子でチャレンジ

作品展と同日、ワークショップを開いている。いろいろな素材を使って作り出す遊びのおもしろさや不思議さは、科学する楽しさに発展していく。また、この日は土曜日実施のため、父親の参加も多く、幼児と制作にチャレンジしながら、幼稚園生活の一部ではあるが、その様子を見る機会にもなっている。

ワークショップ

自然物を使って

こま作り

万華鏡

絞り染め

変わり絵

プラトンボ

登る忍者

鳴き蝉

ロケット

ピョンピョンカエル

プロペラ遊び



ロケットを飛ばして遊ぶ



自然物を使って



3歳：くつやさん



交流会：ハロウィン

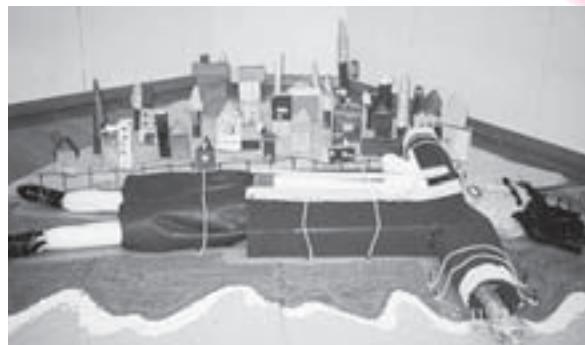


4歳：ドレスやさん



3歳：動物園

子どもたちの作品展



5歳：共同制作 ガリバーの国



4歳：海賊の宝物



交流会：フレームづくり



5歳：ムシキングの世界

お楽しみ会・聖護院大根収穫祭

保護者主催のお楽しみ会は、毎年、聖護院大根が収穫できる12月に行っている。「年に一度は、親も子どもたちのために、何か楽しいことをやって見せたい。」という意向が保護者からあり、毎年この時期の恒例になっている。

保護者が主催のため、保護者同士のかかわりを深め合う場、子育てについて気軽に話し合う場にもなっている。

さらに、幼稚園生活の中での、親同士の思い出づくりの場もある。

幼児たちが収穫した聖護院大根と、いろいろな野菜などの素材を入れたトン汁が、保護者によって作られる。また、トン汁ができるまでの間、

クラスや学年の保護者が催しもの（歌・劇・クイズ・お話し等）を演じ、幼児たちを楽しませている。

お楽しみ会プログラム（2007年度）

- ・さくら組の保護者 歌
「あわてんぼうのサンタクロース」
- ・ふじ組の保護者 ダンス 「もづくん」
- ・たんぽぽ組の保護者 クイズ
「はてなボックス」
- ・うめ組の保護者 劇
「おもちゃのチャチャチャ」
- ・もも組の保護者 人形劇 「大きなかぶ」



トン汁作り



クリスマスソングの大合唱



聖護院大根収穫



お母さんのリズムダンス

○栽培活動について

栽培活動を通して、「育てること・味わうこと」に興味関心を深めていく機会となっている。

幼児たちは、園の畑で、3月にはジャガイモの種イモを、5月にはサツマイモの苗植えや枝豆の種をまき、9月には聖護院大根の種をまいている。

作物の成長を観察しながら、雑草を抜いたり肥料をあたえたりしながら、幼児自身が自ら体を動かす過程の中で、少しずつ“育てる”ことについて理解をし始めている。また、収穫を喜び、味わうことができた時に、幼児たちは満足感を得、“育てる”という意味が深められていくようである。



枝豆の収穫：お月見会



ジャガイモの収穫：カレー会食会



サツマイモの収穫：お菓子作り

●生活発表会

毎年2月は1年間の生活を通して、友達とのつながりが深まる時期である。

また、考えたり言葉を交わしたり、友達と一緒に行動するなど、いろいろな面が成長する時期であることから、この時期を選んで生活発表会を行っている。

友達と過ごした1年間、一緒に遊び、協力しながら活動を展開し、いろいろな経験を繰り返しながら、毎日の生活を積み重ねてきている。

その時々の、考えや思いを伝え合い、時には競い合い、葛藤し、お互いに刺激を受け合いながら、一人ひとりが自分らしさを出して生活をしてきている。

この生活発表会は、そのような幼児たちの成長してきた姿を、表現活動を通して保護者に伝える行事となっている。

表現する楽しさ



3歳：劇：ステキなプレゼント



4歳：劇：キラキラ溜のお話



5歳：劇：そんごくう



5歳：合奏



5歳：ペーパーサート劇：おひさまとクッキー

○一人ひとりが主役

生活発表会プログラムの例

- 1 はじめのことば
- 2 園長あいさつ
- 3 歌 たんぽぽ組
「ふしぎなポケット」「ありさんのおはなし」
- 4 合奏と歌 ふじ組
「虹の彼方に」「童謡：たわらはごろごろ」「つばさ」
- 5 劇 うめ組 「キラキラ溜のお話」
- 6 合奏と歌 さくら組
「くまのプーさん」「童謡：しゃぼんだま」「あしたははれる」
- 7 劇 たんぽぽ組 「ステキなプレゼント」
- 8 合奏と歌 もも組
「たのしいね」「わらいごえっていいな」
- 9 ペーパーサート劇 ふじ組
「おひさまとクッキー」
- 10 合奏と歌 うめ組
「ホ・ホ・ホ」「ジグザグおさんぽ」
- 11 劇 さくら組 「そんごくう」
- 12 おわりのことば
- 13 副園長あいさつ

主体的に
遊びを広げていく生活



カン飛ばし



ドラムころがし



シーソー遊び



忍者小屋を建てた



草つゆを絞って

1978～1988年
たくましく



だんごころがしゲーム



三輪車を走らせて



グローブジャングルに乗って



園庭：いろいろな遊びが広がる



1989～2008年
友達と仲良く

みんなで水遊び



シャボン玉遊び



ジュースやさん

N

大成学園幼稚園の取り組み

■ 教育実習の受け入れ

○茨城女子短期大学保育科の教育実習

1971（昭和46）年から茨城女子短期大学保育科の1年生の学生を全員受け入れている。

9月から12月の期間にわたり、10名ずつの学生が、1週間（6日）ごとに入れ替わり実習を行ってきた。1992（平成4）年度より、ゆとりある生活の提言から、学校完全週5日制となり、実習に取り組む体制も変わってきた。

前期5月には施設設備見学、6月には観察実習を行い、後期9月から11月（12月）の期間、10名ずつの学生が4日間ごとに入れ替わり実習を行うようになった。後期の実習は、学生たちにとつて実際に幼児たちと遊んだり絵本を読み聞かせたりするなど、生活の一部をつくりあげていくもので、幼児理解を深めたり基本的な知識と技能を身に付けたりしていく大事な学びの場となっている。

実習にあたっては、保育科実習担当の教員と事前打ち合わせを持っている。

さらに、教育実習終了後は、今年度の実習の取

り組み方を振り返り、課題について申し送りを行い、次年度へつなげている。

○大成女子高等学校専攻科看護科の実習

2005（平成17）年より、大成女子高等学校専攻科看護科1年生の臨地実習の受け入れが始まった。10月から翌年2月の期間に2日間ずつ、約30名の生徒が班に分かれて実習に取り組んでいる。

この実習では特に、健康な幼児の心身の発達や自立に向けた支援の方法について学んでいる。

最終日には、30分間程度のカンファレンスを持ち、さらに学習を深めている。また時折、高校の看護科担当の教員もその時間に出席し、今回の実習の取り組み方を確認し、次回の実習に向けてのアドバイスも行っている。

○近隣小中高生徒の体験学習の場として

小学校では、生活科の総合学習において、中学・高校では、将来の進路への関連から職場体験をするという授業において、幼稚園等の職業に関心のある生徒たちの実習を受け入れている。

教育実習



幼児たちの興味に寄り添いながら遊びを展開していく



幼児の言葉に耳を傾けるといろいろな思いが見えてくる

●交流活動

○茨城女子短期大学学生との交流

短大の開学は1967（昭和42）年である。その2年後1969年より、学生たちによる学園祭が行われるようになった。その当時は、学生のサークル活動が大変活発な時代であったようだ。

1978年頃より、保育科の学生とサークルを担当する教員が中心となる児童文化クラブによって、幼児たちが学園祭に遊びに行く機会が設けられた。

学生たちは人形劇や紙芝居を上演し、幼児たちを喜ばせた。

2007（平成19）年には、保育科のゼミの発表の場として交流が図られた。

「桃太郎」「赤ずきんちゃん」「ヘンゼルとグレーテル」のお話やリズム遊び等が上演され、幼児たちを楽しませた。

学生たちにとって、よい発表の場であると同時に、幼児教育に熱心に向き合おうとする意欲を育てる機会でもあるように思う。また、短大と幼稚園が、さらに身近に連携を図ることにつながる機会でもあるので、このような機会が継続していくことを願っている。

○大成女子高等学校との交流

趣旨：幼児たちと接する活動を通して、進学や将来の職業意識を深めることを目的とする。

時期：毎年6月・10月

2002（平成14）年より、制作活動を中心とした計画的なプランを持って活動を展開している。幼児たちは生徒たちから新しい遊びの提案を受け、一緒に遊ぶ喜びを見せている。

6月：普通科 科学・医療系コースの生徒（2年生）と科学遊びの楽しさを知る活動

メビウスの輪

プラトンボ

空気砲

ロケット

やじろトンボ

動く足タコ

10月：普通科 保育・福祉系コースの生徒（2年生）と一緒に楽しむ制作活動と遊び、完成した作品は作品展に展示して紹介している

2006年度 4歳のクラスでは、クリスマスツリーがテーマになった。

2007年度 5歳のクラスでは、お祭りがテーマになった。

遊戯室には出店が並び、幼児たちはお金を作つて買い物を楽しみながら賑わいを見せていた。

出店：チョコバナナ屋 焼きそば屋 輪投げ屋
魚釣り屋



科学遊びのおもしろさを体験



高校生の遊びのアイデアが園内の生活を広げる

● 3年保育の開始

1988（昭和63）年頃より少子化に伴う家庭環境および地域社会の変化が見られ始めてきた。

兄弟、姉妹や近隣の友達と遊ぶ機会が少なくなってきていた。このようなことから、地域より3年保育の要望がはじめた。

1992（平成4）年、3年保育の認可を受ける。

定員 152名

3歳児1クラス16名、4歳児2クラス68名、5歳児2クラス68名とした。

行動面や心情面・身体的発達等を考慮した、3歳児の教育課程を作成し、個に応じた指導に心掛けた。

V

園舎の変遷

● 開園当時の園舎

開園当時の園舎は松や杉の木が多く、緑に囲まれた閑静な環境に恵まれた場所にあった。

施設設備

園地総面積 2,270m²

園舎総面積 887m²

保育室4 炊事室1 遊戯室1 観察室2 職員室1 会議室1 応接室兼実習生の研修室1 和室3 テラス 物置3

※保育室の上には、観察室があり、外から入れるようになっていた。

保護者にとって、幼児たちの園生活の自然な姿を見ることができた。

※絵本の部屋を新築 1980年

落ち着いた雰囲気の中で、童話や物語に親しんだ。

屋外保育室面積 284m²

※各保育室の続きに、それぞれ屋外遊戯場やテラスがあった。

室内から保育活動が広がるとともに、夏には

テーブルや椅子を並べ、青空の下で気持ち良い昼食の場にも利用されていた。

運動場面積 793m²

ブランコ グローブジャングル 太鼓橋 ジャングルジム 低鉄棒 砂場 つるつるお山 滑り台 簡易プール 拳登棒 シーソー チェーンネットクライム 丸太小屋山小屋

自然環境

短大の広々とした芝生のグランドは、運動遊びができる格好の場所である。

- ・四季折々の楽しい活動（虫捕り、草花摘み、落ち葉拾い等）が広がる。
- ・生き物との出会い（小鳥、カエル、野うさぎ等）がある。

裏庭には土山があり、遊具で遊ぶこと以外のダイナミックな遊びが広がった。

- ・サクラやイチョウなどの大木があり、季節の美しさを見せていた。
- ・畑を作り、サツマイモや二十日大根、トウモロコシを育て収穫を喜び合った。



毎週月曜日には、決まった時間に園庭に出てみんなで体操をする



開園当時の風景

●新園舎の落成

- 1992年12月、園舎を改築し新園舎が落成した。
- ・保育室は広く明るく、園舎全体が段差のない設計であるため、部屋での遊びが広い廊下へと広げられる。
 - ・色鮮やかなステンドグラスの設置。
幼児たちの健やかな、そして、力強く成長していくことを願い、絵本の部屋には「花と太陽と宇宙」、廊下には「春夏秋冬」の2つをテーマに設置された。
 - ・プールを設置し、夏には思いきり水遊びが楽しめるようにした。

屋外施設

総合遊具 グローブジャングル ウォルキンズ砂場
土山 つるつる山 拳登棒 チェーンネット
クライム トンネル ブランコ 三角タワー 鉄棒
プレイハウス タイヤのある乗り物

新園舎全景

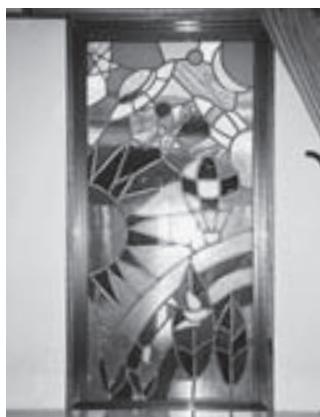


施設設備

園地総面積 2,270m²
園舎総面積 1,155.55m²
保育室5 遊戯室1 絵本の部屋1 職員室1
預かり保育室1 保健室1 印刷室1 教材室
1 応接室1 便所3 用具室1 楽器室1
乗務員室1 更衣室1 休養室1 会議室2
化粧室1 シャワー室1 給湯室1
運動場面積 793m²



園章「なでしこ」



「健やかな成長を」願う

楽しさが広がる
生活環境



太陽の光がよく射し込む明るい保育室



中廊下：遊び空間が広がる



絵本の部屋



VI 創立 30 周年と園歌制定

大成学園幼稚園は 2001（平成 13）年創立 30 周年を迎えた。

創立 30 周年を記念して園歌を制定。5 歳児 2 クラスの幼児たちが元気に園歌を披露した。

遊戯室において、ささやかに園児とその保護者で祝った。

歌詞は、額賀さじ副園長によって作詞された。

幼児たちが、自ら育つ姿を温かく見守りながら、さらに、幼児たちの健やかな成長を願う思いが込められていた。また、“ステンドグラス”や“小鳥のさえずり”“花壇に咲く花”“短大の芝生のグランド”等、幼児たちが毎日生活する園の生活環境の様子が歌われている。

作曲は、小林蔵雄氏に依頼した。

さらにこの年、園旗を新しく製作した。

大成学園幼稚園の園歌

1 風さんそよそよ 朝のうた
緑の芝生 わたつたら
仲よしこよしが 手をつなぎ
光とあそび お花とわらう
ここは 大成学園幼稚園
ステンドグラスに みんなの
笑顔キラキラ 映ってる

2 虹の色した クレヨンで
お空に願い 描いたら
みんなの心 ふれあって
小鳥もお庭で 希望をうたう
ここは 大成学園幼稚園
すくすく育つ 仲よしを
明るい明日が みつめてる



大成学園幼稚園
「園旗」

VII

地域に根ざす園としての役割

●預かり保育

地域の実態や保護者の要請により、教育課程に係る教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動（預かり保育）を1999（平成11）年5月より実施した。

また、2000年3月には預かり保育室が完成した。

預かり保育では、本来は家庭や地域にいる時間帯であることを配慮し、その時間帯にふさわしく、幼児たちがゆったりと過ごせる生活を作りだしている。

●未就園児のための園内開放

子どもをめぐる日本の社会環境が大きく変化してきている。2003（平成15）年の合計特殊出生率は、1.29と過去最低になり、少子化が一段と進んでいる。

核家族化で兄弟姉妹、祖父母らとの多様な人間関係が絶たれ、また、地域のつながりが薄くなり、群れ遊ぶ場所や相手が見つからないという構造にならってきている。

そのような意味から、地域の中で子育てをしていく人間関係をつくるための橋渡しができることを願って、人との出会いができる環境を提供している。

※毎月2～3回 10時30分～12時

●子育て支援事業 親子ひろば「ぼぼ」

2007（平成19）年より、短大と幼稚園が会場となり未就園児親子ひろば「ぼぼ」が始まった。

茨城女子短期大学保育科の学生と教員が中心となり、計画的なプログラムを持ち、年に8回開催している。学生にとって、さらに幼児と間近に接する機会であり、深い勉学の場になっている。

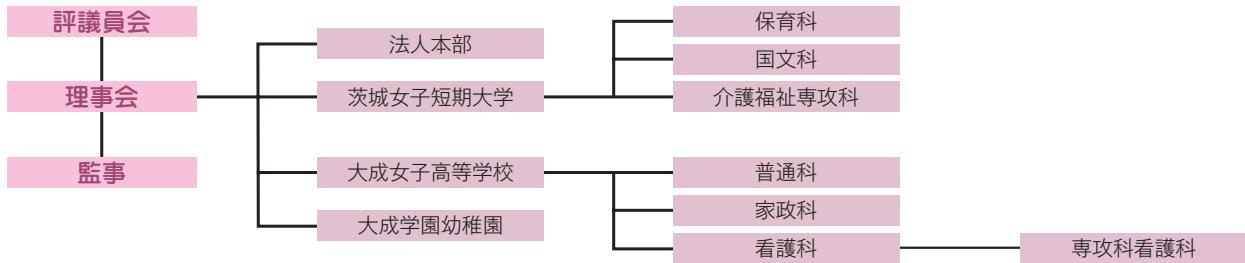
●国際化の推進

1994（平成6）年より、園内の国際化も推進され、外国（アメリカ、イタリア、フランス、ドイツ、中国等）から来た幼児の受け入れを積極的に行い始めた。

資料編

I 組織* 敬称略

◆組織について



* 1951年3月より学校法人組織となる

◆歴代学園理事長

氏名	就任期間	氏名	就任期間	氏名	就任期間
額賀三郎	1951年3月～1953年2月	江幡衷	1984年7月～1995年4月	額賀修一	2009年12月～
額賀修	1953年2月～1984年7月	額賀良一	1995年4月～2009年11月		

◆歴代学園理事

氏名	就任期間	氏名	就任期間	氏名	就任期間
額賀三郎	1951年3月～1953年2月	額賀誠	1953年7月～1973年12月	堀籠平吾	1989年1月～1992年2月
額賀修	1951年3月～1985年1月	江幡衷	1970年6月～1995年4月	小林弘	1991年4月～
町田ふく	1951年3月～1979年4月	額賀良一	1973年12月～2009年12月	額賀さじ	1993年4月～1996年7月、2009年12月～
宗武彦	1951年3月～1980年3月	江幡廣松	1975年4月～1986年12月	郡司勝美	1995年4月～
小神野三男四	1951年3月～1970年5月	菊池七郎兵衛	1979年4月～1995年4月	金井正	1995年4月～
鈴木達	1951年3月～1959年5月	菊池實	1980年3月～1995年4月	江幡慎一	1995年4月～2003年4月
坂吉兵衛	1959年4月～1965年5月	篠崎泰	1985年12月～1991年2月	額賀修一	1996年7月～
小林達也	1965年6月～2009年2月	宮澤治正	1987年2月～1989年1月	多賀野利弘	2003年4月～

◆歴代学園監事

氏名	就任期間	氏名	就任期間	氏名	就任期間
江幡衷	1951年3月～1970年6月	古川清	1975年4月～1987年2月	金井正	1991年4月～1995年4月
大塚軍二	1951年3月～1972年9月	遠藤俊夫	1985年1月～1989年10月	多賀野利弘	1995年4月～2003年4月
野上武雄	1970年6月～1984年12月	小林弘	1987年2月～1991年4月	岩上堯	1995年4月～
菊池七郎兵衛	1972年9月～1975年4月	郡司勝美	1989年10月～1995年4月	小塙義輔	2003年4月～

◆歴代学園評議員

氏名	井上幸之助	篠崎康	興野みの	井川富雄	金澤直人	宮澤治正	江幡衷	小塙義輔	額賀さじ
町田ふく	高堀育三	江幡すえ	植田美代	額賀誠	大森うめ	杉山澄	額賀良一	柴田和子	高瀬一男
湯浅四郎	飛田しづえ	野上武雄	岡村貞男	岡崎恒雄	小林弘	小林達也	堀籠平吾	額賀修一	酒井範夫
武藤かね	額賀阿や子	菊池實	会沢英	額賀とき	安達一枝	横須賀英	小野孝尚	磯好知	
矢須徳之丞	小澤榮弘	高木よし子	藤本重一	秋山義隆	郡司勝美	大塚武男	芹沢悟	後藤久枝	
鈴木みつ	小神野三男四	阿久津順一	海野積善	田所タケ	宮本恵司	野内伊三郎	額賀利夫	太田節子	

◆法人本部長

氏名	就任期間	氏名	就任期間	氏名	就任期間
黒沢正木	1996年4月～1998年3月	稻野辺千喜	1989年3月～2003年6月	磯好知	2003年7月～

◆校長・学長・園長

大成女子高等学校

役職名	氏名	就任期間	役職名	氏名	就任期間
校長	額賀三郎	1909年4月～1953年2月 (うち1948年3月までは 大成裁縫女学校・ 水戸市大成女学校・大成高等女学校長)	教頭	大塚武男	1988年4月～1992年3月
	額賀修	1953年2月～1984年8月		野内伊三郎	1988年4月～1990年3月
	額賀良一	1984年8月～2004年3月		額賀密	1992年4月～2000年3月
	額賀修一	2004年4月～		樋口寅太	1992年4月～2000年2月
名誉校長	額賀キヨ	1953年2月～1967年8月		山木倫人	1994年～2000年3月
副校長	額賀あや子	1966年4月～1977年2月		酒井範雄	2000年4月～2003年3月
	額賀良一	1977年2月～1984年8月		石川豊	2003年4月～2009年3月
	大塚武男	1992年4月～1998年3月		額賀修一	2003年4月～2004年3月
	酒井範雄	2003年4月～2005年3月		井坂良昭	2004年4月～
	石川豊	2009年4月～2010年3月		内山治男	2009年4月～
学監	高堀育三	1966年4月～1973年3月	事務長	小神野三男四	1936年6月～1967年3月
	笛島菊次郎	1974年4月～1978年8月		横山有	1967年～1971年3月
教頭	松浦龍	1948年4月～1950年9月		会沢英	1974年6月～1984年3月
	高堀育三	1950年9月～1966年3月		内藤雅嗣	1984年4月～1985年3月
	笛島菊次郎	1966年4月～1974年3月		額賀利夫	1986年4月～1995年3月
	小澤榮弘	1974年4月～1988年3月		増子英雄	1995年4月～1999年3月
	秋山義隆	1986年4月～1988年3月		磯好知	1999年4月～2004年3月
				朝妻重雄	2004年4月～

茨城女子短期大学

役職名	氏名	就任期間	役職名	氏名	就任期間
学長	額賀修	1967年4月～1984年12月	副学長	高瀬一男	1998年4月～2005年3月
	菊池實	1985年1月～1987年1月		内山源	2005年4月～
	宮澤治正	1987年2月～1989年1月	事務局長	額賀良一	1967年4月～1980年3月
	堀籠平吾	1989年2月～1992年2月		小林達也	1980年4月～1990年3月
	額賀良一	1992年4月～2009年11月		芹沢悟	1990年4月～1997年7月
	小野孝尚	2009年12月～		水野浩記	1998年4月～2006年3月
副学長	額賀良一	1980年4月～1992年3月		安藤紘一	2006年4月～
	小林真鏡	1992年4月～1996年3月			

大成学園幼稚園

役職名	氏名	就任期間	役職名	氏名	就任期間
園長	額賀修	1967年4月～1984年3月	園長	小野孝尚	2009年12月～
	菊池實	1984年4月～1987年1月	副園長	額賀さじ	1985年4月～
	宮澤治正	1986年4月～1989年1月	教頭	柴田和子	1992年4月～1997年3月
	堀籠平吾	1988年4月～1992年2月		渡邊敏江	2001年4月～
	額賀良一	1991年4月～2009年11月			

◆同窓会会長

なでしこ会（大成女子高等学校同窓会）

役職名	氏名	就任期間
会長	町田ふく	～1967年 (同窓会正式発足以前、発足後は名誉会長)
	根本八重子	1967年～2001年
	成田和子	2002年～2003年
	鈴木智恵子	2004年
	塙富子	2005年～
副会長	鈴木光子	鈴木智恵子
	安達一枝	塙富子
	横川みのる	鈴木祥子
	田所タケ	照山史子
	成田和子	根本陽子

秋桜会（茨城女子短期大学同窓会）

役職名	氏名	就任期間
会長	安悦子	1970年～1971年
	川上礼子	1971年～1982年
	後藤久枝	1982年～2009年
	酒井恵子	2009年～
副会長	志田広美	加藤智子
	笛目恵子	内田みどり
	小澤憲子	渡辺忍
	小室照子	宇佐美満里

◆父母の会会長

大成女子高等学校

就任期間	氏名	就任期間	氏名
1982年度	大網義明	1999年度	大和田一実
1983年度	大網義明	2000年度	樋口英嗣
1984年度	黒沢好男	2001年度	関憲三
1985年度	君嶋聖威	2002年度	松本健一
1986年度	神尾善三	2003年度	蛭田千代
1987年度	神尾善三	2004年度	浜野洋子
1988年度	飯泉一也	2005年度	岩上和恵
1989年度	入江剛龍	2006年度	鯉渕嘉弘
1990年度	高橋峯雄	2007年度	橋本明美
1991年度	延島三郎	2008年度	宮本加代
1992年度	前田勝子	2009年度	鯉渕嘉弘
1993年度	斎田恒二郎		
1994年度	根子清		
1995年度	根子清		
1996年度	根子清		
1997年度	八木岡ミツ子		
1998年度	黒田秀子		

茨城女子短期大学

就任期間	氏名	就任期間	氏名
1992年度	高林由幸	2001年度	高橋宏
1993年度	戸村宏平	2002年度	今松美喜子
1994年度	前田勝子	2003年度	大串久雄
1995年度	斎田恒二郎	2004年度	鈴木和子
1996年度	福富孝至	2005年度	蛭田千代
1997年度	打越克義	2006年度	浜野洋子
1998年度	和田謹司	2007年度	大木恵子
1999年度	八木岡ミツ子	2008年度	岩渕悦子
2000年度	岡田まり子	2009年度	村上則子

◆後援会会長

大成女子高等学校

氏名
大網義明 入江剛龍
大繩敬二 延島三郎
神尾善三 八木岡ミツ子
飯泉一也 樋口英嗣（現会長）

III 卒業生の推移

資料編 | 卒業生の推移

大成裁縫女学校・水戸市大成女学校・大成高等女学校・大成女子高等学校

年	卒業者数（累計）	備考	年	卒業者数（累計）	備考
1907年（明治40年）		私塾開設	1959年（昭和34年）	604 (9,996)	
1908年（明治41年）	不明		1960年（昭和35年）	561 (10,557)	
1909年（明治42年）	不明	学園創立	1961年（昭和36年）	517 (11,074)	
1910年（明治43年）	8 (8)		1962年（昭和37年）	675 (11,749)	
1911年（明治44年）	20 (28)		1963年（昭和38年）	584 (12,333)	
1912年（明治45年）	21 (49)		1964年（昭和39年）	413 (12,746)	
1913年（大正2年）	23 (72)		1965年（昭和40年）	876 (13,622)	
1914年（大正3年）	29 (101)		1966年（昭和41年）	942 (14,564)	
1915年（大正4年）	35 (136)		1967年（昭和42年）	736 (15,300)	
1916年（大正5年）	33 (169)		1968年（昭和43年）	864 (16,164)	
1917年（大正6年）	31 (200)		1969年（昭和44年）	779 (16,943)	衛生看護科設置
1918年（大正7年）	40 (240)		1970年（昭和45年）	567 (17,510)	
1919年（大正8年）	47 (287)		1971年（昭和46年）	784 (18,294)	
1920年（大正9年）	48 (335)		1972年（昭和47年）	902 (19,196)	
1921年（大正10年）	67 (402)		1973年（昭和48年）	889 (20,085)	
1922年（大正11年）	55 (457)		1974年（昭和49年）	884 (20,969)	
1923年（大正12年）	88 (545)		1975年（昭和50年）	874 (21,843)	
1924年（大正13年）	105 (650)		1976年（昭和51年）	613 (22,456)	
1925年（大正14年）	115 (765)		1977年（昭和52年）	675 (23,131)	
1926年（大正15年）	125 (890)		1978年（昭和53年）	667 (23,798)	
1927年（昭和2年）	139 (1,029)		1979年（昭和54年）	533 (24,331)	
1928年（昭和3年）	148 (1,177)		1980年（昭和55年）	589 (24,920)	
1929年（昭和4年）	157 (1,334)		1981年（昭和56年）	458 (25,378)	
1930年（昭和5年）	172 (1,506)		1982年（昭和57年）	459 (25,837)	
1931年（昭和6年）	164 (1,670)		1983年（昭和58年）	464 (26,301)	
1932年（昭和7年）	130 (1,800)		1984年（昭和59年）	392 (26,693)	
1933年（昭和8年）	137 (1,937)		1985年（昭和60年）	252 (26,945)	
1934年（昭和9年）	157 (2,094)		1986年（昭和61年）	527 (27,472)	
1935年（昭和10年）	140 (2,234)		1987年（昭和62年）	501 (27,973)	
1936年（昭和11年）	178 (2,412)		1988年（昭和63年）	533 (28,506)	
1937年（昭和12年）	223 (2,635)		1989年（平成元年）	594 (29,100)	
1938年（昭和13年）	201 (2,836)		1990年（平成2年）	637 (29,737)	
1939年（昭和14年）	239 (3,075)		1991年（平成3年）	476 (30,213)	
1940年（昭和15年）	254 (3,329)		1992年（平成4年）	624 (30,837)	
1941年（昭和16年）	240 (3,569)		1993年（平成5年）	627 (31,464)	
1942年（昭和17年）	289 (3,858)		1994年（平成6年）	544 (32,008)	
1943年（昭和18年）	349 (4,207)		1995年（平成7年）	450 (32,458)	
1944年（昭和19年）	395 (4,602)		1996年（平成8年）	474 (32,932)	
1945年（昭和20年）	437 (5,039)		1997年（平成9年）	528 (33,460)	
1946年（昭和21年）	359 (5,398)		1998年（平成10年）	382 (33,842)	
1947年（昭和22年）	181 (5,579)		1999年（平成11年）	298 (34,140)	
1948年（昭和23年）	354 (5,933)	大成女子高等学校開校	2000年（平成12年）	289 (34,429)	
1949年（昭和24年）	390 (6,323)	大成高等女学校廃止	2001年（平成13年）	422 (34,851)	
1950年（昭和25年）	244 (6,567)	水戸市大成女学校廃止	2002年（平成14年）	319 (35,170)	看護科設置
1951年（昭和26年）	175 (6,742)		2003年（平成15年）	324 (35,494)	
1952年（昭和27年）	234 (6,976)		2004年（平成16年）	388 (35,882)	
1953年（昭和28年）	346 (7,322)		2005年（平成17年）	263 (36,145)	
1954年（昭和29年）	356 (7,678)		2006年（平成18年）	265 (36,410)	専攻科卒業生数（累計）
1955年（昭和30年）	419 (8,097)		2007年（平成19年）	236 (36,646)	22 (22)
1956年（昭和31年）	497 (8,594)		2008年（平成20年）	204 (36,850)	28 (50)
1957年（昭和32年）	316 (8,910)		2009年（平成21年）	209 (37,059)	31 (81)
1958年（昭和33年）	482 (9,392)				

茨城女子短期大学

本科（英文科・国文科・保育科）	年	英文科	国文科	保育科	卒業者数（累計）	備考
	1968年（昭和43年）	8	8	47	63 (63)	
	1969年（昭和44年）	11	8	89	108 (171)	
	1970年（昭和45年）	10	18	72	100 (271)	
	1971年（昭和46年）	10	16	75	101 (372)	

茨城女子短期大学

本科（英文科・国文科・保育科）

年	英文科	国文科	保育科	卒業者数（累計）	備考
1972年（昭和47年）	15	32	96	143 (515)	
1973年（昭和48年）	16	39	119	174 (689)	
1974年（昭和49年）	19	53	108	180 (869)	
1975年（昭和50年）	24	54	119	197 (1,066)	
1976年（昭和51年）	28	48	108	184 (1,250)	
1977年（昭和52年）	28	58	128	214 (1,464)	
1978年（昭和53年）	30	54	118	202 (1,666)	
1979年（昭和54年）	17	57	122	196 (1,862)	
1980年（昭和55年）	35	68	124	227 (2,089)	
1981年（昭和56年）	32	72	140	244 (2,333)	
1982年（昭和57年）	27	69	127	223 (2,556)	
1983年（昭和58年）	25	79	125	229 (2,785)	
1984年（昭和59年）	31	82	124	237 (3,022)	
1985年（昭和60年）	34	70	121	225 (3,247)	
1986年（昭和61年）	22	47	71	140 (3,387)	
1987年（昭和62年）	37	97	95	229 (3,616)	
1988年（昭和63年）	60	97	129	286 (3,902)	
1989年（平成元年）	60	104	126	290 (4,192)	
1990年（平成2年）	33	79	123	235 (4,427)	5 (5) 専攻科（福祉専攻）
1991年（平成3年）	58	82	109	249 (4,676)	14 (19)
1992年（平成4年）	74	85	109	268 (4,944)	12 (31)
1993年（平成5年）	69	94	112	275 (5,219)	18 (49)
1994年（平成6年）	75	99	110	284 (5,503)	16 (65)
1995年（平成7年）	89	98	107	294 (5,797)	24 (89)
1996年（平成8年）	68	98	117	283 (6,080)	9 (98)
1997年（平成9年）	41	92	114	247 (6,327)	21 (119)
1998年（平成10年）	37	48	119	204 (6,531)	22 (141)
1999年（平成11年）	17	49	127	193 (6,724)	15 (156)
2000年（平成12年）	14	23	126	163 (6,887)	21 (177)
2001年（平成13年）	16	25	126	167 (7,054) 英文科募集停止	19 (196)
2002年（平成14年）	3	22	111	136 (7,190)	19 (215)
2003年（平成15年）		25	104	129 (7,319)	9 (224)
2004年（平成16年）		17	118	135 (7,454)	17 (241)
2005年（平成17年）		31	128	159 (7,613)	15 (256)
2006年（平成18年）		31	113	144 (7,757)	14 (270)
2007年（平成19年）		35	92	127 (7,884)	17 (287)
2008年（平成20年）		26	81	107 (7,991)	9 (296)
2009年（平成21年）		36	72	108 (8,099)	5 (301) 介護福祉専攻科に名称変更

大成学園幼稚園

年	卒業者数（累計）	備考	年	卒業者数（累計）	備考
1972年（昭和47年）	25 (25)		1991年（平成3年）	71 (1,283)	
1973年（昭和48年）	36 (61)		1992年（平成4年）	68 (1,351)	
1974年（昭和49年）	76 (137)		1993年（平成5年）	61 (1,412)	
1975年（昭和50年）	68 (205)		1994年（平成6年）	40 (1,452)	
1976年（昭和51年）	75 (280)		1995年（平成7年）	63 (1,515)	
1977年（昭和52年）	76 (356)		1996年（平成8年）	49 (1,564)	
1978年（昭和53年）	72 (428)		1997年（平成9年）	70 (1,634)	
1979年（昭和54年）	74 (502)		1998年（平成10年）	57 (1,691)	
1980年（昭和55年）	74 (576)		1999年（平成11年）	60 (1,751)	
1981年（昭和56年）	78 (654)		2000年（平成12年）	58 (1,809)	
1982年（昭和57年）	70 (724)		2001年（平成13年）	56 (1,865)	
1983年（昭和58年）	64 (788)		2002年（平成14年）	53 (1,918)	
1984年（昭和59年）	59 (847)		2003年（平成15年）	53 (1,971)	
1985年（昭和60年）	60 (907)		2004年（平成16年）	57 (2,028)	
1986年（昭和61年）	53 (960)		2005年（平成17年）	51 (2,079)	
1987年（昭和62年）	62 (1,022)		2006年（平成18年）	46 (2,125)	
1988年（昭和63年）	72 (1,094)		2007年（平成19年）	49 (2,174)	
1989年（平成元年）	59 (1,153)		2008年（平成20年）	51 (2,225)	
1990年（平成2年）	59 (1,212)		2009年（平成21年）	39 (2,264)	

IV 校地・校舎の変遷

大成裁縫女学校～大成女子高等学校

1908(明治41)年 4月 木造トタン葺き2階建174.9m²(53坪)新築竣工



1912(明治45)年 4月 木造トタン葺き2階建528m²(160坪)新築竣工



1916(大正 5)年 9月 木造瓦葺き2階建231m²(70坪)建築→倒壊後再築



1919(大正 8)年 6月 木造トタン葺き平屋建198m²(60坪)増築



1925(大正14)年 1月 本校東側2階建家屋を借り入れ特別教室とする



1926(大正15)年 10月 一部を改造し木造スレート葺き2階建561m²(170坪)新築竣工



1929(昭和 4)年 4月 校地1,392.6m²(422坪)拡張



1931(昭和 6)年 9月 木造スレート葺き2階建高女校舎・屋内運動場1,211m²(367坪)新築竣工



11月 運動場660m²(200坪)拡張



1937(昭和12)年 5月 高女校舎660m²(200坪)新築竣工



1938(昭和13)年 11月 運動場拡張のため石蔵3分の1を取り壊す



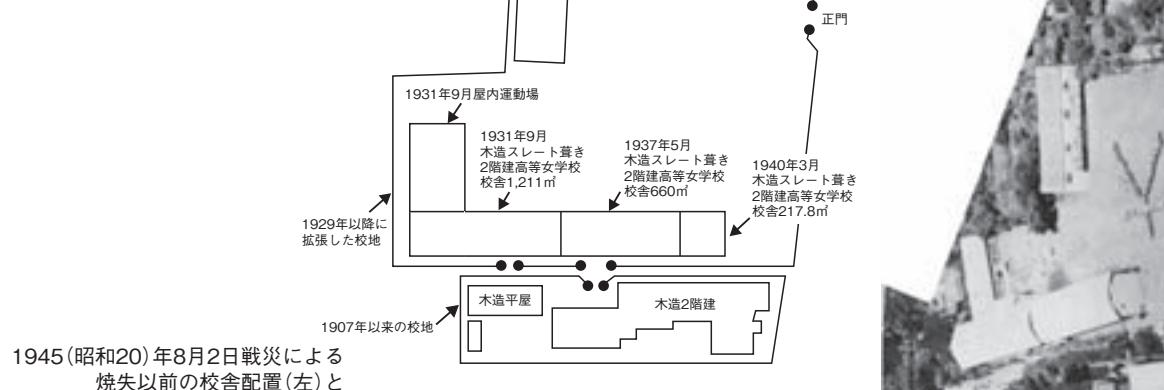
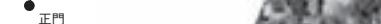
1940(昭和15)年 3月 高女校舎217.8m²(66坪)新築竣工



1943(昭和18)年 3月 木造瓦葺き2階建396m²(120坪)新築竣工



1945(昭和20)年 8月 水戸大空襲により石蔵を除く全校舎5棟3,065.7m²(929坪)焼失



1947(昭和22)年 1月 木造平屋建663.3m²(201坪)を百里航空隊建物の払い下げ材料で



建築着工(第一校舎と称する)

1949(昭和24)年 6月 木造2階建815.1m²(247坪)第二校舎(後に第三校舎と改称)新築竣工



1951(昭和26)年 7月 木造2階建541.2m²(164坪)第二校舎新築竣工

1952(昭和27)年 6月 校地970.2m²(294坪)拡張



1953(昭和28)年 1月 木造2階建600.6m²(182坪)第四校舎新築竣工

1954(昭和29)年 3月 木造平屋建66m²(20坪)図書館新築竣工

4月 調理実習室、ユニットキッチン・ガスの設備完成

11月 木造2階建891m²(270坪)第五校舎新築竣工

1956(昭和31)年 9月 鉄筋3階建399.16m²(120.96坪)本館新築竣工
(図書室、教員室、事務室、校長室、応接室)



1957(昭和32)年 11月 鉄筋4階建380.36m²(115.26坪)第四校舎拡張工事竣工
(理科実験室を含む)



1958(昭和33)年 11月 鉄骨体育館630.86m²(191.17坪)新築竣工
木造2階建211.2m²(64坪)作法室・第二調理室新築竣工



1955(昭和30)年頃の航空写真



1958(昭和33)年頃の航空写真



1962(昭和37)年頃の校舎配置図(左)と
創立50周年記念館と第六校舎(右)



1961(昭和36)年 3月 鉄筋5階地下1階建980.66m²(297.17坪)創立50周年記念館新築竣工(視聴覚室を含む)

1963(昭和38)年 3月 鉄筋6階建1,428.24m²(432.8坪)第六校舎新築竣工(第一調理室を含む)

4月 校地229.68m²(69.6坪)拡張

8月 校地165m²(50坪)拡張

1964(昭和39)年 3月 鉄筋4階地下1階建610.5m²(185坪)第七校舎竣工

6月 校地1,320m²(400坪)拡張

11月 第5手洗(水洗)完成

1965(昭和40)年 12月 校地182.33m²(55.25坪)拡張

1969(昭和44)年 3月 鉄筋2階建422.8m²(128.12坪)衛生看護科校舎第1期工事完了

6月 校地280.5m²(85坪)拡張

9月 鉄筋3階建594.72m²(180.22坪)衛生看護科校舎第2期工事完了竣工

1976(昭和51)年 2月 校地524.7m²(159坪)拡張

1977(昭和52)年 12月 校地348.77m²(105.51坪)取得

1978(昭和53)年 5月 校地306.90m²(92.84坪)取得

1979(昭和54)年 10月 鉄筋4階建1361.46m²(412.56坪)2号館竣工

1985(昭和60)年 3月 校地1,108.15m²(335.22坪)取得

1986(昭和61)年 3月 鉄筋3階建2,297.01m²(696.06坪)5号館竣工

12月 鉄筋5階地下1階建1,923.91m²(583.0坪)4・7号館竣工

1988(昭和63)年 11月 鉄筋体育館3,354.47m²(1,016.5坪)新築竣工

1990(平成 2)年 9月 校地348.78m²(105.51坪)取得

1993(平成 5)年 5月 校地689.75m²(208.65坪)取得

1994(平成 6)年 9月 校地424.46m²(128.40坪)取得

1996(平成 8)年 1月 鉄筋3階建本館(事務棟)940.02m²(284.85坪)新築竣工

11月 校地198.98m²(60.19坪)取得

2000(平成12)年 12月 校地819.37m²(247.87坪)取得

2001(平成13)年 3月 校地428.69m²(129.68坪)取得

2002(平成14)年 3月 看護棟1,594.77m²(483.26坪)新築竣工

2003(平成15)年 9月 校地1,141.05m²(345.17坪)取得

2008(平成20)年 3月 校地770.89m²(233.19坪)と隣接地662.48m²(200.41坪)を交換

2009(平成21)年 1月 校地247.08m²(74.74坪)取得

3月 校地172.39m²(52.15坪)と隣接地99.86m²(30.21坪)を交換



1966(昭和41)年頃の航空写真



1982(昭和57)年頃の航空写真



体育館



事務棟



看護棟

茨城女子短期大学

校地26,814.29m²(8,111.53坪)

1967(昭和42)年 5月 鉄筋5階建3,326.00m²(1,006.14坪)本館竣工



1969(昭和44)年 4月 鉄筋2階建834.13m²(252.33坪)寄宿舎竣工

1975(昭和50)年 5月 鉄骨平屋建139.94m²(42.33坪)学生ホール竣工

1977(昭和52)年 8月 木造2階建231.25m²(69.95坪)合宿所竣工

1978(昭和53)年 3月 鉄筋2階建1,731.36m²(523.75坪)体育館竣工

1979(昭和54)年 5月 木造2階建170.17m²(51.48坪)寄宿舎竣工

1981(昭和56)年 12月 鉄筋2階建1,306.61m²(395.26坪)2号館竣工



1982(昭和57)年 12月 鉄骨3階建131.22m²(39.70坪)書庫竣工



1985(昭和60)年 3月 鉄骨2階建647.1m²(195.75坪)3号館竣工

1987(昭和62)年 4月 鉄骨2階建200.4m²(60.62坪)部室竣工

1991(平成 3)年 3月 鉄筋5階建3,940.34m²(1,191.98坪)1号館竣工

大成学園幼稚園

園地2,270m²(686.69坪)

1969(昭和44)年 鉄骨造2階建887m²(268.32坪)園舎新築竣工



1992(平成 4)年 12月 鉄骨造2階建1,155.55m²(349.56坪)園舎新築竣工



2000(平成12)年 3月 木造平屋建28.68m²(8.68坪)預かり保育用園舎新築竣工



◆履修科目一覧（2009年度）

茨城女子短期大学

《保育科》

共通教養科目	人間と文化／日本文化史、地域文化、芸術（演劇）
	人間と社会／日本国憲法、心理と社会、現代社会論、生涯学習論、女性と社会生活Ⅰ・Ⅱ、ボランティア活動論
	生活と科学／生活と環境、生活と科学（衣食住）、生活と数学、身体の仕組みと働き
	実務と情報／プレゼンテーション技法、マルチメディア演習
	人間と健康／健康とスポーツ
専門科目	外国語／英語Ⅰ、英語Ⅱ（実用英語）
	目的／教育原理、保育者論、指導計画論、児童福祉、社会福祉、社会福祉援助技術、保育原理Ⅰ・Ⅱ、 養護原理、福祉特講
	対象／発達心理学Ⅰ・Ⅱ、教育心理学、保育臨床相談、家庭教育論、小児栄養、小児保健、小児保健実習、 精神保健、家族援助論
	教科／基礎音楽、幼児音楽Ⅰ・Ⅱ、音楽特別演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、基礎造形、幼児造形Ⅰ・Ⅱ、基礎体育、 幼児体育Ⅰ・Ⅱ、音楽表現、造形表現、身体表現、日本語表現法、幼児と環境
	内容・方法／保育内容総論、保育内容Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、乳児保育、保育指導法、視聴覚教育、障害児保育、 養護内容、児童文化
取得資格	研究／ゼミナール、総合演習、総合表現
	実習／実習指導Ⅰ・Ⅱ、教育実習、保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
	幼稚園教諭二種免許状、保育士
	《国文科》
	人間と文化／日本文化史、地域文化、芸術（演劇）

共通教養科目	人間と文化／日本文化史、地域文化、芸術（演劇）
	人間と社会／日本国憲法、心理と社会、現代社会論、生涯学習論、女性と社会生活Ⅰ・Ⅱ、ボランティア活動論
	生活と科学／生活と環境、生活と科学（衣食住）、生活と数学、身体の仕組みと働き
	実務と情報／プレゼンテーション技法、マルチメディア演習
	人間と健康／健康とスポーツ
専門科目	外国語／英語Ⅰ、英語Ⅱ（実用英語）
	国語学／国語学概論、国語史、国語法
	国文学／国文学概論、国文学史、作家作品鑑賞Ⅰ（古代）、作家作品鑑賞Ⅱ（中世）、作家作品鑑賞Ⅲ（近世）、 作家作品鑑賞Ⅳ（近代小説）、作家作品鑑賞Ⅴ（近代詩）
	漢文学／基礎漢文、中国文学
	関連／演習Ⅰ（古代）、演習Ⅱ（中世）、演習Ⅲ（近世）、演習Ⅳ（近代小説）、演習Ⅴ（近代詩）、 演習Ⅳ（国語学）、作家作品研究Ⅰ、作家作品研究Ⅱ、日本語表現法、日本思想史、児童文学、書道Ⅰ、 書道Ⅱ、比較文学論
取得資格	研究／卒業論文研究
	図書館司書、秘書士・秘書実務士
	図書館概論、図書館経営論、図書館サービス論、情報サービス論、レファレンスサービス演習、情報検索演習、 図書館資料論、専門資料論および資料特論、資料組織概説、資料組織演習、児童サービス論、 コミュニケーション論、情報機器論、図書館特論Ⅰ・Ⅱ、その他
	秘書に関する科目
	秘書学概論、秘書実務、事務管理、人間関係論、秘書実務演習、その他

専門科目	人間と社会／生活と福祉、社会保障制度、介護保険制度、障害者自立支援制度、介護実践に関連する諸制度
	介護／介護の基本、コミュニケーション技術Ⅰ・Ⅱ、生活支援技術Ⅰ・Ⅱ、介護過程、介護総合演習、 介護実習Ⅰ・Ⅱ
	こことからだのしくみ／発達と老化の理解Ⅰ・Ⅱ、認知症の理解Ⅰ・Ⅱ、障害の理解Ⅰ・Ⅱ、 こことからだのしくみⅠ・Ⅱ
	取得資格
	介護福祉士

大成女子高等学校

《普通科特別進学コース》

1年	国語総合、世界史A、現代社会、数学I、数学A、理科総合A、生物I、英語I、音楽I、体育、保健、総合、HR
	理系：現代文、古典講読、日本史B/地理B、数学II、数学B、化学I、物理I/生物II、英語II、情報A、体育、保健、総合、HR
2年	文系：現代文、古典、日本史B/地理B、数学II、数学B、物理I/化学I/生物II、英語II、英語演習、情報A、体育、保健、総合、HR
	理系：現代文、古典講読、公民演習、数学II/数学III、数学B/数学C、数学演習、化学II、物理II/生物II、リーディング、英語演習、家庭基礎、体育、総合、HR
3年	国立文系：現代文、古典、日本史B/地理B、公民演習、数学II、数学B、数学演習、理科演習、リーディング、英語演習、家庭基礎、体育、総合、HR
	私立文系：現代文、古典、国語表現I、日本史B/地理B、地歴演習、公民演習、英語II、リーディング、英語演習、家庭基礎、体育、総合、HR

《普通科進学コース》

1年	国語総合、世界史A、現代社会、数学I、数学A、理科総合A、英語I、オーラルI、音楽I、礼法、体育、保健、総合、HR
	科学・医療系：現代文、日本史B、数学II、数学B、化学I、物理I/生物I、英語II、情報A、体育、保健、総合、HR
	国際情報系：現代文、地理B、数学II、生物I、英語II、オーラルII、コミュニケーション論、家庭総合、体育、保健、総合、HR
2年	日本文化系：現代文、古典、地理B、数学II、生物I、英語II、家庭総合、情報A、体育、保健、総合、HR
	保育・福祉系：現代文、地理B、数学II、生物I、英語II、美術I、家庭基礎、情報A、体育、保健、総合、HR
	科学・医療系：現代文、古典講読、日本史B、公民演習、数学II、数学演習、化学II、物理II/生物II、リーディング、家庭基礎、体育、総合、HR
	国際情報系：現代文、古典講読、日本史B、公民演習、数学演習、リーディング、オーラルII、英語演習、コミュニケーション論、家庭総合、体育、保健、総合、HR
3年	日本文化系：現代文、古典、国語表現I、日本史B、地歴演習、公民演習、数学演習、リーディング、書道I、家庭総合、体育、総合、HR
	保育・福祉系：現代文、古典講読、日本史B、公民演習、数学演習、化学I、リーディング、音楽II、発達と保育、体育、総合、HR

《家政科》

1年	国語総合、世界史A、数学I、理科総合A、英語I、生活産業基礎、被服製作、フードデザイン、作法、資格取得講座、音楽I、家庭総合、体育、保健、総合、HR
2年	現代文、日本史A、数学II、生物I、英語II、オーラルI、家庭情報処理、被服製作、フードデザイン、資格取得講座、家庭総合、体育、保健、総合、HR
3年	現代文、現代社会、数学II、英語II、課題研究、家庭情報処理、発達と保育、家庭看護・福祉、被服製作、フードデザイン、作法、書道I、体育、HR

《看護科》

1年	国語総合、世界史A、現代社会、数学I、理科総合A、体育、音楽I、英語I、オーラルI、礼法、看護基礎医学、基礎看護、総合、HR
2年	現代文、数学A、生物I、体育、英語II、家庭基礎、看護情報処理、看護基礎医学、基礎看護、成人・老人看護、看護臨床実習、総合、HR
3年	現代文、日本史A、数学II、化学I、体育、英語II、看護基礎医学、成人・老人看護、母子看護、看護臨床実習、HR

《専攻科看護科》

1年	心理学、統計論、体育、英語、解剖生理学、病理学、微生物学、薬理学、基礎看護援助論、看護研究、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、臨地実習、在宅看護論、看護の統合と実践、臨床看護論
2年	国文学、人間関係論、女性と社会生活、生涯学習論、造形と美術、英語、栄養生化学、公衆衛生学、社会福祉学、総合医療論、関係法規、基礎看護援助論、看護研究、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、臨地実習、在宅看護論、看護の統合と実践、看護学総論、臨床看護論

◆教職員一覧 (2010年3月現在)

法人役員等			法人本部		
理事長	監事	小塙義輔	磯好知	法人本部長	
額賀修一	岩上堯		額賀さじ		
理事	評議員		横須賀英		
額賀修一	額賀修一		柴田和子		
小野孝尚	小野孝尚		高瀬一男		
額賀さじ	磯好知		酒井範雄		
小林弘	後藤久枝				
郡司勝美	芹沢古美子				
金井正	太田節子				
多賀野利弘					

茨城女子短期大学			事務局		
専任教職員			非常勤教育職員		
小野孝尚	学長	小林裕子	保育科	小林恵四郎	保育科
内山源	副学長	吉武利子	保育科	打越靖	保育科
武田昌憲	国文科教授	篠原純子	保育科	田山久子	保育科
小林和子	国文科教授	小野春江	国文科	加藤智子	保育科
内桶真二	国文科准教授	市毛恵子	保育科	中村朋子	保育科
中山愛理	国文科講師	小池芳江	保育科	岡田美奈子	介護福祉専攻科
磯靖子	国文科講師	吉川麗園子	保育科	小山征雄	保育科
松永晴紀	保育科教授	川井理香	保育科	本宮町子	保育科
佐藤豊	保育科教授	阿部頼子	保育科	久保田修	保育科
坂本勝江	保育科准教授	額賀修一	国文科准教授	関口孝子	介護福祉専攻科
神永直美	保育科准教授	佐々木美穂	保育科	山口恵子	国文科
糸賀恵美	保育科講師	中村佳代	保育科	国府田はるか	保育科
海野富江	保育科講師	飯村真造	保育科	平田和子	介護福祉専攻科
角田雅昭	保育科講師	早船徳子	介護福祉専攻科	伊藤純子	保育科
吉澤歎	保育科講師	吉崎三義	国文科		
金澤俊夫	介護福祉専攻科准教授				
仙波美千世	介護福祉専攻科講師				
井坂優子	介護福祉専攻科講師				

大成女子高等学校					
専任教職員			事務局		
額賀修一	校長・数学	川崎智洋	地歴・公民	瀬谷裕子	数学
石川豊	副校長・地歴・公民	菅谷栄子	国語	鈴木博之	理科
井坂良昭	教頭・数学	野澤和弘	地歴・公民	森聖子	理科
内山治男	教頭・理科	小澤俊幸	地歴・公民	田中耕太郎	外国語
伊藤ゆみ子	保健体育	川原良二	保健体育	和田創一	地歴・公民
藤田力雄	保健体育	小野間徹	理科	増山直子	数学
荒木春美	家庭	小泉恵子	家庭	廣瀬章江	看護
上嶋正子	家庭	関口美津江	国語	船山貴司	数学
山口裕子	外国語	大金喜代子	地歴・公民	矢野直美	地歴・公民
塙良	理科	小川石根	外国語	山本しづ子	看護
津田はるみ	保健体育	菊池郁子	看護	田村桃絵	看護
真崎節	国語	糸川明子	保健体育	山崎博美	看護
大津雅幸	国語	林裕子	外国語	齋藤洋晴	外国語
橋本公明	国語	市橋郁恵	国語	北畠陽子	養護
寺門恵子	数学	山岸基良	理科	益子八千代	看護
非常勤教育職員			事務職員		
滝田みどり	国語・書道	渡邊貴子	地歴・公民	朝妻重雄	事務長
上田真	地歴・公民	清水谷登志美	家庭	安幸代	
横田昌弘	数学	坂本教子	外国語	芳賀理加	
大和田智美	数学	青砥久	数学	三村由美子	
坂本敦子	音楽	黒沢幸子	家庭	平田有美	
君塚葉子	外国語	小野春江	書道		
友常みゆき	美術	大山春乃	看護		
佐藤桂子	情報・理科	新堀礼子	看護		
高野華絵	音楽	成瀬元夫	教育相談		

大成学園幼稚園						
小野孝尚	園長	國谷良子	教諭	長須由美子	教諭	前田和美
額賀さじ	副園長	清水由子	教諭	磯崎恵美	教諭	鬼沢めぐみ
渡邊敏江	教頭	山田明香	教諭	坪智美	教諭	齋藤由

◆進路状況

茨城女子短期大学 (2005~2009年度の実績)

《保育科》	幼稚園教諭二種免許状と保育士の2つの資格を取得し、公立・私立の幼稚園や保育園(所)に大部分が就職している。 なかには障害児(者)や親のいない子どもたちに役立ちたいと施設に就職する卒業生もいる。 また、本学の介護福祉専攻科へ進学する者も1割程度いる。
	大成学園幼稚園／杉の子幼稚園／旭幼稚園／もみや幼稚園／三つ葉幼稚園／すけ川幼稚園／小木津幼稚園／めぐみが丘幼稚園／諏訪かおる幼稚園／ひばり幼稚園／十王幼稚園／多賀二葉幼稚園／水木わかば幼稚園／日立市立幼稚園／若草幼稚園／すみれ幼稚園／あゆみ幼稚園／星の宮幼稚園／ナザレ幼稚園／みぎわ幼稚園／赤塚幼稚園／渡里幼稚園／平須幼稚園／水戸幼稚園／大塚ひのまる幼稚園／河和田幼稚園／栄光幼稚園／勝田第一幼稚園／勝田第二幼稚園／いばらき幼稚園／正美幼稚園／石岡善隣幼稚園／ばらき台幼稚園／中央幼稚園／いなほ幼稚園／子鹿幼稚園／平泉幼稚園／小山西幼稚園／諏訪幼稚園／七井幼稚園／わかさ幼稚園／ほうとく幼稚園／平第一幼稚園／白百合幼稚園／勿来リズム幼稚園／湘南やまゆり学園／南幼稚園／大津保育園／磯原保育園／中郷保育園／聖徳保育園／青空保育園／同仁東保育園／松ヶ丘保育園／こどものいえ保育園／田尻徳風保育園／れんげ保育園／多賀さくら保育園／いしまち保育園／南高野保育園／きたむこう保育園／ちゃあ一む保育園／のびのび保育園／日立市立保育所／大宮聖慈保育園／あゆみ保育園／大宮みのり保育園／御前山保育園／ひまわり保育園／太田あすなろ保育園／はすみ保育園／常北保育園／筑子保育園／しろはと保育園／おしのべ保育園／みか保育園／大沢保育園／岩間保育園／笠間市立保育所／かしま台保育園／ゆたか保育園／瓜連保育園／那珂市立保育所／チューリップ保育園／すみよし保育園／ひばり保育園／千波保育園／葉山保育園／こばと東保育園／こばと保育園／笠原保育園／石川保育園／わかな保育園／ひでの保育園／彩の国保育園／スワン保育園／リリー文化学園／見和めぐみ保育園／のぎく保育園／水戸市立保育所／たかば保育園／勝田あすなろ保育園／はなのわ保育園／つくし学園／なかや保育園／堀川保育園／平磯保育園／勝田みれ保育園／市毛フレンド保育園／ひたちなか市立保育所／滝口保育園／ひぬま保育園／飯沼保育園／ふじ保育園／ウイステリアナーサリースクール／大洋保育園／青山保育園／とりのす保育園／串挽保育園／わんぱく保育園／聖隸会保育園／玉里保育園／太陽保育園／納場保育園／竜翔寺保育園／北浦保育園／白帆保育園／スサキ保育園／日の出保育園／牛堀保育園／大野めぐみ保育園／大野ひかり保育園／こどもの家野草舎／鹿島いずみ保育園／ひよどり保育園／深芝保育園／東田保育園／福島市立保育所／富岡町立保育所／真岡めばえ保育園／こどもの森グループ／石崎学園／若草園／みどり園／勇成会あさひの家・ありますの杜／社会福祉法人同仁会
	専攻を生かして、情報サービス、印刷会社、図書館など図書関係の分野へも就職している。 また、その他金融機関等の一般企業をはじめ公的機関へ進む卒業生もいる。 あるいは、他大学の3年に編入して上級の資格取得を目指す者もいる。
	(株)常陽銀行／茨城県信用組合／茨城銀行(株)／水戸証券(株)／郵便局／JAひたちなか／あしぎん事務センター／アライアンス保険サービス(株)／東電環境エンジニアリング(株)／東京電力(株)／(株)日立データセンター／(株)エムシー／アクアワールド茨城県大洗水族館／茨城県大宮土木事務所／吉原小学校学校司書／大成女子高校図書館／茨城県社会福祉協議会／水戸市役所／核燃料サイクル機構東海事業所／日本レコードマネージメント(株)／日立化成工業(株)／(株)あけぼの印刷／キヤノン化成(株)／山宗(株)／(株)東京かねふく／大阪シーリング印刷(株)／常陸森紙業(株)／(株)齊藤自工／トヨタ部品茨城共販(株)／(株)デンソー東京茨城支社／ホテルテラスザガーデン水戸／(株)ツインリンクもてぎ／(株)ライトオン／(株)オーナード桜山／(株)シャノア／(株)石川時計店／(株)マルヘイストア／(株)山新／あさ川製菓(株)／(株)ケーズデンキ／(株)丸昌／フジタ(株)／(株)ニコロボーロ／(株)ザ・フォウルビ／医療法人博仁会／日立総合病院／生天目歯科医院／赤津眼科
《国文科》	介護福祉士の資格を生かし高齢者や障害者の福祉施設に約6割の修了生が就職し、ほかは児童福祉施設などに就職している。
《介護福祉専攻科》	介護老人福祉施設松栄荘／介護老人福祉施設ユーハイの家／介護老人福祉施設渡里すずらん苑／介護老人福祉施設ひばりヶ丘／介護老人福祉施設あやめ荘／介護老人福祉施設みれい／介護老人福祉施設愛友園／介護老人福祉施設鮎川さくら館／介護老人福祉施設久慈川荘／介護老人福祉施設ハートピア石岡／介護老人福祉施設かさまグリーンハウス／介護老人福祉施設いくり苑那珂／介護老人保健施設つまさと／介護老人保健施設ライフライフ那珂／介護老人保健施設田尻ヶ丘ヘルシーケア／介護老人保健施設温泉リハビリセンター虹の丘／介護老人福祉施設泉崎南東北ケアセンター／知的障害者福祉施設あいの家／身体障害者療護施設大雅荘／障害者支援施設さくら苑／グループホームさくらの里／グループホームハイブリッジ／グループホームばなな／有料老人ホームローズヴィラ水戸本館／有料老人ホームらいふアシスト泉ヶ森／岡崎整形外科医院／つくばセントラル病院／ふじ保育園／常北保育園／しろはと保育園／大成学園幼稚園

大成女子高等学校 (2007~2009年度の実績)

《普通科》	筑波大学／茨城大学／茨城県立医療大学／千葉大学／埼玉大学／信州大学／福島大学／山形大学／前橋工科大学／都留文科大学／山梨県立大学／早稲田大学／青山学院大学／明治大学／日本女子大学／東京女子大学／日本大学／東洋大学／駒沢大学／専修大学／大東文化大学／東海大学／帝京大学／桜美林大学／神奈川大学／玉川大学／白鷗大学／東北福祉大学／日本社会事業大学／国際医療福祉大学／東京音楽大学／東京家政大学／秀明大学／フェリス女子学院大学／神戸女学院大学／大妻女子大学／共立女子大学／昭和女子大学／実践女子大学／川村学園女子大学／日本体育大学／茨城キリスト教大学／常磐大学／茨城県立中央看護専門学校／茨城女子短期大学など
	【進学】茨城女子短期大学／茨城キリスト教大学／聖徳大学／つくば国際短期大学／聖徳大学短期大学部／東京家政大学短期大学部／実践女子短期大学／文化女子短期大学／中川学園調理技術専門学校／水戸調理師専門学校／リリー保育福祉専門学校／水戸教養福祉専門学校／茨城理容美容専門学校／水戸経理専門学校／華服飾専門学校／文化服装学院／辻製菓専門カレッジなど 【就職】京成百貨店／丸井／大洗海岸病院／ケアアレジデンス水戸／(株)いっしん／コジマ／サンヨーソーイング／あさ川製菓／ケーズデンキなど
《看護科》 看護科1~3回生 看護師国家試験合格率 100%	【進学】茨城県立中央看護専門学校助産学科／新潟大学養護教諭特別別科／三育学院短期大学専攻科地域看護学専攻 【就職】水戸済生会総合病院／国立病院機構水戸医療センター／日立製作所水戸総合病院／常陸大宮済生会病院／水戸府病院／国立病院機構茨城東病院／筑波大学附属病院／総合病院水戸協同病院／土浦協同病院／日立製作所日立総合病院／水戸中央病院／つくば病院／茨城西南医療センター病院／化学療法研究所附属病院／洛和会音羽病院／済生会習志野病院／千葉西総合病院／小豆沢病院／小山記念病院など

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1881年	明治14年	8月	—	私塾	額賀三郎、石岡町根当に出生
1881年	明治14年	8月	—	私塾	額賀キヨ、東茨城郡小川村小塙に出生
1900年	明治33年	—	—	私塾	額賀キヨ、東京裁縫女学校卒業。故郷小川村にて裁縫教授所開設
1907年	明治40年	2月	—	私塾	額賀三郎・キヨ結婚
		明治40年	12月	—	私塾 裁縫希望者を集めて鳥見町に開塾
1908年	明治41年	4月	—	裁縫学校	水戸市藤坂町に移転しトタン葺き2階建174.9m ² (53坪) の校舎落成
1909年	明治42年	4月	3日	裁縫学校	大成裁縫女学校 (修業年限 本科2年、専科2年、家政科1年、定員200名) 設置認可。本科5名、専科8名で授業を開始
1910年	明治43年	3月	—	裁縫学校	第1回卒業式 (8名)
		明治43年	6月	1日	裁縫学校 校友会の組織が成立し校友会雑誌第1号を発行
1911年	明治44年	1月	—	裁縫学校	校友会雑誌を「なでしこ」と改称し第6号を発行
1912年	明治45年	4月	—	裁縫学校	前年9月に着手した木造2階建校舎528m ² (160坪) の増築
	明治45年	4月	—	裁縫学校	新たに別科の規定を設置 (修業年限1年、高等女学校及び実科高等女学校の卒業生を収容、女子に必要かつ適切な技芸の修得をはかる)
	明治45年	6月	—	裁縫学校	校章を制定
1912年	大正元年	9月	13日	裁縫学校	明治天皇御大葬につき遙拝式を挙行
1916年	大正5年	9月	—	裁縫学校	瓦葺き2階建校舎231m ² (70坪) の増築が落成したが10月1日暴風雨のため倒壊
1917年	大正6年	2月	—	裁縫学校	前年倒壊した校舎落成
1919年	大正8年	6月	—	裁縫学校	4月に着手したトタン葺き平屋建校舎198m ² (60坪) 落成
	大正8年	9月	—	女学校	大成裁縫女学校を水戸市大成女学校と改称し定員を400名に増加
1921年	大正10年	5月	—	女学校	遠足及び修学旅行規程を制定
1923年	大正12年	9月	1日	女学校	午前11時59分 関東大震災発生、生徒を室外に避難させ損害なし
	大正12年	—	—	女学校	豊田英雄校長着任
1924年	大正13年	4月	—	女学校	校服を制定 (和服・紺色、元禄袖、袴、靴着用)
1925年	大正14年	1月	—	女学校	本校向い側2階建を特別教室とするために借用
1926年	大正15年	10月	—	女学校	7月に着手した木造2階建校舎561m ² (170坪) 落成
	昭和元年	12月	25日	女学校	大正天皇崩御され遙拝式を挙行
1928年	昭和3年	5月	—	女学校	制服を改定 (セーラー服ネクタイに2本の白線を入れる)
	昭和3年	—	—	女学校	豊田英雄校長退任
1929年	昭和4年	3月	8日	女学校	校歌を制定
	昭和4年	3月	20日	高女併設	大成高等女学校の設立認可され、定員200名で発足
	昭和4年	4月	—	高女併設	第1回高女生徒40名入学
	昭和4年	4月	—	高女併設	敷地1,392.6m ² (422坪) 拡張
	昭和4年	11月	—	高女併設	本校生徒作成の子供服及び編物、天皇陛下にご覧いただく
	昭和4年	11月	—	高女併設	校章を制定
1930年	昭和5年	2月	—	高女併設	第1回針供養
	昭和5年	4月	—	高女併設	体育部創設
	昭和5年	10月	—	高女併設	教育勅語済発40年記念式を挙行
1931年	昭和6年	7月	—	高女併設	磯浜なでしこ寮において運動部の合宿練習実施 (以降、毎年実施)
	昭和6年	9月	—	高女併設	新築校舎1,211m ² (367坪) 落成
	昭和6年	11月	—	高女併設	新校舎東側に運動場660m ² (200坪) 拡張
1932年	昭和7年	2月	28日	高女併設	創立25周年記念式を挙行
	昭和7年	6月	—	高女併設	県下中等学校第1回連合旅行に参加
	昭和7年	9月	—	高女併設	県北女子中等学校競技大会に出場
1933年	昭和8年	3月	—	高女併設	高女第1回卒業式を挙行

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1933年	昭和8年	4月	—	高女併設	県主催郷土工作品展覧会に出品した蒲団2点入賞
	昭和8年	5月	—	高女併設	1932年度卒業生寄付の国旗掲揚柱が落成し、掲揚式を挙行
	昭和8年	5月	—	高女併設	水府グラウンド開場式に行われたマスゲーム「輝く日本」に参加
	昭和8年	7月	7日	高女併設	教育に関する勅語の謄本を賜る
	昭和8年	10月	—	高女併設	文部大臣鳩山一郎氏より「温良貞淑」の揮毫を寄贈され、作法室に配置
	昭和8年	11月	—	高女併設	陸上競技部、明治神宮大会（全国大会）において800m競走で3着入賞
	昭和8年	12月	—	高女併設	皇太子殿下ご誕生奉祝記念として校旗を制定
1934年	昭和9年	1月	—	高女併設	校旗樹立式を挙行
	昭和9年	6月	—	高女併設	陸上競技部、関東女子競技大会において入賞
	昭和9年	11月	17日	高女併設	高崎市乗附練兵場における天皇陛下の閱兵に合唱団として参加
	昭和9年	11月	—	高女併設	温室落成
1935年	昭和10年	2月	—	高女併設	第1回生徒作品展覧会開催
	昭和10年	5月	—	高女併設	運動場2,970m ² (900坪) 拡張
1936年	昭和11年	4月	—	高女併設	高等女学校の定員を400名とする
	昭和11年	5月	—	高女併設	愛国子女団結団式挙行、団旗を授与
	昭和11年	5月	20日	高女併設	愛国子女団が天皇陛下に謁見
	昭和11年	9月	—	高女併設	茨城県陸上競技協会主催選手権大会に参加 (100m、400m、80m障害競走、400m継走、走高跳)
1937年	昭和12年	5月	26日	高女併設	高女用新築校舎660m ² (200坪) 落成
	昭和12年	9月	—	高女併設	学校特設防護団を結成
1938年	昭和13年	1月	—	高女併設	朝日新聞社主催「皇国大捷の歌」発表会に合唱団として出場
	昭和13年	2月	11日	高女併設	建国祭愛國行進に参加
	昭和13年	3月	—	高女併設	展覧会開催、本校関係戦死者遺族及び傷病兵士を招待
	昭和13年	3月	—	高女併設	家事科洗濯用工事落成
	昭和13年	4月	—	高女併設	学校長額賀三郎先生、県より自治功労者として表彰
	昭和13年	5月	—	高女併設	グランドピアノを設置
	昭和13年	9月	—	高女併設	水戸を訪れたヒトラーユーゲント歓迎行事に参加、刺繡を寄贈
	昭和13年	11月	—	高女併設	運動場拡張のため石倉の3分の1を取りこわす
	昭和13年	12月	—	高女併設	小学校連絡懇談会を開催
1939年	昭和14年	3月	—	高女併設	高等女学校の定員を600名とする
	昭和14年	6月	—	高女併設	農繁期勤労奉仕期間を設ける
	昭和14年	7月	—	高女併設	支那事変二周年記念式を実施
	昭和14年	8月	—	高女併設	「青少年学徒に賜りたる勅語」を賜る
	昭和14年	11月	—	高女併設	学校長額賀三郎先生、全国高等女学校協会より30年女子教育功労者として表彰
1940年	昭和15年	3月	—	高女併設	玄関、職員室、応接室を含む2階建校舎217.8m ² (66坪) 落成
	昭和15年	5月	—	高女併設	「青少年学徒に賜りたる勅語」の奉読式を挙行
	昭和15年	7月	—	高女併設	防空防火規程を作成
	昭和15年	9月	—	高女併設	排球部、明治神宮大会（全国大会）に出場
	昭和15年	10月	1日	高女併設	愛国子女団総会に参列
	昭和15年	10月	17日	高女併設	額賀キヨ、母校渡辺学園より教育功労者として表彰
	昭和15年	10月	30日	高女併設	学校長額賀三郎先生、教育功労者として文部省より表彰
	昭和15年	11月	10日	高女併設	紀元2600年奉祝式を挙行
	昭和15年	11月	11日	高女併設	高女4年生徒が国民奉祝日斉唱団に参加
	昭和15年	12月	13日	高女併設	学校関係物故者慰靈祭を挙行

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1940年	昭和15年	12月	14日	高女併設	学園創立30周年記念式を挙行、記念展覧会を開催
	昭和15年	—	—	高女併設	県下女子中等学校合唱コンクールで優勝
1941年	昭和16年	5月	—	高女併設	那珂川が氾濫し大洪水となる
	昭和16年	12月	8日	高女併設	真珠湾攻撃、太平洋戦争開戦
1942年	昭和17年	2月	—	高女併設	衣料切符制開始
1943年	昭和18年	3月	—	高女併設	木造2階建校舎396m ² (120坪) 落成
	昭和18年	5月	—	高女併設	本校生への学徒動員開始
	昭和18年	5月	—	高女併設	校内に防空壕がつくられる
	昭和18年	5月	—	高女併設	日立製作所水戸工場、日立兵器工場に女子挺身隊として参加し、学年別に週1回登校
	昭和18年	10月	—	高女併設	学園創立35周年記念式を茨城会館において挙行
	昭和18年	11月	6日	高女併設	水戸グラウンドにて運動会開催 (戦中期最後の実施)
1944年	昭和19年	1月	8日	高女併設	武器製作のため本校、水戸高女、下館高女の3校で女子3交代の佐乙女工場 (日立製作所内) を設立
	昭和19年	8月	—	高女併設	敵機の空襲により工場の疎開を始め、本校も日立兵器の学校工場となり体育館に旋盤をとりつけて機関銃の弾倉をつくる
	昭和19年	11月	13日	高女併設	茨城県達により、看護婦養成所に指定 (大成高等女学校看護婦養成所第1回卒業174名、戦争による看護婦の不足を補う)
1945年	昭和20年	7月	4日	高女併設	財団法人の経営となる
	昭和20年	8月	1日	高女併設	空襲により全校舎5棟3,065.7m ² (929坪) 焼失
	昭和20年	8月	15日	高女併設	終戦
	昭和20年	11月	—	高女併設	旧37部隊兵舎を仮校舎として授業を開始
	昭和20年	12月	—	高女併設	通学困難者を対象に分散授業を各地で実施
1946年	昭和21年	11月	21日	高女併設	昭和天皇水戸ご訪問にて本校授業をご視察
1947年	昭和22年	1月	—	高女併設	百里航空隊建物の払い下げを受け第一校舎 (平屋建663.3m ² (201坪)) 建築着工。生徒は週1回この校舎に通学、他は旧37部隊兵舎で授業実施
	昭和22年	3月	—	女学校 中学	学制改革により中学校が発足、高女の1・2年生は大成女子中学校生徒となる
	昭和22年	7月	27日	女学校	排球部卒業生クラブ、金沢国体に出場
1948年	昭和23年	4月	—	中学高校	学制改革により大成女子高等学校と改称、高女の3・4年生は高校生徒となる
1949年	昭和24年	3月	23日	中学高校	第1回大成女子高等学校中学校卒業式を挙行
	昭和24年	6月	27日	中学高校	前年12月起工式を挙げた木造2階建第二校舎815.1m ² (247坪) 落成 (後に第三校舎と改称)。旧37部隊兵舎より机、椅子を移転 (生徒各自)
	昭和24年	9月	23日	中学高校	水戸近郊中学排球大会を主催 (以降、毎年実施)
	昭和24年	11月	30日	中学高校	排球部、関東大会に出場 (横浜)
	昭和24年	3月	—	中学高校	学芸会を旧37部隊跡地で実施
	昭和24年	11月	10日	中学高校	矢祭山遠足 (2年生)、筑波山遠足 (3年生)、東京遠足 (中学生)
1950年	昭和25年	1月	31日	中学高校	資生堂講習会を実施
	昭和25年	2月	8日	中学高校	定期考查修了後、全員で那珂川から砂を校庭に運び整備
	昭和25年	3月	16日	中学高校	校債を発行
	昭和25年	3月	23日	中学高校	第2回卒業式を挙行
	昭和25年	3月	28日	中学高校	大成女学校廃止
	昭和25年	6月	17日	中学高校	バレー部 (排球部)、全国高校総合体育大会 (インターハイ) に出場
	昭和25年	10月	7・8日	中学	袋田 (1年)、水郷筑波 (2年)、箱根遠足 (3年)
	昭和25年	12月	11日	中学高校	仮校舎を旧37部隊兵舎より旧42部隊兵舎へ移動
	昭和25年	12月	17日	中学高校	石倉の一部をこわし石垣を作る
1951年	昭和26年	3月	3日	中学高校	財団法人より学校法人の経営となる

西暦	和暦	月	日	区分	事項	
1951年	昭和26年	5月	一	中学高校	関西旅行、日光、箱根	
		昭和26年	7月 30日	中学高校	木造2階建第二校舎541.2m ² (164坪) 落成	
		昭和26年	9月 18日	中学高校	生徒からの月20円の寄付でピアノを購入	
		昭和26年	10月 3日	中学高校	学校新聞「大成時報」の第1号を発行	
		昭和26年	10月 5日	中学高校	高校文芸部「いぶき」創刊	
1952年	昭和27年	6月	25日	中学高校	校地970.2m ² (294坪) 拡張	
		昭和27年	8月 16日	中学高校	バレーボール部、インターハイに出場	
1953年	昭和28年	1月	一	中学高校	木造2階建第四校舎600.6m ² (182坪) 落成	
		昭和28年	2月 3日	中学高校	旧42部隊跡を引き揚げ全員本校校舎で授業を行う	
		昭和28年	2月 13日	中学高校	校長額賀三郎先生逝去	
		昭和28年	2月 20日	中学高校	額賀三郎先生の学校葬	
		昭和28年	2月	一	中学高校	額賀修先生、校長に就任
		昭和28年	4月	一	中学高校	制服を改定 (ボレロ型)
		昭和28年	9月 17日	中学高校	国体聖火が水戸市を通過、本校寺田先生がランナーの指導者として走る	
1954年	昭和29年	3月	10日	中学高校	木造平屋建図書館66m ² (20坪) 落成	
		昭和29年	4月	一	中学高校	調理実習室、ユニットキッチン・ガスの設備落成
		昭和29年	7月 2日	中学高校	大成女子中学校廃止	
		昭和29年	11月 3日	高校	創立記念日、体育祭を実施	
		昭和29年	11月	一	高校	第五校舎891m ² (270坪) 落成
		昭和29年	12月 1日	高校	産業教員70周年記念式で額賀キヨ先生表彰	
1956年	昭和31年	9月 16日		高校	図書館を含む鉄筋3階建本館399.16m ² (120.96坪) 落成	
1957年	昭和32年	11月 14日		高校	理科実験室を含む鉄筋4階建第四校舎380.36m ² (115.26坪) の拡張工事落成	
1958年	昭和33年	3月 3日		高校	家庭クラブ3年生がおひな様を寄付 (5ヵ年計画)	
		昭和33年	11月 17日	高校	鉄骨の体育館630.86m ² (191.17坪) 落成	
		昭和33年	11月 30日	高校	木造2階建作法室、第2調理室211.2m ² (64坪) 落成	
1959年	昭和34年	6月 28日		高校	バドミントン部、県大会で優勝	
		昭和34年	9月 13日	高校	音楽部、毎日賞音楽コンクールで3位に入賞	
		昭和34年	11月 4日	学園	創立50周年記念式を挙行	
		昭和34年	11月 20日	高校	全職員、全国私学研究大会 (東京) に参加	
1961年	昭和36年	3月 1日		高校	視聴覚室を含む地上5階地下1階建鉄筋の創立50周年記念館980.66m ² (297.17坪) 落成	
		昭和36年	4月	一	高校	制服を背広型に改定
		昭和36年	8月 1日	高校	バレーボール部、インターハイに県代表として出場 (徳島県)	
1962年	昭和37年	3月	一	高校	名譽校長額賀キヨ先生、県知事より教育功労者として表彰	
		昭和37年	10月 16日	高校	バレーボール部、県代表として福井国体に出場	
		昭和37年	11月 3日	高校	オーバーの型を制定	
1963年	昭和38年	3月	一	高校	第一調理室を含む5階建鉄筋第六校舎1,428.24m ² (432.8坪) 完成	
		昭和38年	4月 11日	高校	校地229.68m ² (69.6坪) 拡張	
		昭和38年	7月	一	高校	学校新聞「大成時報」を「大成女子高新聞」と改題して復刊
		昭和38年	8月 15日	高校	校地165m ² (50坪) 拡張	
1964年	昭和39年	3月 31日		高校	地上4階地下1階建鉄筋第七校舎610.5m ² (185坪) 落成	
		昭和39年	6月 26日	高校	校地1,320m ² (400坪) 拡張	
		昭和39年	9月 6日	高校	吹奏楽部、NHK吹奏楽コンクールで優勝	
		昭和39年	10月 1日	高校	マイクロバスを購入	

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1964年	昭和39年	10月	17日	高校	オリンピックバレー ボール日本代表の佐々木選手、ソ連を破り金メダルを獲得
	昭和39年	11月	11日	高校	第5手洗（水洗）完成
1965年	昭和40年	1月	17日	高校	創立者額賀三郎、キヨ先生の胸像除幕式を挙行
	昭和40年	10月	24日	高校	バレー ボール部、岐阜国体に出場
1966年	昭和40年	11月	19日	高校	名誉校長額賀キヨ先生、文部大臣より教育功労者として表彰
	昭和40年	11月	27日	高校	副校長額賀あや子先生産業教育功労者として産業教育振興中央会より表彰
1966年	昭和40年	12月	20日	高校	校地182.33m ² (55.25坪) 拡張
	昭和41年	5月	—	高校	温室（第18回卒業生卒業記念）落成
1967年	昭和41年	11月	3日	高校	名誉校長額賀キヨ先生、勲五等宝冠章授与
	昭和42年	1月	20日	高校	吹奏楽部、第1回定期演奏会を文化センターで実施（以降、毎年実施）
1967年	昭和42年	3月	25日	短大	短期大学設置認可（定員 文科英文専攻20名、国文専攻20名、保育科40名）（文部省）
	昭和42年	4月	18日	短大	第1回入学式挙行（入学生 文科英文専攻7名、国文専攻8名、保育科50名）
1967年	昭和42年	5月	21日	短大	全学遠足（那須大丸）
	昭和42年	7月	1日	高校	学校新聞「大成女子高新聞」を「大成学園新聞」と改め、第30号を発行
1967年	昭和42年	8月	1日	学園	名誉校長額賀キヨ先生逝去
	昭和42年	9月	3日	学園	額賀キヨ先生の学園葬
1968年	昭和42年	9月	12日	短大	学生食堂開設
	昭和42年	10月	25日	短大	開学式挙行
1968年	昭和42年	11月	20日	学園	学校長額賀修先生、私学教育功労者として私学連合会より表彰
	昭和43年	1月	1日	学園	学校長額賀修先生、茨城放送にて「茨城教育百年を語る」に出演
1968年	昭和43年	4月	1日	短大	保母養成機関認可（厚生省）
	昭和43年	4月	17日	短大	学生便覧完成
1968年	昭和43年	5月	—	学園	創立60周年記念誌編集委員会発足
	昭和43年	5月	13日	高校	創立記念日を11月3日からこの日に変更
1968年	昭和43年	6月	26日	学園	学校長額賀修先生、藍綬褒章を授与され皇居に参内
	昭和43年	7月	19日	学園	学校長、世界教育者会議（アイルランド）に日本代表として出席（8月27日まで）
1968年	昭和43年	11月	3日	高校	バレー ボール部、インターハイ・国体・関東の3つのタイトルを獲得
	昭和43年	11月	—	高校	バトントワーリング部、県大会で優勝
1969年	昭和43年	11月	8日	学園	学校長夫妻、天皇皇后両陛下ご主催の秋の園遊会に招待される
	昭和44年	2月	10日	短大	校歌（作詞 能村潔教授 作曲 高木東六）、校旗、校章制定
1969年	昭和44年	3月	1日	高校	鉄筋2階建生活センター873.42m ² (264.22坪) 落成
	昭和44年	3月	20日	短大	第1回卒業式挙行（卒業生 文科英文専攻8名、国文専攻8名、保育科47名）
1969年	昭和44年	3月	31日	高校	鉄筋2階建衛生看護科校舎422.8m ² (128.12坪) 1期工事落成
	昭和44年	4月	1日	高校	衛生看護科設置認可
1969年	昭和44年	4月	1日	短大	保育科定員増、1学年50名となる
	昭和44年	4月	1日	短大	学寮「なでしこ寮」開設
1969年	昭和44年	5月	13日	短大	創立記念日として休業とする
	昭和44年	6月	5日	高校	校地280.5m ² (85坪) 拡張
1969年	昭和44年	6月	10日	高校	家庭クラブが大型バスを寄贈（家庭クラブ号）
	昭和44年	9月	30日	高校	衛生看護科校舎2期工事落成（3階建594.72m ² (180.22坪) となる）
1969年	昭和44年	10月	25日	高校	皇太子殿下水され、生徒が校門前で歓迎
	昭和44年	10月	29日	短大	第1回学園祭開催（30日まで）
昭和44年	11月	11日	学園		創立60周年記念式典を東町運動公園体育館で挙行、その後本校体育館で祝賀会を実施

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1969年	昭和44年	11月	14日	学園	神崎寺で慰靈祭を執行
1970年	昭和45年	1月	19日	短大	学友会発足
	昭和45年	4月	1日	短大	文科に司書コースを設置
	昭和45年	7月	2日	高校	衛生看護科、戴帽式実施
	昭和45年	8月	3~7日	高校	バレー部、インターハイに県代表として出場（和歌山県）
	昭和45年	10月	8~11日	高校	バレー部、岩手国体に県代表として出場
	昭和45年	11月	4日	高校	第1回芸術祭実施（東京ハーブ楽団出演）
	昭和45年	12月	20日	短大	第1回マンドリン演奏会開催
1971年	昭和46年	4月	13日	幼稚園	学校法人大成学園大成学園幼稚園開園。額賀修が初代園長に就任
	昭和46年	4月	—	幼稚園	第1回入園式を挙行
	昭和46年	5月	—	幼稚園	親子遠足を実施（以降、毎年実施）
	昭和46年	8月	22日	短大	同窓会総会開催
	昭和46年	9月	—	幼稚園	短大保育科1年生の教育実習を受け入れ（以降、毎年実施）
	昭和46年	9月	—	短大	研究紀要第1集発行
	昭和46年	9月	—	幼稚園	遠足を実施（以降、毎年実施）
	昭和46年	10月	—	幼稚園	運動会を実施（以降、毎年実施）
	昭和46年	10月	22日	高校	バレー部、和歌山国体に出場
1972年	昭和47年	3月	21日	幼稚園	第1回修了式を挙行
	昭和47年	—	—	短大	保母養成カリキュラムの変更（1974年度）通知
1973年	昭和48年	1月	21~23日	高校	スケート部（フィギュア）、盛岡国体に県代表として出場し、4位に入賞
	昭和48年	8月	16日	短大	幼児教育研究会開催
1974年	昭和49年	4月	—	短大	グループ制を導入
	昭和49年	5月	31日	高校	バドミントン部、県代表として関東大会に出場
	昭和49年	7月	18日	高校	ロータリークラブ交換留学生来校（この頃毎年来校している）
	昭和49年	10月	20日	高校 幼稚園	茨城国体に参加
1975年	昭和50年	5月	19日	短大	新学生ホール使用開始
	昭和50年	6月	6日	高校	2年生で初めて宿泊学習を実施
	昭和50年	8月	20日	短大	図書館職員研修会開催（46名参加）
1976年	昭和51年	2月	7日	高校	第1回校内合唱祭を開催
	昭和51年	2月	17日	高校	校地524.7m ² （159坪）拡張
	昭和51年	3月	—	幼稚園	定員を変更
	昭和51年	5月	22日	高校	天皇陛下ご臨席のもと植樹祭が本県大子町で行われ本校生徒代表参列
	昭和51年	12月	17日	短大	定員増認可（文科英文専攻30名、国文専攻30名、保育科100名）
	昭和51年	12月	21日	短大	文芸講演会開催（講師 永瀬純一氏）
1977年	昭和52年	2月	22日	高校	副校長額賀あや子先生逝去
	昭和52年	3月	12日	高校	副校長額賀あや子先生の学園葬
	昭和52年	4月	—	高校	家庭クラブ、茨城県高等学校家庭クラブ連盟会長校を務める
	昭和52年	7月	20日	高校	全国献血大会で本校表彰
	昭和52年	9月	29日	高校	バレー部、県代表として青森国体に出場
	昭和52年	11月	3日	学園	理事長額賀修先生、勲四等旭日小綬章を受章
	昭和52年	12月	—	高校	校地348.77m ² （105.51坪）取得
1978年	昭和53年	1月	31日	高校	学校長額賀修先生、産業教育功労者として表彰

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1978年	昭和53年	3月	—	短大	体育館兼講堂新築・竣工
	昭和53年	5月	—	高校	校地306.90m ² (93坪) 取得
	昭和53年	5月	18日	高校	3年生で社会見学を実施
	昭和53年	5月	18・19日	高校	1年生で宿泊学習を実施
	昭和53年	11月	18日	高校	校長額賀修先生、高体連30周年記念式典で功労者として表彰
1979年	昭和54年	4月	—	短大	図書館移転
	昭和54年	6月	1日	短大	「茨城女子短期大学新聞」発行
	昭和54年	7月	23日	高校	水泳部、県代表として宮城国体に出場
	昭和54年	8月	1日	高校	バトン部、全国高校総合文化祭バトントワーリング部門に県代表として出場
	昭和54年	8月	3日	高校	バレー部、インターハイに県代表として出場 (滋賀県)
	昭和54年	8月	25・26日	短大	図書館科学会研究大会開催
	昭和54年	9月	—	短大	保育科、Music Laboratory開設
	昭和54年	10月	3日	高校	創立70周年記念として建設中の2号館落成 (1361.46m ² (412.56坪))
	昭和54年	10月	5日	学園	創立70周年記念式を文化センターで挙行、その後祝賀式を京成ホテルで実施
	昭和54年	10月	7日	高校	バトン部、県総合演奏行進大会バトントワーリング部門において最優秀賞を受賞
	昭和54年	10月	—	学園	校長額賀修先生、「いばらき賞」を受賞
	昭和54年	10月	—	幼稚園	女子体育連盟全国大会で研究発表
1980年	昭和55年	6月	12日	短大	茨城県私立短期大学協会第1回連絡協議会開催
	昭和55年	6月	—	幼稚園	彫塑展を行う (以降、毎年実施)
	昭和55年	8月	18日	高校	水泳部、インターハイに出場 (徳島県)
	昭和55年	10月	—	幼稚園	作品展を行う (以降、毎年実施)
1981年	昭和56年	1月	24日	高校	ダンス部、全日本女子体育実技研究発表会に出場、ドロシィ・エインズワース賞を受賞 (東京)
	昭和56年	3月	14日	短大	定員増認可 (文科英文専攻30名、国文専攻70名、保育科130名)
	昭和56年	3月	—	高校	バレー部、選抜大会に出場 (東京都体育館)
	昭和56年	5月	—	幼稚園	保護者コーラス同好会発足
	昭和56年	8月	1日	高校	バレー部、インターハイに出場 (群馬県)
	昭和56年	9月	13日	高校	水泳部、滋賀国体に出場
	昭和56年	10月	—	高校	バレー部、滋賀国体に出場
	昭和56年	12月	14日	短大	2号館竣工
	昭和56年	12月	—	幼稚園	交通安全指導を受ける (以降、毎年実施)
	昭和56年	12月	25～28日	高校	スキー教室 (菅平高原スキー場) 実施 (以降、毎年実施)
1982年	昭和57年	1月	26日	高校	ダンス部、全日本女子体育実技研究発表会に出場、2年連続日本一に輝きドロシィ・エインズワース賞を受賞 (国立教育会館虎の門ホール)
	昭和57年	4月	1日	短大	学則の一部変更。「新たに大学又は短期大学の第1学年に入学した学生の既修得単位の取扱いについて」
	昭和57年	8月	1日	高校	バレー部、インターハイに出場 (鹿児島県)
1983年	昭和58年	7月	22・23日	短大	社会人対象「教養公開講座」開催 (以降、「公開講座」と改称し毎年開催)
	昭和58年	8月	—	高校	バレー部、インターハイに出場 (愛知県)
	昭和58年	9月	11日	高校	水泳部、群馬国体に出場
	昭和58年	10月	—	高校	バレー部、愛知国体に出場
1984年	昭和59年	4月	1日	短大	秘書課程開設
	昭和59年	4月	—	幼稚園	菊池實、第2代園長に就任

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1984年	昭和59年	8月	17日	高校	水泳部、インターハイに出場（秋田市）
	昭和59年	8月	—	高校	バレーボール部、インターハイに出場（秋田市）
	昭和59年	8月	—	高校	吹奏楽部、県コンクール出場4部門にて金賞受賞
	昭和59年	8月	—	高校	額賀良一先生、校長に就任
	昭和59年	12月	—	幼稚園	生活発表会を行う（以降、毎年実施）
1985年	昭和60年	1月	8日	短大	額賀修学長が辞任し、菊池實が学長に就任
	昭和60年	1月	24日	高校	ダンス部、国際女子体育会議記念全日本女子体育実技研究発表会に出場、ドロシィ・エインズワース賞を受賞（東京）
	昭和60年	3月	—	高校	校地1,108.15m ² (335.22坪) 取得
	昭和60年	4月	—	高校	制服をブレザー型に改定
	昭和60年	4月	—	高校	家庭クラブ、県社会福祉協議会より「児童・生徒のボランティア活動普及事業協力校」に指定（1987年3月までの3カ年間）
	昭和60年	4月	—	幼稚園	保育形態を変える
	昭和60年	4月	—	幼稚園	クラス役員制度を設ける
	昭和60年	6月	12日	高校	科学万博見学（全学年）
	昭和60年	8月	—	高校	バレーボール部、インターハイに出場（石川県）
	昭和60年	8月	—	高校	水泳部、インターハイに出場（石川県）
	昭和60年	8月	—	幼稚園	茨城県私立幼稚園研修会で研究発表をする
	昭和60年	10月	26日	学園	額賀修理事長の告別式
	昭和60年	10月	27日	高校	陸上競技部、県新人戦走高跳で優勝（笠松総合運動公園競技場）
	昭和60年	10月	—	高校	バレーボール部、鳥取国体に出場
	昭和60年	11月	5日	短大	学園祭「那珂祭」の名称変更、「樹林祭」へ
1986年	昭和61年	3月	—	高校	鉄筋3階建5号館2,297.01m ² (696.06坪) 竣工
	昭和61年	4月	—	幼稚園	宮澤治正、第3代園長に就任
	昭和61年	8月	3日	高校	吹奏楽部、県コンクールに出場し、4部門で金賞
	昭和61年	8月	16日	高校	水泳部、インターハイに出場（島根県）
	昭和61年	8月	—	高校	バレーボール部、インターハイに出場（岡山県）
	昭和61年	8月	—	高校	陸上競技部、インターハイ走高跳に出場（山口県）
	昭和61年	8月	—	幼稚園	夕涼み会を実施（以降、毎年実施）
	昭和61年	9月	—	高校	水泳部、山梨国体に出場
	昭和61年	10月	—	高校	陸上競技部、山梨国体走高跳に出場
	昭和61年	12月	—	高校	バレーボール部、第4回日中友好青少年交流日本代表として中国遠征
	昭和61年	12月	—	高校	鉄筋5階地下1階建4・7号館1,923.91m ² (583.0坪) 竣工
1987年	昭和62年	1月	—	高校	ダンス部、全日本女子体育実技研究発表会に出場し、ドロシィ・エインズワース賞を受賞（東京）
	昭和62年	2月	1日	短大	菊池實学長が辞任し、宮澤治正教授が学長に就任
	昭和62年	3月	29日	高校	水泳部、全国ジュニアオリンピック春季大会に出場（東京）
	昭和62年	4月	—	幼稚園	文部省委嘱幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究が3年間の指定を受ける
	昭和62年	6月	—	幼稚園	保護者読書を楽しむ会発足
	昭和62年	6月	—	幼稚園	園内研究会を行う（以降、毎年実施）
	昭和62年	7月	—	短大	公開講座を実施（一般対象、以降、毎年実施）
	昭和62年	8月	17日	高校	水泳部、インターハイに出場（北海道）
	昭和62年	9月	—	高校	水泳部、沖縄国体に出場
	昭和62年	11月	14日	短大	開学20周年記念式典を挙行
	昭和62年	11月	—	幼稚園	那珂町美術展に参加（以降、毎年実施）

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1988年	昭和63年	4月	1日	短大	文科英文専攻・国文専攻を文学科英語英文専攻・国語国文専攻に名称変更
	昭和63年	4月	—	幼稚園	堀籠平吾、第4代目園長に就任
	昭和63年	5月	7・8日	短大	グループリーダー研修会を実施
	昭和63年	6月	4日	高校	バドミントン部、関東大会に出場（千葉県）
	昭和63年	6月	—	高校	器械体操部、関東大会に出場（埼玉県）
	昭和63年	7月	23日	高校	ダンス部、日本代表としてドリルチーム世界大会に出場（東京）
	昭和63年	8月	16日	高校	水泳部、インターハイに出場（兵庫県）
	昭和63年	9月	4日	高校	水泳部、京都国体に出場
	昭和63年	11月	19日	短大	天皇陛下のご容態の推移によって全国的に学園祭自粛ムードが広がり、第20回学園祭は中止
	昭和63年	11月	28日	高校	新体育館竣工式（3,354.47m ² (1,016.5坪)）
	昭和63年	11月	29日	高校	新体育館竣工アトラクション（女子バレーボール東芝及び日製佐和チーム招待試合）
	昭和63年	11月	—	高校	胸像前庭改造
1989年	昭和64年	1月	7日		昭和天皇崩御
	平成元年	2月	10日	短大	宮澤治正学長の大学葬
	平成元年	2月	17日	短大	堀籠平吾先生、学長に就任
	平成元年	7月	28日	幼稚園	全国幼稚園教育研究協議大会横浜大会で研究発表する
	平成元年	8月	5日	高校	ダンス部、日本代表としてドリルチーム世界大会に出場、ダンスプリシジョン部門にて第3位（名古屋市レインボーホール）
	平成元年	8月	12日	高校	水泳部、インターハイに出場（高知県）
	平成元年	9月	3日	高校	水泳部、北海道国体に出場
	平成元年	9月	—	幼稚園	祖父母参観日を実施（以降、毎年実施）
	平成元年	10月	23日	幼稚園	講演会を行う
	平成元年	11月	7日	学園	創立80周年記念式を大成女子高校の新体育館で挙行、祝賀会を中央ビルで実施
	平成元年	11月	9日	高校	創立80周年記念芸術鑑賞会（寺内タケシとブルージーンズ、体育館）
	平成元年	11月	10日	幼稚園	文部省委嘱幼稚園教育の在り方についての実践的研究発表
	平成元年	11月	25日	高校	吹奏楽部、関東マーチング連盟主催関東マーチングフェスティバル大会に出場（千葉・幕張メッセ）
1990年	平成2年	3月	10日	高校	創立80周年記念事業として研究紀要の創刊号を発行
	平成2年	4月	1日	短大	専攻科福祉専攻（定員20名）を設置
	平成2年	5月	19日	短大	就職懇談会を実施
	平成2年	5月	26日	短大	校歌板除幕式（1989年度卒業生記念品）
	平成2年	6月	11日	高校	バレーボール部、関東大会連続26回通算35回出場で表彰
	平成2年	6月	—	幼稚園	保護者生け花を楽しむ会発足
	平成2年	7月	4日	高校	21番教室を進路相談室・コンピューター室として改造
	平成2年	8月	—	高校	全国高校ボーリング大会で6位に入賞
	平成2年	8月	—	高校	ダンス部、ドリルチーム世界大会にダンスプリシジョン部門の日本代表として参加
	平成2年	9月	—	高校	校地348.78m ² (105.51坪) 取得
	平成2年	11月	17・18日	高校	学園祭を今年度から名称を撫子祭として外部公開で実施
	平成2年	11月	21日	高校	吹奏楽部、永年コンクール出場（20年）として表彰
1991年	平成3年	2月	—	幼稚園	幼稚園教育課程運営改善講座へ出席
	平成3年	4月	—	幼稚園	額賀良一、第5代目園長に就任
	平成3年	5月	12日	短大	1号館竣工披露

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1991年	平成3年	6月	一	幼稚園	親と遊ぶ日を実施（以降、毎年実施）
	平成3年	8月	7日	短大	サマーキャンプを実施
1992年	平成4年	3月	24日	短大	堀籠平吾学長の大学葬
	平成4年	4月	一	短大	額賀良一先生、学長に就任
1993年	平成4年	4月	1日	高校	今年度から学校5日制を導入、月1回第2土曜日を休業日とする
	平成4年	4月	一	幼稚園	2年保育から2・3年保育とする
1994年	平成4年	7月	一	幼稚園	大成女子高等学校衛生看護科生徒の実習を受け入れる（以降、毎年実施）
	平成4年	10月	一	幼稚園	高校生の体験学習を受け入れる（以降、毎年実施）
1995年	平成4年	12月	一	幼稚園	新園舎が完成
	平成5年	1月	26日	短大	次年度からの週5日制導入について審議
1996年	平成5年	2月	一	幼稚園	新園舎落成式を行う
	平成5年	4月	12日	短大	専用スクールバスの運行開始
1997年	平成5年	5月	一	高校	校地689.75m ² (208.65坪) 取得
	平成5年	5月	一	幼稚園	サッカーを保育に取り入れる
1998年	平成5年	7月	一	幼稚園	七夕まつりを行う
	平成5年	9月	一	幼稚園	祖父母を招いて遊ぶ日を実施（以降、毎年実施）
1999年	平成5年	10月	一	幼稚園	全国幼稚園教育県研究協議会研究の協力園となる
	平成5年	11月	一	幼稚園	健康体操教室を行う
2000年	平成5年	12月	一	幼稚園	餅つき会を行う（以降、毎年実施）
	平成6年	5月	一	幼稚園	ネイティブスピーカーによる英会話を保育に取り入れる
2001年	平成6年	8月	一	幼稚園	全国私立幼稚園連合会関東地区教員研修千葉大会で研究発表する
	平成6年	9月	一	高校	校地424.46m ² (128.40坪) 取得
2002年	平成6年	11月	一	幼稚園	外国人子女を受け入れる
	平成7年	5月	一	幼稚園	茨城県幼稚園教育指導資料作成委員に選出される（1名）
2003年	平成7年	11月	一	学園	インターネット専用線接続
	平成7年	11月	一	幼稚園	第16回全国幼稚園経営研修会で公開保育をする
2004年	平成8年	1月	3日	高校	本館（事務棟）完成、竣工式を行う (940.02m ² (284.85坪))
	平成8年	2月	29日	短大	インターネット活用基礎講座開講
2005年	平成8年	5月	一	幼稚園	保護者テニス同好会発足
	平成8年	8月	26日	短大	海外研修旅行（カナダ）
2006年	平成8年	8月	一	幼稚園	専用線でインターネットに接続、ホームページ公開
	平成8年	11月	一	高校	校地198.98m ² (60.19坪) 取得
2007年	平成8年	11月	一	幼稚園	講演会開催（以降、毎年実施）
	平成9年	3月	20日	高校	バレーボール部、春の高校バレー全国大会に出場しベスト8
2008年	平成9年	5月	一	幼稚園	大成女子高等学校家政科生徒の実習を受け入れる（以降、毎年実施）
	平成9年	7月	一	幼稚園	観劇（角笛シルエット劇）を実施（以降、毎年実施）
2009年	平成9年	9月	一	学園	大成学園理事長額賀良一、文部省より教育功労者として褒章を授与される
	平成10年	6月	一	高校	バドミントン部、関東大会に出場（埼玉県）
2010年	平成10年	7月	一	幼稚園	第47回全国幼稚園教育研究大会愛知大会で研究発表をする
	平成10年	7月	一	幼稚園	保護者絵本つくりの会発足
2011年	平成10年	7月	一	幼稚園	中学生の職場体験学習を受け入れる（以降、毎年実施）
	平成10年	8月	4日	高校	バレーボール部、県代表としてインターハイに出場（高知県）
2012年	平成10年	8月	一	高校	水泳部、インターハイに出場（香川県）
	平成10年	9月	一	高校	水泳部、神奈川国体に出場

西暦	和暦	月	日	区分	事項
1998年	平成10年	10月	—	幼稚園	スポーツフェスティバルを実施（運動会をスポーツフェスティバルと名称変更）
	平成10年	10月	—	幼稚園	親子でサツマイモの収穫を楽しむ
1999年	平成11年	3月	26日	高校	バレー部、春の高校バレー全国大会に出場し準優勝
	平成11年	5月	19日	幼稚園	幼年消防クラブ発会式（以降、毎年実施）
2000年	平成11年	5月	—	幼稚園	子育て支援事業としての預かり保育を開始
	平成11年	6月	—	幼稚園	保護者オカリナ同好会発足
2001年	平成11年	8月	4日	高校	バレー部・水泳部、県代表としてインターハイに出場（岩手県）
	平成11年	8月	25・26日	幼稚園	第1回宿泊保育を実施（以降、毎年実施）
2002年	平成12年	10月	7日	学園	創立90周年記念式典を体育館で挙行、その後祝賀会を水戸京成ホテルで行う
	平成12年	11月	4日	幼稚園	消防署見学（以降、毎年実施）
2003年	平成12年	8月	—	高校	バレー部・水泳部、インターハイに出場（岐阜県）
	平成12年	8月	—	幼稚園	預かり保育室完成
2004年	平成12年	10月	28日	高校	研修旅行でハワイを初めて導入
	平成12年	12月	—	高校	校地819.37m ² （247.87坪）取得
2005年	平成13年	3月	3日	幼稚園	創立30周年、園歌制定・園旗製作
	平成13年	3月	—	高校	校地428.69m ² （129.68坪）取得
2006年	平成13年	5月	9日	幼稚園	幼児体育を導入
	平成13年	5月	9日	幼稚園	完全給食を実施
2007年	平成13年	8月	—	高校	水泳部、インターハイに出場（熊本県）
	平成14年	3月	—	高校	看護棟1,594.77m ² （483.26坪）新築竣工
2008年	平成14年	4月	1日	短大	文学科を廃止し、国文科に統合
	平成14年	4月	29日	学園	大成園理事長額賀良一、勲四等旭日小綬章を受章
2009年	平成14年	8月	—	高校	バレー部、インターハイで準優勝（茨城県）
	平成14年	10月	—	短大	春季に加え秋季公開講座を開催（以降、毎年開催）
2010年	平成14年	11月	—	短大	本学卒業生を対象にリカレント教育講座を開催（以降、毎年開催）
	平成15年	7月	25日	幼稚園	第52回全国幼稚園教育研究大会茨城大会で公開保育を行う
2011年	平成15年	8月	—	高校	バレー部、インターハイ第3位（長崎県）
	平成15年	8月	—	高校	バレー部、国体で第4位（静岡県）
2012年	平成15年	8月	—	高校	水泳部、インターハイに出場（長崎県）
	平成15年	9月	—	高校	校地1,141.05m ² （345.17坪）取得
2013年	平成16年	1月	28日	幼稚園	コンサートを開催（以降、毎年開催）
	平成16年	3月	6日	幼稚園	お別れの集いを実施（親子）（以降、毎年開催）
2014年	平成16年	4月	—	高校	額賀修一先生、校長に就任
	平成16年	4月	—	幼稚園	保育形態を変える
2015年	平成16年	5月	21日	幼稚園	サツマイモの苗植えに参加
	平成16年	5月	25日	幼稚園	高校生との交流活動を行う（以降、毎年実施）
2016年	平成16年	5月	28日	高校	看護科第1回戴帽式実施
	平成16年	8月	28日	幼稚園	茨城県女子体育連盟50周年記念の学校ダンス発表会で模範演技を発表
2017年	平成16年	9月	17日	幼稚園	中学生の職場体験学習を受け入れる
	平成16年	11月	20日	幼稚園	作品展：親子でチャレンジ（ワークショップ）を実施（以降、毎年実施）
2018年	平成16年	8月	—	高校	水泳部、インターハイ女子200m平泳ぎ8位入賞（中国地方）
	平成16年	8月	—	高校	ゲートボール部、全国ジュニアゲートボール大会3位
2019年	平成16年	9月	23・24日	高校	国際文化系研修（ブリティッシュ・ヒルズ）実施（以降、毎年実施）

西暦	和暦	月	日	区分	事項
2005年	平成17年	3月	3日	幼稚園	講演会を行う (CAP: 大人のワークショップ)
	平成17年	4月	28日	幼稚園	移動美術館ハローミュージアムを開催
	平成17年	4月	一	高校	「大成女子高新聞」と「なでしこ通信」を統合し、情報誌「ToSay!」にリニューアル
	平成17年	5月	20日	高校	保育・福祉系3年研修 (茨城女子短期大学授業体験) 実施
	平成17年	5月	一	幼稚園	保護者エアロビクス同好会発足
	平成17年	6月	3日	高校	日本文化系2年研修 (茨城県天心記念五浦美術館) 実施
	平成17年	6月	10・17日	高校	保育・福祉系3年研修 (日本赤十字社 家庭看護法講習) 実施
	平成17年	6月	21日	高校	科学・医療系3年研修 (大成学園幼稚園にて科学実験教室) 実施
	平成17年	6月	一	高校	バドミントン部、関東大会に出場 (茨城県)
	平成17年	7月	一	高校	ゲートボール部、第10回全国ジュニアゲートボール大会で準優勝
	平成17年	8月	7日	高校	バレー部、インターハイに出場 (千葉県)
	平成17年	8月	一	高校	水泳部、インターハイに出場 (千葉県)
	平成17年	9月	17・18日	高校	「撫子祭」を実施。この年より毎年実施となり近隣の小学校・幼稚園・保育園の子どもを招待
	平成17年	10月	25日	高校	保育・福祉系2年研修 (大成学園幼稚園にて体験学習) 実施
	平成17年	10月	一	高校	英語オンライン教育システム「English For You」中学生版稼働
	平成17年	11月	20日	高校	少林寺拳法において1年生徒、単独演武で全国大会出場 (香川県)
	平成17年	11月	27日	高校	科学・医療系2年、「青少年のための科学の祭典常陸大宮大会」に出演参加
	平成17年	11月	一	幼稚園	大成女子高等学校看護科専攻科1年の実習を受け入れる (以降、毎年実施)
2006年	平成18年	2月	28日	高校	体裁・内容を一新し、文集「nadeshiko」vol.34 を発行
	平成18年	2月	8・9日	高校	ジュニア・インターインシップ (2年特別進学コース、ビジネス系、家政科) を実施。報告会: 3月17日 (以降、毎年)
	平成18年	3月	20日	高校	バレー部、第37回全国高等学校バレー部選抜優勝大会 (東京) に出場、全校応援を行う
	平成18年	4月	1日	高校	文部科学省よりスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) の指定を受ける (県内私立初)
	平成18年	4月	20日	高校	水泳部、日本選手権50m平泳ぎ8位入賞
	平成18年	6月	一	高校	陸上競技部、走り幅跳びで関東大会に出場 (神奈川県)
	平成18年	7月	29・30日	高校	ゲートボール部、第11回全国ジュニアゲートボール大会で優勝 (埼玉県)
	平成18年	8月	一	高校	バレー部・水泳部、インターハイに出場 (大阪府)
	平成18年	9月	16・17日	高校	「撫子祭」においてSELHi英語教室を開催 (以降、毎年実施)
	平成18年	11月	16日	高校	ゲートボール部、国際親善交流試合 (シンガポール) に派遣される
	平成18年	10月	一	高校	水泳部、兵庫国体に出場
2007年	平成19年	2月	2日	高校	スキー部、インターハイの回転・大回転に出場 (富山県)
	平成19年	2月	5日	幼稚園	水戸芸術館見学 (以降、毎年実施)
	平成19年	3月	1日	高校	第1回看護科修了式を挙行
	平成19年	3月	19日	高校	バレー部、第38回全国高等学校バレー部選抜優勝大会に出場、全校応援を行う (埼玉県)
	平成19年	4月	1日	短大	国文科の定員を変更 (70名→50名)
	平成19年	6月	4日	短大	2号館2階旧ピアノ練習室を保育科多目的演習室に改修
	平成19年	8月	4日	短大	ダンスサークル、第47回黄門まつり「市民カーニバル in MITO」で第3位 (格さん賞) を受賞
	平成19年	8月	一	高校	バレー部、インターハイに出場 (大阪府)
	平成19年	8月	一	高校	水泳部、インターハイに出場 (大阪府)

西暦	和暦	月	日	区分	事項
2007年	平成19年	10月	1日	短大	開学40周年記念の年史・冊子を刊行
	平成19年	10月	1日	短大	1号館パソコン演習室のパソコン全台更新
	平成19年	11月	5日	短大	長須与佳琵琶演奏会を体育館で開催
	平成19年	11月	10日	短大	ねんりんピック茨城2007オープニングの「群舞（風のプレリュード）」に保育科学全員が参加
	平成19年	11月	18日	短大	開学40周年記念式典を水戸京成ホテルにて挙行
2008年	平成20年	2月	—	高校	スキー部、インターハイの回転・大回転に出場（新潟県）
	平成20年	3月	—	高校	校地770.89m ² (233.19坪) と隣接地662.48m ² (200.4坪) を交換
	平成20年	4月	—	短大	スポーツフェスティバル開催
	平成20年	7月	9日	高校	地球のステージSTAGE1を水戸市民会館にて実施
	平成20年	8月	—	高校	水泳部、インターハイに出場（大阪府）
	平成20年	8月	—	短大	国文科ゼミ旅行
	平成21年	1月	—	高校	校地247.08m ² (74.74坪) 取得
2009年	平成21年	2月	—	高校	スキー部、インターハイの回転・大回転に出場（長野県）
	平成21年	3月	—	高校	校地172.39m ² (52.15坪) と隣接地99.86m ² (30.21坪) を交換
	平成21年	5月	23日	短大	スポーツフェスティバル開催
	平成21年	7月	11日	学園	大成学園創立100周年記念式典を挙行
	平成21年	7月	12日	学園	大成学園創立100周年記念パーティー開催
	平成21年	7月	15日	高校	地球のステージSTAGE2を水戸市民会館にて実施
	平成21年	8月	30日	短大	国文科ゼミ旅行（9月3日まで）
	平成21年	8月	—	高校	水泳部、インターハイに出場し、100m自由形優勝、飛板飛込6位（大阪府）
	平成21年	8月	—	高校	水泳部、新潟国体に出場し、100m自由形3位、飛板飛込4位
	平成21年	8月	—	高校	スキー部、新潟国体クライミングに出場し、準優勝
	平成21年	9月	—	高校	吹奏楽部、東関東吹奏楽コンクールに出場
	平成21年	9月	18~20日	高校	「撫子祭」を実施。PostSELHi英語教室を開催。Sonar Pocketを招いて学園創立100周年記念コンサートをひたちなか文化会館にて実施
	平成21年	10月	30日	短大	大成学園創立100周年記念ウリアナ古箏演奏会開催
2010年	平成22年	12月	1日	学園	額賀修一先生、理事長に就任
	平成22年	12月	1日	短大	小野孝尚先生、学長に就任
	平成22年	12月	1日	幼稚園	小野孝尚先生、第6代目園長に就任
	平成22年	12月	19日	短大	保育科発表会を実施
2010年	平成22年	2月	—	高校	スキー部、インターハイに出場（北海道）

創立100周年事業関連組織図

(敬称略)

創立100周年記念事業委員会

委員長：塙 富子／安達 一枝

副委員長：学園理事長・高校同窓会長・短大同窓会長
学長・校長・園長・高校後援会長・学園理事2名

創立100周年記念事業実行委員会

委員長：塙 富子／安達 一枝

副委員長：高校同窓会長・短大同窓会長・高校後援会長

本部

副理事長（額賀 修一） 法人本部長（磯） 課長（額賀 まゆみ）

短大

同窓会：会長（後藤） 副会長（小澤）

父母の会：会長（村上） 副会長（小川、品田）

職員（事務局となります）：担当教授（小野、佐藤）

事務局（安藤事務局長、片岡、笠原）

高校

同窓会：会長（塙） 副会長（照山、鈴木、根本）

後援会：会長（樋口） 副会長（蛭田）

父母の会：会長（鯉渕） 副会長（檜山、大貴、綿引）、

宮本、関根

職員（事務局となります）：

副校長（石川） 教頭（井坂、内山） 同窓会事務局長（津田）

父母会後援会事務局長（田中）

教務部長（寺門） メディア部長（鈴木）

入試広報部長（野澤） 事務長（朝妻）

幼稚園

保護者代表：（菊地、金沢）

職員（事務局となります）：副園長（額賀） 教頭（渡邊）

創立100周年記念事業募金委員会

委員長以下、委員は実行委員会と同じ

式典部会

部長：高校同窓会長（塙）

副部長：短大同窓会長（後藤）

部員は実行委員会と同じ

100周年記念誌編集部会

部長：高校後援会長（樋口）

副部長：高校父母の会長（鯉渕）

同窓会：短大（後藤） 高校（塙、照山）

職員

本部：額賀 まゆみ

短大：小野、松永、武田、佐藤、安藤

高校：石川、井坂、真崎、小澤、野澤、市橋、鈴木

幼稚園：渡邊

寄付者ご芳名

寄付者ご芳名

大成学園創立 100 周年記念募金へのご協力、心より御礼申し上げます。

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

※ 2009年12月31日までにご寄付いただいた方々のご芳名を基本的に申込順で掲載しております。

ただし、お名前の公表を希望されない方については掲載しておりません。

最新の寄付者ご芳名は、

http://www.taisei.ac.jp/jp/tg/100th_anniversary/contributor_list.pdf
に掲載しております。

最新の寄付者ご芳名は、

http://www.taisei.ac.jp/jp/tg/100th_anniversary/contributor_list.pdfに掲載しております。

あとがき

大成学園創立100周年記念誌「大成学園100年史」が、ついに完成致しました。この日を迎えるまでには長い時間を要しましたが、ご協力いただきました多くの皆様の大成を思うお気持ちの深さに感激させられ、本学園が長く存在し続けることができた所以を強く感じる日々でした。

執筆に協力いただき資料や情報を提供してくださった多くの皆様、編集部会の方々、編集・デザイン・印刷・製本を引き受けくださった大日本印刷の皆様に心より感謝申し上げます。

やっと形になりましたこの「大成学園100年史」が、これから、学園関係者の皆様を繋ぎ、さらなる結束と協和にお役立ていただけることを願っております。

大成学園創立100周年記念誌 編集部会

「資料や情報をご提供くださった方々」(50音順)

安達一枝様、石川治様、板垣重信様、市毛カヲル様、伊藤ゆみ子様、稻葉栄一郎様、猪野嘉久様、岩田とみ子様、内田伊与子様、遠藤伸子様、小田キヨ子様、小貫様、神永トク様、川又ツヤ様、木村様、倉田雅博様、小石川様、小澤榮弘様、後藤春江様、小塙和義様、小塙義輔様、小林萬利子様、小森寿子様、塩沢俊行様、塩畠吉野様、鈴木節子様、須藤英子様、須藤福江様、関根むめ様、芹沢古美子様、高堀久子様、野澤由紀子様、塙阿佐様、浜田妙子様、原澤様、平井様、平塚イシ様、平塚成子様、古田久子様、宮本加代様、村社久枝様、谷田部節子様、野内伊三郎様

大成学園100年史

発行日 2010年8月

発 行 学校法人大成学園

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町3-2-61

Phone 029-221-7291

<http://www.taisei.ac.jp>

印 刷 大日本印刷株式会社

東京都市谷加賀町1-1-1
